
閃光のアシュマ 第二話 オリジナル・ナンバー

高岡 佳史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光のアシュマ 第二話 オリジナル・ナンバー

【Nコード】

N5493F

【作者名】

高岡 佳史

【あらすじ】

ノリトレアからの脱出に成功したアシュマ達は逃亡生活を強いられていた。途中、アギと言う化け物に襲われる等して一行はボグニなる商人と出会う。しかしそれは謎の秘密結社『七賢人』の手先だった。ボグニの卑劣な罠を何とか切り抜け、再び逃亡生活に戻るアシュマ一行。だが、その前にヨディと名乗る青年が現れる。その頃ガルマインは『七賢人』からの正体を受け謎の人物『浜御前』の接待を受ける。アシュマは追っ手からの……アーヌの追及を逃れる事はできるのか？ガルマインの野望は達成できるのか？一体ヨディと

言う青年は何者なのか？SF剣戟冒険アドベンチャー第二弾！デュ
エリストアシユマ『第二話オリジナル・ナンバー』ただ今参上！

主な登場人物

主な登場人物

アシユマ・アトー・シヨ阿克・アシユオン

この物語の主人公。

年の頃は二十三〜四。

ザンバラにきられた、少し濃い目の栗色の髪の毛。

しなやかで猫科の動物を連想させる鍛えられた肉体。

彫の深い端正な顔立ちに、髪の毛と同じ色で、深い影と虚無感を湛えた瞳。

どこか暗い影を刷いている、美形の青年。

謎の多い刀、『万人殺しの妖刀・鬼虎』を遣う。

アーチエル・ナヴィア・アップルトン

栗色の長く伸びた髪の毛に、栗色の潤んだ大きな瞳と、濡れた様な桜色の唇を持ち、黙っていれば人形かと思まごうばかりの美形の少女。

レキシタニア王国の王女である。

ただ、人形の様にと言われれば冷たい印象を与えがちだが、見てみれば温かみがあり優しい感じのする少女で、事実、その通りの少女である。

破壊の権化『バヴェル』のキー。

それが故に様々な勢力からその身を狙われる。

オルバニアン・マグマイヤー

本名をルーラン・ナル・テルドリニアナと言う。

ノリトレアの正式な王位継承者なのだが、故あってアシユマ達と行動を共にしている。

アシユマを親の敵として狙っている。

好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

ヨデイ・ヨフル

アシユマ達が雇った、サイコ・フライヤー『銀龍号』の艇長。

物腰の軽い気のいい青年。
が、その正体は……。

アルミナ・ラ・シア

アシユマ達を賞金首と狙う女賞金稼ぎ。

別命『隻眼のアルミナ』

身の丈程もある大剣を遣う。

レディール・エレノイ

アシユマを何かと付けねらうレイピアの達人。
女性。

別命『閃光のワルキューレ』

しかし彼女の本当の顔とは……。

アベニ・ロー。

以前はどこぞの国で草スバイをしていた。

歳は老いているが、腕は確か。

今は、故あって銀龍にいて、ヨディ付きの間者になっている。

皆に言わせれば影が薄いのだが、それが忍びの者にとっては眼目であるといって喜んでいる。

色々と重宝している様だ。

オロ・エバス

汎用型電脳装置等の基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器等も取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、唯一ドートネーゼと対等に渡り合っている数少ない人間。

ドクワント・ネルゼイ警部

国際警察機構の警部。

下はジーンズにスニーカー、上はTシャツにミリタリージャケットと警部と言うわりには意外とラフな格好をしている。

怪盗『ダスト・モンキー』捕縛に情熱を燃やす。

アース

鬼虎でも斬り裂けぬ硬い鎧を身に纏い、アシュマを付けねらうド
ートネーゼ、ネルファバーゼ配下の剣の達人。

その腕はアシュマと拮抗する。

ドートネーゼ四人衆の内の一人。

アシュマ最大のライバル。

ガルマイン・デッド

自ら手に入れた遺跡『バヴェル』を以って、世界制覇の野望を持
つ男。

アーチエルを付けねらう。

ノリトレア王国の武芸師範。

ガデウイン・デッド

ガルマインの実子。

ガルマインの持つ暗殺集団影の者を束ねる。

陰湿でサディスティックな性格。

ボグニ

アギの港の交易商人。

別の顔がある。

ウルク

ネルファバーゼ四人衆の内の一人。
大剣遣い。

カフル

ネルファバーゼ四人衆の内の一人。
細身の剣を遣う。

カシア

ネルファバーゼ四人衆の内の一人。
女性型。
鞭を使う。

第一節 査問委員会

ルーラン王子が即位して三月余り。

ルーランは王となった。

国政の混乱もようやく落ち着いてきた頃だった。

ガルマイン邸に一人の訪問者が。

訪問者は『ドートネーゼ』の使者であると言った。

その使者は頭から下まで黒い服で固め、目には黒いサングラスを掛け、髪型はオールバックと言う出で立ちだった。

ガルマインは下城の時刻となり、自邸に戻りその話を聞いた。

自邸と言っても、どす黒く陰惨な印象を与える例の平城だ。

老人の使者は一通の書簡を残して去った。

ガルマインは偽のルーランを王に祭り上げ、実権はガルマインにある、傀儡政権を手に入れた。

ガルマインは、自分の政敵になる者を、そろそろ粛清しようかと思っていた頃合であった。

その折に、ガデウィンよりその話を聞いたのである。

ガルマインは息子に問い尋ねた。

「で、その使者、どの様な輩であるか」

「全身黒尽くめの男でありました……」

「ふむ……」

ガルマインは自室で侍女に気が絵を手伝わせながら頷く。

勿論侍女は信用の置ける者だ。

「『査問委員会』でしょうか？」

「かもしれん。で、その書簡とやらは何処に」

「は。此処にございますれば」

「ふむ」

ガルマインは書簡を広げ、そして読んだ。

ガルマインもドートネーゼの一員である。

それが、ガルマインの独断専行が多すぎて内部分裂的になっている。

我が物顔をしすぎたのかもしれない。

その結果が今出ようとしている。

「これは……」

ガルマインは息を呑んだ。

「いかがいたしましたので？　やはり査問委員会の手の者で？」

「そういった所になるかの」

ガルマインは落ち着いた様子で、

「明日の公務は一切キャンセルじゃ」

ガデウィンにそう命じた。

次の日ガルマインは、息子ガデウィンと共に公用車に乗って、召喚されたその地へ向かっていた。

その場所は王宮市からは車で小一時間。

保養地と言った趣があり、屋敷が浜に面していた。

ドートネーゼの持ち物だ。

直ぐに分かる。

屋敷は広く、崖に沿って建っており、浜側は広く、睨^{にら}みが利く構えになっていた。

しかし館は、あくまでも目立った風も無し。

どこか鄙びた感じがして、渋い味わいを醸し出していた。

（そう言えば、この辺りはドートネーゼのプライベートビーチだったな）

等と、ガルマインは思い出していた。

老人の屋敷のロータリーに車をつけてガルマインは降り立った。

続いてガデウィンが降り立った。

すると、屋敷の中から黒尽くめの男達が出てきて、ガルマイン達を迎え入れた。

「お腰の物を預からせていただきます」

ガルマインは腰から刀を鞘ごと抜き、それを黒尽くめの男に手渡した。

ガデウインもそれに倣^{なら}った。

しかし、ガデウインは腰にそれが無いと、落ち着かない様子でガルマインの後に従った。

「こちらへ」

ガルマイン達は黒尽くめの男に案内されて中へと入っていった。

長めの廊下を渡り、右へ折れ、突き当たりの一室へと案内された。

「こちらにて、暫くお待ち下さい」

そう言われて待つ事にした。

待つ事四半刻。

四畳半程の板の間の、周りを板の壁でぐるりと囲まれた、閉鎖的なその一室はガデウインに重苦しい雰囲気を与え不安に陥らせた。

「親父殿……」

「……」

「親父殿……！」

「……」

「親父殿……！！！」

「騒ぐでない！ 何事か？」

「親父殿、我らは大丈夫なんだろうか？」

臆病にもガデウインは弱気な事を言う。

「何がだ？」

「かような所で敵にでも襲われでもしたら、我らは一溜まりもないぞ、親父殿」

「騒ぐでない」

「しかし……」

「肝の小さい奴よ……」

そう言ってガルマインは嘆息した。

暫くして、

「ガルマイン様、どうぞこちらへ」

障子戸が開き、黒尽くめの男がガルマインを誘った。

「うむ」

言葉を発して立ち上がり、黒尽くめの男に案内されてその部屋を後にした。

黒尽くめの男に誘われ、とある部屋の前に来た。

「ガルマイン様をお連れしました」

「うむ。大儀である。下がってよい」

そういわれて、黒尽くめの男は下がった。

「……ガルマイン殿、お待たせ申した。中へ入られよ」

「御免」

そう言ってガルマインは障子戸を開いた。

そこに居たのは線の細い老人だった。

細織りに、袴、角帯を締め、足袋を履いていた。

どこか宗匠の様にも見えた。

「さ、こちらへおいでなされ」

話す言葉もどこか機械的であった。

「は」

声を聞いた限りでは、男とも女とも判別がつかない。

「ささ、そこでは色々と不便である。そこにおかけなされ」

老人は向かいの座椅子を指し示した。

「では、失礼」

そう言って、ガルマインは卓を挟んで老人の前の座椅子に座った。

「ようおいでなされた。造作をかけました」

「何の」

「ほほほ。さて、査問委員会じゃがの……」

「はい」

「それはもう少し後にしましょうな。今、茶等淹れさせるでな。それまでゆるりと過ごされよ」

「ではお言葉に甘えて」

「時にな、ルーラン王は病弱と聞く。いま崩御なされたら、いかが致すな？」

「！」

ガルマインはぎくりとした。

折角王に仕立て上げ、自分の意のままに動く人形を得たのだ。

他に手駒が無いではない。

が、手間が掛かる。

出来うるならばその手駒を失いたくはなかった。

「我らなら、すぐさま新しい王を用意する事等、それこそ造作も無い事よ」

「！！」

「それに、ガルマイン殿には色々と周りにうるさいハエがたと飛んでおるそうな」

ガルマインはこの老人が言いたい事が解ってきた。

老人は……ドートネーゼは、今の王を廃して、自分をも抹殺できる力を持っているぞ、と暗に仄めかしているのだ。

それに政敵の多いことも指摘した。

つまりはガルマインの事を正確に把握していることになる。

「お戯れを。いくらなんでもルーラン様に不敬が過ぎまする」

「そうであるの。そうであるの」

ガルマインは老人の……ドートネーゼの考えが何処どこにあるのか掴みかねていた。

その時、するすると小間使いの者が現れて、それぞれの前にお茶を淹れて行った。

「おお、茶が参ったでな。少し喫するとしましようか？」

「は……」

「では、我が主あるじにお引き合わそう」

老人は立ち上がる。

「査問委員会……最高評議会に？」

ガルマインがそれを眼で追う。

「やはり、聡い^{さと}のう。いかにも最高評議会じゃ。こちらへおいでなされ」

老人は廊下の向うへ歩いて行く。

「はっ」

「さ、こちらじゃ」

そう言つて、老人は更に奥へ行つた。

奥の部屋は全くの暗闇だ。

「ささ、こちらじゃ」

ガルマインは老人に更に部屋の奥へと誘^{こび}われた。

「そこで、お止まりなされ」

ある所まで歩いて行くと制された。

老人は奥まで行つて消えた。

「……………」

暫く待っていると、ガルマインの周りにライトアップされた人影が現れた。

人影は数えてみると七人だった。

『汝の名は？』

声が響き渡り、質問してきた。

「査問ですか？」

『問われた事にのみ答えよ』

「最高評議会ですか？」

『問われた事にのみ答えよ』

「……ガルマイン・デッドにござる」

『話に聞いておるぞ。汝、我らの秘宝たる『バヴェル』を私し、汝が物にせんが為、私兵まで使つておるとは、その罪許しがたし』

『知っておるぞ。汝、神から与えられた職責を全うせず、汝、自ら王とならんが為に汝の王を汝自ら手にかけてし事、明白也。その罪許しがたし』

『知っておるぞ。汝、我らの秘宝たる『鬼虎^{おにとら}』を、アシユマなる不逞の輩に与えし事、明白也。その罪許しがたし』

『汝の言葉知っておるぞ。我らに齒向かつて憚^{はば}る事なしとの大言、その罪、許しがたし』

『汝、何か申し開きがあるか？ その言の葉遺憾によつては、汝の命、貰い受ける事になろうぞ』

次々と言葉が辺りに響いてガルマインに見舞う。

声もどこから響いてくるのかも分からない。

『汝、申し開きはあるか！？』

「在り申さん！ 好きになされよ！！」

『何と潔^{こゝろ}しかな、その心』

『何と強靱なるかな、その心』

『何と豪胆なるかな、その魂』

『惜しいなるかなこの人物……』

声があちらこちらから響いてくる。

『我らに反旗を翻す心積もりはあるか？』

「あり申さん！」

『その言葉に偽りあるか？』

「偽り無し！」

『偽りある場合はその首刎ねるぞ。宜しいか？』

「お好きなように」

『分かった。以上で査問を終わる』

ガルマインはそれ以上追求される事はなかった。意外なほど呆気なかった。

側には、例の黒尽くめの男が立っていた。

「ささ、こちらへ」

ガルマインは行きと同じ様に廊下を案内された。先程の老人はもう居なくなってしまった。

ガルマインはそのまま出口まで案内された。

もう、用は無いと言う事だろう。

車がつけてあった。

「親父殿、お帰りなさりませ」

先に車に乗っていたガデウィンが、ガルマインを迎えた。

「うむ」

ガルマインは腰を落ち着けた。

アシュマ達はサイコ・フライヤーに乗って、ボグロムの海の上空を航行していた。

追っ手を撒きつつ、目的地もはっきりしないまま、アルステインの搜索と逃亡生活を三月程^{みつぎ}続けていた。

食料も底を尽きかけていた。

精神状態も限界に近づいていた。

「どうするんだよ！！　もう、食いもんも無いんだぞ！？　いずれこのままじゃあ、追っ手に捕まるか、飢え死にするかどっちかだぞ！？」

オルバニアンは叫ぶ様に言った。

オルバニアンは白の合わせに白いシャツ。

縞の袴、ブーツを履いていた。

「そうですねえ。やはり、どうにかしないと、いけないかしら」

アーチェルがのんびりと言った。

アーチェルは、短めの茶色のスタンドカラーのジャケットに丸首の白いシャツ。

ベージュのサルエルパンツ。

革のブーツ。

この格好だった。

まさか、ドレスのままにいる訳にも行かない。

オルバニアンが予め用意していたこの格好に収まった。

「……知らぬ……」

最後にアシュマが飽いた様に言う。

そのアシュマと言う青年の格好は、丸首の革のジャケット。

黒いシャツに、洗いざらしたデニムのジーンズ。

先端に鉄の嵌ったブーツ。
腰には鬼虎を佩いていた。

「何が『知らぬ』だよ！ 自分だけ当事者じゃないような口ぶりしやがって！！」

オルバニアンはアシュマの言葉に反応して激しく怒っていた。

「アルステインだってどうするんだよ？ あんだけ恩を受けておいて、用済みとなりゃ、はい、それまでよ……そんなのって、ねえんじゃないのか！？」

「そうですね。アシュマさま。アルステイン様には大恩ある身。もしどこかで難儀していたら、助けてあげねば」

ここはアーチェルも追従した。

「……………」

当のアシュマはだんまりを決め込み、何も無かった様に窓の外を見ていた。

「都合が悪くなるとだんまりですかい？ ええ？ 旦那？」

未だオルバニアンは怒ったままである。

それは収まる所を知らない風であった。

「……あ、あの、どこかに大きな港は無いでしょうか？」

険悪な空気の中、アーチェルが二人の間に割って入って言った。
この空気を^{なだめすか}宥め賺そうとしたのである。

「港ですかあ？」

オルバニアンが不機嫌そうに聞き返していた。

最早アーチェルに対して無礼であるとかそう言う頭は無い。

「ええ、港。大きければ大きい程、良いのですが……」

最後に行くに従ってアーチェルは口籠もる。

「あー、だめだ、だめだめ。そう言う所は、いの一番に警戒網が敷かれているぜ」

「大きい港だからこそ、安全なのではないのですか？」

「何故ですかー？」

オルバニアンはぶっきら棒に言った。

オルバニアンの不機嫌此処に極まれりと言ったところか。

「木を隠すには森の中と言って……」

アーチェルは少し俯いて言う。

「はあ？ 何を言ってるんですか？ そんなの駄目に決まってるじゃないですか！ ああいう大きい港は、一機一機、厳しい入港チェックがあつて、すぐ見つかったちゃうんですよ！」

オルバニアンはとどめに強く言ってしまった。

「……………」

オルバニアンはアーチェルが急に黙ってしまったので、後を振り向いて様子を伺った。

アーチェルは完全に俯いている。
すると……。

「…………ど、どうしてそんな意地悪ばかりおっしゃるの？ わたくしだって、わたくしだって……一生懸命、考えてるのに……」

アーチェルは、とうとうぽろぽろと涙を零し始めた。

「お、お姫さん……いい、いや、その、意地悪を言った訳じゃなくて……………」

オルバニアンはアーチェルの方へ寄って行って、宥めようとした。
「姫……。アーチェル王女。どうも、申し訳ありませんでした。王女に対してこの様な口の利き様、二度と致しませんので、どうかお許し下さい」

オルバニアンはアーチェルに対し丁寧に謝った。

「二度と喧嘩等致しませぬか？」

アーチェルは少しずれた返答をした。

「は？ 喧嘩……？」

オルバニアンは聞き返した。

この返答に困惑したのである。

喧嘩をやめろ戸はどう言う事か？

今はアーチェルに誤っていると言うのに。

「そうです、アシュマさまと喧嘩致しませぬか？」

アーチェルの言っている事がやっと分かった。
だがそれを呑むわけにはいかなかった。

「それとこれとは、話が違います。なにせ相手は俺の親父の仇あだですよ、諍いさかいを起すなと言う方が無理と言うもの。こればかりはどうか平に御容赦を」

オルバニアンにしてみれば当然の事だった。

何せ相手は親の仇。

憎き相手なのである。

しかし……。

「無理なのですか……？」

そう言ってアーチェルはまた、両手で顔を覆い、ぽろぽろと泣き出した

「……いえ、む、無理では御座いません、必ずその様に……」

「本当ですか？」

アーチェルは聞き返し、眼だけをこちらに向ける。

「本当ですとも」

オルバニアンは頷いて応えた。

「アシュマさまは？」

アーチェルは先程とは打って変って、アシュマのほうを向いて嬉々として訊いた。

アシュマは相も変わらず窓から外の景色を眺めていた。

「アシュマさま……？ 聞いてらした……の？」

今度はアーチェルがアシュマの機嫌を伺う様に、アシュマの横顔を覗き込んだ。

「わかった。向こうから仕掛けてこないなら、こちらから仕掛ける様な事はしない」

アシュマはアーチェルをも見ずに応えた。

その言葉はオルバニアンを刺激した。

「んだと！？ ごるあ！！ 人が、折角頭まで下げて喧嘩はしないという約束をだなあ……」

オルバニアンはアシュマのその態度に『切れ』た。

「アーチェル。先程の話は無しだ。向こうから仕掛けられては、受けて起たねばなるまい」

アシュマも、立ち上がった。

「もう、やめてー！ー！！」

アーチェルは大粒の涙をぼろぼろと零しながら叫んでいた。

「どうして、仲良く出来ないの！？」

アーチェルはその場に蹲ってしまった。

オルバニアンは狼狽えた。

面白い程狼狽えた。

「ア……アーチェル様、申し訳ありません。二度とこの様な事は起こしません」

オルバニアンは再度アーチェルに対して謝っていた。

土下座だ。

「本当ですか？」

アーチェルが面を上げる。

オルバニアンの顔がそこにある。

「亡き母に誓って」

オルバニアンは頷く。

アーチェルの表情が明るくなる。

そして顔はアシュマの方へ。

「アシュマさまは？」

アーチェルはアシュマに尋ねてみる。

アシュマは相変わらず向こうを向いていた。

そのアシュマが、

「俺の答えはさっきの通りだ」

と、だけアシュマは答えた。

「それとさっきの懸案だがな」

まだアシュマは向こうを向いたままだ。

「懸案？」

オルバニアンは聞き返していた。

「追っ手に捕まるか、飢え死にするか……だ」

アシュマは先程の話を引っ張り出してきた。

アーチェルはおどおどとし始めた。

また喧嘩が始まるのかと。

ここで初めてアシュマはこっちを向く。

アシュマはそんなアーチェルを見て、肩を二、三回ぼんぼんと叩いてやる。

「いつそこの船を棄てるというのはどうだ？」

アシュマが意外なことを言った。

オルバニアンとアーチェルは驚いた顔をした。

「は？ 何をいきなり突拍子もない事を言うかね？ この人は？
出来る訳無いだろう？」

「そんなでもないと思うが？ この、サイコ・フライヤーだから足が付きやすいんじゃないか？」

「確かに……。王国製のサイコ・フライヤーと言うのは、目立ちますわね」

アーチェルは独りごちた。

「うーむ……」

オルバニアンは言葉に詰まった。

「まだ、食料のあるうちに、どうにかした方がいい」
アシュマは畳み掛けた。

「わ、分かっているけどよ…… そ、それよりも、アーチェル姫を
どーするかが、大事なじゃねえの？」

答えに窮してオルバニアンは話題を転じた。

「え？ わたくしですか？」

アーチェルが意外な顔をして自分を指差す。

「で、アーチェルをどうすると？」

アシュマも訊いた。

「ああ、俺達だけで逃げ回るならいざ知らず、高貴なお姫様をこん

な事に巻き込んだんじゃないと思ってね」

「そんな、オルバニアン様。わたくしは足手まといですか？」

アーチェルが悲しげな顔をする。

「いっ！ いや、決して邪魔とかじゃなくて、然るべき大国に保護しかるを求められては……？」

「保護？」

アシュマが怪訝な顔をする。

「そうさ、このままお姫様がレキシタニアに帰ったとしても、またガルマインに姫が拉致されるのは目に見えてる。それよりはアヘイピアとかノルブル王国とかに保護を求めても良いんじゃないか？ 何だったらレジルデにでも行って、法皇様にでも保護を求めたら……」

オルバニアンはそう提案した。

「流石に法皇様に保護を求めるのはちよつと……」

アーチェルは恐縮してしまった。

「あ、でも、アシュマさまや、オルバニアン様と、別れると言う事では、ございませんのよ？」

アーチェルにしては珍しく取り繕っていた。

そして上目遣いにアシュマの方を見た。

「どうした？」

アシュマはアーチェルを見返した。

「う、ううん……なんでもないの」

アーチェルは慌てて顔を伏せる。

「ア、アシュマさまは……やはりアーチェルがいない方がいい？」

アーチェルは再び上目遣いにアシュマを見る。

「……馬鹿な事をいうな」

アシュマはそう言い、一拍おいて、

「だが、保護を求めるならば、お前も同じなのではないか？ オルバニアン」

と、言い、話を切り返してきた。

「え？ 俺？」

オルバニアンはきょんととして、訊き返していた。

「そうだ。オルバニアン。仮にもお前は一国の王子だ。ここで、お前に何かあってみる。ノリトレアは、永久にガルマインの手の内のままだ。それこそアヘイビアとかノルブル王国等に、保護をしてもらった方が良いんじゃないのか？」

アシュマはまくし立てて言った。

「そうですね。アシュマさまの仰るとおりですわ」

アーチエルがアシュマの発言に賛意を示す。

「で、オルバニアン様は大丈夫なの？」

アーチエルが訊いた。

「正直言うと、今の俺には、王子だ何だはあまり興味がないんですよ。今の俺には、何よりも大事な事があるんだ！」

「何ですか？ それは」

アーチエルが訊き返していた。

「それはアシュマ！ お前だ！！ 親父の仇を討たぬ事には俺の気がおさまんねえ！！」

「オルバニアン様！！ 先程の約束はどうなさいましたの！？ それに興味云々、仇云々の話では、ござりませぬ！ ノリトレアの民、数千万人の命が、かかっております！！」

アーチエルがオルバニアンを叱った。

「う……おつかねえ」

オルバニアンが怯む。

「今頃、分かったのか？」

アシュマが言った。

「アシュマさま？ オルバニアン様？ なにを話してらっしゃるの？」

「う……そうだ、アルステイーンだ！ アルステイーンも、同じくして保護を求めたんじゃないかって」

ばつが悪くなったのかオルバニアンは話題を転じた。

「まあ、そうですわ。そうかもしれませんわね」

アーチエルも頷く。

「分かった。アヘイビアに助勢してもらおう。その代わり、お姫さんも一緒な」

「わたくしもですか？」

アーチエルが尋ねる。

「そうですよ。アーチエル様。当然です」

オルバニアンが言った。

「アーチエル、アヘイビアというのはどんな国なのか？」

国勢をまだよく分かっていないアシュマが訊いた。

「えーと、アヘイビア連邦はですね、世界一の国民総生産量を誇り、世界一の軍事大国でもあります。元首は大統領で国民自らの選挙で選ばれます。自ら民主主義の盟主を謳^{うた}っていて……えーと……」

アーチエルは言葉を詰まらせると……

「要は世界一の正義の味方の国って所だ」

オルバニアンが言葉を継いだ。

「どうも胡散臭いな」

アシュマが零す。

「なんだよ、これ程分かり易い国も無いだろ？ 正義の味方なんだからよ」

「正義の名を振りかざす者程、始末に終えない事をする」

「訳分かんねえ事を言う人だな。あんたも」

オルバニアンが応えたその時だった。

『その所属不明機。こちらはゲンドール共和国空軍である。貴船は今、我が国の領空内を侵犯中である。即刻領空外へ退去するか、我らの誘導に従い航行されたし』

レーダーを見ると、機影が二つあった。

速度から見て、戦闘機と見て取れた。

「ほうら、おいでなされた。姫様頼むぜ」

オルバニアンは言った。

「はいっ」

アーチェルは操縦席の後に備え付けられている椅子に座りシートベルトをつけると、その前にある半球状の物体に手をあてて両目を静かに閉じた。

すると、サイコ・フライヤーは速度を増して追尾機をぐんぐん引き離して行く。

アーチェルが触れた物は大きな『魔導石』で、この機体のブースターの役割を果たしていた。

これも、アーチェルが『強念者』だからできる芸当だが。アシュマも一度この席について『念』をかけて見た。

すると、余りにも強大な力が加わり、船を制御できなくなった。以来、アシュマはこの席に着く事も。コクピット周りの計器類に触る事も、禁止になった。

「さあゝて、逃げるとするか!!」

この、サイコ・フライヤーには武装が施されていなかった。逃げる事がこのサイコ・フライヤー最大の武器であった。

『再度警告する。貴船は今、我が国の領空内を侵犯中である……』

「さて、早く領空外へと、とんずらこきましようかね」

サイコフライヤーはスピードを上げて領空外へと脱出しようとしていた。

しかし、急に機体が振動し始めた。

「な、なんだこりゃ! ……くそっ!」

機体は振動が激しくなり、オルバニアンは制御するだけで精一杯になった。

「く、くそっ!!」

「オルバニアン様! 暴走ですか!?!」

アーチェルが悲鳴を上げた。

「いや、この、機体が、もう、保たない……様です」

「機体がか?」

アシュマがやって来た。

「陸地を目指さないと……。う、海の上では沈んでしまう……」

オルバニアンは必死でサイコ・フライヤーを飛ばしていた。

が、振動は一向に収まる気配を見せない。

機体がガタガタ言う。

「もう、機体が保たないか？」

アシュマが訊く。

「す、推進系はいま、アーチェルの姫さんの力で、保ってる様なもんだ」

オルバニアンは必死に操縦桿を握っている。

「また、領空内に戻っていませんか？」

アーチェルが不安に思った。

「水の上に着水する訳には……。いきません。ガタが来ていた様だ。隙間だらけだ」

オルバニアンは必死だ。

だがオルバニアンは悲観的な事を想像した。

「アーチェルの側にいる」

アシュマが言った。

「そうしてくれ！ たのむ！」

『警告する。その所属不明機。貴船は今、我が国の領空内を侵犯中である。即刻領空外へ退去せよ。警告に従わない場合は貴船を攻撃する』

敵機は無機質的に声を発し続けていた。

突然、警告アラームがなり始めた。

「だめだ！！ ロックオンされた！！ ミサイルが来る！！」

オルバニアンは悲鳴を上げた。

想像が現実の物となった。

「オルバニアン！ 少しでも保たせろ！」

アシュマがオルバニアンに叱咤した。

「でも、どうするってんだよ！！」

オルバニアンが泣き言を言う。

「オルバニアン様！ 大丈夫ですか！？」

オルバニアンの悲鳴に呼応するかの様にアーチェルも悲鳴を上げていた。

「アーチェル様、念を、ありったけの念をかけて下さい！！」

「わ、分かりました！！」

アーチェルは半球版に手を掛けて念じ始めた。

サイコ・フライヤーは、なお依然としてミサイルの脅威から逃れていなかった。

アシュマは後の部屋からサバイバルバッグを引っかき集めてきた。

「アシュマ！ そんな物が役に立つかよ！！」

「いいんだ！！」

「何だって？」

「もう良いぞ、アーチェル！ オルバニアン！！ 此処に来い！！」

アシュマが大声を張り上げる。

しかしミサイルが来る。

一体どういうつもりなのか？

「なんだって！？」

オルバニアンは思わずアシュマに訊いた。

操縦桿を放せば、たちまちミサイルの餌食になる事は、目に見えていた。

直ぐには手放せない。

「ミサイルが着弾する前に早くここに来い！！」

アシュマは強い命令口調でオルバニアンを来させる。

「ち！ 分かったよ」

「アシュマさま……もうよろしいのです？」

アーチェルが半球版から手を外しかけた。

「いい。脱出する手筈は整った」

「じゃ、じゃあ俺も、もういいんだな？」

オルバニアンが操縦桿から、手を離れた。

「互いに手をつなげ」

アシュマが叫んだ。

アシュマの右にはオルバニアン。

アシュマの左にはアーチェル。

アシュマは予め鬼虎の鯉口を切っていた。

ミサイルがサイコ・フライヤーに命中した。

爆風がサイコ・フライヤー内を走り回る。

しかし爆風は鬼虎の念導境界面で遮られ、爆発の炎は念導境界面で光に変換され鬼虎の鯉口の中へと収まっていった。

機体は爆発し、散乱した。

二機の戦闘機はサイコ・フライヤーの撃墜を確認すると、帰途へとついた。

消えかかる爆炎の中から球状の念導境界面で覆われた三人が現れた。

「そうかこの手があったか……」

オルバニアンは感心した様に言った。

「あっ！ 食料、食料！ 食料は！？」

すぐさま不安に陥るオルバニアン。

「慌てるな。ちゃんとある」

アシュマが言った。

「さすが、アシュマさま」

アーチェルがアシュマを褒めた。

ただ、不思議なのは、爆炎を念導境界面で何かの力に変換したのに、念導境界面内、即ち念の力場内にアーチェル達を囲っても、光に変換しないのは何故だろう？

アシュマはこの疑問に答えを見出せないでいた。

確かに、鬼虎が発生する念導境界面及び念の力場と、魔導石が発生させるそれとは、似ている所もあれば、全く別の部分もある。

ただ、理屈では証明できないが、鬼虎自身が吸収するしないを、割り振りをしているのではないか？

アシュマはそう思ってみる。

これはアシュマが、感覚的につかんだ事であって、必ずしも理屈で証明出来る物ではなかった。

アシュマ達は鬼虎の念導境界面に包まれて、重力に逆らうが如くゆっくりと地面へと降下していった。

アシュマ達は砂漠の地に降り立った。

周りは見渡す限り、砂と岩石と多少の植物しかない、乾燥と灼熱の地だった。

照りつける日差しがアシュマ達を焼く。

「あちい……。こりゃあ、一難去って、又一難って所かねー……」
オルバニアンが言った。

「上空から見た時には、南の方に何か建造物があったが、あれは何か？」

アシュマが尋ねた。

「んなこたあ知らねえよ！」

オルバニアンが苛ついて怒鳴る。

「アギの港だと思います。先程の戦闘機は、ゲンドウール共和国の空軍だと言っていました。ゲンドウールにはアギ砂漠が広がっており、砂漠の南には世界有数の交易港、アギの港があると聞きます」

アーチェルが答える。

「良い答えだ」

アシュマが褒めた。

「いえ、それ程でも……」

アーチェルは嬉しそうに表情を弛める。

そして照れる。

「んじゃあ、行き先が決まったって事で、アギの港へ行こうぜ」

オルバニアンがサバイバルバッグを背負い、立ち上がる。

「いえ、まだお話が……」

「ん？　なんですか、アーチェル様？」

オルバニアンがアーチエルの方に振り向く。

「アギの名前の由来なのですが、この砂漠には獰猛な肉食獣アギがよく出没して、旅人を捕食するとか……」

「捕食ねえ……そんなのあ、こんなちっこい奴を旅人が、面白可笑しく誇張してるもんですよ。気にしないで行きましようよ、アーチエルの姫さん」

「だいいんですけど……」

アーチエルは危惧を棄てきれない。

不安な様子だ。

「待て、動くなオルバニアン！」

アシュマが何かを警戒した。

「な、何だよ！？ アシュマ！」

「何か来る」

「来るつつたって、まわりにゃ何も……」

その時、オルバニアンの背後に砂柱が立ち、砂煙と共にそれは現れた。

目は退化して無く、腕も脚も無かった。

それよりも何よりも特徴的だったのが巨大な顎で、あご頭部全部が顎で出来ていて四方に広がった。

顎には巨大な歯がびっしりと生え揃っていて、これに噛まれたらおそらく全身はズタズタにされてしまうだろう。

そしてそれは目に見える部分だけでも、優に三メートルはあり、地面に隠れている部分をあわせたら、どの位の長さになるか見当もつかない。

「あ、あ、あ……」

オルバニアンは足がすくんで動けなかった。

アギは動けないでいるオルバニアンを飲み込もうとした。

「う、うわああああっ！！」

オルバニアンはもう駄目だと思った。

アギがオルバニアンを半分までその顎が覆い隠した時、光が一閃

し、アギの顎を断ち割っていた。

ギャオオオオオン！

不気味な鳴き声を響かせて、次々砂柱が立ち上がる。

砂煙が消えて行くのと同時に、アギの全容が明らかになって行く。

それは、一つの胴体に七〜八メートルの枝胴体、一メートル程の頭部が八体ついた、それは、おぞましい姿の生き物だった。

「オルバニアン！」

アシュマが叫ぶ。

「……………あ」

「オルバニアン！！」

アシュマは更に叫んだ。

「う……………」

「怪我は無いか！？」

「う……………」

オルバニアンはショック状態の様だ。

それに構わず、アシュマは叫びつつけた。

「オルバニアン！！ アーチェルを守れ！！」

その言葉と同時に、アギの一体目がアシュマを襲った。

アギが口を開いたその瞬間に、自ら飛び込んで、刀を二閃し顎を断ち割っていた。

「オルバニアン！ しっかりしろ！ ハグム殿の仇を、討つんじやなかったのかッ！！」

「仇…………。そ、そんなもん言われなくとも分かってらあッ！！」

アシュマの『仇』と言う言葉で、オルバニアンは正気を取り戻していた。

アギの二撃目が来た。

アシュマはそれをかわし、アギの胴体部分を断ち割っていた。

「なら、アーチェルを守れ！！」

「おうよ！！」

やっと立ち直ったオルバニアンを横目に見ながら、アシュマはア

ギの結合部分に向かって横から走り寄った。

その、アシユマに顎つきの部分が次々と襲い掛かるが、アシユマの砂地とはとても思えない速力で次々とこれをかわしていった。

オルバニアンがアーチェルの元へとたどり着いた。

「アーチェル様、お待たせいたしました」

「大事無いですか!？」

オルバニアンがアーチェルを案じる。

「はい、大丈夫です」

アーチェルは遠く離れているからなのかアギに襲われることはなかった。

「では、アシユマさまに付いて、アシユマさまのお手伝いを」

「いえ、俺はアーチェル様を守る様、あいつに言われてきましたから」

アシユマの方を見ると、アシユマ自身はアギの結合部分へと近づきつつあった。

が、アギは結合部分を地中へと潜らせ始めた。

アシユマは構わず、鬼虎を手に、胴体と言う胴体をぶった斬り始めた。

枝胴体ごと斬り割られたアギもあった。

アギは他の枝胴体ごと地中へ逃げ込もうとする。

アシユマはアギの結合部分に鬼虎を突き立て、斬り裂いて行く。

アギはもがいて苦しんだ。

アギは頭をアシユマ目掛けて、顎を大きく開けながら突っ込んで来る。

アシユマは咄嗟によけて、アギの頭はその結合部分を思い切りかじった。

アギは苦痛にその身体を捻らせうねらせる。

アシユマはすかさずアギの枝胴体を真っ二つに斬り割り、そのまま結合部分へと鬼虎を新たに突き立てた。

血が滝の如く吹き出る。

アシユマは存分に返り血を全身に浴びた。
その姿はさながら修羅の様でもあった。

「すげえ……」

オルバニアンは感嘆した。

アシユマがアギの結合部分を斬り裂いていると、結合部分の中に、
ごりっ、と硬い物が鬼虎に突き当たった。

アシユマはそのまま構わずその硬い物を捻^{ひね}り斬った。

そのとたんアギは痙攣を始め、枝胴体は次々と倒れこみ、そのま
ま動かなくなった。

どうやら、とどめを刺した様だ。

アシユマは鬼虎を引き抜き、オルバニアン達の元へ戻って行った。

「アシユマさま、お帰りなさいま……うっ」

アーチェルは声を掛けるのもそこそこに後退^{あとずさ}った。

アシユマはアーチェルの意外な反応に何かあったのかと思った。

「アーチェル、どうした？ 怪我でもしたか？」

アシユマはアーチェルに寄ろうとする。

すると、アーチェルはアシユマが寄った分だけ、後退った。

「!？」

アシユマは疑問に思う。

「ほ……ほほほ……」

アーチェルは引きつった笑いをさせる。

「どうしたんだ？ アーチェル？」

アシユマは何かがあったかと心配する。

「ほほほ」

「アシユマ。お前、臭うんだよ」

オルバニアンが鼻を摘みながら言った。

「臭う？ そうなのか、アーチェル？」

「ほほ……ほ……しよ、少々」

アーチェルは尚も引きつった笑いをしている。

「そりゃ、あんだだけ、アギの返り血を浴びたんだ、生臭くてたまら

んぜ……って言うよりアギの血そのものがすごい臭いだぜ」

「そうか」

といって、腕に付いたアギの返り血を嗅いだ。

「うっ」

と、言ってアシュマは顔をしかめた。

「仕方ない、とりあえず、アギの港へ行こう」

アシュマはサバイバルバックを手に取った。

「アシュマ、離れて歩けよ！」

オルバニアンが鼻を摘みながら離れる。

「アシュマさま、申し訳ありません」

アーチエルは本当に申し訳なさそうに言った。

「わかった」

「でも、もうアギに襲われる心配は、無いと思います。アギはアギの血を嫌うと言いますから」

「そうか」

アシュマはとぼとぼ歩き始めた。

少し落ち込んでいるのだろうか。

精彩が無い。

「アシュマ！ 俺も今のお前を襲おうとは思わないぜ。安心してくれ」

オルバニアンが揶揄する。

「オルバニアン様！！」

そんなオルバニアンをアーチエルが叱ってみせる。

「おう、こわ」

「まったく、もう」

「アーチエル様、どのくらいでアギの港に着きましよう？」

オルバニアンはアーチエルの機嫌を伺う様に言ってみた。

「さあ！？ 知りません！！」

どうやら完全に機嫌を損ねてしまった様だ。

暫く砂漠を歩いた。

アシユマはともかく、オルバニアンとアーチェルは太陽の熱で身体を焼かれ、体力を奪われ、歩く力を奪われていった。

アシユマは後から付いていったが、後ろから見ても、特にアーチェルの体力の消耗が激しい様に見えた。

「おーい、大丈夫かあ!!」

辛うじてオルバニアンが片腕を上げたくらいで、アーチェルに至っては、ふらふらと歩いて何の反応も示さなかった。

「少し休め!!」

二人は倒れこむ様にして腰を落とした。

アシユマは臭い等お構いなしに近づいて行って、アーチェルの様子を診に行った。

「大丈夫か?」

「大……丈夫……です」

辛うじてアーチェルは応えた。

「オルバニアンは?」

「お……俺は、多少へばっているが、大丈夫だ」

「そうか」

「アーチェルが熱中症になりかかっている。気を使ってやってくれ。それとここで暫く休もう」

「……わかった」

アシユマはアーチェルの上着を脱がし、アーチェルを仰向けに寝かせ、そこら辺にあった枝等で頭が隠れる程の小さなテントを作ってやった。

それから、アシユマは自分用のサバイバルバッグから水筒を取り出し、アーチェルに飲ませてやった。

「すみません、アシユマさま……」

アーチェルはそう言って泣き出した。

「気にするな」

そう言ってアシユマは水を口に含んで、霧吹き of 要領で水を吹きアーチェルに掛けた。

「あと、この水は気兼ねなく飲んでくれ。いいな？」

「それではアシュマさまが……」

「俺が参っている様にみえるか？」

アシュマがアーチェルを見据える。

「……いいえ」

アーチェルが優しく否定する。

「なら、そういう事だ」

「……有難う。アシュマさま」

砂漠では水は命の次に大切な物の筈だ。

それを、アーチェルの為に惜しげもなく使ってくれる。

アーチェルは、ぽろぽろと涙を流し感謝した。

アシュマは二人がいる所より少しはなれた高台になっている所で、何か無いか探してみた。

水の匂いを嗅ごうにもにもアギの血の臭いがアシュマの鼻を利かなくしていた。

水の音に関して言えば全く無かった。

ただ、向こうから車の近づく音が聞こえてくる。

目を凝らして見ると車が一台こちらに向かってやって来る。

「オルバニアン！ 車だ！ 車がこっちにやって来る！！」

「なんだって？」

アシュマは車に向かって大きく手を振った。

その車は、ボグニと名乗ったアギの港の交易商人の物だった。

ボグニという男は大層太っていて足が短く、まるで樽の様な体型の男だった。

だが、その顔はどこか愛嬌があって、憎めない所があった。

ボグニは仕入れた物をこれから、自分の店へ運ぶ所だった。

アーチェルとオルバニアンは座席について、アシュマは荷台に乗った。

「それにしてもここに来る途中、ぶったまげたなあ。なにせあんな大物のアギを見るだけでもたまげたのに、それを一人で殺^やっちゃうなんてなあ」

呆れかえって、この商人は言った。

「そんなにすごいのかい？アギを倒す事って」

オルバニアンが尋ねた。

「アギを倒す事がすごい訳じゃない。あの大きさのアギを一人で倒すっちゃう事が常識より外れとるっちゃうこった」

「そんなでっかいアギなのかいあれば？」

「最大級だなあれば。しかも、あんな大きいアギなんて見た事もねえ。まず、首の数が多。それが普通じゃねえ。普通は大人二十人で組を作って倒すもんだ、アギっちゃうもんは。しかもそんなアギを一人で倒すなんちゅう事してのけるたあ、アンタの相棒は化け物んだな、ありゃ」

商人ボグニは一人感心していた。

「へー」

「『へー』っておめは、後の荷台に座っておる相棒に助けられたんじやろうが！少しは感謝ツちゅうのをだな……」

「くすつ。うふ、うふふふ」

アーチェルは何が可笑しいのか、くすくすと笑い出した。

「アンタまで、笑うツちゅうのか？」

ボグニがミラー越しにアーチェルを見た。

「いえ、違うんです。アシユマさまっついてもそうなんです。人から化け物扱いされて」

アーチェルが微笑みながら応える。

「そうだから？アシユマ？どこかで聞いた名じゃなあ？」

ボグニが頭を捻る。

何かを考えているようだ。

「え？ え？ そうですね？ 普通だと思いますよ？ 普通、普通！
ね？ オルバニアン様！」

アーチェルは慌てた。

ここで、アシュマ達の素性がばれるのは宜しくない。
ガルマインの手の者に知られるのはまずい。

そう思ったのだ。

アーチェルはオルバニアンに助け舟を求めたが、

「そうかあ？ アシュマなんて珍しい名前だぜ？」
泥舟を返された。

「いや、あのその……」

「思い出した！ 『閃光のアシュマ』だな！」

「あ！ え、ええ！ そうです、そうです！ 閃光のアシュマ」

アーチェルは、指名手配犯でのアシュマの名を出されるかと思い、
ひやひやとした。

「あの『閃光のアシュマ』なら、納得だあ。なら尚更荷台なんかに
や乗せてらんねえ」

男気があるのかボグニは興奮の呈であった。

「どうする気だよ？ あの臭いでこの座席に来させるつもりかよ？」

「わたくしは我慢できます！」

アーチェルは右手を握り顔の前に持って行って決意を述べた。

「二人とも落ち着きなせえ。この先にオアシスがあるでよ。そこで
身体を洗わすといええ。良い石鹸もあるで、それを使えばアギの血も、
血の臭いも綺麗さっぱり取れるでよ」

アーチェルはアシュマに知らせようと窓を開け顔を出しアシュマ
の方へ向いた。

アシュマは荷台に一人ぽつんと座っていた。

「アシュマさまこの先に……」

アーチェルがそう言い掛けると、

「聞こえてるよ全部」

そう応えていた。

「もう」

アシュマはいつもそう応える。

たまには別の応えも聞きたくなるアーチェルだ。

「造作を掛ける」

アシュマはそう言うに止まった。

「いいいえ、なんの。ワシはここでボーっとしとるだけだえ」

ここは、オアシス。

シュロや、まばらに生えた草等が生い茂り、この灼熱の死の世界で、ここだけ必死に死と戦う生命の営みがあった。

「ところでボグニ殿はアルステイーンと言う名前に記憶は無いか？」

アシュマは尋ねていた。

「あるよ」

ボグニは事も無げに答えていた。

「それでは……今我らは、アルステイーンと言う名の者を捜している。もし行方を知っていたら、お教え願えまいか？」

アシュマは喜色を示す。

が、ボグニは手を上げて制した。

「ワシは名を知ってるまで。行き先は知らん」

「そうですか……」

アシュマは静かに言葉を吐き出した。

「さ、身体を洗ってきなせえ」

ボグニがオアシスを指差す。

「忝かたじけない」

アシュマは着衣を脱ぐとゆっくりと足の先から頭の先までオアシスの水の中へ潜っていった。

そしてあらかたアギの血を洗い流すとオアシスの岸边に戻ってきた

「ちえっ！　なんで俺がアシュマの服なんかを……ぶつぶつ……臭

いし……」

ぶつくさ言いながらオルバニアンはアシュマの服を洗い始めた。

アシュマは石鹸を使って、頭を洗っていた。

その後ろからアーチェルが近付いてきた。

「アシュマさま……お背中お流しします……」

「え？ 何だって？」

アシュマはアーチェルが何を言ったのか聞こえなかった。

「だから……お背中をお流しします……」

「え!？」

いつもアシュマは、

『聞こえている』

で、済ますのに、どうしてこんな大事な事を聞き逃すのか、アーチェルにしては珍しく苛々いらいらとしてきた。

「だから……おせなかおながしします!」

アシュマはアーチェルの言う事に聞こえないらしく、振り向いて、

「え？ 何だって？」

そう言ってアーチェルの方を振り向いた。

「え? ……………」

アーチェルは見てしまった。

一糸纏わぬアシュマの裸体を。

アーチェルは固まってしまった。

そして……。

「きゃああああああああっ!!」

大きな叫び声をあげてしまった。

「な、なんだ!？」

アシュマは目を瞑っていたので状況が良く分かっていなかった。

「アシュマさまの、えっちいいいいいい!!」

アーチェルは逃げて去ってしまった。

「ア、アーチェル……?」

アシュマは一人取り残された……。

「全くもう、アシユマさまったら、あんなに『えっち』な方だとは思いませんでした」

アーチェルは半分泣きそうになりながら、アシユマに抗議した。

「アーチェル。あれは、事故だ」

アシユマはアーチェルの方を見ながら応えていた。

「『事故』で済まそうなんてアシユマさま、あんまりです。乙女にあんな物を……あんな物……を……見せるなんて」

アーチェルは耳まで真っ赤にして俯いてしまった。

「？」

アシユマはアーチェルの様子を伺った。

「アシユマさまの えっち。ばか。しらない！」

アーチェルは照れているようだ。

それを誤魔化そうとしている。

「この人達は何をしとるんだがね？」

ボグニが後ろの席で繰り広げられている様子を疑問に思っ
て思わず口走る。

「ちっ、ただの痴話ゲンカだよ、全く……」

ボグニの言葉を受けてオルバニアンが答える。

その事を言う事をさも忌々しげに。

「そうか、痴話ゲンカかね。そりゃ、放って置くのが一番ええな」

ボグニは後ろを気にするのをやめて前を向く。

オルバニアンと商人ボグニは二人を放って置く事にした。

そしてキーを差込み、エンジンを回し、車を走らせる。

「所でお三方はアギの港に行くって言ってなさったな」

「ああ、そうだけど？」

オルバニアンが応えていた。

「宿屋はどうなさる？ 良かったら、ワシの店に来んか？」

ボグニがそう言い出す。

「厚意だろうか？」

「俺はいいけど、後の二人にも聞いてみるよ。で、どうするよアシ

ユマの旦那？」

「聞こえてた。俺は大丈夫だ。アーチエルは？」

「もう！ 何が『聞こえてた』よ！ わたくしの話は、聞いてないくせに！ もう！ ばか！ 知らない！」

アーチエルの機嫌が良くない。

「ボグニ殿の所に来ないかと言っている」

アシュマがアーチエルに言った。

「え？ そうでしたの？ ボグニ様の御厚意、嬉しく存じます。宜しく願います」

アーチエルは態度を豹変させる。

「変わり身の早い娘子だなあ。ま、ええじゃろ。あんたみたいな可愛い娘子ならな」

「有難うございます」

「しかし、こんな所で車とは有り難えや 恩に着るぜ、ボグニさん」
オルバニアンは言った。

「なんて事ねえよ。こっちこそ、あんなに大きいアギを倒した勇者殿一行を乗せられるんだ。こんなに鼻が高い事はねえやな」

アシュマ達はボグニの車に乗って、死の砂漠から抜けつつあった。

アシュマ達がアギの港に着いたのは、夜も更けてからだった。

アギの港は、アギ湾の崖に多層構造で崖の下から崖の上まで続いており、最上層の周囲には城壁をめぐらしていた。

城壁には入り口があり、入り口には鋼鉄製の扉があって、侵入者を硬く拒んでいた。

こんな夜更けだと言うのに、城壁の内側から光りが漏れ出して、未だ活発に活動している商人達がいる事を示していた。

正に不夜城と言う様相を見せている。

アギの入り口の守衛にボグニがパスを見せて、門を抜けて行く。
ボグニの車は、この階層の中央にある昇降機の前に来て、扉が開

くの待った。

扉が開いてからは、ボグニは昇降機の案内女に階層を告げ、扉を閉めさせ、階層を下っていった。

アシュマは窓から外を眺めていて、階を下って行くにしたがって、治安が徐々に悪くなって行くのを感じた。

オルバニアンは疲れ果てて眠っている。

アーチェルも疲れ果てアシュマに寄り添う様にして眠っていた。

ボグニがバックミラー越しにアシュマを見る。

ボグニが口を開く。

「アシュマ殿はこれから何処に行きなさるのかな？」

「ああ……とりあえず、アヘイビアという国に行こうかと思ってる」

アシュマがボグニの問いに答えていた。

「そうですか。アヘイビアに」

ボグニが聞き入る。

「……………」

アシュマは黙る。

これ以上はなす必要性を感じなかった。

「……………」

「……………」

「アヘイビアにはどうやって行きなさる？」

ボグニがまた尋ねる。

親切なのかどうかは不明だ。

「まだ決まっては……」

「そうですか」

「……………」

「……………」

会話が途切れる。

ボグニはアシュマに少し話にくさを覚えた。

更に口を開く。

「ワシの知り合いの貨物船の船長が、近くアヘイビアに行く予定があるでよ、そいつに掛け合ってみようか？」

「忝い」

「ま、多少の不便は、勘弁して欲しいだあね」

「有り難い。感謝する」

「う、ううん……」

アシユマとボグニの会話が耳に障ったか、アーチエルは目を覚ます。

「もう着きましたの？ アシユマさま」

アーチエルは眠い目を擦りながらアシユマに尋ねる。

「ああ、もう少しで着く」

「重畳、重畳。んふ♪」

アーチエルはアシユマの左腕を抱えて、また眠ってしまった。

ご満悦だ。

その代わり、オルバニアンが起きてきた。

「あゝ、うっせえなあ、何の話だよ？」

「ボグニ殿が貨物船の手配をしてくれるそうだ」

アシユマが説明する。

「貨物船？ まさか、そんなので、アヘイビアに行こうって腹じゃないだろうな？」

オルバニアンは不服いっぱいだ。

当然だろう。

自分のあずかり知らぬところで重要な事が決められたのだ。

しかもそれが、自分の親の仇によって決められた。

これが不服とならないでなんになるう？

「そのつもりだが？」

そんなオルバニアンの気持ちも知らないでアシユマは言い切る。

「それなら、もっと、なんつうか、こう……そう！ 旅客機……！」

そんな貨物船なんてえもんに、乗れるかつーの！

オルバニアンは不満をぶつけた。

バスポート

「旅券もなしにどうやって、旅客機にのれと？」

しかし、アシュマは理詰めで責める。

当然の如く。

「う……」

言葉に詰まるオルバニアン。

「乗船前に受けるチェックを、どうかわせと？」

アシュマの言葉が更にオルバニアンを追い詰める。

「うう……」

更に追い詰められるオルバニアン。

とどめに言う。

「公の場に出てガルマインの手の者から、どうやって身を隠せと？」

「ああー、もう、分かったよ！！ 貨物船でいいよ！！」

オルバニアンはとうとう、癇癪を起こしてしまった。

その、大きな声にアーチェルが目覚めました。

「うーん、もう着きましたの？」

アーチェルは左手で目をこすりながら訊いた。

アシュマはアーチェルに振り向いて話す。

「もう少しだ。アーチェル」

「そう。苦しゅうない、大儀。うふ♪」

アーチェルは満足そうだ。

アーチェルは、アシュマの腕を取って、また眠りに入ろうとしていた。

「そうだ、姫様にも聞いてみようぜ！！ おい、姫さんよ、俺達や貨物船でアヘイビアに行くだよ！！ どうするね姫さん！！」

「うん？ わたくしはアシュマさまと一緒になら、何でも、何処へでも……ふあ、わああっ。うふ♪」

アーチェルはアシュマの左腕を抱えてまた眠ってしまった。

アーチェルはアシュマと一緒にならば満足らしい。

「けっ！」

オルバニアンは椅子に座りなおしていじけてしまった。

ボグニはアシュマと視線を合わせ、苦笑いをしながら、やれやれといった感じで肩をすくめた。

それに対して、アシュマもわずかに首を縦に振って見せた。

オルバニアンとアーチェルはすぐさま眠りに入った。

アシュマ達一行は、アギの港の中層部、ボグニの店に着いた。

店は、夜半も過ぎていると言うのに、まだ開いており、客の出入りも頻繁ひんぱんに行われていた。

店の商品は生鮮野菜が主な売り物だった。

その他には乾物等も取り扱っていて、多少の雑貨も扱っていた。

あの、アギの血を綺麗さっぱり洗い流してしまった石鹸も、取り扱っていた。

「さ、こちらに……」

店の裏に案内されて、裏口を開いた。

「店の出入りは、こちらをお使い下さい」

ボグニは裏口から店の中に入った。

そこは、店の奥向きを一手に引き受ける、奥の間だった。

どうやらここは、店舗兼住宅の様だった。

奥の間を向かって左に行くほこりと湯殿があった。

「ここが湯殿です。後程、旅の埃を、落として下さいませ」

ボグニが案内した。

二階に上がると、使っていない一室があり、その部屋を客間代わりに宛がわれた。

「狭くて、不便でしょうが、暫くはこの部屋を使って下さい」

一同は頭を巡らせた。

丁度六畳ぐらいの広さだろうか。

「いま、お食事を用意しますでな。それまで、風呂等使って、ゆるりとして下され」

そう言って、ボグニは階下に下りていった。

「アシュマさま？ お風呂にはお入りになりませんか？」

アーチェルがアシュマに訊く。

アーチェルは控えて最後に入ろうと思っていた。

「俺は一番最後でいい。オルバニアンは？」

アシュマは、柱にもたれかかりながらオルバニアンに尋ねる。

アシュマは昼にオアシスで身体を清めている。

そんなに身体は汚れていない。

「俺も後でいいよ。お姫さんは？」

それに対しオルバニアンは肩肘しながらごろりと横になって言った。

オルバニアンは単に物臭なだけだ。

「じゃ、じゃあ、頂いちゃっていいかしら？」

アーチェルは少し悪戯っぽく言う。

肩をすくめ、舌も少し出す。

「ああ、いいよ」

アシュマが答える。

「じゃあ、わたくし、お風呂頂いてきますね」

そう言つて、アーチェルは、階段を下りて行った。

「アシュマさんよお、いつにする？」

オルバニアンがアシュマに向けて言葉を放った。

何か含みがあるようだ。

二人きりになるのを待っていたようだ。

「俺はいつでもいいが」

アシュマもオルバニアンに応えてやる。

鬼虎を引き寄せる。

左手を鯉口に当てる。

どうやら二人の決闘の算段だったようだ。

アシュマとオルバニアンは此処で決着を付けるつもりなのか？

「いや、この人達に迷惑がかからあ。やめとくよ」

オルバニアンは殺気を収める。

「そうか」

アシユマも鬼虎を収める。

「それに、悔しいがまだ俺の腕じゃあ、あんたを斬れねえ」
オルバニアンはそう言い放った。

「寝込みを襲うと言うのは？」

アシユマが要らぬ事を訊く。

「俺がそんな卑怯な手を使うってのか！？ 馬鹿にすんな！！」

オルバニアンの怒りに火が点いた。

親の仇に卑怯者呼ばわりされたのと同じ事である。

この怒りは当然といえた。

「何で二人で喧嘩してるんですか！？ お約束は！？」

その時アーチェルが階段から顔を覗かせた。

アーチェルはアーチェルで少し怒っているようである。

約束を反故にされたと思ったのだ。

「何でもねえよ！」

オルバニアンが吐き捨てた。

そのあとで、

「すまねえ。もうやんねえ」

と、言った。

「アシユマさまは？」

アーチェルが尋ねた。

「俺もしない。済まなかった」

アシユマは静かに目を瞑り鬼虎を抱く。

相変わらず、柱に背をもたれている。

「はい。よろしい」

アーチェルは両手を胸の前で叩く。

微笑んで御満悦の様子だ。

「どうした？ アーチェル。風呂はもう終わったのか？」

そんな訳は無い。

あえてアシユマは訊いてみたのだ。

アシュマは目を開きアーチェルを見る。

「ううん、タオルを忘れちゃって」

アーチェルはちよつと舌をペロリと出した。

「そうか」

「じゃあ、わたくし……」

「行って来い」

「はい……」

アーチェルは再び階下へと下がっていった。

アシュマは再び目を瞑る。

この後オルバニアン、アシュマと続いて風呂に入り、続いて食事を採り、遅めの就寝となった。

この時、アーチェルとオルバニアンは床に着いたが、アシュマは柱に背をもたれて、そのまま寝ようとしていた。

「どうしたの？ アシュマさま お布団に入らないの？」

アーチェルはアシュマのほうを見る。

合点がいかないようだ。

「ああ、いいんだ。この方が落ち着く」

アシュマは目を瞑り、矢張り背にもたれ胡坐を掻き、鬼虎を抱いていた。

「なんだよ！ アシュマ！ 俺へのあてつけかよ！？」

オルバニアンはさっきの事もあり、そう思い、アシュマに向かって怒鳴りつけていた。

「そんな狭い見じゃない」

アシュマは目を瞑ったまま応える。

「じゃあ何だってんだよ！？」

オルバニアンは怒りっぱなしだ。

「寝込みを襲う輩は、他にもいるって事だ」

アシュマは意外な事を言った。

「！？」

オルバニアンは皆目見当がつかない。

「そろそろ出てきたらどうなんだ？」

此処でアシュマは目を見開く。

障子戸がかりりと開いて、ボグニと黒装束の男達が現れた。

黒装束の男たちは言わずと知れたガルマイン配下の『影の者』と

呼ぶ者達である。

廊下からの照明で逆光となり、表情までは読み取れなかったが、
気配でボグニがほくそえんでいる事が分かった。

「ガルマインの……、いや、ドートネーゼの手の者か？」

アシュマは静かに呟く。

「情報どおり、勘だけは良い様ですな。アシュマ・アトー。いかにも我らはドートネーゼ、ネルファバーゼの手の者！」

「ネルファバーゼ？」

聞きなれない言葉を聞いた。

ネルファバーゼとは何か？

アシュマにはまだ馴染みが無いが、ネルファバーゼとはドートネーゼの暗殺機関の事である。

ガルマインもこのネルファバーゼに属している。

そんな事はアシュマの耳には入って来ない事だったが。

「ええ」

ボグニはその愛嬌のある顔で頬を歪めて見せた。

「オルバニアン！ アーチェル！ 敵だ！ 起きろ！」

アシュマが言い放つ。

アシュマは既に鬼虎を腰に佩いて立ち上がった。

「う、うう…… だ、だめだ…… 体が……言う事を聞かねえ」

「ア……アシュマさま……か、体が痺れて……」

オルバニアンとアーチェルの二人は体が小刻みに震えて自由が利かないようだった。

「！ 毒かつ！」

アシュマは思いつくところを言ってみる。

「ふふふ……その通りですよ……。食事に入れさせてもらいました

よ。あなたにも、そろそろ効いてくる頃合でしょう」

アシュマは腰を沈め抜刀の姿勢をとった。

居合いをしようと言うのだ。

実際身幅広く重ねの厚い豪刀鬼虎は居合いには向いていない。

が、アシュマはそれをやろうとしている。

実際、何度かアシュマは鬼虎で居合いから斬りつけている。

その速さは正に電光石火。

何ものよりも速い。

それは偏にアシュマの腕があつたから。

豪刀鬼虎がその速さで斬り付けた時何が起こるか。

それは凄まじいまでの威力となつて返つて来る。

アシュマは今それをしようとしている。

「ならば、毒が回りきる前に、お前達を斬る！」

アシュマが宣言する。

鯉口が切られる。

「ぬぬっ！　ならば！　皆の者、こ奴を討ち取り、鬼虎を奪え！」

ボグニが合図をする。

「秘剣・閃光一刀！」

アシュマは叫んだ。

そして抜刀をした。

只の抜刀では無い。

豪刀鬼虎の選考の如き抜刀である。

抜刀術も只の抜刀では無い。

アシュマ独自の工夫が凝らされている。

手首の返し、腕の引き抜き、腰の捻り。

正に閃光の如き抜刀術だった。

一人目の胴体を正に真つ二つにし、返す刀で二人目の胴も真つ二つにした。

そのまま、上段に振りかぶり三人目を袈裟に斬り割ると、そのまま刀をすり上げて四人目の右腰から心臓辺りまでを斬り割って、五

人目は引いた刀を喉元へと突き刺した。

ここまでが、ほんの一瞬の内に行われた。

何と速い刀遣いであろうか。

「形勢逆転だな……ボグニ……」

アシュマの切っ先はボグニを狙っていた。

「いえいえ、それでも無い様ですねえ。そのからだの震え……身体に毒が回って来たみたいですねえ。あんなに激しく動いたから、毒の回りが激しかったんでしょなあ」

アシュマの切っ先が小刻みに揺れる。

アシュマの眼は眩み、周りが回っていた。

手足は痺れ、力が入らなくなっていた。

切っ先は大きく逸れ畳に突き刺さった。

アシュマは毒に抵抗しようとしたものの、出来る事と言えば、せいぜい鬼虎を畳に突き刺し杖代わりにするくらいだが、今はそれも叶わず立て膝をするのが、やっとな程だった。

「く……どうせだ。最後に聞きたい。どうやって、俺達の居所を知った？ サイコ・フライヤー墜落から、そう時間は経っていなかった筈だ……」

アシュマは言わなかったが思っていた疑問を口にした。

「良いでしょう。我らドートネーゼの息のかかった者は世界中に散らばっております。また、サイコ・フライヤー撃墜前のやり取りも、全て聞かせてもらっています。そこで、今回は私が一番近かったので、派遣されたと言う事ですよ」

「そうか……。ドートネーゼというのは、それ程までに、勢力があるのか」

アシュマはドートネーゼの恐ろしさの一端を知った。

「わかった所で死んでもらおうか」

ボグニはそう言って、背中に手を回し二振りの斧を取り出した。

「うりゃあっ!!」

ボグニは思い切り斧を打ち下ろした。

アシユマが咄嗟に鬼虎に手を沿え、斧の来る方向に構えた。
ぎいん！

と、鈍い音がして斧の打ち下ろしが止められた。

「なに！？ 折れないだ！？」

通常ならば、斧の質量を刀は受け止め切れない。

折れるのが普通だ。

だが、鬼虎はその一撃を受け止めていた。

boguniは何度か斧をアシユマに……鬼虎に叩きつけていた。

「何故だ？ 何故、折れん！？ 何故、刃こぼれもさんのだあっ！
！」

boguniはムキになって斧を打ちおろす。

むしろ、boguniの斧が刃こぼれを起こしていた。

「鬼虎を折ったりしては、まずいのでは無かったのか？」

アシユマがそう言う。

「このおっ！」

boguniは両手の斧を振りかぶった。

「アシユマさま！」

アーチェルはboguniの両足に組み付いて、boguniのバランスを崩した。

「お、おわっ！」

boguniはそれでも、アシユマに斬り掛かってきた。

アシユマはこの機を逃さず、boguniが振ってきた斧の下を掻い潜り、心臓目掛けて鬼虎を寝かせて、突いた。

「おぐあっ！」

boguniはアシユマの上に押し掛かった。

アーチェルは息を呑んだ。

「アシユマ……さま？ アシユマさま！？ アシユマさま！！」

「……………無茶をしたものだな、アーチェル。礼を言う。助かった」
アシユマはその巨軀きよくの死骸の下から何とか抜け出て、boguniの死体をごろりと退けた。

「いえ、そんな……」
照れるアーチェル。

「ところでオルバニアンは？」

「こ、ここに、いるぜ……みんなより、痺れが強い……かもな……死ぬかと、思った……ぜ」

体が痺れているらしい。

少し動きがぎこちない。

「動けるか？」

アシュマが訊く。

「動けねえ、事は、ねえが……」

オルバニアンが上体を起こす。

汗が酷い。

「出来れば、早く移動したい。これ以上ここにいて、厄介事に巻き込まれたくはない」

「それには賛成だ……。俺はいいとして、アーチェル様は、動けるのかよ？」

「わ、わたくしは……大丈夫、です」

アーチェルが応える。

「いや、アーチェルは俺が背負う」

「で、俺には……、歩けと……。無茶言う奴だぜ」

オルバニアンは脂汗を掻きながら、立ち上がりかけた。

「さあ、アーチェル。俺の背に乗れ」

アシュマが背を向ける。

「アシュマさま、もう動けますの？　すごい汗よ？」

アーチェルが気遣う。

「大丈夫。汗を掻いてすっきりした感じだ」

アシュマは後ろを振り向いた。

「オルバニアン様は大丈夫でしょうか？」

「へへ……。俺は何とかなるけどな……」

「済みません。では、失礼します。アシュマさま」

アーチエルはアシユマにおぶさった。

「さあ、行くぞ」

そしてアシユマ達一行はボグニの店を出て、アギの港町の闇の部分へと溶け込んでいった。

第二節 ヨディ・ヨフル

ガルマインはドートネーゼの査問から舌の根も乾かぬうちに、ノリトレア王国の元老院議員の肅清を始めた。

主にアルステイーンの味方をした者、自分の味方をしなかった者、裏切りそうな者、力のある者、単に邪魔な者を始末した。

ある時は合法的に。

またある時は影の者を使って暗殺を。

着実にそして確実に邪魔なものを消し去っていた。

ノリトレア王国に住まう者、皆が……そう皆が、ガルマインに恐怖した。

「親父殿」

ガデウィンが報告に来た。

ガルマインは王宮……クリスタルパレスの中央大塔の執務室にいた。

その椅子に座っている。

いつもは自分の屋敷に居るはずだ。

幾ら王の後見人と言っても中央大塔の執務室にいるとは事態が異常だ。

が、そこに居る。

いま、ガルマインが如何にノリトレアで権力を握っているかが良く分かる。

「何だ？」

ガルマインが少しうるさそうに息子を見る。

「ボグニがしくじった。アーチエルを取り逃がした」

ガデウィンが頭を垂れる。

さも失敗したかのように。

「ボグニ？ 誰だそれは？」

が、それに反してガルマインは自分のあずかり知らぬことについて疑問を挟んだ。

「親父殿は知らないかもしれないが、実働部隊のボグニだ。毒を得意とする奴なんだが……効かなかった様だ」

ガデウインが悔しそうにする。

「アシュマ……か？」

ガルマインは訊く。

「恐らく」

「一度アシュマのことはじっくり調べなければならぬな」

ガルマインはアシュマの底知れぬ強さに警戒心を抱いた。

一週間後、再び浜の屋敷の前に着いた。

一応ドートネーゼに対する恭順の意と言うものを示さねばなるまい。

でないと、ドートネーゼと言う巨大組織が自分の敵に回ってしまう。

今はドートネーゼ、ネルファバーゼを利用している彼だがその構図は面白くない。

屋敷内に案内される。

前回同様、黒尽くめの男達が案内に立ち、やはり前回同様廊下の突き当たりにある部屋へ通された。

「こちらにて暫くお待ち下さい」

そう言って、また待たされる事になった。
どのくらいの時間がたつたろう。

こちらが、焦れかかった頃、

「お待たせしました。こちらへどうぞ」

ガルマインは再び誘われた。

部屋の前まで通された。

「ガルマイン様をお連れしました」

障子戸の前で黒尽くめの男が言葉を発する。
気負いや緊張は見受けられない。

あくまでも機械的だ。

「大儀。下がってよい」

障子戸の向うで声がする。

枯れた声だ。

「はっ」

声を受けて黒尽くめの男は去った。

「ガルマイン殿、入られよ」

中から声がする。

「はっ」

ガルマインは障子戸を開けて中へ入った。

「ささ、かけられよ」

前回同様宗匠の衣服を着た老人が出迎えた。

その老人は卓を前に静かに端座していた。

ガルマインは入り口のところで端座する。

「そつ子では話は出来まい。こちらに座られよ」

前回同様、座椅子に座らせられた。

「それでは失礼して……」

ガルマインは断わって座った。

老人は話の口火を切った。

「今回は他でもない、ガルマイン殿の話じゃ」

「身共の？」

一応意外な振りをする。

ガルマインは心の中で、

『来たか』

と思う。

これだけドートネーゼと言う組織の中で傍若無人振りを発揮してきたのだ。

何らかの制御が働くのは無理からぬ話。

ガルマインは意を決してその言葉を待った。

「よもや最高評議會を裏切る事はあるまいな？」

『やはりきたか』

それがガルマインの感想だった。

如何なる方法で自分を縛るのか。

「……は。毛筋の先程も」

ガルマインの態度は揺らぎもしない。

そういう態度を取ってみせる。

「そうか。ならばよい。ところでガルマイン殿には三十二番目の位を与えようと思うてな。最高評議會にも了承は採ってある。バヴェルを以ってして、世界を一新するのだ。その為早く、バヴェルを発掘し、アーチェルを捕らえるのだ。そして、鬼虎を奪い返すのだ。あれはドートネーゼのものだ。アシュマなどと言う不逞の輩の物では無い」

老人は淡々と話した。

だが、言葉は重い。

「分かり申した。アーチェルと鬼虎。必ず手に入れて見せましょう」
ガルマインは自信もたつぷりに言つてのけた。

「それと、一週間後、暫く時間を、空けて頂けませんのか？」

老人はまたもガルマインを召喚するつもりなのか。

「それは一体？」

ガルマインは尋ねていた。

「いえね。最高評議會がアヘイビアに、ちょっと用がありましたね。ついでと言つては何ですが、ガルマイン殿を、あちらの方々に紹介しておこうと、こういう訳です」

これには、ガルマインも魂消た。たまげ

なにせ、相手は、超大国アヘイビア連邦だ。

軍事超大国と言つてもいい。

いま、アヘイビアとは、国交を持っていないノリトレアだが、上

手く会談が成れば、アヘイビアとの国交がなり、ノリトレアの発展に、どれだけ貢献できるか……。

ドートネーゼがそれだけ国を跨いで組織と言う事になろうか。

「はい、分かり申した。開けておきましょう。期間はどのくらいを見積もれば宜しいですか？」

ガルマインは胸中の動揺を見せずそう応えていた。

「そうですね。二週間程を見ておけばよろしいですね」

老人は相変わらず淡々としている。

「そうですか。有難う御座います」

ガルマインは形ばかりに頭を下げた。

だがそれは老人には悟られる事はなかった。

「事務次官レベルでの協議はもう、終わりつつあるので、あとで外務省の人間から詳しい事を聞いておいた方がいいでしょう」

「もうそこまで……」

ガルマインはそこまで話を進めているとはと、怒りを通り越して、空恐ろしい物を感じた。

ドートネーゼに属しているとはいえそのドートネーゼの組織はどこまで根を張っているのか想像が出来なかった。

だが、自分がその組織の三十二番目の階位。

最高位の三十三番目の階位より一つ下だ。

三十三番目の階位は最高評議会。

つまりは最高評議会を除いて殆どの権力を握った事になる。

体が打ち震えた。

「ま、そう言う事ですね。最高評議会の話はここまです。もうお帰りになって構いませんよ」

最後まで淡々とした話し方に違和感を覚えつつガルマインは席を立った。

「では」

と、部屋を後にし、いつの間にか案内に来ていた黒尽くめの男の後に従う。

途中でガデウインを拾う。

ガデウインを連れ、車に乗る。

車の中で、ガデウインが、今日の首尾を訊く。

「親父殿、今日は何を？」

「うむ。一週間後にアヘイビアに行く。お前は外務省に行き、詳しい話を聞いて来い」

ガルマインは、一方的に言い放つ。

「外務省？ そんな話が進んでいるのですか？ 何の話も聞いてはおらせぬぞ！？」

ガデウインが軽く怒りを覚える。

「とにかく、そういう事だ。話を聞いて来い」

ガルマインは放念したようにガルマインに言い放つ。

「……は」

ガデウインは、不服そうに返事をした。

二人はこのまま、帰途へと着いた。

アギの港で、オルバニアンは、アヘイビアへ行く船を探し回った。港口で、路地で、酒場で、足が棒になる程歩き回って、オルバニアン一行を乗せてくれる、船主を探した。

しかし、下手に動き回る訳にも行かなかった。

何処にドートネーゼの目が光っているか、分からないのである。

それを考えると、下手に人に、接触出来ないのである。

それに、オルバニアン達の手配書も、街のあちこちで張られていた。

夜も更けて、オルバニアンは、様々な事に疑心暗鬼になり心身共に疲れ果てて、アシユマ達の待つ、路地裏の小汚い宿屋に帰ってきた。

そこは、トイレは共同、風呂も共同。

襖等は破れ放題。

壁にはひびが入り、天井は雨漏りで腐っていた。

床板もどこか腐っていてぎしぎし言う。

布団等は長年の垢で、てかっけてとても寝れた物ではなかった。

「お帰りなさいませ、オルバニアン様。どうでしたか？」

アーチエルが優しく訊く。

「やあ、アーチエル様……。はは……。駄目でした。……。申し訳ない」

「申し訳ないだなんて。オルバニアン様は良く頑張っているらしいです。後はアシュマさまにお願いしましょう」

アーチエルがオルバニアンを優しく労う。

「と、言う訳だ。行ってくる」

アシュマは鬼虎を腰に落とし差しにした。

「行ってらっしゃいまし」

アーチエルが端座して頭を下げる。

「アシュマ……すまねえ」

オルバニアンはへとへとで畳の上にうつ伏せになって突っ伏した。

「気にするな」

アシュマは一言残し夜の街へ繰り出した。

こうして夜はアシュマの担当になっていた。

マントを着込み、赤い布で顔を覆い、鬼虎を差し、一人夜の歓楽街へと繰り出して行く。

アシュマの専らの武器は、『耳』と『勘』だった。

歓楽街を練り歩き、耳を利かせては情報を集める。

何日か同じ事を繰り返し、情報を絞り込んだ結果、とある情報にたどり着いた。

場末の酒場『リトル・チキン』に、とある理由で表の社会に顔を出せない者、罪を犯した者、その他様々な理由で渡航出来ない者を渡航させる、『渡し屋』なる者が居る事が分かった。

アシュマは初めてその酒場へと足を踏み入れた。

酒場の中は、煙草の煙で煙っていて、店内が良く見渡せない。

アシュマはカウンターの一番奥へ行き、ワザと顔を隠している布

を取り、サケを注文した。

サケは二合徳利で爛がされていた。

暫くサケを飲んでいると、背中に視線を感じ、後を振り返ると、男が一人こちらを見ていた。

アシユマと視線が合うと、こそこそと外へ出て行った。

アシユマは、まずいなど、思った。

外へ出るか、と思った時、

「あんたかい？ 船を捜しているってのは？」

一人の男が声を掛けてきた。

「あんたは？」

アシユマが声を返す。

「僕？ 僕はヨデイ。ヨデイ・ヨフルってんだ。あんただろ？ 船を捜してるってのあ。なあ、アシユマ・アトーさんよ」

初対面なのにヨデイと名乗った青年はアシユマの名を呼んできた。

少しは警戒した方が良さそうだ。

アシユマはそんな事を考えながら、

「手配書を見たのか？」

と、訊いてみた。

「まあ、そんな所だ」

その男はそう返してきた。

歳の頃は二十五く六と言ったところだろうか。

ヨデイと、名乗ったこの男、背はすらりとして長く、割と細身の身体をしていた。

碧く、長く艶やかな髪の毛が印象的だった。

顔は何処となく愛嬌があり、笑い顔が印象的で好青年といった感があつた。

こげ茶のブルゾンに、チノクロス製のパンツを穿いていた。

靴は革のプレーントゥ。

全体的にお洒落と言った印象が強い。

しかしこの歳で『僕』と言うのも違和感があつた。

「手配書つていやあ、さつきチンケな野郎があんたの事を……そうだなあ、あれは密告しに行ったんですね。だから別の場所で話しましょう」

ヨディと言った青年はそんな提案をする。

顔はあくまでもにこやかだ。

「蓋を開けりゃ、あんたが一番怪しかった、と言うのは無しにしてもらいたいな」

アシュマが釘を刺す。

「違う。で、あなたは僕の事どう思ってるんですか？」

下手をすればいい所の御曹司にも見えなくも無い世間ずれした雰囲気がこの青年にはあった。

どこかに人を惹きつける不思議なものを身に纏っていた。

最初は警戒していたものの、今は、アシュマの勘は、この男は信用できる男だと言っていた。

「あんたなら大丈夫そうだ。兎に角この場所を早く離れよう」

「合点」

二人は、揃って店を出て、路地に出ようとした時に、路地には、警官隊と、さっきの男がいた。

「こりゃやばい」

ヨディと名乗った男は、店の中へ戻っていった。

アシュマも、それに倣って店の方へと戻った。

「親父さん、裏口借りますよ！」

ヨディは言って、裏口の方から逃げようとした。

アシュマもそれに続いた。

幸い、裏口の方はまだ、警官達は来ていなかった。

「今の内です」

ヨディが言いかけたとたん、左手からパトカーが来た。

サイレンを鳴らしていなかったので、パトカーが来るのが、分からなかった様だ。

それでもヨディは、

「まだ行ける！」

そう言って憚^{はば}らなかった。

だが右側からもパトカーが二台きて、道を塞いだ。

「ちっ！」

ヨディは舌を鳴らした。

「行くぞ」

アシュマが言った。

「マジですか」

ヨディも、後に続いた。

二人は車のボンネットの上をすべり、警官が出てくる前に、路地へと逃げた。

警官が出てきた時には、二人は路地の相当先を走っていた。

これで脱出できるな、と、思った時、路地の出口から、警官が入ってきた。

「ち！」

今度はアシュマが、舌打ちをした。

「アシュマ！ その先を左です！」

ヨディが、アシュマに指示を出した。

「わかった！」

アシュマは、路地を左に折れた。

「っと！」

アシュマは、立ち止まった

左に折れた路地からも、警官が来たからだ。

「こっちもか！」

「どうします？ アシュマさん」

ヨディが訊いていた。

すると、アシュマがすらりと鬼虎を抜いた。

「あらあら、そんな物騒な物抜いて、どうするんですか」

ヨディは慌てた。

尤も声音は落ち着いていたが。

「大丈夫だ、殺しはせん」

アシュマが、請け負った。

「こいつ、抵抗する気だぞ！」

警官達も、警棒を抜き、応戦の構えを見せた。

「しょうがないなあ、こうなったら、やるしかないか」

ヨディは、二本の木の棒が、一本の紐でつながれた、見た事のない武器を、手に取った。

「ヌンチャクじゃないか。珍しい」

アシュマが感心した。

「良くご存知で」

ヨディも返す。

「少し離れて戦った方が良いな」

「同感」

アシュマは、ヨディの持つ見慣れない武器が、意外に間合いが広いだろうと読んでいた。

その間にも警官達はじりじり近づいて来る。

アシュマは思い切って、先の先をとろうとした。

「！」

警官は虚を突かれ、警棒を叩き落され、肩口を叩かれその場に蹲った。

これが戦いの始まりを告げた。

アシュマの攻撃は単純で、峰に反した鬼虎で、警棒を叩き落すか、叩き折る。

次に肩口へ鬼虎をお見舞いして、相手の鎖骨を折って戦闘不能にし、次の相手に向かうという物だった。

これに対して、ヨディの戦いぶりは、実に多彩な物だった。

見慣れぬその武器を駆使し、まわす、払う、打ちのめす、たち折る、時には手足の技も組合わせて、その戦いぶりは目まぐるしい物となった。

しかし、警官の数は減るどころか、徐々に増えて行った。

中には、樹脂製の盾を持った武装警官が、現れるようになった。
「アシュマさん、これじゃあ、脱出するどころか、逆に捕まってしまう」

ヨディが泣き言を言った。

「こっちに突破口が、出来るかもしれん！」

アシュマがそう応えていた。

「何？ そっちだって、武装警官がいるんじゃないの？ この狭い路地で、盾装備はこっちにとってきついよ？」

「後の敵は任せた。試してみたい事がある！」

「え？」

ヨディは我が耳を疑った。

アシュマは、じりじり近づいてくる敵に対して、刀を引いた、霞の構えを取った。

相手は多少たじろいだが、また、じりじりと間合いを詰めてきた。アシュマは気を溜め、鬼虎の切っ先に集まる様にイメージした。すると、鬼虎の切っ先に仄かではあるが、光りの渦が出来上がった。

アシュマが、

「発！」

と、叫んで鬼虎を虚空に突き出した。

それは、物凄い突風の奔流となり、警官達を吹き飛ばし、アシュマの言うとおり、突破口が出来上がった。

「行くぞ！」

アシュマがヨディを呼んだ。

「ほいほい、分かってます……よっと」

二人は、夜の街の暗がりの中へ、消えていった。

アシュマはヨディを伴って、アシュマ達が路地裏にとってある、小汚いぐれ宿に戻ってきた。

「ホントに小汚い部屋ですねえ」

これが、ヨデイと、アーチェルとオルバニアンとの、挨拶の言葉であった。

「こっ！ 小汚くてわるかったなあっ！」

オルバニアンは憤った。

「これ、その君、そんなに喧嘩っ早くちゃ、まとまる話もまとまりませんよ。もう少し自制しなさい」

ヨデイがオルバニアンを制した。

「オルバニアン様、お止め下さい。紹介が遅れました。わたくしは、アーチェル・ナヴィア・アップルトン。レキシタニアの者です。こちらが、オルバニアン・マグマイヤー様。今は故あってこの名を名乗っております」

アーチェルが各人の紹介をする。

「ああ、ルーラン・ナル・テルドリニアナ様でしょう？ 自称本物の」

両の手を後頭部に持って行き、ヨデイが零す。

「アーチェルの姫様、こいつ怪しいぞ？ 何で俺の名を知ってるんだ？」

オルバニアンが口を出した。

初対面なのに正体を看破された。

怪しくも思うわけである。

「怪しいも何も、国際映像で、啖呵切ってたじゃないの？」

ヨデイがネタをばらす。

元はどうやらオルバニアンらしい。

「う……」

オルバニアンは黙ってしまった。

「そっちの王女様は、ここにいるアシュマの旦那に、飛びついて抱き合っていましたね」

「あら、いや、そんな抱き付くだなんて……お父様が見ていらしたらどうでしょう。アシュマさま責任とって下さいね」

アーチエルは顔を赤くした。
頬に手を当て身をくねらせている。

「お？ 俺が？」

アシュマは自身を指差している。

「はい」

アーチエルは、当然といった顔で微笑んでいた。

「さて本題に入りたいんだが、よろしいかなヨディ殿」

アシュマは話をそらせた。

「あら？ ……もう！」

アーチエルは話をそらされてしまった事に不満を持った様だ。

「どうぞ。で、貴方はどうしたいのですか？」

ヨディが先ず聞いた。

渡航をさせる者としては当然である。

「まず、アヘイビアに行きたい」

アシュマが言う。

「ただ、行くといっても、色々ありますよ？ 旦那。ただアヘイビアに着いて、そのままほっぽり出すってのもあれば、安全にしかるべき場所に、お送りするってのもありますが？」

ヨディが様々な提案をする。

それを聞いて、アシュマはほんの一瞬考えた後、

「安全に大統領府まで行きたい」

と、言った。

「大統領府まで行って、何をしたいのです？」

「大統領に、アーチエルとオルバニ안의保護をお願い致す」

「そいつぁ、難しい話しだなぁ。大統領府に、素性も何も保障されていない人間がいきなり来て、私は誰々です。保護して下さい。なんて、頼めると思いますか？ 普通」

ヨディは呆れた様に言う。

「ならば、どうしろと？」

逆にアシュマが問う。

やりようが分らないのだ。

アシュマの身一つなら何とでもなる。

だが、三人連れである。

身が重たい。

二人の保護をしてもらって身軽になりたいとは思っていた。

だが、それを言うとアーチエルが悲しむだろうとも思っていた。それを死ってか知らずかアーチエルは微笑を絶やさなかった。

「僕に、ちょっとしたコネがあります。そいつに頼めば、直ぐには行かないが、大統領と極秘裏に会談が出来ます」

ヨディはそれを引き合いに出した。

そのようにすれば問題は無いらしい。

「ならばもう一つ。アルステインと言う名の若者の行方を、知りたい。若しくは探りたいと思っている」

アシュマは矢継ぎ早に訊く。

「アシュマ。ちょっと待て。その前にこいつは信用できるのかよ？」
オルバニアンが話しに割って入ってきた。

「ああ、信用できる奴だと思う。彼はな」

アシュマが返答した。

「その信用できる根拠ってのを教えろよ！」

「……勘だ」

「……………」

オルバニアンは、アシュマの答えに固まってしまった。

「ざけんなよアシュマ！　こんな奴を、勘だけで信用して良いのかよ！？」

オルバニアンがヨディの面に向かって指を刺す。

「では僕の事は信用していただけないと？」

ヨディは言った。

多少気分を害したらしい。

「当たり前だろう？」

オルバニアンはかなり興奮している。

「その、直ぐ熱くなる性格は、直した方がいい様だ。何でも自分だけが、正義じゃあないんですよ？」

ヨデイがそれを指摘する。

それはオルバニアンをかなり刺激したようだ。

「なんだと、この野郎!？」

オルバニアンはこの一言で頭に血が上ってしまった様だ。

もう手が付けられない。

「じゃあ、この交渉はここまでですかね？ 子供と話している暇はないもんでね」

ヨデイは立ち上がりかけた。

「何を!？」

オルバニアンが憤り、立ち上がりかける。

その時、アーチェルが、
ぱん！

と、オルバニアンの頬を、はり付けた。

オルバニアンは、啞然とした。

そこにいる皆が、固まった。

アシュマやオルバニアンは、まさか、あの弱々しく、凡そ暴力とは無縁と思えるアーチェル王女が、ここまでしようとは思わなかったのである。

「失礼しました。ヨデイ様。どうぞお話を続けてくださりませ」

アーチェルが、何事も無かったかのように言った。

堂に入っている。

「あ、ああ。流石は王女様といった所ですか……」

等と言って、ヨデイは席に着きなおした。

「何処まで話したっけかな」

ヨデイが言くと、

「ヨデイのコネの所までだ」

アシュマが受けた。

「じゃあこの件、僕が全面的に請け負って、良いんですね？」

「宜しく頼む」

アシュマが頭を下げた。

「あと、アルステイーンの行方についてだが……」

「しようがありません。サービスですね、これは。……アルステイーン様なら死にましたよ」

「！」

そこにいる全員が、驚愕し、硬直した。

「……何故それを」

アシュマだけが、辛うじて訊てたいた。

「『僕』が彼の最期を見届けましたからね……。やはり、そのお三方の様に、国外脱出を図られた様です。で、僕の船へ……。でもね、僕の船には、医療用の機材なんか置いていない。彼は顔に刺さった破片で、三日三晩苦しみましたよ。そしていよいよアヘイビアに……って時に……死にましたよ。呆気なくね。何でも、破片の内の一つが脳にまで届いていたんだそうです」

三人は三様の反応を見せていた。

アーチェルは立ち上がって、部屋の隅の方へ行って一人静かに泣いた。

オルバニアンは、怒りだか悲しみだか分からない感情を拳に込めて、畳に打っていた。

目には涙が浮かんでいた。

「ちよっと付き合え」

アシュマは、ヨディを連れて行こうとする。

「アーチェル、少し出て来る」

アシュマは断りを入れると、アーチェルは、

「はい」

と、言って泣いていた。

アシュマがヨディを連れて来た所は場末の酒場。

取り敢えずは何でも置いている。

ヨディはバーボンをボトルで頼むと、グラスに注ぎ、琥珀色をし

た液体をちびりちびりと舐める様にして吞んだ。

アシュマはサケを頼んだ。

サケは二合徳利とっくりに爛して持ってこさせた。

「アンタが、一番まともそうだな」

ヨデイは言った。

「それでも無いさ」

そう言って、アシュマも杯を傾けた。

「それより、ホントなのか？ さっきの話は」

アシュマはヨデイに尋ねた。

「ホントですよ。アルステイーン・エト・テルドリニアナは死にました」

「そうか……」

アシュマは、一つ溜息をついた。

「……それにな」

「それに？」

「時間が欲しかったのさ。あいつ等の為に……頭を冷やさせる……」
アシュマが呟くように言った。

「頭を？ ……ああ、成程。優しいですねあなたは」

「優しい？ そんな事を言われるのは初めてだ」

アシュマは意外な事を言われ少し驚いた。

そして杯にまた口をつける。

ヨデイもグラスを手に取り口に運ぶ。

二人は暫らく無言で呑んだ。

そうしている事かれこれ彼此一刻。

二人は、元のぐれ宿に帰ってきた。

すると二人は泣き疲れたのか、畳の上に、横になって眠っていた。

「無用心な……。まあいい。俺一人で、交渉の続きだ……」

「あ、アシュマさま……」

が、アーチェルが気配に目を覚ました。

「起きてきたのか。もう大丈夫なのか」

「はい、もう大丈夫です。いつまでも泣いているのも、アルステイン様の性に合わないでしょうから」

アーチェルはそう言った。

「羨ましいですね、アルステイン様は」

ヨディはどこか遠い目をして、そう言った。

「ちなみに、そのアシュマの旦那に死なれたら、どうしますね？」

「何を不吉な事を……」

アシュマが言った。

「……その……アシュマさまが死んだら……」

「無理に言わなくていい。アーチェル」

アシュマが気を利かせる。

「……私も、死にまする……」

二人は固まった。

「アーチェル。馬鹿な事を言うんじゃない」

アシュマが珍しく狼狽した。

アーチェルが、そうそうそんな事を言うとは、思っていなかったからでもある。

「そんなに馬鹿な事でしょうか？」

アーチェルは小首を傾げアシュマに尋ねる。

「そうですね？ 人生死んだら御仕舞いですからね」

ヨディも諭した。

「何だよ。誰が死んだって？」

周りの音にオルバニアンも目を覚ます。

「お前も起きて来たのか？ オルバニアン」

「契約の話の続きでしょ？ アーチェル様も、お前さんも、俺が居ない所で大ボカされると困るんでね」

「じゃあ、僕の報酬だけど……」

ヨディは話を続けた。

「これではどうかな？」

アシュマは金の延べ板を取り出した。

およそ金五千万分である。

「うゝん正直言って少し少ないが……ま、良いでしょう。一度目だ。サービス料金と言う事で」

金五千万といえど大金である。

例えばサイコ・フライヤー一機をチャーターするのに金五千万は掛からないと思えた。

それをヨディは、

『安い』

と、言った。

どんな船なのか？

「良かった……」

そんな事も知らずにアーチェルは胸をなでおろした。

「どこにそんな金が！」

オルバニアンは叫んだ。

オルバニアンですらそんな事には気づかずに大金が動く方に驚いた。

「ノリトレアの武道大会の賞金だ」

アシュマはしれっとして言った。

「アシュマ！ お前よお、そんな金持ってたら、何でこんな『ぐれ宿』なんかに泊まるんだよ？ もっと良い所に、泊まれただろうに！」

オルバニアンが文句を言う。

「死にたいのか？ オルバニアン。直ぐに足が付くぞ？」

至極尤もな話である。

「うっ……わ、分かってらあッ」

オルバニアンは、多少ばつが悪そうだった。

「それに、金は使う所で使うべし。これで良いのだな？ アーチェル」

アシュマはアーチェルに問うていた。

「はい。とてもよろしゅう御座います」

アーチェルは嬉しそうに応えてた。

「あ、そうだ」

アーチェルは、オルバニアンの前まで行き、

「先程は出すぎた真似を致しまして、申し訳御座いませんでした」
謝って頭を下げた。

「いや、もう良いよ。俺も大人気無かったんだよ」
おとなげ

オルバニアンは、もうあっけらかんとした物で、そう言った。

「それじゃあ、皆さん、僕の自慢のサイコ・フライヤー『銀龍』
で御案内しましょう。宿屋を出る用意をして下さい」

ヨディが自慢げに言う。

「え？ これから？」

オルバニアンは素っ頓狂な声を出して聞いていた。

「ええ、少なくともここの宿屋より環境は良いですよ。ベッド完備、
シャワー付きですよ」

「え、シャワー付ですか？ アシュマさま、行きましょう！」

アーチェルは、嬉しそうにする。

「そうか。ならば行くか。シャワーはアーチェルにとって、嬉しい
限りだろう」

アシュマが受けた。

「はい、それはもう」

「では行くか」

元々、荷物らしい荷物もない一行である。

宿屋を出る準備は、直ぐに出来た。

「さて行きましょうか」

ヨディは皆を引き連れて、宿屋の清算を行って、宿屋をでた。
宿賃はヨディが払う。

「済まなかったな、宿屋の清算までしてもらって」

アシュマが言う。

「いいいえ、後でたんと払ってもらいますよ。身体でね。ふふふ」
ヨディはそう言った。

「あんたが言うのと、いやらしく聞こえるな」

オルバニアンが揶揄して言う。

「それは、君の頭の中がいやらしいからでしょう？」

「んだとお？ 俺のどこがいやらしいんだよ」

「そんなに喧嘩っ早いと、また王女様にぶたれちゃいますよ？」

「う……」

オルバニアンは固まって、黙ってしまった。

「さあ、こっちです」

ヨデイは皆を誘った。

アシュマ達一行は、本港より離れて、寂れた港へとやって来た。
かなり暗い。

治安も悪そうだ。

何処からか、言い争う声が聞こえて来る。

ある意味、本港と違った喧騒がある。

「おい、おい、おい。こんな所に連れてきて、本当に船はあるんだ
ろうな？」

オルバニアンは訝いぶかしがった。

「大丈夫ですよ。ちゃんとありますよ。ただ、普通に入港すると、
色々引っかけって面倒なんですよ」

「面倒？」

アシュマも訝しがって、聞いていた。

「ええ、大きい港だと、色々チェックだ何だで、引っかかるとまず
いんですよ」

「成程。で？」

アシュマが合いの手を入れる。

「ええ、だから、こう言う寂れた港に入るんですよ。管理者に鼻薬
を嗅がせてね。それに言うじゃないですか？ 木を隠すにゃ森の中
ってね」

「どこかで聞いた様な話ですね」

アーチエルが言った。

「うっ……」

オルバニアンはばつが悪そうに息を詰ませた。

「オルバニアン様……」

アーチエルが冷たい視線でオルバニアンを見る。

「うっ……。知らなかったんだから、しょうがないだろう？ そんな鼻葉なんて物持ち合わせてなかったんだからよ！」

「それもそうですわね……」

アーチエルは妙に納得してしまった。

元々人を信じやすい性質たちなのだろう。

サッパリとした物だった。

「さあ、着きましたよ。ここです。これが、僕のサイコフ라이어、『銀龍』です」

「なんだあ？ このオンボロは？」

オルバニアンは呆れて言った。

「オンボロとはなんです、オンボロとは！ 全く、失敬ですね！」

ヨディは憤って言った。

しかしオルバニアンが言う様に、銀龍と呼ばれたサイコフ라이어は、確かに形は旧型で所々に錆が浮いていた。

中央構造部分にはブリッジ、それに両翼には主武装の砲座式レールキャノンが付いており、更に船首にはより口径の大きな固定式のレールキャノンが付いていた。

この時代のレールキャノンは電磁加速による電圧の問題が解消され、尚且つ短い距離での十分な加速が得られる事となり、短砲身での実用化になった。

左右の扇形の主翼部分には居住空間と、荷物を入れる為の倉庫、そして副武装の三十ミリ機関砲が一門づつ、計二門が付いていた。

荷物を入れるスペースが異様に大きいのも、この船が元は貨物船で、今は戦闘用に急ごしらえて武装等を付けられた為と思われる。

扇形の羽の下には、念導式反重力エンジンと念導式推進エンジンがそれぞれ一体となって、銀翼の下に付いていた。

エンジンはノリトレアのティスボン公社製で世界最高級であると、ヨディは豪語していた。

「……以上の様な装備で、そのスピードたるや、世界一と自負しています」

ヨディが誇らしげにいった。

しかし、王国製のサイコフライヤーより、二周り、三周り程大きく、それだけ動かすのにより多くの念が必要と見てとれた。

「で、そのレールキャノンってのは何でい？」

オルバニアンが尋ねる。

「レールガンとはですね、物体を電磁誘導により加速して撃ち出す装置で、レールキャノン、電磁投射砲、電磁加速砲とも呼ばれます」
「で、そいつあ一体なんなんでい」

「……技術屋ではないので、これ以上の説明は勘弁して下さい……」
ヨディが照れた様に頭を掻いた。

「なんでい、結局解んねえんじゃねえか」

オルバニアンはヨディを揶揄した。

「いいじゃないですか、もう。所で、この中に強念の持ち主は、いらっしゃいますか？」

ヨディは尋ねた。

すると、アーチエルがおずおずと手を挙げ、

「一応、わたくしが、そうらしいんですけど……」

アーチエルが恥かしそうに言う。

「ああ、王女様。王女様の様な、美しい方に労働させる等という事は、このヨディ、決してさせませんので、ご安心を。おい、そのサル！ お前も念ぐらい使えるだろ！ 王女様の代わりに働き『やがれ』」

ヨディがオルバニアンに向かって横柄に言う。

「だれが、サルだ！？ 誰が！？ てめえの方が、よっぽどサル顔

「じゃねえか!!」

オルバニアンが言い返す。

「言いましたね? この単純お馬鹿が!」

「なんだとう!? 誰が単純だ、誰が!!」

「いい加減そこら辺で止めとけ。話が進まん」

アシュマが諫めた。

「お、おう……」

「そ、そうですね……」

オルバニアンとヨディは少しばつが悪そうにしていた。

「コホン。では、我が銀龍にお入りあれ」

アシュマ達一行は、銀龍の中へと入っていった。

内装は綺麗に直されており、住み心地はよさそうだった。

「先ずは皆さん、お風呂を使うと宜しいでしょう。特に王女様はずつとお風呂なしで過ごされて御辛かったです。先ずは一番最初にお使いになって下さい」

ヨディは王女の事を氣遣った。

「宜しいので?」

アーチェルが尋ねた。

「宜しいですとも」

「皆さん、わたくし、先にお風呂頂いてもいいかしら」

「いいぜ」

「いいとも」

オルバニアンもアシュマも賛意を示した。

「有難う御座います。じゃあ、ちよつと頂いて来ます」

アーチェルは直ぐさまバスルームに行った。

「すごい! お風呂とトイレが別々だわ!」

暫くしてアーチェルが叫んだ。

「それは良かった」

アシュマが言った。

「覗いちゃ駄目ですよー、アシュマさまー」

アーチェルが言ったのを受けて、アシュマが苦笑した。
その時、奥の方から、小柄な老人がやって来た。
濃い紫色の忍び装束だ。

人相は良い。

が、深く刻まれた『皺』が、その人の年輪を表していた。
相当の苦勞をしてきたと見える。

「若、今、御婦人の声が聞こえてまいりましたが、また女子を口説き落として来たのですかな？」

「おいおい、アベニ。僕は若でもなければ、女の人を、口説き落として来た訳でもないよ」

「この御老人は？」

アシュマが尋ねた。

「ああ、紹介が遅れたね。この爺さんは、アベニ・ロー。以前は何処かの国のスパイをしていたらしい。ちょっとした縁でね、拾ってやったのさ」

「若！ 拾った等と……」

「若？」

オルバニアンが訊いた。

「ああ、なんか、どういう訳か、僕の事を若って呼ぶんだよね」
ヨディが受けた。

「く、癖で御座る……」

「ああ、アベニ。彼らは今回の依頼主、アシュマ・アトー氏に、オルバニアン・マグマイヤー氏、それに今バスルームに入っている御令嬢が、アーチェル・ナヴィア・アップルトン王女さ」

「アベニ・ローに御座いまする。宜しゅうお願い致しまする。そうそうたる布陣に御座いますな。レキシタニアの姫君に、ノリトレアの王子、そして、閃光のアシュマ殿とは……」

「所で、本当に強念者はアーチェル様しかいないのですか？ 例え
ば、そのアシュマさんが、エンジン部分の念を担当してもらう訳には行きませんか？」

「あー駄目駄目。サイコフライヤーが、壊れても知らないぜ」
オルバニアンが駄目出しをした。

「え？ そんなにすごいのですか？」

ヨデイが驚いてみせる。

「俺達の乗っていたサイコ・フライヤーを壊しかけやがった。……いま、考えてみれば、あそこでサイコフライヤーがぶっ壊れたのは、アシュマの所為じゃないのか？」

オルバニアンはアシュマに視線をよこした。

「いや？ 俺は知らん。それより、この船にはそういった、強念者はいないのか？」

アシュマが話をヨデイに振る。

「いや、前に居たには居たんですけどね、有り金もって、ドロン、パア。今は居ないんですよ」

ヨデイが肩をすくめて首を左右に振った。

「それで、『身体で払ってもらう』と……」
等とアシュマは納得をした。

「いや、まあ、……そう言った訳で……面目ない。その分、格安料金で運んであげるんじゃないですか。ここは持ちつ、持たれつ、という事で……」

格安料金とはどう言う事か？

どうやら武装した船に乗るからコストが掛かるらしい。

「良かろう。アーチェルが駄目なら、俺が座するという事で」

「ま、しょうがないですね。それで行くという事で。じゃあ、こちらに来て下さい。ブリッジに御案内しましょう」

アシュマ達はブリッジに行った。

そこはブリッジというより、コックピットに近いイメージだった。窓は大きくとられ、正面には主操縦席、向かって右隣に航法士兼副操縦席、左には通信席、操縦席の後には念を送る為の半球形に削った直径二尺半程の魔導石と簡単なメーター類があった。

魔導石は、大きな土鍋を、ひっくり返した様な形をしてもらって

いる、と考えればよいだろうか。

念を送る半球の魔導石には椅子が二脚付いていて、二人で操作する事を示していた。

更に後には、一段高くなった所に椅子があつて、全体を見回せる様になつていた。

（俺は、こっちの席になりそうだな）

アシユマは何となく、そう思った。

そのほかに、椅子が数脚あつた。

その時、アーチェルが、風呂から上がってきた。

「どうも、良いお風呂を頂きました。生き返りました」

アーチェルがにこやかだ。

「それは、良う御座いました」

ヨデイが言い、喜んだ。

アーチェルは後手に、少しもじもじしながら、ヨデイに訊いた。

「あの、お洗濯をしたいのですけれど、洗濯機か何かはありますか？」

「王女様がお洗濯ですか？ そんな事は、我ら下々の者にお申し付け下さい」

「い、いえ良いんですの、わたくしが致しますから……」

「……！」

ヨデイは、状況を理解した。

アーチェルは自分の下着を洗いたいのだ。

「王女様、それでしたら、風呂場の隣にありますよ」

「そ、そうでしたの……？」

「あ、そうだ。洗濯機に洗濯物を入れたら又おいでなさい」

「なんだあ？ 変な姫さんだなあ」

オルバニアンは頭を捻った。

「じゃあ、今度はキッチンを……」

船内を一通り回った頃、アーチェルが戻ってきた。

「ヨデイ様。先程の用件って、何ですか？」

「こちらへおいで下さい」

「？」

「おいヨディ、何処へ行くんだ？」

オルバニアンはついて行く気配を見せた。

「オルバニアン。君は少し待って下さい」

ヨディとアーチェルは、荷物を入れる倉庫へやって来た。

「アーチェル様。ここは婦人用の服を仕入れて置いてあります。気に入った物を幾らでも、好きなだけ選んで下さい。それを差し上げます。下着もありますよ」

「え、でも、そんな事をしていただいては……」

「いえ、いいですよ。これだけあるうちの一部ですから、売り上げには全然響きません。先程お金も前払いでいただいていますからね」

「え……、でも……」

アーチェルが少し遠慮する。

「いえいえ、いいんです。気になさらないで下さい。じゃあ外でお待ちしています……」

「あ、あの……」

「じゃあ」

ヨディは倉庫から出て行った。

「ヨディさんよお、姫さんはどうしたんだよ？　ここか？」

オルバニアンが指差して訊いた。

「おっと、今は男子禁制ですよ。お風呂にでも入って、さっぱりして来て下さい。あんまり不潔だと、ご婦人方に嫌われますよ？」

ヨディが、オルバニアンを強引に風呂場へ連れて行った。

その後、各々バスルームを使い、皆が寝ようとした時、倉庫からアーチェルがパジャマ姿で出てきた。

袖口に可愛いフリルの付いた、ピンク色のパジャマで。

「おお」

感嘆したのはオルバニアンだった。

「あの、ヨディ様、有難う御座います」

アーチエルはヨディの側へ行き、小さい頭をぺこりと下げた。

「いえいえ、王女様に頭を下げられては、こちらが恐縮してしまいますよ。どうぞ、その様な事はなさらずに……」

「それでも、助かりました。有難う御座います」

アーチエルは再度ぺこりと頭を下げた。

そして、アシュマの方を向き、

「いかがですか？」

くるりと回って見せた。

「似合ってる」

アシュマは目を細めて、美しい花でも愛でるかの様に言った。

「良かった。アシュマさまに喜んで頂いて」

アーチエルは嬉しそうに言った。

「さ、夜も更けました。そろそろ寝ましょう」

ヨディはそう促した。

ベッドルームは中央廊下を挟んで左右に分かれていて、それぞれ二段ベッドが三つずつ用意されており、右側にアーチエル、左側に男衆が寝る事となった。

皆が床に着いたのは明け方近くになってからだった。

朝、一番早く目覚めたのは、アシュマだった。

ブリッジから差し込んでくる光りが眩しかった。

アシュマは、ブリッジの空いている椅子に、腰をかけた。

次に目を覚ましてきたのは、アベニだった。

アベニはアシュマの右隣の椅子に座った。

「アシュマ殿にござるか。お早いですな」

「お早う。アベニ殿」

「良く寝れませんでしたかな？」

アベニが、剣の達人とも言うべき、この若者に聞いてみる。

「いや、そんな事はない。良く寝れた。アベニ殿は？」

「ワシはいつもの癖でしてな。あと、短い時間で、寝て活動できるように、訓練されましてな。これも一つの癖ですな」

老人は掌で顔をなでてそう言う。

一応は眠い様だ。

「そうですか……」

アシュマは淡々と応える。

「実はの。ノリトレアの武芸大会を、ワシも拝見させてもらっておつてな。観客は不満気だったが……。済まんがの、『あれ』をワシの前でやつてもらえんかの？」

アシュマは何事かと暫し考えたが、何か察する事でもあったのか、おぼろがすみ「『朧霞』を？」

と、言った。

「『おぼろがすみ』と、言うのか。中々、言いて妙な名じやの」
老人は何か感ずる物があつたのか、頷いて納得した風だった。

「では、やってみます」

「そんなに直ぐに出来ますのか！」

老人は驚いた。

そうこう言い終らぬ内に、アシュマは周りの景觀に溶け込んで行つた。

アシュマは消えた。

「おお！ なんと！ アシュマ殿、どこにござるか？」

アベニは辺りをきよきよと見回した。

その時アベニは右肩を、ぽん、と叩かれ右を向いた。

その視線の先にはアシュマがいた。

「おお！ なんと見事な！ どういう絡繰からくりに御座いますかな？」

「ただ、気配を消してるに過ぎませんよ」

「気配を消すだけで、あそこまで見事に消える物なのですか？」

「周りに溶け込む様にイメージしてみる。周りのあらゆる物と一体化する。そのくらいのもですよ。矛盾しているかもしれませんが

念も多少使いますかな？ 大体そんな感じですよ」

「ワシにも出来るかの？ 商売柄、今の技は大変有効に御座るのでな」

「訓練次第かと思えます」

「それで御座るか。真にもって忝い」

老人は心から感じ入ったようだった。

「いえ、別に」

アシュマは老人にそこまで感謝されて、逆に困った様だった。

この様に人に接せられるのに、慣れていない様だった。

数時間置いて、次に起きてきたのはヨディだった。

「ふぁぁぁあつ……。やぁ、アベニ、アシュマ君、お早う」

「お早う御座います、若」

アベニはヨディに挨拶をする。

「……………」

が、アシュマはヨディを目で認めただけで声は掛けなかった。

「おや？ アシュマ君は返事がないね。寝不足かな？」

「いや。お早う」

アシュマも改めて挨拶をする。

人と接する事が苦手なこの若者は挨拶を言った後前を向き直る。

「お早う。僕は寝不足気味だよ。オルバニアンの、あのイビキは一体何なのかね？ あれじゃあ、寝られやしない そうそう、アベニの爺さん、『若』は、無しにしましうよ」

ヨディは少しこそばゆいのかそう言ってみた。

「失礼つかまつった。何せ自分より若い者を見るとつい癖で……」

老人は何処か少し不満げでもあった。

次に起きてきたのは、アーチエルだった。

アーチエルは、短めの薄い紅色のチュニックの下に半袖で丸首のシャツ、それにジーンズのパンツをはき、足は動きやすい様に、底がゴムでできた運動靴を履いていた。

首と手首にはそれぞれ首飾りと金属製のリングを嵌めていた

髪の毛は、これも動きやすい様に、ポニーテールに束ねられていた。

「お早う御座います」

アーチェルが朝の挨拶をする。

「お、お早うございます。アーチェル様」

「お、お早うに御座る。王女様」

ヨディとアベニは、アーチェルのその可愛らしさに言葉を失った。
「お早う」

アシュマだけは、短い返答だったが淀みなく応えていた。

「どうですか？ この格好は？ 変じゃありません？」

「いやあゝ。いいですよ。王女様の着る物なら何でも」と、ヨディ。

「長生きはする物ですのゝ。眼福に御座る」と、アベニも喜んだ。

「……あの、アシュマさまは如何ですか？」

この少女は人の心にすんなり入ってくる。

それに抵抗を覚えさせない。

一種の才能といえた。

それが証拠に……、

「良く似合っている。アーチェル」

人と接する事を苦手とするアシュマを微笑ませていた。

「よかった。嬉しいです。いま、朝食を作ってしまいますわね。簡単な物ですけれど」

アーチェルは機嫌良く言った。

「ああ、済まない」

アシュマが応えた。

「ああ、そんな勿体無い。そんな事は、我ら下々の者にお言い付け下さい」

ヨディが慌ててそう言う。

「いえ、いいのです。作らせて下さいまし。……そういえば、オル

バナニアン様の姿が見えませぬが……」

アーチェルが辺りを見回す。

「ああ、あの小僧は、まだ大イビキで寝てますよ」

ヨデイが呆れる。

「そうですか」

アーチェルは屈託ない。

その話を流してしまふ。

皆は、ブリッジの椅子に各々座り、アーチェルが造ってくれた、トーストとベーコンエッグにソーセージ、それにサラダを添えた物を食した。

「オルバナニアン様の分はここに入れておいて良いんですね？」

と、アーチェルはヨデイに尋ねた。

「ええ、いいですよ。それにしても、彼は良く寝ますね」

「起して来ましょうか？」

「その方が、良いかも知れないですね」

「じゃあ、ちょっと起して来ましょうか？」

「いや、王女様。さすがにそこまでしていただいては……」

しかし、アーチェルは、最後まで聞かずに、オルバナニアンを起しに行ってしまった。

男子の寝室で、アーチェルはオルバナニアンを起しに掛かった。

「オルバナニアン様。もう、朝に御座います。お起きになって下さりませ」

アーチェルがオルバナニアンを揺する。

「んがぁ……。ぐぅ……」

オルバナニアンは起きる気配を見せない。

「オルバナニアン様」

アーチェルはオルバナニアンを更に揺さぶった。

「んがぁ……？ うん？ もう、何だよ。もう少し寝かせてくれよ」

オルバナニアンはやっと覚醒する。

が、半分寝惚けている。

「オルバニアン様、もう、朝に御座います」

「朝？ いいよ、もう少し寝かせて……？？」

その時オルバニアンは、がばっと目覚めて、

「きゃっ、きゃあああゝっ！！」

まるで乙女が自らの危難に会った時の様に、かんだか甲高い悲鳴を上げた。
ブリッジでは、

「な、なんだ！？」

と、ヨディが首を巡らせた。

「オルバニアンの声だな」

ヨディは驚いて後を見たが、アシュマはそれに関せず、そう言った。

「なんだ、オルバニアンか」

ヨディも納得し、それで片付けてしまった。

一方寝室では、オルバニアンにしては珍しく照れて、首まで毛布を引き上げ肩をすばめて、まるで乙女のように震えていた。

余程、女性に起された事がないのだろう。

そういった事に免疫がない様である。

「みなさん、もうお起きになってますわよ。顔を洗って早く来て下さいね」

アーチェルは言って、寝室を出て行った。

「ふわあゝっ」

暫らくしてオルバニアンが起きてきた頃、アーチェルはレンジで、オルバニアンの分の朝食を加熱していた。

「あ、オルバニアン様、暖め終わったら、食べて下さいな。これから出航との事で、手が離せないのです、申し訳ありませんが、宜しく願いますね」

アーチェルは言って、にこりと微笑んだ後、半球状の魔導石の前に座った。

「あ、お、おう」

オルバニアンは曖昧な返事をした。

アーチェルに見惚れたのだ。

「……では、発進する。アーチェル様、メインブースターの出力の方、宜しく願いますよ」

ヨデイが、申し訳なさに言った。

「大丈夫ですから」

アーチェルが応えた。

顔には笑みがある。

「発進！」

ヨデイはアーチェルの念を絞っている念導バルブをスロットルで開いていった。

『銀龍』は空中に浮かび、速度を増し、空を滑空し始めた。

その名の通り、銀色の翼に太陽光が反射してまぶしかった。

銀龍は順調に航行をしていた。

「これなら、夜半過ぎにアヘイビアに着くでしょう」

ヨデイが言った。

「さ、アーチェル様も少しお休み下さい」

そうアーチェルに言った。

「それでは機の安定が……」

「それは御安心下さい」

ヨデイは六十センチ程の高さの黒い箱を二つ持ってきた。

「これは、最近分かった事なのですが、ある微生物が念と同じ様な波を発生させる事が発見されました。その微生物はエナジアと名付けられました。この船の巡航速度くらいならこのエナジアで十分です」

ヨデイはそう言ってエナジアの箱から電極の様な物を、ぺたりぺたり、と半球の魔導石に張っていった。

「これで大丈夫ですよ。手を離して下さい」

「はい」

アーチェルは恐る恐る手を離した。

「後は、出入港時と緊急時以外はお休み頂いて構いません」

ヨディがアーチエルを見て微笑む。

「わかりました」

アーチエルはいったん席を外して、エナジアの箱を覗いた。

箱には小さな覗き窓があり、そこを覗いて見ると、中には抹茶の様に、緑色に濁っていた。

「へえ、こんな物が、念を発生させるなんて……」

アーチエルは感心した。

「ええ、発生させられる念は少し弱いのですが、いずれ念者に取り替わられるかもしれませんね。でもそれは、もう少し先の話になるでしょうけれどね。ノリトレア以外、まだどの国にも知られていないんだそうですよ。あと育てるのが難しいらしいんですよ」

少し得意顔でヨディが言った。

「ノリトレアは魔導石を精製して他国に売って利益を得ていますけどね。魔導石は精製が難しいんですよ」

「ふう〜ん……」

アーチエルは感心した後、アシュマの所へ行き、

「ねえ、アシュマさま。あの黒い箱が念を発生させるんですって。すごいですわね」

そう語った。

「どうやらその様だな」

アシュマが言う。

「う〜む」

ヨディが唸った。

「どうなされた、若」

アベニがヨディの近くに歩み寄っていった。

「さつきから、ずーっと付けられているんだよね」

「付けられている？」

アシュマも話しに加わった。

「ええ、もう少し近寄られると、向こう側のミサイルの射程範囲内

に入りますね」

その時だった。

警報のサイレンが成り始め、ライトが点滅を始めた。

「どうしたんだよ、ヨディさんよ！」

オルバニアンが叫んだ。

ヨディが、

「ロックオンされました！ ミサイルがやって来ます！ 王女様！

魔導石へ！」

シートへ座るようにと促した。

「はい！」

アーチェルは魔導石の前に座りシートベルトをして、手をかざした。

「オルバニアンさん、貴方は後部レールキャノンの砲座へ！」

「公空上だろ！ 何で撃ってくるんだよ！？」

オルバニアンが喚く。

梯子を上っていく。

「知りませんよ！ アシユマさんは……」

「俺は何も出来んぞ……」

アシユマは落ち着いて椅子に座っている。

「うゝ。そこいら辺にでも座って下さい！」

ヨディは頭を押さえて操縦桿を握った。

「分かった」

ミサイルが接近してきた。

このままでは機体に命中する。

ヨディは電波欺瞞紙チャフを撒いた。

これで、レーダー誘導のミサイルならば回避できる筈だ。

同時に赤外線欺瞞装備フレアも使用した。

ミサイルはフレアに反応し、的中、爆発をした。

「きゃあっ！！」

爆発の衝撃で、アーチェルが悲鳴を上げる。

「もう、チャフもフレアもありません！ 逃げに入ります！ 王女！ 念を掛けて下さい！」

更に念を掛けるよう、ヨディが言った。

「はい、でも、もうこれが精一杯……で……」

アーチェルが苦しそうに言った。

『上手く逃げるのかよ！？ 速度出てねえぞ！ 世界一速ええんだろ、この船は！』

オルバニアンは無線で割って入ってきた。

「確かにそうですが……」

『殺っちまおうぜ』

「ヨディ、いずれこのままでは追いつかれる。反撃しよう」

アシュマが言った

「そんな、殺しては駄目！」

アーチェルが叫んだ。

「大丈夫ですよ。向こうの飛行機には脱出装置が付いてますから」
ヨディが請け負った。

「そうですか。なら良かった」

アーチェルは一安心する。

「！ また、ロックオンされました！ ミサイルです！ 今度は振り切るしかありません」

『捉えた！ やってみる！』

オルバニアンがスピーカー越しに言う。

「捉えたって……。そんな、無茶な！」

オルバニアンは一発目のミサイルに照準を合わせ、引き金を引いた。

大きな金属音が響いて、レールキャノンから砲弾がミサイル目掛けて飛んで行き、見事命中し、ミサイルは爆発した。

「次！」

オルバニアンは言って、照準を決め、次弾を発射した。こちらも見事命中しミサイルを爆破させるのに成功した。

「あいつ、才能あるのかな？」

ヨディが呟いていた。

『当たり前前事言うなよ。照れるぜ。でも、敵機を一度振り切ってくれ。一度に何発もミサイルを撃たれたら、対応できねえぜ』

オルバニアンは耳聴くヨディの言葉を聞き取り、そして言った。

「とはいっても……」

ヨディが後を見ると、顔を真っ赤にさせて頑張って念を送っているアーチェルの姿がそこにあった。

ヨディはいつまでも後ろを振り向いているわけには行かなかったので前を見た。

そこに、アシュマがやって来て、アーチェルの手の上にそっと右手を重ねた。

そして、アーチェルの前に回り込んだ。

「もっと力を抜いて、この船が速く飛ぶ様にイメージして」

「は、はい……」

「お、おわっ！！」

ヨディは叫ぶ。

急にサイコフライヤーが加速したからである。

「ア、アシュマ君、君、何したの？」

再び後ろを振り向くヨディ。

「何もしていない。ただ、アーチェルにコツを教えていただけだ」

（だ、だめ……、アシュマさまに手を触れられていると、逆に集中できない……）

アーチェルの頭の中はアシュマの事で一杯になった。

「アーチェル」

アシュマに呼ばれ、アーチェルは思わず顔を上げた。

その時アーチェルは、アシュマの指先でトンと軽く眉間を叩かれた。

その瞬間から、アーチェルの意識は飛んでしまった。

アシュマは自分の席へ帰り、席に着いてしまった。

「おっ！ 丁度いい具合に念が安定しましたね。その調子でお願いします。王女様」

ヨディが言ったが、アーチェルは

「はい」

と、淡々と言った。

「大回りに回って、相手の後に回り込みます。後についたら、オルバニアン、頼みましたよ」

『わかってらあな！ 任せとけ！！』

スピーカーからオルバニアンの声がする。

「僕も艦首の主砲で敵機を狙いますから！」

「いきますよ！！」

銀龍は、フルスロットルで飛んで、大きく左旋回を始めた。

横にGがかかり、物が右側に引っ張られる。

敵機は右旋回を始めた。

どうやら、出会い頭で攻撃をするつもりなのだろう。

しかし、銀龍号のレールキャノンの方が、射程は長い筈なので、こちらの方が有利である。

オルバニアンがレーダー追尾式スコープで敵機を探った。

すると、敵機五機を確認した。

「いけるか？ いけっ！」

オルバニアンは照準を合わせると間髪いれずにレールキャノンを発射した。

二斉射して、一機を撃墜した。

「やるじゃないか、オルバニアン」

ヨディが興奮していた。

その間にも敵機は近付きつつあったので、オルバニアンはまた照準を付けた。

「はいよ……もうちょい、もうちょいね……よし！ いけっ！」

今度も二斉射で、一機撃墜した。

オルバニアンの見事な攻撃をみて、

「僕も負けてられないねえ」

ヨディが負けん気を出す。

「そろそろ敵と一直線になる為、船首レールキャノンが使えるようになるだろう。」

兎に角、敵にミサイルを撃たれる前に、こちらが先手を取る必要があった。

ヨディも、照準をあわせ、

「よしっ、いけえ!!」

船首レールキャノンを撃った。

船首レールキャノンは敵機に当たりこそしなかったが、弾道が放つ衝撃波と熱で二機を撃墜した。

なにせ、戦艦クラスさえ落とす事が出来る程の威力である。直撃しなくても戦闘機クラスの大きさの物なら撃破出来た。

「よっしゃあっ!」

残りの一機は旋回して去ってしまった。

「一体何だったんでしょかねえ……王女様、もう出力を落として楽になさってくれても構いませんよ」

ヨディが後ろを振り向く。

「……はい……」

「……? 王女様?」

ヨディは、まるで魂の抜け殻のようになってるアーチエルを見て、尋常ならざる物を感じ取った。

「王女様……?」

ヨディがアーチエルに近付こうとした。

それをアシユマが手で制し、アーチエルの前に立った。

「……?」

ヨディは何やら疑問に思ったが、アシユマに任せてみようと思った。

アシユマはアーチエルの前に立つと、また人差し指と中指で、アーチエルの眉間を軽く叩いた。

「あ……、念を、念をもっと搾らないと……！」

途端、アーチェルが弾けた様に喋りだす。

「大丈夫だ。もう終わった」

アシュマが言い添える。

「終わった？ わたくしは……今まで何を……？」

「気にする事はない。アーチェルはアーチェルの仕事を見事にしてのけた」

（成程。軽い暗示状態にして、力を引き出してやったのか）

ヨディは合点がいった。

「アシュマさま、わたくしに何かなさいました？」

アーチェルがアシュマの顔を見る。

「いや、そんなに特別な事はしてない ちゃんと出来たじゃないか」

「嘘です。何かなさったんでしょう？」

アシュマとアーチェルが軽く言い合いをする。

「よく、お疲れさん……どうかしたの？ あの二人」

オルバニアンが砲座から戻ってきた。

「いや、別に……たいした事じゃないですよ」

ヨディが応えていた。

「なんだ、別にいつもの事か」

「そうなんだ」

ヨディは妙に納得した。

「若、もう直ぐアヘイビアの領空圏内ですぞ」

アベニが割って入った。

「通商航路を飛んでいるんだ。先程の様な事はおきるまいよ。もちろん、アヘイビア・コントロールに連絡も入れるけどね」

アシュマ達一行はアヘイビアに着こうとしていた。

第三節 実験

「さうて。入国審査も済んだし、軽く食事でも採りましょうか！」
ヨディ達はアヘイビアのソールの港に着いた。

この港は貨物専用であった。

物資の行き来も頻繁で、活気があった。

ヨディ達一行は夜の歓楽街へと足を踏み入れた。

相も変わらず、ヨディの船は主要な港から外れた所に泊めてあったが、そこから歓楽街が割りと近かったのだ。

歓楽街には、様々な施設があった。

そう、此処はアヘイビア有数の歓楽街で、治安も悪い事で有名な街、ソールの街であった。

アシュマは、念の為、鬼虎の鯉口を切っておいた。

「ちよいと待ちな！ オルバニアン・マグマイヤーにアシュマ・アトー！」

その時、一行の後から呼び掛けられた。

二人は振り返った。

アーチェルも振り向いた。

「お、アーチェルの姫様も一緒だね。今、助けて差し上げますよ」

そう言った者は、アーチェルよりは少し年上そうな少女であった。

その少女は物騒な事に、少女自身の背丈よりも長く幅広の大剣を背負っていた。

顔かたちは整っており、右目の眼帯を除けば美少女と言っても過言ではなかった。

髪の毛は紅く少しボサボサで逆立っていた。

体つきはスレンダーな方で、黒い革のホットパンツにやはり黒い革のタンクトップを着て、脚にはコンバットブーツ、そして更には、全身にボディアーマーを着込んでいた。

「なんだよ、お前は？」

オルバニアンが訝しげに言った。

「じゃあ、自己紹介させてもらおうか。アタシはアルミナ。アルミナ・ラ・シア。これでも『隻眼のアルミナ』と言やあ、世間にちったあ知られた賞金稼バウンティ・ハンターぎさ。アシュマにオルバニアン。おとなしく姫様を渡してお縄に付きな。そうすりゃ、命だけは、助かるかもしれないよ?」

アルミナと名乗ったその少女は、猛々しく啖呵を切った。

「いやだね、あのガルマインの事だ。俺達を、必ず口封じの為に殺すさ。それに、俺にゃあ、やらねばならん事があるんだ!」

オルバニアンも負けじと啖呵を切った。

「なんだいそりゃ?」

アルミナが訊く。

「俺の手で、親父の仇、アシュマを討つんでい!!」

オルバニアンが声色高々に宣言する。

「そんな事があつたんですか?」

ヨディが声を潜めてアーチェルに訊いた。

「ええ、事実は事実なんですけど、色々と事情が……」

「へえ、ふーん」

ヨディは変な納得の仕方をする。

「はっ、はははははっ!」

アルミナが笑った。

「なっ! 馬鹿にすんのか!」

オルバニアンは憤る。

「ああ。なんで仇と付け狙う奴と、何、仲良くこんな所を歩いてんのさ! あたしひたひただったたら馬鹿らしくて、やってらんないけどね」

周りに人集りが出来た。

「くそ、抜け!!」

オルバニアンが叫んだ。

「アタシや、あんたみたいに直ぐ熱くなる男は嫌いじゃないけどね、アンタ……早死にするよ」

アルミナは方頬を釣り上げて、ほくそ笑む。

「このお！ 言いたい事を言わせておけば！！」
オルバニアンが激昂する。

その時、アシュマがオルバニアンの前へ出た。

「アシュマさま……」

アーチエルが不安げな声を出す。

アシュマはまた戦おうと言うのか。

また危険な目に会おうと言うのか。

「オルバニアン、お前は此処こゝで見ろ」

アシュマが前に出る。

「なっ！ なんだとうッ！ アシュマ、お前まで馬鹿にすんのかっ
！」

「違う、あの女の得物を見る。お前の刀ではへし折られるぞ」

アシュマが冷静に言う。

「うっ……」

「あの女は任せろ」

そこで、アルミナが口を挟む。

「アンタの事はよく聞くよ、『閃光のアシュマ』。さあ、アタシに
閃光が如き太刀筋を見せておくれ」

アシュマはゆっくりと鬼虎を抜いた。

アルミナも背中の大剣をゆっくりと抜いた。

そして大剣を下段に付けた。

アシュマはいつもの様に右手に鬼虎をだらりと下げたままだった。
地擦りの構えと呼べば呼べなくも無い。

「なめた真似してくれるね。アタシに対してその構えとは！」

アルミナは一端アシュマに背を向けて遠心力で剣を回し始めた。

アシュマはアルミナの一周目の剣戟を間合いの外に出て剣をかわ
した。

続いてアシュマはすかさずアルミナの間合いに入って攻撃を加え
ようとした。

「甘いよ！」

アルミナが叫び更に遠心力の付いた大剣でアシュマを襲った。
アシュマは難なくこれを後ろに跳んでかわし着地した。

「なっ！ それなら！」

アルミナは回転しながら剣の軌道を変え袈裟斬りに打ち下ろしてきた。

アシュマは体を開いてこれを避けた。

剣は地面にめり込み、アルミナの剣の動きが止まった。

「ちっ！」

アルミナが舌打ちした時には既に遅く、峰に反された鬼虎で、
ばしっ。

と、肩口を打たれた。

「うっ！」

アルミナは喚き、膝を付いた。

周囲からは、歓声ともどよめきとも取れる声が聞こえてきた。
アシュマは、鬼虎を納刀し、その場を去ろうとした。

「待ちな！」

アルミナが大剣を片手に立ち上がった。

鎖骨を折ってないにしても、相当の激痛の筈だ。

（よくも立ち上がった物だ）

アシュマはある意味関心した。

「今度はそうは行かないよ！」

アルミナが言って眼帯をむしり取った。

「！」

アシュマは驚いた。

それは、彼女の普通の瞳は赤い瞳なのに対して、眼帯を取った方の瞳は金色に輝いていたからである。

「あんた。アタシに、この眼をさらけ出させてしまったねえ。もう
アタシに勝ち目はないよ。何せこの金色眼は、こんじきがん『戦利眼』せんりがんと言って、
相手の太刀筋を見切る能力があるのさ。アタシに恥を掻かせてくれ

たお礼さ。アンタにも同じ思いをさせてあげるよ」

アシュマは再び鬼虎を抜いた。

アルミナは再びアシュマに背を見せ、遠心力で剣を回し始めた。その時、戦利眼に映ったのは、アシュマが真っ直ぐこちらに向かつて来る事だった。

（それじゃあ、逃げられないじゃあないかい。それともアタシの剣を受けようってのかい？ それこそ刀ごと真っ二つだよ？）

アルミナは内心ほくそ笑んだ。

アシュマは真っ直ぐ突っ込んできた。

（読み通りだよ！）

アルミナは更に力を込めて、剣に力を与えた。

アルミナの大剣は、アシュマ目掛けて伸びてきた。

その時、なんとアシュマは、鬼虎の峰に手をそえ、アルミナの大剣を鬼虎で受け止めた。

「！！ そんな、馬鹿なっ！！」

アルミナは思わず叫んでいた。

あまりの事にアルミナは、思わず身体を硬直させていた。

そしてアシュマは、大剣の根元辺りに鬼虎の一撃を加えていた。

鬼虎の一撃は、チーズでも切る様に、大剣を綺麗に斬り下ろしていた。

「！！」

アルミナは衝撃を受けた。

この大剣を受け止めただけでなく、それを斬り裂くとは、思っても見なかった事だからだ。

アルミナは半ば放心状態になってその場にぺたりと座り込んだ。が、はっと気が付きアシュマに向かって

「このおっ！！ 今度あったら、必ず捕まえてやるからなあっ！」

と、言う罵声と、

「こらああっ！ 貴様ら何をやっておるかあ！」

という、警官達の声が聞こえてきた。

「こりゃ、やべえ。こつちだ」

ヨデイが皆を先導し、人ごみの中へ紛れ込んだ。

ノリトレア。

クリスタルパレス

王宮の執務室。

ガルマインは、出かける準備をしていた。

アヘイビア連邦共和国に出向く為だ。

その時報告が入る。

男が部屋に入る。

「なんだ？ プロフェッサー。バヴェルの報告なら、帰ってから訊く。後にしてくれないか？」

「一言ですみます。例の最後のプレートの名前が解読できました」

「ほう？ 気になるな。何だ？」

「ア……、アシュマ・アトー・ショアク・アシュオン……」

「！ ……なんと、それは……」

「そうです。閣下の宿敵アシュマの名前と完全に一致します」

「そうか。分かった。下がってよい」

「はっ」

男は下がり部屋を出た。

「リクシルめ。やりおったな？」

ガルマインは一人呟いた。

アシュマ達一行は未だソールの街にいた。

凶太い神経ではある。

食事を採ろうと言うのである。

「ここがいいですかね？」

ヨデイが店の扉を開く。

全国チェーンのファミリーストランだった。

「わあ。綺麗なお店。なにたべようかなあ？」
アーチエルがはしゃぐ。

「何でも好きな物を頼んでいいですよ」
ヨデイがウェイトレスに案内されて席に着く。
アーチエルがメニューを開く。

「何にしようかなあ？ うーん。迷うなあ。アシュマさまは何を頼むんですか？」

「ハンバーグランチ」

「私もそれにしようかなあ？」
唇に人差し指を当てて考えている。
楽しそうだ。

「好きな物を食べるがよい」
アシュマがアーチエルを見ながら言う。

「じゃあ、わたくしもそれにしようっと」
アーチエルがメニューを閉じた。

その日、アヘイビアの首都ガーファにあるガーファ国際空港は騒然としていた。

何故なら、ノリトレアから、事実上の元首がやって来るからだ。

その元首とは、勿論、ガルマインである。

元首となって日が浅い彼が、外交上のパイプ等持っている訳でもなく、専らドートネーゼの引き合わせによる物であった。

確かにノリトレアは技術立国で、商業上の交流は前からあったし、外務省を通じて政治的交流も無かった訳ではない。

国の代表として、内務大臣や外務大臣が訪れる事も、珍しくはない。

が、ガルマインは正式な立場とえば、一介の武芸御指南役ではないのだ。

そんな自分を、事実上の元首として扱ってくれるとは、多少複雑

な気分がした。

サイコ・フライヤーは、空から滑り降りる様にして降りてきた。滑走路上でサイコ・フライヤーは停まり、タラップが掛けられる。タラップから降りると、美女が花束を持って歓迎してくれた。

こうしてガルマインはアヘイビアの首都ガーファの地に降り立った。

続いてアヘイビアの国務長官がやって来てガルマインと握手をした。

（国民向けのパフォーマンスなのだろうな）

ガルマインはそう思った。

ガルマインは、記者達のフラッシュを、喜色満面を装い受けていた。

続いて用意されていたリムジンに乗り、空港を後にした。

リムジンの中でガデウィンが、

「親父殿、えらい歓迎のされようですな」

ガデウィンが子供の様にはしゃぐ。

「全てドートネーゼのお陰じゃ」

ドートネーゼのお陰とは言え、ガルマインは着実に出世していく。

「はあ」

ガデウィンは、要領の得ない言葉を返してきた。

ガルマインは、何故ガデウィンはこんなにも愚鈍なのかと思ひ、ため息をついた。

「親父殿、いかがした？」

「お前は黙っておれ」

愚鈍な息子と話していると腹が立つ。

そうならない為、ガルマインは息子の口に封をした。

「外務大臣との会談は、明日になります。その後首脳会談になるでしょう」

ノリトレアの外務省のスタッフが言う。

この外務省スタッフもドートネーゼの者である。

「そうか」

ガルマインは強い意志を持ってそう言った。

「この後、ホテルにて各界有識者とのパーティーがあります」

スタッフはそう言った。

リムジンは高速道路を走り、都市部を抜け、大都会の中を走るようになっていた。

一際高いビルの前で、リムジンは止まった。

ここは、ガーファ有数のホテルの前だった。

ホテルのボーイにリムジンの扉を開かれ、ホテルへの階段をゆっくりと登った。

一行三人は、エレベーターに乗り、最上階へと登っていった。

一行は、エレベーターを降り、エレベーターホールから廊下へと出た。

廊下の途中に、一際豪華な造りの扉が見えた。

中では、パーティーが催されている。

豪華絢爛な。

其処此処に、歳若い者から初老までのドレスアップされた男女。

各テーブルには美食家をも唸らせるような、山海の珍味。

一本十数万もする三鞭酒。

会場のいたる所で、会話に花が咲いていた。

そこに入場するガルマイン。

ガルマインが現れると、我先にとガルマインの周りに人だかりが出来た。

ガルマインの顔はもう有識者の間で知られているのだ。

そして、

「自分は某^{なにがし}です、どうぞ宜しく」

と、言う様な挨拶を次から次へと、めまぐるしくされるのである。たまった物ではなかった。

まあ、横ではガデウィンが、特に若い女性に対して喜んで握手をしていたが……。

（戯けめ）

ガルマインはそう思いながら、輪を抜けた。

「ご案内いたします。こちらへ」

スタッフがガルマインを誘う。

ガルマインが付いて行った先は、アヘイビアの経済界、工業会等のトップや重鎮達だった。

これには、ガルマインも驚いた。

もし、ドートネーゼの一員でなかったならば、果たしてこの様な顔ぶれと一堂に会せただろうか？

と、言う事は、これら財界のトップ達は、ドートネーゼの配下にあると言う事ことを意味していないだろうか？

彼らはロビイストでもあるので、アヘイビアの政界にも顔が利く筈であった。

いや、それよりも良く見るとアヘイビアの上院、下院双方の有力な政治家も顔を交えていた。

その顔ぶれの者達が自分に対して、

「よろしく」

そう言つて、自分に握手を求めてくるのだ。

「では、こちらの方々にも御挨拶を」

外務省スタッフがガルマインを誘う（さそふ）

「これは……」

それは、事実上世界を牛耳ると言われている、各財閥の当主達であつた。

中でも異彩を放っていたのは、イーチャイルド家の当主イーン・イーチャイルドであつた。

彼がイーン・イーチャイルドならば、その手の詳しい者によれば既に百五十歳は超えている筈だという。

イーンは、車椅子に乗り、頭からはフードをすっぽりと被り、下半身にはひざ掛けを掛け、手には手袋をして、露出している肌は顔から下半分しかなかった。

「イーン様、こちらがガルマイン・デッド。現在のノリトレアの事実上の元首で御座います」

外務省スタッフはそう言っただけで腰を折った。

ガルマインもそれに倣った。

イーンの車椅子を押している青年が耳打ちをしている。

どうやらこちらの言った事を伝えているらしい。

暫くして、イーンが言った事を青年が聞き耳を立てていた。

そして、

「よく仕事に励まれよ。大儀であった」

と、だけ言った。

「はっ」

ガルマインは頭を垂れた。

「これで粗方紹介を終えました」

外務省スタッフの言葉だ。

「そうか。では帰るか」

「はい」

ガルマイン息子の方へ歩み寄って行った。

「ガデウィンよ、行くぞ」

ガルマインは、ガデウィンを誘ったが、

「お、親父殿、女子共が離して、く、くれませぬ……」

ガデウィンがそう応えた。

「この、戯けが!!」

「お、親父殿、待ってくれ」

ガルマインは足早にその場を後にした。

ガデウィンはガルマインの後を追った。

「明日の外務大臣との会見は、昼過ぎ辺りからになるでしょう」

帰りのリムジンにて、スタッフは言った。

「うむ」

ガルマインとガデウィンが泊まるホテルに着いたのはそれから数分後だった。

ガルマインはホテルで一泊する。
次の日のガルマインとアヘイビア外相との会談は和やかな雰囲気
の中、滞りなく終わった。

「アシユマ・アトーが？」

ガルマインにしては少し間の抜けた声で訊き返していた。

「はい」

その日のスタッフとの会話は、その掛け合いで始まった。

「このアヘイビアに？」

「はい」

「うゝむ」

ガルマインはリムジンに乗りながら唸ってしまった。

「何とかして我が手に入らないものか？　せめて、アーチエルだけでも……」

「あの小娘だけでも構わないのですか？　鬼虎は？」

スタッフが資料を見つつ喋る。

「構わん。多少の能力を見せても所詮は刀。一体何が出来よう」

リムジンはハイウェイに入って益々車体を加速させた。

「しかし最高評議會は、あの小娘よりも刀の方に御執心の様です。
もしかして娘の方は下げ渡されるかもしれませんよ」

「『下げ渡される』か……」

ガルマインは苦笑した。

「御不満ですか？」

スタッフの目だけが動く。

このスタッフはドートネーゼからの使者でガルマインのサポート
をするだけでなく、同時にガルマインの行動を監視する者でもあつ
た。

「いや」

ガルマインは即座に否定をする。

「そうですか。それにしてもガルメイン様は、鬼虎の評価を低く見すぎでは無いでしょうか？」

メガネの奥で外務省スタッフの眼が光る。

「そうか？ 良く斬れると言っても所詮は刀。何が出来よう」

ガルメインは正直な所を述べた。

「はあ」

「ところで、アシュマ捕縛をするそうナ。どうなっておる？」

「さあ、これは最高評議会が関わっているので、私も詳しくは分かりません」

スタッフにもべもない。

「そうか。しかし、あの刀……鬼虎はともかく、アシュマは比類なき手練れだ。如何するのか？」

ガルメインが指摘する。

何度も苦汁を舐めてきている。

当然の指摘だ。

「その点は大丈夫な筈です。ネルファバーゼがレボトミノ連邦共和国より、怪力無双のゴド・ングを、ドラスティス王国からは、剣の達人レディール・エレノイ嬢を、しょうへい招聘したと聞きました。このお二方が、縦横無尽に働いてくれるでしょう。今回は警察の方に、貸し出されるみたいです。基本的には我らの側に立つという事です」

スタッフがそう応えた。

自信があるようだ。

「そうか。いずれも当代一と呼ばれる剣士達だな」

ガルメインは冷静に分析をする。

「怪力無双のゴド・ングは大型の斧使い。レディール・エレノイはレイピアの達人、素早さでは負けた事が無いそうです」

スタッフは大分気負いこんでいる。

「ふむ」

ガルメインは気乗りがしない。

「見たいですか？ アシュマとその一党が捕まる所を」

「それで、今日は同道を求めたのか？」

「今日のスケジュールは有りませんので」

リムジンは高速道路を降りた。

「ネルゼイ警部、全員配置に付きました」

「うむ！」

ネルゼイ国際警察機構警部は、手の者を使い、例の港の外れに係留してある銀龍号を、武装警官で包囲しつつあった。

国際警察機構は各国警察が相互の主権を尊重しつつ、国際的な刑事犯罪の防止に役立てる目的で結成した組織だ。

情報や資料の交換、捜査協力等が主な任務だが、時には現地警察と一体になって、容疑者を逮捕できる権限も持つ。

あくまで、現地警察との連携での話であるが。

ネルゼイ警部は、今、自分が本国にいたので、このまま地元警察の権限を行使できる立場にある。

後は、突入するだけだが……。

「ねええ、私達の出番はまだなのお？　殺^やっちゃって構わないの

よねえ？」

レディール・エレノイが出番を願って、レイピアを構える真似をして見せた。

この女性、年は二十二〜三歳程の頃合。

黄金色に輝き、腰まで届く豊かな髪。

彫が深く美しく整った顔。

均整の取れたスタイル。

豊かな胸元。

肩の部分がパフスリーブの純白のブラウスを着て、臍脂のベストが豊かな胸を窮屈そうにおしこめる。

美しい曲線を描く腰から臀部にかけてのライン。

スラリと伸びた脚にフィットする様な薄茶色のパンツルックで裾

をブーツに入れた出で立ち。

それに対して、見た目は三十四〜五歳で、巨大な斧を軽々と持ち上げた、このゴツそうな男、ゴド・ングが、

「レディール、でしゃばるなよ！ 閃光のアシマは俺が殺る！！」

そう、がなった。

このゴド・ング、容貌は厳つく、身体は筋肉に覆われて、いかにもむさい。

「閃光の異名を持つてるのはアシマだけじゃないわ。私だって閃光のワルキューレと言われているのよ。私と戦った男は、皆、あの世に魂を持っていかれるの。そんな私と殺りあおうというの？」

レディールがレイピアを抜く気配を見せた。

「俺とて怪力無双と呼ばれたゴド・ング！ 俺の邪魔をする奴あ、皆あ、ぶった斬る！」

ゴド・ングも斧を手に持つ。

「ええい、やめよ！ こんな所で、斬り合い等始められた日にゃ、洒落にならん。喧嘩なら他でもらおう！ それに我々はアシマ・アトーを捕縛しに着たのではない！ 『ダスト・モンキー』の捕縛に来たのだ！！」

「……ちっ！」

ゴド・ングは舌打ちをする。

「なによ、その『ダスト・モンキー』って？」
レディールが訊く。

その話題に上るダストモンキーだが……、

「けちくさい、こそ泥さ。この三月程でぐんぐん頭角を現した新手の密貿易者で、中々尻尾を掴ませない。主に武器や魔導機兵用の部品を色々と横流ししている。捕まえようにもその度に上手く逃げ回りやる」

と、ネルゼイはこう説明をする。

「ふーん……」

レディールは気の無い返事をした。

彼女の興味は専らアシユマにある様だ。

「『上』からの命令なので、仕方なく貴方方を此処において頂いているが、目に余る様だと、お帰り願う事になるが、如何？」

「なんだと、我らを呼ぶだけ呼んでおいて、その態度は何か？」

「そうよ、貴方、少し横暴ではなくって？」

招かれた二人は少しばかり憤った。

「分かった。分かった」

ネルゼイは少しも取り合おうとしない。

『A班、配置完了しました』

「そうか、わかった」

『B班、近くにリムジン発見』

「なんだと？ 排除しろ！」

『ですが、『上』の方に確認してくれば分かります……』

「また『上』か！ 一体『上』は何を考えているんだ！ B班、リ

ムジンはそのままにして待機」

ネルゼイはネルゼイで苛つかされる事があった。

『了解』

「私達の話聞いて無いの？ 貴方は！」

レディールが怒って言う。

「ええい！ これから突入だと言うのに、うるさい方々だな！ それ程までに言うなら、アシユマ捕縛をお願いしよう！」

ネルゼイが苛ついて言う。

「はじめから、そう言えばいいのよ」

「全くだ」

二人の剣士は自分の得物を持って、各々勝手な位置に陣取ってしまった。

「何か様子が変だ」

始めに異変に察知したのは、アシユマだった。

「なにが？」

興味を引いたのは、ヨデイである。

「どーせ、又、お隣さん同士で揉めてんだろ？」

そう言ったのは、オルバニアンである。

『お隣さん』と言うのは、港に係留^{けいりゅう}し、隣り合ったフライヤー同士で行われる揉め事である。

俺のレーンに入った入らないの線引きでの揉め事から、ぶつかった、ぶつかっていない、と言う小事故まで、ありとあらゆる揉め事があった。

フライヤー乗りと言うのは、何故か荒くれ共が多い。

ヨデイのように穏やかなのは珍しい。

「静か過ぎる。この時間なら買い物客等でもっと人通りがあつていい筈だ」

アシュマが言う。

買い物客で人通りがあると言うのは、交易商人が問屋に卸さずに、自前のサイコ・フライヤーで直接店を開く者もいると言う事である。

ヨデイもその口だ。

だが今日は店を開いていない。

ヨデイの扱う商品は婦人用の着物だ。

下着から毛皮まで何でもある。

だが今日は天気が悪かった。

小雨が降っている。

こんな日は仕事を休んでいた。

ところで、アシュマの言う、買い物客というのは、そう言う者を言った。

「確かに少ないなあ」

ヨデイが言った。

少ないどころか、人っ子一人いなかった。

幾ら小雨が降っていても。

「気のせいじゃないのー？」

あくまで、オルバニアンは能天気だった。

「ヨディ、念のため直ぐ発進出来るようにしておいた方が良くないか？」

アシュマが警戒して言う。

「ああ。そうだね」

ヨディがすぐさま操縦席に着いた。

そして、係留してあるフックを外そうとしたが、それが出来なかった。

「くそっ！ どうなってやがる？ ソールコントロール！ こちら船籍登録二六六二銀龍号、船の位置を微調整したい。一時係留フックの解除をお願いしたい」

ヨディが連絡を入れる。

が、返ってきた応えは……、

『二六六二、それは許可できない』

と言うものだった。

「何故だ！ ソールコントロール。納得できる回答を得たい」

『二六六二、許可はできない。以上だ』

怪しい。

「ソールコントロール！！ ソールコントロール！！ こりゃ、やばいぞ！ アシュマ君！」

何かあると見たヨディはアシュマに声をかける。

「外のフックを斬って来ればいいんだな？」

アシュマも飲み込みが早く行動に出る。

「ええ、お願いします」

「どうしましたの？ アシュマさま？」

不安に思ったアーチェルがアシュマに聞いてきた。

「船内でじっとして」

アーチェルに静かに、しかし厳しく言うと、ハッチから船外へ出てハッチをロックした。

そして船尾へと行き係留フックを捜し始めた。

「警部、一体何をしようとしているんでしょうねえ」

ネルゼイの部下は訊いた。

「どうやら人の力で、係留フックを外そうとしている様だ」

「出来るんでしょうか」

「出来る出来ないは別だろう。ああやって外そうとしている、行為そのものに意味がある。ばれたな」

「どうやらそのようだ」と自分に言い聞かせるネルゼイ。

「！では」

「全班突入用意良いか！？」

ネルゼイが腹を括る。

「A班OK！」

「B班OK！」

……全班的準備が整えられて行く事が次々と知らされて行く。

「あら、アシュマ・アトーじゃない？」

レディールが言った。

「そうか、奴がアシュマ・アトーか」

ゴド・ングは実物を初めて見たのか、感じ入る所があった。

「あら、彼の顔知らなかったの？ 私は知っていたわよ。もう、愛しくて愛しくて……」

正に愛しい者を見るが如く眼を細めて……、

「愛しくて？」

「殺してしまいそう。んふ」

と、危ない事を言う。

「けっ！」

つまらないことを聞いたとゴド・ングは穿き棄てる。

「警部！ 全班突入用意完了しました」

ネルゼイの部下が報告をする。

「！？」

アシュマは、周りの空気が変わったのを、肌で感じ取った。

「突入！！ ダスト・モンキーを捕縛せよ！！」

ネルゼイが叫んだ。

路地のそこから、警官隊が樹脂製の盾を持って、一斉にヨデイのサイコ・フライヤー目掛けて、殺到してきた。

中からアーチェルが、

「はやく、中に入って!!」

と、大声で叫んでいたが、

「アーチェル、ヨデイにブリッジの防護シャッターを下ろす様に伝えてくれ。大至急だ」

逆にアシュマがそう叫んでいた。

すぐさま、ブリッジの防護シールドが降りた。

アシュマは鬼虎を抜き右手にだらりと下げて、後部ハッチの前に立ちはだかった。

早速、最初の集団がやってきたが、アシュマを避けてサイコ・フライヤーの上部にある上部ハッチに取り付いた。

「くそ、素直に俺だけを、狙ってくればいいものを……!!」

アシュマは上部ハッチ付近にいる警官達を一人、二人と鬼虎で打ち据えていった。

しかしその間に別の班が後部ハッチに取り付き、巨大な鉄杭で扉を開こうとしていた。

火薬で鉄杭が飛び出す奴だ。

アシュマが下へ降り様とした時、全身これ筋肉といった巨漢と、背が高く見事なプロポーションを持つ体と、類稀な美貌を持つまだ若い女が、アシュマの前に立ちふさがった。

「どけ!」

アシュマは焦っていた。

どうやら敵は、アシュマの事は完全無視で、他の仲間を襲う作戦の様だ。

「もう、貴方も気づいているわよね。警官隊は貴方の事は完全無視。貴方の事は私達で処理をする。そういう事よ」

若い女がそう言った。

「俺は、急いでいる。そこをどけ」

アシュマは、物言いは静かだが、低く通る声音で脅しをかけた。

「あら、自己紹介ぐらいさせてよ。私はレディール。レディール・エレノイよ。で、ごっつい彼が……」

「誰がごっついだ……ゴド・ングだ！ アシュマ、俺と勝負しろ！」
「その方が早いかな」

アシュマは刀を峰に反したまま、左脇構えに片手で構えた。

左手は鯉口に添えられたままだ。

「峰に反したままかよ。俺も嘗められたもんだぜ」

不意にアシュマの左脇構えに構えた手から伸びた切っ先が、ゴド・ングの右横鬢を狙った。

咄嗟にゴド・ングは、斧を掲げてかわしたが、がつん、と強い衝撃を受けて、ゴド・ングの鋼鉄製の斧の柄はぐにやりと曲がってしまった。

恐るべき力である。

レディールは一度止まってしまった鬼虎の勢いを見逃さず、得意の突きでアシュマを攻撃し始めた。

「うふふ……。閃光の異名持つのは貴方だけじゃないのよ。私は閃光のワルキューレ。どう？ 受けきれるかしら？ うふふふ……」

レディールは構えた。

身体と右腕を開き、右手を肩と同じ高さにする。

左腕も開いて頬の高さまで持つてきてバランスをとる。

前足のつま先は相手に対してまっすぐに向け、後足はそれに対して四十五度／＼九十度の間で開き膝はやや曲げる。

そして右手に持った細身の剣で突いてくるのだ。

アシュマは、これには最初、面食らった。

だが、この剣の太刀筋は以前に見た事がある様な気がした。

確かに、レディールの突きは変幻自在で緩急があり速い物であった。

アシュマの身体は徐々に切り傷を増やされていった。

が、アシュマはただ避けているだけでなく、彼女の突きを見切り始めた。

そして、徐々に反撃する余裕が出て来た。

アシュマも『閃光』の異名を持つ者だ。

アシュマの速い切り込みで、レディールも体勢を崩された始めた。そして終には、左脇構えから横に鬼虎で薙いでいた。

レディールがこれを辛うじてかわした。

「くっ……、こんな……」

レディールは悪態をついていた。

そしてアシュマは、身体を前に出して誘いをかけてみた。

（今だわ）

レディールは焦ったのか、アシュマの誘いに乗り、レディールが突きを出した時、アシュマは体を右に開いて突きをかわし、上から振り被って鬼虎を振り下ろしてレディールの剣を折った。

「あっ!!」

アシュマは、そのまま茫然自失になっているレディールの鳩尾に、肘あてを噛ました。

レディールは、

「うっ」

と、うめき声を発し、失神し、アシュマに寄りかかってしまった。

「おおっ！ おおおおっ!!」

ゴド・ングが武器も持たずに、肩を突き出し、生身のまま突進してきた。

アシュマはレディールを右手に抱きながら、ゴド・ングの突進を片手でいなして、勢いを他に逸らした。

ゴド・ングはたたたらを踏みながら銀龍の翼の端で踏ん張っていたが、こらえきれず七〜八メートル下の床へ落下、失神してしまった。

「皆、まだまだ未熟だ」

アシュマは独りごちた。

見ると、天井部のハッチも開けられ、警官隊が次々と中へ突入し

て言った。

残りの余った警官達はアシュマを標的とした。

アシュマはレディールを下に寝かせ、警官隊と対峙した。

鬼虎は、峰に反したままだった。

警官隊は皆樹脂製の盾と警棒を持って迫ってきた。

アシュマは又も右腕一本で左脇構えに構えた。

アシュマは囲まれる前に、いち早く正面の警官に斬り掛かって行った。

正面の警官は思わず盾を前に掲げたが、アシュマは盾を断ち割り、続いてその、警官の鎖骨を叩き折っていた。

次の警官には腹部に強烈な打撃を見舞い、更に左の敵には小手への痛烈な打撃を見舞った。

アシュマの攻撃は留まる所を知らず、アシュマは立膝になって、二人程警官の足首を痛打した。

そして立ち上がりざまに、警官の左わき腹を盾を割りつつ打ち据え、正面の敵には真っ向唐竹割りで、ヘルメットを砕いた。

「そこまでだ。アシュマ・アトー君」

見ると警察官の指揮官らしき男がアーチェルを左手に、右手に電磁警棒を持ってアーチェルの顔へと充てがってきた。

この時、ふと、レディールの意識が戻った。

「無礼者！ 離しなさい！ お離し！！ ……アシュマさま！」

アシュマは、アーチェルが叫んでいるのを眼にした。

「私はネルゼイ警部。私もこう言う卑劣な手段は採りたくないのだよ。おとなしく捕まってくれば、これ以上の狼藉を働こうとは思わん。これ、この通り彼女も嫌がっている」

そう言って、アーチェルの顔に電磁警棒を近づけた。

続いてがんじがらめに縛られた、オルバニアンとヨディが船内から連れてこられた。

「アシュマさま！ 私に構わずに逃げて！ 今の内に……！」
アーチェルがアシュマに逃げる様、促した。

「なにい？ 逃げるのかよお！ アシユマあ！」

オルバニアンが叫んだ。

「ア、アシユマ君……逃げなさい……その代わり、後で助けに来て下さい……。ネルゼイ警部、ダスト・モンキーは私です。その二人は無関係です。私さえ捕まえればそれで良いのでしょうか？」

「そういう訳にも行かないんだよ。『上』の意向でね。もちろん、アシユマ君、君にも王女誘拐の国際手配犯として嫌疑が掛けられているぞ」

「じゃあ俺はなんなんだよ？」

「オルバニアン君だったね。君には、身分詐称、サイコ・フライヤー強奪、及び王女誘拐補助で、嫌疑を掛けられているよ」

「そー……かい」

「もちろん、ヨディ・ヨフル 貴様にはダスト・モンキーとして、武器密輸、販売、その他麻薬以外の御禁制品の密売等などの嫌疑が掛けられている！ やっと捕まえたぞ！ この猿め！！ ……はあ、はあ、はあ」

「いやあ、僕で興奮されても困るなあ」

「するか！ ボケー！！」

「逃げて！ アシユマさま！！」

アーチェルが叫ぶ。

「……………」

アシユマは、無言で鬼虎をサイコ・フライヤーの上部甲板に突き立てると、どっかと、その場に胡坐を掻いて座ってしまった。

「アシユマさま……！！！」

アーチェルは、落胆とも感動とも知れない複雑な感情に、涙を流していた。

「あなた、あんな小娘の為に自分を犠牲にしようっての！？」

レディールは憤った。

「あなたは馬鹿よ！！ 私はこの男に負けたっていうの！？ ふざけでないでよ！！！」

ばん、とレディールはアシュマの頬を叩いていた。
が、あくまで、アシュマは無表情だった。
アシュマは警官隊によって捕縛された。

「どうやら、アシュマ・アトーは、警官隊に捕まってしまった様で
すね」

ノリトレア外務省スタッフはその光景を見て言った。

「しかし、剣技には目をみはる物が、ありましたね」

「しかし、そのアシュマの腕で、我ら親子が、どれ程煮え湯を飲ま
されたか」

ガルマインが言った。

「では、参りましょうか。後程彼らと相見^{あいまみ}える事もあるでしょう」
その言葉を合図に、リムジンは滑り出した。

数日たった、ある日の事……。

「どういう事です!? 所長!」

ネルゼイ警部は所長室で所長の机を、
ばん!

と、叩いていた。

「どう言う事とはどう言う事かね?」

「容疑者のアシュマとアーチエル王女です! 私はあの時の捕縛の
責任者です。その私に何の連絡も断わりも無く、容疑者はこちらで
調べる。王女はこちらで保護をする。挙句の果てには、勝手に移送
して、行き先が分からんとは、どういう事です!？」

ネルゼイは再び、

ばん!

と、机を叩いていた。

「断わりも何もだねえ……、君のサインが入っているじゃあないか

ね？」

「何ですって？」

ネルゼイは所長が出した書類に目を通した。

「これは……そんな……馬鹿なッ!!」

それは、確かにネルゼイ警部のサインが書かれた、書類だった。筆跡も寸分違わず、ネルゼイ警部の物だった。

「これは……何かの間違いだっ!」

ネルゼイはどこにぶつけて良いか分からない怒りを叫んだ。

ガルマインは今日もノリトレア外務省スタッフと共に、リムジンに乗って何処かへ行く^{どこ}こうとしていた。

高速道路に乗っている。

「今日はどこに？」

ガルマインが尋ねた。

「今日は、アシュマ・アトーの『実験』に立ち会います」
スタッフが答えた。

「実験？」

「ええ、実験です。貴方はよく言われますよね。アシュマ・アトーは強いと。その強さの秘密を、科学的に解き明かそうと言うのです」
ドートネーゼにしてみれば急務のことらしい。

アシュマには何か秘密があるらしい。

生まれの秘密に関して言えばガルマインも知っているようだ。

それは、つい最近のことのようだが。

プレートに刻まれた名前。

それはアシュマ・アトー。

アシュマ・アトーとは何ものなのか？

「科学的に……」

一瞬考えるガルマイン。

「既に捕らえられたアシュマを実験するのです」

外務省スタッフがメガネの奥でほくそえむ。

「なんと！ 実験等せずにその場でアシユマを殺すべきだ。アシユマ・アトーを実験する等と、危険な事、この上もない」

ガルマインはその事を強く警告した。

「これは最高評議会の意思です。我らは最高評議会の意思によって、動いているのです。貴方の意見は通りません」

スタッフは言い切った。

「最高評議会は何も分かっていない」

ガルマインは吐き捨てる。

「そろそろ着く頃です」

スタッフが言った。

アシユマは目隠しをされて『ここ』に来た。

消毒薬のにおい。

機材を並べる音。

アシユマは、病院に連れてこられたのかと思った。

ここに着いた時には、既に全裸だった。

もとより薬を打たれて、ここに連れてこられた。

目隠しをされ両手足は縛められ、体の自由を奪われていた

「う……」

「なんと、あれだけの薬を打たれて、まだ意識があるとは……」

「だが完全ではない様だ。意識の混濁が認められる」

「だが、常人の五倍以上も打たれて、意識を覚醒させるとは信じられん」

「確かにその通りだ」

「ガルマイン様の御成りである！」

すると、所内全員が、ガルマインに向けて頭を垂れた。

ガルマインはドートネーゼと言う組織の力をまざまざと見せ付けられた。

なにせ、ここはアヘイビアで、ノリトレアとは違うのである。

ここまで、頭を低くする必要はない筈である。

「では、行きます」

スタッフが言葉を発する。

「うむ」

ガルマインがそれを受ける。

スタッフとガルマイン、ガデウインの三人は、吹き抜になっていた一階から、地下一階へと階段を下りて、アシュマのいるフロアまで降り立った。

壁や天井、はたまた床と真新しい検査器具や検査装置が、所狭しと並べられていた。

早速、主任研究員と思しき男がやって来て、何やら挨拶していた。
「今は何をしておるのか？」

「はっ、ガルマイン様。これからアシュマ・アトーの、『素体』：
『オリジナルナンバー』の筋力を測定する所で御座います」

（ガルマイン？ 『素体』？ 『オリジナルナンバー』？）

アシュマは目隠しをされ、混濁する意識の中で、それらの言葉をはっきりと聞いた。

そういうアシュマは、体の各部に電極を刺され、ちょっとしたハリネズミの様にみえた。

「心臓の近くに電極を刺して、死にはしないのか？」

ガルマインが訊いた。

が、決してアシュマを慮おもって訊いたのでは無い。

アシュマは時として信じられない力を示す事がある。

それを怖れての事だ。

冷たいガルマインの視線がアシュマを貫く。

「それも実験の内に入っています」

アシュマは会話の中にガルマインの言葉を聞いた。

（ガルマインか？ ガルマインがここに来ているのか）
アシュマはそう推察する。

「久しぶりだなアシュマよ。そんな『なり』で、この俺と再会しようとはなあ。惨め過ぎて話にもならんな」

ガデウインが歓喜の中肩頬を笑みに歪める。

「ガデウインか……俺に臭い息を吹きかけるな……」

「何だとおっ！　このおおっ！！」

ガデウインは怒りに任せて、アシュマを殴ろうとした。

「やめよ！　ガデウイン！！」

ガルマインがガデウインを制止する。

「う！」

ガデウインは動きを止めた。

「どうも、ガデウイン様は、目に余る行動が多い様ですね」
スタッフがそう言った。

「言うとおりでな」

ガルマインが、ため息混じりに言った。

「いっその事、処分なされては如何ですか？」

「そうしたい所だ」

ガルマインが佩刀を抜いた。

「お、親父殿、何を言っているんだ。……嘘だろ？」
ガデウインは狼狽うろたえた。

「う、嘘だろ？　なあ？」

「ここで、殺されても困ります。どうか余所よそでおやり下さい」
主任研究員が言う。

「命拾いをしたな、ガデウインよ」
アシュマが言った。

「この野郎、言わせておけば……」
「実験開始します。離れて下さい」
重ねて主任研究員が言った。

「う……」

ガデウインが言葉を濁らせた。
研究員が電極のつまみを回し始めた。

「うっ、があっ!!」

アシュマが途端に苦しみだす。

文字通り、体の中を電流が流れている為である。

「へ、へへ。こいつ苦しみだしやがったぞ?」

ガデウィンが笑う。

「どうか?」

主任研究員が訊いた。

「すごいですね。常人の平均二、三倍の筋力がありますね。ナンバーズの一、七五倍と比較しても すごい数値です」

(ナンバーズ?)

アシュマは苦痛の中、その言葉を脳に刻み込んだ

「二、三倍か……。理論値では三倍まではいける筈だ。続けてみる」
「分かりました」

「これは何の実験をしてるのですかな?」

ガルマインが訊く。

「はい、ガルマイン様。これは『オリジナルナンバー』の身体能力を、具体的に数値化している実験です。常人を一に設定して、どれ程の力を出せるのか、実験している訳です」

研究員の一人が答える。

「そうですか。で、その『オリジナルナンバー』は、どの程度の数値を出しているのですか?」

ガルマインにしては気になる数字だった。

「今の所常人の二、三倍の数値をはじき出しております」

「ちなみにナンバーズは?」

「はい。ナンバーズは平均一、七五倍となっております」

「あまり、ナンバーズと変わらないのう」

ガルマインは腑に落ちないところがあった。

バヴェルの発掘現場の砂漠での走り。

跳躍力。

戦闘能力。

とても常人とは思えなかった。
超人。

人を超えた存在。

そう思えてならなかった。

二、三倍。

とてもそんな数字では図れない何かが。

そんなものがアシユマにはある。

ガルマインの危惧する所だった。

「はあ……そんな筈は……」

研究員は、つまみを更に回した。

「うわぁっ!!」

アシユマが苦痛の声を搾り出した。

「どうか」

主任研究員が訊いた。

「理論値を超えました。常人の三、四五倍まで跳ね上がりました。
まだ上がりそうです」

「そうか。私は鬼虎の方を見てくる」

「三、四五倍か。中々な数値じゃの？ 素人の儂でもそう思う」

「恐れ入ります。元々は我々の『素体』なのですから」

（『元々』？）

アシユマも混濁する意識の中で、その言葉を聞いた。

ガルマインは思う。

アシユマは『素体』……『オリジナルナンバー』だった。

プレートに書かれていた名前だった。

それは判明した。

アシユマは人間では無い。

では、『素体』……『オリジナルナンバー』とはなんなのか？

特別な刀、鬼虎を操る能力。

何の為に創られたのか？

また若い研究員がやって来て何かを伝えた。

「主任、DNAの差異値ですがナンバーズと十、五パーセントもの差異が認められます」

「十、五パーセント？ そんなばかな！ ナンバーズばオリジナルナンバーからのクローニングなのだぞ？ 最初から調べなおせ！」

だが、分かる事が一つ。

ナンバーズは『素体』……『オリジナルナンバー』を元にクローニングされた。

アシュマがナンバーズと瓜二つなのもこれで謎が解ける。

だが、いつ元になるDNA素体を手に入れたのか。

「は、はい……ですが我々の持つ染色体地図とは別に、ブラックボックス的な部分があり解析に時間がかかる物かと……」

「同じ部分は省いて、ブラックボックス部分の解析を急げ！」

「とはいえ、数ヶ月から数年掛かる物かと」

「分かっている！ 直ぐに解析に入れ！」

「はっ」

「血液中に、血液の成分とは別の『異物』が多数混在しており、何かしらの働きをしている様なのですが、良く分かりません。これらの『異物』が、他の臓器等にも多数存在していて……」

若い研究員と入れ違いで入ってきた、研究員が言った。

「よく分からないで済むか！ よく調べろ！！ ……それが、文献に出てくる『ナノマシン』なのかも知れん。そちらの方から調べてみる！」

「はい！」

研究員は去っていった。

「騒がしくてすみません。どうぞ、こちらへ。鬼虎の実験をします。まず、基本的な事で分かっている事は、モース硬度十三、五と、言う事が上げられます」

主任研究員は、ガルマイン達を隣の部屋へ招き入れた。

「硬度十三、五……随分と硬いな。ダイヤモンドより硬い。鬼虎の基礎データですな」

ガルマインが感心した。

次の部屋に入ってみて見ると、大きい筒があり、鬼虎の本身は、筒の中に固定されていた。

「どうした。何故分解しない」

「駄目でした、主任。分解しようにも、目釘一本すら抜けないのです」

「まあ、仕方なからう……。それで、核磁気共鳴画像の方はどうだ？」

「駄目です。全て鬼虎の部分が真っ暗に……」

「核磁気共鳴画像はだめですか……超音波画像の方は？」

「試しましたが鬼虎部分が、やはり黒く塗りつぶされて……」

「X線は……？」

「残念ながら」

「いかな……これは……これでは鬼虎の構造が全く分からない……鬼虎の欠片ひとつも取れんか？」

「少しよろしいか？」

ガルマインが質問をした。

「何でしょう？」

研究主任が答える。

「鬼虎とは刀以外に一体何があるというのです？」

鬼虎を甘く見ていたガルマインの言葉だ。

最高評議会は何をこんな刀一振りにこだわるのか。それが知りたかった。

「簡単に言えば、記憶素子です。その他には、まあ、念導境界面と似た力場を構成します……が……」

「『が』……？」

「エネルギーと力場と物質……これらを自由に行き来できる為の装置、とでも言いましょうか……」

主任研究員が鬼虎の力の秘密の一端を話した。

「……………むう、そうなのか……。有難う」

ガルマインは鬼虎を見つめる。

（そのような側面があるのか、鬼虎は……。それは一体どのような事なのか？）

ガルマインは思った。

しかしそれは、ガルマインにとっては、想像を超えた所にあった。

「まあ、全て古代文献による物ですが……」

主任研究員が笑って言う。

同時に研究員が入ってきて、

「主任、素体の動体視力、反射神経共に常人の三倍を軽く超え……。それらを総合すると、相互作用で、常人の何倍の力を発揮するのか、皆目見当がつかず……」

そう告げた。

「分かった。その手の報告はもういい。後でゆっくり検討に入る。待っててくれ」

「はい」

「とりあえず、鬼虎と素体、オリジナルナンバーとの関連性を見ると、主任研究員が言うと、鬼虎を別の機材の上に乗せ、アシユマのいる部屋へと持ってきた。

「そうだ。その鬼虎と素体……アシユマ・アトーの関連性を知りたい」

ガルマインが付いて行った。

鬼虎はアシユマの側まで持つてこられたが、アシユマは目隠しをされているので、何をされているのか分からなかった。

アシユマは未だ電極を各部分に突き刺されたままだった。

「主任殿？ 今度は何をなさるのかな？」
ガルマインが訊いた。

「オリジナルナンバーと、鬼虎の相互関係を調べます」

「どの様にして？」

「これからオリジナルナンバーに電極を使って、苦痛を与えてみます。その時の電流の波と、鬼虎本体の振動数の相関関係を見ます」

「直ぐにはアシュマとの関連性をはかる事は出来ませんな」

「その通りです」

「では、私達は次の場所へ行く」

ガルマイン達は別の所へ行く気配を見せた。

「これは、これは。たいしたお持て成しも出来ませんで」

研究主任は恐縮がる。

「ここは、そう言う所ではなかる。構わん。仕事をせい」

「はっ、畏まりました」

ガデウィンは、アシュマのその様子を、興味深そうに見ていた

「どうしたガデウィン？」

ガルマインは息子を促した。

「親父殿、俺はここにいる」

「そうか？　あまり研究員の方々の迷惑になるなよ」

「分かっております。親父殿」

スタッフとガルマインは階段を登り、地上一階に戻って、隣の部屋へ行った。

ドアをノックし、若い研究員が対応すると、すぐさまこの主任研究員が対応に当たった。

スタッフとガルマインが主任研究員に付いて中に入っていた。そこにあった物は、『バヴェル』のおそらくはメインコクピットになるであろう『棺桶』と、その中にはアーチエルが眠っていた。頭には見慣れないヘッドギアをつけていた。

多分あれは、ノリトレアの研究員が、バヴェルとの同調率を、調べていた物と同じ物だろう、と、ガルマインは予想をつけた。

それにしても、あの『棺桶』は一体どこから持ってきた物だろう……？

まさか、ノリトレアから持ってきた訳ではあるまい。

「君、あのコクピットだが……」

ガルマインは恐る恐る訊いてみた。

「ああ、あれはアヘイビアで見つかった遺跡の一部です」

スタッフが答える。

「一部……！」

「一部と言っても、あれで殆どの筈ですけどね。……済みません、今は何をしているのですか？」

スタッフがこちらの主任研究員に話しかけた。

「はい、今は起動実験をしています。しかし、よくコアユニットを見つけられましたな」

主任研究員がガルマインを見た。

「いや、例のプレートの特読に成功しましてな。レキシタニアのアーチエル王女の事を知りましてな。それでアーチエル様においでいただいた次第で……」

「それは重畳。カプセルの胎児が二人見事に揃ったと言う事ですな。」

ここで重要な事が一つ。

アーチエルもまた、素体なのだ。

ならば、アーチエルも人間では無いと言う事か。

カプセルの素体とは何のことか。

「起動いたしました」

そこへ研究員がやって来て、そう告げた。

「そうですか、起動しましたか！ 続いて同調実験を始めなさい」

主任研究員が言って、

「はい」

そのまま研究員が去った。

「しかし、困った物です」

主任研究員が言う。

「何故？」

ガルマインが話を受ける。

「あの娘コクピットに乗せようとする、泣くは、喚くは、暴れるは、で大変な物でした」

「我らの時も一緒だった。……中々手が付けられない、じゃじゃ馬

で」

「結局の所、我らは薬を使い眠らせてコクピットに入れましたが、覚醒していない為、同調率実験ではたいした成果は期待出来ないでしょう」

「そうか……」

そう言っただルマインは『棺桶』に入っている、アーチエルを見つめた。

第四節 反撃

ここは警察内の留置場。

窓は高い所にあり、鉄格子が嵌められていた。

壁の内、左右と後は分厚いコンクリートで固められ、正面にはやはり鋼鉄製で頑丈そうな鉄格子が嵌められていた。

しかし、留置場としては旧式の物であった。

もう夜も更け、コンクリートの壁とあいまって、それが寒々しさを更に深めていた。

「はあ」

ヨディはため息をついた。

ため息は白く吐き出され、そして消えた。

アシュマは、どうしただろう？

アーチエルは？

オルバニアンは？

（結局巻き込んでしまったな。悪い事をした）

等と思い塞ぎこんでいると……、

「若……若！」

一瞬、ヨディはわが耳を疑ったが、声のする方へと目を転ずると、そこにはアベニがいた。

「爺！ 無事だったか！」

ヨディは嬉しそうに声を上げた。

「若、声が高う御座います」

アベニがヨディを注意する。

「そうか……そうだな。で、爺、他の者はどうしておる？」

ヨディは慌てて声を潜めた。

「アシュマ殿と、アーチエル様が、他の場所へ移送されました。オルバニアン様は無事です」

「アシュマ君とアーチエル様の行方は分からんか？」

「『糸』をつけ申した。もうそろそろ、場所も分かりましょう」

「そうか。先ずは脱出だな。出来るか？ 爺」

「この程度の錠前ならば簡単に……」

カチリと音がして鍵が開き、扉がききくつと音を立てて開いた。
「でかした。アベニ。次はオルバニアンの所だな。どこにおる？」

「それよりも先ずはこちらを。魔導石のスペアにございます」
アベニは銀色に輝く宝石のような物を渡した。

「相すまぬ。で、オルバニアンは？」

ヨデイは魔導石の首飾りを、首に巻いた。

「こちらにございます」

「そうか」

ヨデイはアベニ爺の後を追った。

角を曲がった所に警官がおり、ヨデイ達と出会わした。

警官は思わず固まったが、アベニがその隙に警官の首筋に、吹き矢で毒矢を当てた。

途端に警官がどさりと倒れこんだ。

「爺！」

ヨデイが咎める。

「御心配には及びません。痺れ薬にございます。後、一時間程はこのままです」

「そうか。急ごう」

ヨデイはホッとして胸を撫で下ろす。

ヨデイと、アベニは倒れた警官を、近くの空き部屋に警官を隠すと、オルバニアンが囚われている留置所へと向かった。

それは直ぐそこで、難無くオルバニアンを見つける事が出来た。
オルバニアンは、備え付けのベッドの上で背をこちらに向け、不貞腐れた様に寝ていた。

「オルバニアン。オルバニアン」

オルバニアンに声が掛かる。

「なんだよ、うるせえな！」

オルバニアンは余計不貞腐れて背中を見せ付ける。

「しいっ！ 私ですよ、ヨディです」

「けっ！ 何がヨディだよ……うるさいにも程が……？」

一瞬間があく。

何かを考えているようだ。

「……ヨディかつ!!」

オルバニアンは、がばつと跳ね起き、ヨディ達の所へ駆け寄ってきた。

「助けに来てくれたのか？ ありがてえ!!」

「しっ！ 声が大きいですよ、オルバニアン」

ヨディは指を口に持っていつて声を低くする。

「……どうですか？ アベニ？」

ヨディはアベニのほうを見る。

「もう少しでござる」

「なあ、ヨディ。アシュマとアーチェルの姫さんはどうなった？」

今いない二人の事が気になる。

オルバニアンはその事を訊いた。

まだ捕まっているのか？

これから助け出すのか？

「ここから連れ去られました。行き先は今分かりません」

オルバニアンは落胆した。

特にアーチェルの行方が分からない事に暗澹あんたんたる思いがした。

あの花の様に可憐で美しい女性が、何か無体な事をさせられているかも知れないと思うと、胸が締め付けられるような思いがした。

あの人だけはそう言う思いをしてはいけない。

オルバニアンはそう思った。

「アベニ爺が糸を付けたので後程分かりましょう」

ヨディが聞き慣れない言葉を使う。

「糸？」

当然の疑問が湧き起こる。

「電波発信機みたいな物ですよ」

ヨディが答えた。

その時、カチリと音がして扉が開いた。

「開きましたぞ、オルバニアン殿」

アベニが出入り口から脇に寄る。

「すまねえ。この後、どうするんだ？　ヨディ」

オルバニアンが今後の事を訊く。

「まずは、武器を取り戻さない」と

「先ずはこれを」

アベニがオルバニアンに魔導石を渡した。

これで三人の当面の防御が備わった。

「気休め程度ですが」

アベニが申し訳なさに言う。

「いやいや、すまねえ。アベニの爺さん。で、武器庫はどこにあるんでい」

防御の次は攻撃だ。

「武器庫というよりお二方の武器と魔導石ならば鑑識課に」

アベニが武器の在り処を言う。

アベニら三人は鑑識課へと向かった。

鑑識課へ付いた時、この様な刻限だというのに未だ働いている人間が数名いた。

覗いて見ると部屋の奥のロッカーにヨディ達の武器が置いてあった。

「どうする？」

オルバニアンが訊く。

「そうだな、強制的に奪って逃げるとするのはどうだい？」

そうヨディが提案した。

「おれは嫌いじゃないぜ。そういうのはよ」

オルバニアンが賛意を示す。

「アベニは？」

「お二方がそれで行くのならば、それに従いまする」

「じゃあ、殺生はなしと言う事で」

ヨデイがアーチェルの事を思い出しながら言う。

後で文句を言われるのを嫌ったからだ。

「なんだよ、その中途半端なのはよ!」

オルバニアンが文句を言う。

彼の気性として、このような中途半端なものは好まない。

白黒はつきりしていないと気持ち悪いのだ。

「時間はありませんよ。いきます」

ヨデイはそんなオルバニアンの事は無視して実のあるほうを取った。

オルバニアンは何か言いたげだったが、口を噤んで後に従う。

ヨデイは鑑識課のドアを開き、ヨデイの武器のあるロッカーを指した。

続いてオルバニアンもロッカー目指して走った。

鑑識署員達は最初、何が起こったか理解できずにその場に固まった。

最後にアベニが入ってきて煙玉を数個投げ入れた。

部屋にはもうもうと白煙が立ち上り周り一帯、白一色となった。

ヨデイはヨデイの奇妙な武器と棒、そして自分の付けていた魔導石を、オルバニアンは自分の刀と魔導石、そしてアーチェルの身に付けていた魔導石と首飾りを取り返していた。

「鬼虎がねえぞ!」

オルバニアンが叫んだ!

「無ければ仕方ありません! 兎に角ここを脱出しましょう」

「わかった!」

等と、オルバニアンは行きかけたが、

「おっと! 面白いモンがあるじゃねえか」

短く切り詰めてはあるが、対魔導機兵用ライフルと、その弾丸を目敏く見つけ、手に入れた。

「こりゃ、拾いもんだぜ」

オルバニアンはヨディ達の後を従って行った。

ヨディ達が警察署の出口から出てきた時、警官隊が発砲してきた。外に待ち伏せされていたのだ。

ヨディ達は一瞬慌てたが魔導石のお陰で、難を逃れた。

『撃ち方やめ！……ヨディ！逃げ場はないぞ！これ以上罪を重くしてどうする！？諦めて投降しろ！』

なんと、ネルゼイ警部が直々に、拡声器で説得をし始めた。

「済まない！ネルゼイ警部！時間がないんだ！」

ヨディは言った。

『それが、この騒ぎの理由になるか！』

「突っ切ろうぜ、ヨディ！」

「魔導石のキャパシティオーバーになるかもしれないが、……それしかないか。事実、先程は大丈夫だったし」

魔導石のキャパシティオーバーと言う表現は正確では無い。

ヨディは警官隊の発砲による弾丸の量の多さが彼等それぞれの念導境界面のキャパシティをオーバーする事を恐れたのだ。

二人とも、それ程多数の弾丸にさらされた経験を持たない。

未知なだけに恐れが多い。

だが、オルバニアンは、

「ああ。魔導石だって二個あらあな。ちったあ、何かの足しになるぜ」

やる気満々だ。

怖い者知らずと言っているだろう。

向こう見ずと言ってもいいかもしれない。

が、今はそれを云々言っている場合ではないのである。賭けるしかない。

「爺はどうか」

ヨディが覚悟の程を訊く。

「覚悟の上でござる。異論はあり申さん」

「よし！ 行くぞ！！」

三人は、出入り口を走り出た。

アベニは最後の煙玉をありったけ地面にぶちまけた。

一斉に銃声が鳴り響く。

あたり一面はもうもうと白煙が上がった

その状況に警官達が、ネルゼイの許可なしに発砲を始めてしまった。

『撃ち方やめ！ 同士討ちになる！』

ネルゼイが叫んだ。

魔導石を持たない警官もいるのだ。

その隙に三人は、警察署の出口から脱出していた。

「逃げる足が必要だ」

ヨデイが何かを探した。

「任せてくれ」

オルバニアンは止めてあるパトカーの前に行った。

中には警官がいる。

中の警官は、武装したオルバニアンを見て、車内で剣を構えて見せた。

かなりの臆病者なのか、体が震えているのが見て取れた。

オルバニアンは、対魔導機兵用改造ライフルの銃口を、運転席目掛けて構えた。

中の警察官はますますびくつき、身体を固めた。

次にオルバニアンは、銃口を隣の空車に向けて引き金を引いた。

ドン！！

と、いう音と共に爆発、炎上した。

オルバニアンは、銃口をパトカーに向けなおし、

「車を降りろ！！ キーはそのままにしておけ！！」

オルバニアンが警官を脅す。

警察官は慌てて逃げて行った。

早速ヨデイが運転席に着き、オルバニアンが後部座席で陣をとり、

アベニが助手席で懷から何かの機械を取り出した。

「それはなんだい？ アベニ爺さん」

オルバニアンが訊いた。

「これでござるか？ これは『糸』の繋がっている先を示す機械に存じます」

全地球測位システムのようなものだろうか？

「そうか。で、今二人はどこにいるんだ？」

「レブニートテーマパークと言う所にございますな」

アベニが意外な所を言う。

「テーマパークかあ。何でそんな所にいるんだろ？ 二人してデートかな？」

オルバニアンがとぼけたことを言う。

「テーマパークねえ……範囲が広すぎるな。もう少し範囲を狭められないか？」

ヨデイが言った。

「今は、これで精一杯でございます、若。向こうに着きますれば、もう少し細かい所まで分かり申そう」

アベニ爺が淡々と答える。

「そうか」

ヨデイは少し残念そうに言った。

「幸い、追っ手も来てねえみたいだしな」

オルバニアンは、一応後ろを見ながら、言った。

「じゃあ、そのテーマパークに行ってみようか」

ヨデイ達一行を乗せたパトカーは、ゆっくり滑り出した。

しかし、そんなヨデイ達を、密かに尾行する車が一台有るのを、ヨデイ達は知らなかった。

ヨデイ達はテーマパークにやって来た。

テーマパークの入り口で車を降り、敷地内に入った。

昼間は家族連れや友人同士で賑わうこのテーマパークも、この時間、しかも夜では皆、死んだ様にひっそりとしていた。

正面の植木と花畑の中の噴水も、その後の城の明かりも、水の上を乗り物で滑り降りるアトラクションも、いまは皆死んでいた。

どのアトラクションも今は灯を落とし、死の静寂が辺りを支配していた。

「アベニ、どうか？」

ヨデイが声を掛ける。

「はい、若。こちらにございますな」

そう言って一行は、テーマパークの向かって右手の方へと歩を進めた。

その一行の後を付ける者が、一人いた。

その者は闇に紛れて、一行の後をたどった。

「あがぁっ！！」

アシュマの苦しむ声が部屋中に響き渡った。

アシュマと鬼虎の同調実験は未だ続けられていた。

アシュマの体に電極は未だ付けられており、電極に電圧が段階的に上げられたり下げられたりして、なにやら鬼虎とのグラフを見比べては、

「やはり同調が見られる」

とか、

「この程度では、せいぜい同調率は、五パーセント程度が限界だな」等と言っていた。

しかし、ガデウインは大いに不服だった。

もっと、アシュマの苦しむ様を、見られると思ったからだ。

それが、チョツと苦しんだかと思うと、直ぐにレベルを下げる。

こんな事では、ガデウインの腹が収まらなかった。

フラストレーションがたまる一方である。

「よし、もう少し電圧を上げてみよう」

研究員が電圧のつまみを捻る。

「あがつ、があつ、うがあああつ!!」

「よし、電圧を下げるぞ……」

その時ガデウインが、研究者の間に割って入ってきて、

「生ぬるい!! こうすればいいんだっ!!」

一気に電圧を最高レベルまで上げてしまった。

「うがあああああああああああつ!!」

アシュマの苦しみは、最高潮に達した。

電圧を一気にアシュマに上げてしまった所為で各所の明かりが暗くなったりした。

「わははははっ!! もがけ!! あがけ!! 苦しめ!! もつと苦しむがいい!!」

ヨディ達一行は、それらしき施設にやって来た。

「森の熊さんと遊ぼうピーポー館?」

「はい」

アベニは大真面目で応えた。

「本当にここが?」

「はい。どこかに監視カメラが有るかも知れませぬ。急がないと」

「この裏か?」

「どうやらその様で」

ヨディ達は建物の裏手に来た。

そこには、夜だと言うのに、サングラスを掛け、上から下まで黒尽くめの男が二人、裏口に立っていた。

「どうするよ? こっちにや、見張りがいるぜ?」

オルバニアンが言った。

その時、建物からの光りが、強くなったり弱くなったり、点滅していた。

中では、何かが起こっているようで、混乱していた。

アシュマの叫びも終わりが近付いていた。

「ああああ……がつ！」

アシュマの頭が、がっくりと下がる。

心電図が平坦になった。

研究員が叫ぶ。

「被験者が、死亡しました！」

「ひひ……、やった。俺がアシュマを殺ったんだあっ！！」

「しまった！」

「アシュマ！……マジかよ」

ヨデイとオルバニアンが叫びながら、階下へと降りてきた。

「オルバニアン！」

ガルマインが叫んだ。

「おっと、動くなよ！ 対魔導機兵ライフルの銃口がお前を狙ってるぞ！ ヨデイ！ アシュマを下ろしてやってくれ」

オルバニアンが狙いをガルマインにつける。

「了解だ！」

ヨデイが応える。

「うぐぐ……」

ガルマインが唸った。

「しかし、こんな所で会えるたアなア……。正直言って驚いたぜ」

オルバニアンは、再会を喜ぶ風でもあった。

ヨデイは電極の針を引き抜き、手足の戒めを外してゆっくり抱えた。

オルバニアンは、鬼虎が羽虫の様に振動している音で、鬼虎の存在を認めた。

「アベニの爺様、それが鬼虎だ。そいつを頼む」

「心得た」

アベニは引き際に、鬼虎とその鞘を手にし、納刀した。

その時、柄を握った手に、灼熱感を覚えた。

鬼虎は、鞘の内でも、振動を止める気配は見られなかった。

そして、アシュマの着衣を引き取った。

「皆、動くなよ」

オルバニアン達は、ゆっくりと階段を登っていった。

「オルバニアン、アーチエル様はどうする!？」

ヨデイが訊く。

「アーチエル様はどこだ!」

オルバニアンが叫んだ。

「隣の部屋か？」

ヨデイが行って見てみると、丁度、アーチエルと『棺桶』が搬送される所だった。

「駄目だ!間に合わん」

その時アベニが、吹き矢で何かを、

ひゅっ!

と、吹いた。

それは『棺桶』の目立たない所に付いた。

「じゃあ、アシュマだけでも」

オルバニアンが言った。

「へ、へへへ……おれが……おれがアシュマをやったんだあ……!」
「ひやははは!」

いまや、ガデウィンは正気を失っていた。

「くそ! あの野郎」

オルバニアンはライフルの銃口を、ガデウィンに向けていた。

「オルバニアン! そんな奴、殺しても弾の無駄だ。検査器具と電脳(電算頭脳)だ! 混乱に乗じて逃げるぞ」

「よし」

ドッ!

ドッ!

ドッ!

ドッ!

オルバニアンがライフルを斉射すると検査台、サーバ、その他の

データを取る器具等が破壊された

「あぁっ！ データが！！」

「研究員が悲鳴を上げる。」

「何がデータだ！」

オルバニアンが叫ぶ！

「よし、今だ！！」

ヨディが合図を出した。

「よっしゃ！」

オルバニアンが続いた。

研究所内部では、混乱が続いていた。

「誰かある！？ ……誰もおらんのかっ！！」

ガルマインが叫んだ。

「はっ、ここに」

すぐさま、黒尽くめの男達がやって来て、畏まった。

「すぐさま討伐隊を組み、オルバニアン等を捕縛せえ！」

「はっ」

黒尽くめの男達は、階段を駆け上っていった。

オルバニアンとヨディは、アシュマの亡骸を抱えて、外に出た。

すぐさま乗ってきた車の所に戻ってきたが、ある者がオルバニアン達の行方を遮った。

その者は、密かにオルバニアン達を追いまわしていた者……女賞金稼ぎアルミナ・ラ・シアだった。

「！ お前は！」

「久方ぶりだねえ、オルバニアン。そっちのひよろ長い男が、ヨディってんだろ？ アンタにも賞金が掛かってたとはねえ。知らなかったよ」

「どけよ！ こっちは急いでるんだ」

「あたしだって急いでいるんだ。他の奴にアシュマがかっさらわれない様、いつでも気が気でなかったよ。そういやアシュマはどこなんだい？」

「ここにいますよ！」

「……………まさか、そのボロボロの男がアシュマってんじゃないだろうね？ ……生きてんだろうね！？」

「死んでるよ」

「馬鹿野郎！！ あんた達が付いていながら、何やってんだい！！」

「だから早くそこを退けよ！！ 今病院に連れて行けば、まだ、間に合うかも知れねえんだ！！」

「馬鹿！！ それを早く言いな！ こっちだ。ついてきな！」

一行はアルミナの手までやって来た。

それはクーペカブリオレのスポーツカーだった。

アルミナの趣味に合わせて赤色のボディだ。

操縦席には、全地球無線測位システムにより、現在の自分の位置が分かる様になっていた。

勿論、アベニの様に、『糸』を付ければ追跡も可能である。

「あんた達が、乗ってたばろ車よりは、速く走れる筈さ」

「そうか」

ヨディは、アシュマを後部座席に乗せた。

「俺が後に乗る」

オルバニアンが大量の弾と共に、後に陣取った。

「隣を失礼」

ヨディがアルミナの横に座った。

「行くよ！」

アルミナが言うと、

「おう！」

と、オルバニアンの応えが返ってきた。

アベニ爺がやはり後部座席について、アシュマの着衣を着せ始めた。

「残念な事をしたねえ」

アルミナが言った。

「まだ完全に死んだ訳じゃない！」

オルバニアンが、怒った様な声で返してきた。

「何が残念なんだい？」

ヨディが訊いた。

「『ナニ』が残念なのさ。あんなに立派な物持っていてさ」

「ふーん。なんだ、詰まん」

「なに？ アンタ『あれ』に負けるからって、そんな態度とる訳？
ふふ」

「そんなアンタも『処女』だったりしてな。案外」

「なつなッ何をいつてるんだか……。あつ、あつアタシヤ、処女な
んかじゃないてれべっ」

「……………舌を嚙んだ様だ。」

「分かり易いリアクションどーも」

「こっ！ このお！」

「おいおい、ちゃんと前見て運転してくれよ」

ヨディの言葉に、アルミナは前を見て運転し始めた。

「おまえ、覚えてろよな」

「さあ？ もう忘れたよ」

「おい、もうチョツとまじめにやってくれよ！ アシユマの前なん
だぜ！」

オルバニアンが叫んだ。

「……済まないねえ」

アルミナが言った。

「済まん……しかし、オルバニアン。アシユマは、^{かたき}仇じやなかった
のかい？」

ヨディが訊いた。

「仇さ……仇だけど、それとこれとは違うだろう！？」

そう騒ぐオルバニアン達を他所に、アベニはアシユマに着衣を着
けていた。

ふとした拍子に鬼虎が揺られ、アシユマの方へと傾いていった。
鬼虎はまだ振動していて、柄頭がアシユマにこつんと当たると、

バチツと火花が走り、アシュマがビクンと跳ね上がった。

「うわあっ!!」

「わっ!」

「きゃあっ!!」

三人は、三者三様の驚き方をした。

「何だ今のは?」

そう言ったのは、オルバニアンだった。

「危ない危ない」

アルミナは、ミラー越しに、驚いた顔を見せていた。

危うく、運転を誤りそうになったからだ。

跳ね上がった拍子に、鬼虎がアシュマの膝の上に落ちた。

とたん、火花が走り、

「がああっ!!」

と、言う悲鳴と共に、アシュマが跳ね上がった。

その後、前の座席に手をかけて息を吹き返し、息を切らせながら、

「はあ、はあ、はあ……んぐ、はあ……こういう事か。……無限の

力を、手にする、という事は……鬼虎よ……」

そう言つて、アシュマは完全に蘇生した。

「ア、アシュマ!?! ……生き返ったのか? ……この野郎生き返

りやがつて! 仇を討つ前に勝手に死ぬんじゃないよ」

オルバニアンが喜んだ。

オルバニアンは自分でも何故喜んでいいのか分からなかった。

「アシュマ君。よかったですねえ」

ヨデイも喜んだ。

「アシュマ、今度のは一つ貸しにしとくよ」

アルミナが商売つ気を見せる。

「アルミナじゃないか? どうしてこんな所に」

アシュマは、頓珍漢な事を言った。

「アシュマ君、君は今の今まで死んでいたんですよ」

ヨデイが解説をする。

「……そうらしいな。それより、アーチエルは？」

アシュマが、訊かなければならない事を訊いた。

「済まん、アシュマ君を担ぎ出すので、精一杯だった」

ヨデイが言った。

「そうか、分かった」

アシュマは少し情けない気がした。

アーチエルを守れず今ここに自分がいる。

自分だけ逃げてきた気がする。

「それより、目の前の敵をどうにかした方が、良さそうだぜ」

オルバニアンがそう言って、ライフルを構えた。

羽虫の様な音で飛来してくるそれは、一人乗りの小型サイコ・フライヤーだった。

形は落花生の様な形をしており、一人で浮遊、操縦、攻撃をまかなえた。

十二〜三機はいる様だ。

オルバニアンは構えたライフルから弾を発射した。

弾は一直線に伸びて、サイコ・フライヤーに命中し、爆発した。

「次！」

狙いを次機に定めたオルバニアンは、寸分違わぬ狙いで、サイコフライヤーを打ち抜いていた。

やはり爆発炎上し、オルバニアンは既に次機に照準を定めていた。
「次！」

言う間に、ライフルの弾丸が、サイコ・フライヤーを打ち抜いていた。

今度の場合も、爆発炎上した。

どうやら、魔導石を狙って撃っている様だ。

確実に相手を仕留める為らしい。

「アルミナ！ 暫く保たせてくれ！ ライフルの弾が切れた！ これから装填する」

「気安く名前で呼ぶんじゃないよ！ 保たせろっても、どうしろっ

てんだい！」

「その役目、俺がやろう」

アシュマが後部座席から立ち上がって、鬼虎の鯉口を切ったサイコフライヤー数機から、二十ミリ徹甲弾が放たれた。

パイロットはこれで終わりだと思った。

通常の念導境界面では防ぎきれない運動エネルギー。

車を貫いてお仕舞いだ。

が、サイコ・フライヤーからの弾丸全てが、鬼虎の念導境界面で光に変換され、電光となって、鬼虎の鯉口の中へと吸い込まれていた。

アルミナは驚き、

「一体何だったんだい、今のは」

ヨデイに向かって訊いていた。

「いや、僕も分からないんだけどね」

当然サイコ・フライヤーのパイロットにも分からない。

「普通の念導境界面とは、違う様だね？」

そう言いあう二人を尻目に、アシュマは鬼虎を抜いた。

すると刀身に無数の光の玉が、張り付いていた。

アシュマは、鬼虎を敵目掛けて振った。

すると無数の光球は、相手目掛けて高速で飛来し、サイコ・フライヤーを次々と貫通、爆破して行った。

残りの敵は恐れをなしたか皆、逃げていった。

「かゝっ、アシュマ、あんた派手だねえ。嫌いじゃないよ、そういうの。で、どうするのさ、これから」

アルミナはミラー越しにアシュマを見る。

「アーチェルを取り戻す」

その視線に向かってアシュマが答える。

「アンタ、取り戻すって言ってもねえ」

「ヨデイ、何か分からんか？」

アシュマはヨデイに話を振る。

話を振られたヨディは、慌てる風も無く、

「爺、どうだい？」

アベニに訊いた。

「そうでございますな……ここは………」

アベニ爺も慌てる風もなく淡々と答え始めていた。

アシュマとアーチェルのいなくなった研究室で、ガデウインは、ガルマインに殴られていた。

「貴様という奴は！」

ばしっ！

「どこまで！」

ばしっ！

「愚鈍に出来ておるのだ！」

ばしっ！

「お、親父殿。おれはあ……おれはあのアシュマを、殺ったんだあ。親父にも出来なかった事をお………」

ばしっ！

と、ガデウインを殴る音が、辺りに響き渡った。

「ワシは！」

ばしっ！

「お前程！」

ばしっ！

「愚かな奴を！」

ばしっ！

「見た事がないわ！」

ばしっ！

「へへへ、親父殿………」

「このお！」

ガルマインの怒りは頂点に達した。

ガルマインは、とうとう刀を抜いて大上段に振りかぶった。

「お待ち下さい。ガルマイン様」

声がして、ガルマインは刀を、振り下ろすのを止めた。

その代わり、声の持ち主に目を向けた。

声の主は、主任研究員だった。

「どうせ殺すその命。もう少し、有効利用してみましようか？」

「有効利用？」

「はい」

主任研究員の手の平には、直径が三センチ程の、紫色の玉があった。
鈍い光沢を持った玉は金属の様に見えた。

「ここか？」

ヨデイが訊いた。

「はい。この辺で御座います」

と、アベニが応えた。

「そうか」

と、アシュマが納得した。

「『そうか』って、少しは疑えよ！　ここは普通の団地！　住宅街だぜ？　そんな所に敵の基地があるかつーの！」

オルバニアンが、苛つきを覚えながら言った。

「そういう偽装もありうる」

アシュマが言う。

「団地一個丸々かよ」

「だからそうだと言っている」

「アホかつ！？」

オルバニアンが吐き棄てる。

「どっちでもいいじゃない？　爺さんの持ってる、全地球無線測位システムによると、ここから真正面。あそこよ」

アルミナが正面を指差した。

「どうする、ヨディ？」

オルバニアンが訊く。

「どうするってなあ。どうします？ アルミナさん？」

「なんだよ、そろいも揃って、だらしない男達だねえ。……とは言ってもアタシや部外者。何も言えないねえ……どうするねアシユマの旦那？」

アルミナも訊く。

「……何故俺に聞く？ 答えは出ているだろう？」

「答え？」

アルミナがまた訊いた。

「真正面に有るのだろう？ 最短距離で。ならばそれを突っ切れば良い。それだけだ」

「また、無茶を言い始めたよ、この旦那は」

オルバニアンが刀を背にし、銃を磨きながら言った。

「まあ、アシユマ君は言い出したら、聞かないところあるもんねえ。

こうなったら一蓮托生、行くしかないでしょう」

ヨディまでが武器を磨き始めた。

「じゃあ、私の取っておきを見せましょっか！」

アルミナは車に戻り、大剣を片手に戻ってきた。

が、以前の剣とは違っていた。

「今度の剣は多少、訳が違うよ。何せミスリル・チタン合金の本身部分に刃はセラミックの複合素材だからね。以前よりミスリルを本身部分に使用する事により総重量が五十パーセントも軽量に成功！ ミスリルのしなやかさも加わって硬い、折れにくい、錆びにくいと三拍子揃った名剣中の名剣！ 名付けてロンリーストライフ！！ ああ、このひんやりした感じがたまらない……って、爺さんしかおらんやんけえー！ ぼけえー！ こら、まてえー！」

男三人衆はアルミナの話等何処吹く風で、さっさと先へ急いだ。アルミナも先の三人について行った。

「わ、ワシの話は誰が聞いてくれるんじゃ？」

アベニも後に続いた。

やはり、思ったとおり、敵は、道路の両端から出てきた。

変わっている事といえば、仮面を着けた男が指揮をし、黒尽くめの男達が実際に戦闘をしている事だ。

（仮面の男……あれが、ナンバーズの一員だな、恐らく）

アシュマは、拷問にも似た実験の最中に聴いた言葉の断片から、そう推量した。

試しにその仮面の男に、聞いてみた。

「おい、そこのお前！ お前のナンバーは幾つなんだ？」

「貴様に答える筋合いはない」

（やはりそうか）

これで、『仮面の男』達が『ナンバーズ』なのだと確信した。

その間、アシュマはもちろん、アルミナも、オルバニアンやヨデイも、襲ってきた敵を蹴散らしていた。

黒尽くめの男が、右に左に跳んで来るが、アシュマは鬼虎を一閃、二閃させ、一刀両断にしていた。

こう言う場合、最も敵を蹴散らせるのは、アルミナの大剣だった。彼女が剣を振るうたび、手が飛び、脚が飛び、頭が飛んだ。

そして彼女が再び剣を振るうと、胴が裂け、胸が裂け、股が裂けた。

その大質量がもたらす運動エネルギーは何物をも引き裂く力を持っていた。

その時、その先の団地の一角が、慌しく動き始めた。

扉が大きく、普段の幅の倍程度開かれた。

そして、『棺桶』が出てきた。

「まずいぞ！ 奴ら何かを運び出そうとしている！」

オルバニアンが叫んだ。

「急ぐぞ！」

アシュマが言うと、アシュマの行く手に影が四つ現れた。

「！」

その影は、ゴド・ング、レディール・エレノイ、ガデウイン、そしてアーヌだった。

「アーヌ……」

アシュマは呟きながら血振りをくれて、素早く納刀し、腰を落として抜刀の姿勢をとった。

アーヌは又もや、ドートネーゼの代理としてやって来たのだろうか？

「アーヌよ。今日もドートネーゼの代理か？」

アシュマが問うた。

「知れた事。それ以外に何があるという？ 貴様を倒し、鬼虎を奪い返す。それだけの事だ」

アーヌは言い切った。

他の三人も、アシュマに合わせて、警戒姿勢をとった。

「オルバニアン、アシュマ君はやけに、あの外骨格野郎に警戒しているみたいだけど、何か因縁でもあるのかい？」

「ああ。あの黒蟹野郎は、俺とアシュマが国外へ脱出する時にいきなり現れて、アシュマと死闘を繰り広げた後、いきなり消えちゃったのさ。俺が見た中じゃあ、アシュマが唯一仕留め切れなかった奴なんじゃないかな？」

「そんなに手強いのか？ それじゃあ僕は、あのお姉さんのお相手しよう」

ヨディはさっさと標的を決めた。

「てっ、てめ、きたね……」

オルバニアンは次の言葉を失った。

「アタシや、あの斧野郎をやるよ」

アルミナも標的を決めた様だ。

「来るぞ！！」

と、アシュマに叱咤され、三人は構えを取った。

一番最初に口火を切ったのは、ゴド・ングだった。

斧をアルミナを大上段に振りかぶり、アルミナ目掛けて振り下ろした。

アルミナはその大剣で、ゴド・ングの打ち込みを受け止めた。火花が散った。

それが口火となってヨデイとレディール、オルバニアンとガデウインとの戦いの幕が切って落とされた。

アルミナはゴド・ングに、押し潰されそうになっていた。

ヨデイは、レディールの速い突きに、惑わされていた。

オルバニアンは、思いのほか冷静なガデウインの攻撃に、押され気味になっていた。

ゴド・ングは

「へへへ……姉ちゃんよ……俺の女にならねえか？」

厭らしい顔をしながら笑って言い、

「ふざけないでよ！ このブ男!!」

アルミナの不興を買った。

アルミナは咄嗟に眼帯を取り、戦利眼を開いた。

「このおっ！」

ゴド・ングは斧を大きく振りかぶり渾身の力を込めて振り下ろした。

が、予め、斧がそこに打ち下ろされるのを、知っていたかの如く、アルミナは既にそこには居なく、改めてアルミナは、大剣を大きく振りかぶり打ち下ろした。

ゴド・ングは辛うじて金属製の斧の柄でアルミナの大剣を受け止めていた。

隣を見ると、ヨデイがヌンチャクで戦っていたが、戦いにくい様で、実際、

「これでは、ちょっと戦いにくいですね」

と、ヌンチャクをレディールに投げつけ、レディールがひるんだ隙に腰の棒を取り出し、左右に振って一本の長い棒にした。

「なっ！」

驚いたレディールに、ヨディはレディールの間合いの外から、棒で突き始めた。

「くっ！ 卑怯な！」

レディールはヨディを罵った。

オルバニアンは未だ、ガデウインに押され気味だった。

「くそおっ！ この野郎！」

オルバニアンは、悪態をついていた。

戦況は、

がきっ！

と、刀が重なり合い、鏝迫り合いになっていた。

人間離れたガデウインの力は、オルバニアンをしても押され気味にさせた。

「この力は何だ？ これでも人間なのかよ！？」

オルバニアンが弱音を吐く。

オルバニアンは、ガデウインとの鏝迫り合いの中、額に輝く球状の物体に気がついた。

（これはもしかしたら）

そう思い、押されている身体を何とか伸ばし、ガデウインの額に頭突きを食らわした。

「うがあっ！！」

額の球状の物体はひびが走り、急にガデウインは苦しみだした。

その時、

ぴいっ！

と、鳥の鳴き声にも似た音が鳴った。

「これまでの様ね」

レディールはヨディの攻撃が伸び切った所で、後に飛びのき、間合いを外して、逃げ出した。

ゴド・ングも

「姉ちゃん、楽しかったぜ」

棄て台詞を残し、満身の力を込めてアルミナの大剣を押し戻すと、

そのまま逃走を始めた。

ガデウィンは頭を抑えながら、二人の後を追った。

アシュマとアーヌは未だ睨み合いが続いていた。

「アシュマ、加勢するぜ」

オルバニアンが、刀を構える気配を見せた。

「それよりもアーチェルの方を頼む！ 俺は動けん！」

同時にアーヌが、飛び込みざま遠間の居合いで、抜きつけてきた。
「くっ！」

アシュマも抜きつけて、アーヌの抜き打ちに合わせ様とした。

とたん、アーヌは頭上で刀を回し、袈裟に斬ってきた。

アシュマは身体を捻って、何とかこれをかわした。

そしてそのまま、逆袈裟に斬り付けた。

アーヌは右に体を開き、アシュマの刃をかわし、刀をアシュマの
脳天目掛けて、大上段から打ちおろして来た。

それを今度はアシュマが体を開いてかわし、逆に右の脇構えから、
横合いに斬り付けた。

アーヌが一步退いてかわした。

実はアシュマの右脇構えの剣は見せ太刀で、左脇構えの剣が本斬
りの太刀だった。

鬼虎に遠心力を付け、思い切り横に薙いだ。

が、アシュマにしては、間合いを読み違えたらしく、太刀先の一
寸程が辛うじてアーヌの腹を引っ掻いた。

「！」

アシュマは驚いた。

太刀先の一寸とは言え、今まで鬼虎に切れない物は無かった。
が、目の前にいる最強の敵には、鬼虎の刃が通らない。

これ程厄介な事はなかった。

「オルバニアン！ 行きますよ！ 僕達に割って入る隙はない」
戦いに見惚れているオルバニアンに、ヨデイが注意した。

当のオルバニアンは、

「お、おう……」

と、我に振り返り出した。

「あの、アーヌって野郎、相当の使い手だぜ。アタシの戦利眼でも太刀筋を追いきれなかった」

アルミナが、走りながら言った。

「恐ろしい奴だな。アーヌという奴は」

ヨディは見ていて身震いがした。

こんな奴は始めてだ。

一方、アシュマとアーヌは……。

アーヌが刀を上段に構えた

「裏・閃光一刀……！」

アシュマは、左手を鯉口に当て、右手一本で左脇構えに構えた。数瞬の後、今度は、期せずして二人同時に動き始めていた。

アーヌは、上段から振りかぶった一撃が、アシュマを襲おうとしたその瞬間、腹部に強い衝撃を受けて、右手に吹っ飛んでいた。

アシュマの左脇構えからの鋭い一撃が、アーヌに見事決まったのである。

それでも、アーヌはまるで何事も無かったかの様に、立ち上がった。

腹部にもダメージは見受けられない。

厄介な奴だとアシュマは思った。

アシュマが、もう一度攻撃の態勢をとると、アーヌが、

「今宵はこれまでとする」

まるで師匠が、弟子に向かって言う様にして、闇の向こうへと溶け込んでいった。

一方、ヨディ達は、アーチェルの『棺桶』に近付きつつあったが、今一步届かないでいた。

廊下に黒尽くめの男達がひしめいていて、ヨディ達の進行を阻んでいたのだ。

「アタシに任せときな！」

アルミナは、そう言って戦いの最前列に陣を取り、その大剣を横に薙いだ。

すると黒尽くめの男達三、四人が、真っ二つに割られた。

「こりゃ、アーチェルのお姫さんが見たら、卒倒するだろうな……」
オルバニアンが言った。

「そうなのかい？」

ヨディが聞き返していた。

「そりゃあ、もう、異常なくらい暴力反対だし、相手が誰だろうと、敵だろうと血を見るのを極端に嫌うからね」

「平和主義なんだね」

「ただの、潔癖症なだけかしんねえ」

男二人が喋繰っていると、

「はい、その男連中！ 仕事をする！ でないと、そのお姫様が、そのままさらわれちゃうよ！」

アルミナがそう叫ぶ。

そうは言っても、黒尽くめの男達が正に壁となって、先へは進めなかった。

見ると、サイコ・フライヤーからフックが降りてきて、『棺桶』にフックを掛けようとしていた。

万事休すだった。

「アーチェル！！」

下を見てみると、アシュマがこちらへ向かって、走ってくるのが見えた。

「アーチェル！！」

幾ら叫んでも、アーチェルは目を覚ます気配を、見せなかった。

「くそっ！」

アシュマは悪態をつく。

『棺桶』はフックを掛けられ、いよいよ搬送されようとしていた。その時アベニが、闇の中から壁に張り付き、吹き矢で『糸』をつけた。

アーチェルの入った『棺桶』は、サイコ・フライヤーで又も何処かへ連れ去られた。

「……………」

アシュマはそれを、無言で見送った。

サイコ・フライヤーを打ち落とすわけにも行かない。

見送る事しか……それしか出来なかった。

「アシュマあ！！ こっちも何とかしてくれ！」

見ると黒づくめの男達が、オルバニアン達を取り囲んでいた。

その数、約百。

アルミナの大剣も、こう多く密着されては、威力を発揮できなかった。

「オルバニアン！！ 対魔導機用のライフルを使い！」

アシュマが叫ぶ。

「だめだ！ 弾がねえ！」

「俺が行くまで、保たせろ」

「保たせろって、言っただって……」

無茶を言う。

オルバニアンはそう思いながら抵抗を試みる。

一部の黒尽くめの男達が、一階に下りてきた。

一人の男が何か小冊子を持っている。

何のつもりだろうか。

その男が何かを呟き始める。

『その目、真っ赤に燃ゆる魂よ。

汝の高貴な魂よ。

我の敵は汝の敵也。

出でよ赤竜、

レッドドラゴン！』

するとアシュマの眼の前に巨大な赤竜、レッドドラゴンが現れた。

「ドラゴン！」

アシュマが叫ぶ！

男の掌に彫られた入墨が光った。
マナカードが五枚ほど焼ききれる。

「アシュマよ。いつぞやの借りを返させて貰おうか」
呟いたのは、ドートネーゼ実働部隊、ネルファベーゼの所属、アステルだった。

「これが召喚魔法と言う奴よ！」

「似非念者が！」

アシュマが吐き棄てる。

「それは、この赤竜に勝ってから言うんだな！」

アステルの周りには部下のハーミティー、ウォン、リード、ガイ
ス、オイン、マーネが居た。

六方陣を敷いている。

レッドドラゴンが、アシュマに向かって炎を吐いた。

アシュマはそれを避けようとしめない。

真っ直ぐ走り寄って来る。

アシュマは炎をまともに食らった。

「やった！」

アステルは歓喜の声をあげる

が、炎の中からアシュマが踊りだす。

「なに！」

アステルが驚く。

アシュマはレッドドラゴンの左足首を斬り付ける。

バランスを崩すレッドドラゴン。

そしてアステルも左足首に激痛を覚える。

召喚対象物と召喚主は感覚をリンクしているが為に起こる現象だ。

「くそっ、おのれ！」

アステルは片膝をついた。

アシュマは後ろから素早く大きく回りこんで、今度はレッドドラ
ゴンの右足首を斬りつけた。

レッドドラゴンは横に倒れこんだ。

アステルも両膝をついた。

アシュマはレッドドラゴンの後頭部へと回りこんだ。

鬼虎に念を込める。

刀身が伸びる。

アシュマはレッドドラゴンの後頭部、首の後ろの筋を斬り割った。

頭と身体が両断された。

アステルは気を失った。

彼は今、臨死体験をしているかもしれない。

彼の部下の女、ハーミティーがすかさず小冊子のようなものを取り

り出し、何かを読み上げる。

『幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ。

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される、

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!!』

雷雲が湧き起こり、アシュマの頭上に雷が落ちる。

これが噂に聞く魔導法術と言う奴だろうか。

多量の放電の為かハーミティーのマナカードが十三枚ほど焼ききれる。

このエネルギー量は多少アシュマを怯ませた。

その間に、アステルの部下六人が彼を担いで行った。

アシュマはアステルのグループを取り逃がしてしまった。

アシュマは目標を変え、残りの男達に斬り込んで行った。

黒尽くめの男達もアシュマに切り込んでいく。

近付いてくる黒尽くめの男達を、一刀両断の元、正に真っ二つにしていた。

団地の入り口に来た時、二十人程の黒尽くめの男達が、雪崩込んできた。

正に身体を張って、死等恐れずに、壁となる為に、突進してきた。それを、アシュマの超高速の刀術で、腕といい、足といい、近付

いてくる敵の体の一部を切り飛ばし、直接邪魔になる者は、真っ向唐竹割りに斬り裂いていた。

それでも、まだ、階段に十数名の敵が……黒尽くめの男達がいた。アシュマは、狭い通路にもかかわらず、切っ先が壁や天井、手摺等に、掠ったり当たったりするのもお構いなく、それごと黒尽くめの男達を斬り裂き、ばらばらにしていた。

天井や壁、床といった所は全て、黒尽くめの男達の返り血で、真っ赤に染まっていた。

それはアシュマも例外ではなく、頭から爪先まで、真っ赤に染まっていた。

それでも黒尽くめの男達は、恐怖という物を知らないのか、闇雲に突っ込んできた。

勿論、それらの敵も腕を飛ばし、両脚を飛ばし身体を両断し、アシュマは、オルバニアン達のいる階を目指した。

オルバニアン達は、男の向こう側で、どうされているのか、分からない。

「うおおおおおっ!!」

アシュマは、咆哮と共に、黒尽くめの男達に、向かっていった。全ての黒尽くめの男達を倒した時、オルバニアン、ヨデイ、アルミナは縛られていた。

「大丈夫か、皆」

アシュマが皆に訊いた。

「ええ……」

アルミナが言った。

「大丈夫だ」

ヨデイも無事だと言った。

「俺ア、ちいとばかり、やられちゃったぜ……」

オルバニアンは多少かすり傷を食らった様だ。

「それより、アシュマ、お前が一番大丈夫かと聞きたくなるぜ」

「まあ、あれだけの人数を相手にすれば、多少の傷くらい受けるさ」

「頭から爪先まで、返り血で真っ赤じゃないか。それでアタシの車に乗ろうって言うんじゃないだろうね？」

アルミナが自分の車を気遣って、アシユマに訊いた。

「それしかなかるう？」

アシユマが事も無げに言った。

「出来れば血を洗い流してから、乗って欲しいね」

「どこで？」

それはどこにあるのか？

アシユマはそう言いたげだ。

「此処には沢山あるじゃないか？ 風呂場と洗濯機ならね。乾燥機もあるなら、なおの事いいんだけど」

アルミナは部屋の中を除いた。

「あるよ、あるある。乾燥機が」

そう言ってご機嫌になった。

「あんまりのんびりともしてられん。此処は敵の基地内だしな。アーチェルの所にも行かなきゃならん」

アシユマが鬼虎を腰に佩びる。

「大将、大将、今からの時間は勘弁して、眠いよ」
と、ヨディが言った。

かなり参っているようだ。

確かに造りは風呂場と洗濯機、ガス式の衣類乾燥機まである。

風呂場の中は薄いピンクで統一されていた。

風呂場の浴槽は、蛇口のつまみを捻って、お湯を出す方式だった。追い炊きではない。

「とり合えず風呂入って、ゆっくりして、な？」
アルミナがアシユマを風呂場へ誘う。

「さて、この間に、アーチェルの身に何かあったら……」

「あせらない、あせらない。外はアタシ達で守っているから」

が、結局全員が風呂を浴び、アシユマ以外、皆寝てしまった。
アシユマは車を運転できない。

その夜は、結局アシユマが見張る形になったが、何事も無く無事に過ぎた。

第五節 アーチェルの救出

ガルマインは、ホテルのレストランで食事をしていた。レストランにはガルマイン一行しか居ない。

ホテルの内装は、独特の紋様が規則的に並ぶ様式で、天井や壁の梁そして柱等は木で出来ていた。

やはり独自の形となっている。

えも言われぬ風合いをなしている。

但し、少々、手狭感があった。

しかし、今は二人しか客がいないので、それ程圧迫感はない。むしろ貸切の様で、落ち着いて食事が出来た。

二人は食事を終え、食後の茶を喫していた。

「此処はドートネーゼ関連の者しか入れないんですよ」

ノリトレア王国外務省のスタッフがひそひそ説明する。

ガルマインは、成程それだかと思った。

「それにしても息子さんは良かったですね。命拾いをして」

「全くだ。却って使い易くなったぐらいだ」

今はガデウインは側には居ない。

部屋においてきた。

「世界情勢も同様です。自由に扱えないといけません」

「それは、ドートネーゼの最高評議会としての立場か？」

「その通りです。……しかし割かし自由が利かないんですよ」

「自由が利かない……？」

世界に冠たるドートネーゼの言う事か。

ガルマインは思わず訊き返していた。

「このアヘイビアは大方自由が利きます。それに対してノーツ連邦や、クローン人民共和国等は、扱い難いですねえ」

ノリトレア外務省スタッフによる講義が始まった。

「ドートネーゼでも、支配しきれてない国があるのだな」

ドートネーゼの組織は全世界規模で張り巡らされている。

国の運営に関してもドートネーゼの意向が反映される事が多い。

それが効かない国があると言う。

それがノーツ連邦や、クーロン人民共和国だと言う。

どちらも一党独裁の国だ。

「そうですね。で、今はアヘイビアとノーツ連邦、クーロン人民共和国が対立しています。あちこちで、小競り合いが続いています」

「その様な」

この世界ではアヘイビア連邦共和国とノーツ連邦、クーロン人民共和国が対立していると言う。

その傘下の国々が小競り合いをしていると言う。

所謂代理戦争と言うものだ。

今のところはそこまでに発展している所は無い。

だが……。

「で、これは最高評議会からの情報ですが、近く紛争に発展しそうな地域があるのですよ。そうしましたら、アヘイビアと共に派兵をして欲しいのですよ」

「待て。ノリトレアはつい先日まで内戦状態。国力も疲弊して防衛力も急落している。むしろアヘイビアの保護の下、国力を回復させたい所だ」

外務省スタッフは茶を一口啜った後、ポツリと話した。

「バヴェルの事ですがね……。最高評議会は、あれを、貴方の手から、無理矢理接収する事も考えたんですよ？ それは貴方様も考えた事が有るでしょう？ それにあの時、内戦状態にあったのは、首都付近であって、地方の部隊は殆ど無傷の筈。派兵が無理だとは……」

外務省スタッフが畳み掛ける。

このスタッフも只のタマでは無いようだ。

「西方州連合に派兵を頼んでみるというのは？」

ガルマインが代替案を出す。

ガルマインはいずれバヴェルを以ってして世界を制覇しようと思
っている。

その時自分の手駒は多いほうがいい。

自分の手駒が削られるのは面白くない。

「そうきましたか。あその連合は結束が存外脆くて、下手に突付
けないんですよ。どの国も自由主義経済と民主主義を掲げていま
すかね。その中でもアヘイビア寄りの、ノルブル王国。ここは立憲君
主国かつ完全な共和国ですな。次にドラステイス共和国。ここは割
かた反アヘイビアですな。アヘイビアと同じ覇道国家です。共和国
と名乗っては居ますが実質的には立憲君主国ですな。レボトミノ連
邦共和国。この国は何を考えているのか良く分からない。ノリトレ
アと同じで、良い遺跡群と技術者で、独自の文化圏を誇っている。
世界一機械化が進んだ国と考えても良いでしょう。西方州連合とい
っても決して一枚岩等ではないのです。……おっと、講釈が長すぎ
ましたかな？」

外務省スタッフの講義は終わった。

「いや。別に……」

ガルマインは表情を少しも崩さずに食後の茶に目を落す。

「それに比べて我が国は、非常に豊かな遺跡に恵まれ、それを復元
できる非常に優秀な技術者にも恵まれている。最高評議会も非常に
興味を持たれている。最高評議会はノリトレアに技術者を送り、バ
ヴェルの共同研究をしようとも仰られていた。技術者もトースター
やレンジや、車の復元だけでは飽き足らないでしょう？」

このスタッフの言葉から、この世界の文明の成り立ちを垣間見る
事が出来る。

基本的に彼らは、例えばTVを発明するのではなく、発掘したT
Vを復元して、構造を理解して複製を作るのである。

この世界には、こうした遺跡発掘と技術者が、数多あまたいるのである。
これは、この世界に確かに、高度に科学技術が進んだ先史文明が
あった証になる物である。

また、優れた復元技術者がいたからこそ、僅か千年で文明を此処まで、復元できたのである。

「まあ、バヴェルの共同復元の話は、考えておいてください。そうだ。今宵アヘイビア大統領との会食が、迎賓館で行われます。忘れないで下さいよ」

スタッフはそう言って去っていった。

ガルマインは一人その場に座って、寛いでいた。

ガルマインは、迎賓館にて、会談を兼ねた会食をする為にやって来た。

ガルマインを乗せたリムジンが、迎賓館のロータリーに入ってくる。

「今宵、頑張ってください」

外務省スタッフが、何やら言い出した。

「それはまた何を言い出すかと思えば？」

ガルマインが返す。

「今日の主役はあなた。世界の内外にその座をアピールする為のプロパガンダ。裏方たる私は表に出てはいかんですよ」

「裏方……そうか。わかった」

その夜、ガルマインはサバンナ、アヘイビア大統領と会談した。

一介の武芸指南役が、一国の元首格の待遇で招かれたのだ。

これは快挙であった。

これで、ガルマインは、世界最強の国の元、表向きは事実上の元首として認可された物と、思ってよい。

会談は、会食を交えながら穏やかに進んでいた。

会談声明はの国交の樹立、相互の軍事同盟の強化、経済活動の活性化、技術者の相互留学、等を予定していた。

会談を終えて、迎賓館の庭へ出てくると、マスコミの者に囲まれた。

ガルマインは、

「あとで、然るべき者が答えます」

そう言って、マスコミの包囲の輪から抜け出そうとした。

その時、迎賓館が爆発した。

爆発の炎と破片等は、マスコミが盾となって、ガルマインは全くの無傷だった。

強運の持ち主であるといえよう。

「一体どこの誰が……」

その夜、『七つの十字架』と、名乗るテロ組織から犯行声明があった。

そのテロでの、死亡者は十七名、重軽傷者は三十二名。

犯行声明は、

「我々は、ドートネーゼに屈服しない。ドートネーゼよ、我々の住む世界から立ち去れ。立ち去るまで我々は戦い続けるだろう」
等と言う物だった。

ガルマインは以上の事を、滞在先のホテルで聞いた。

ガルマインはすぐさま、犠牲者にお見舞いやお悔やみを、すぐさまノリトレアの名で述べた。

それにしてもドートネーゼを知っていて、尚且つそれを狙うとくるとは、なんと大胆不敵な事か。

自分もドートネーゼの関係者。

何時狙われるか分からない。

それなのに、逆に来るなら来いと、闘士がふつふつと、自分の中から沸いて来るのが分かった。

それはガルマインの恐怖より、野望がより強く勝った瞬間でもあった。

アシュマ達は、荒野のど真ん中で地図を広げて、『作戦会議』の真っ只中だ。

日はまだ高い。

強い日差しが、アシュマ達をじりじりと焼いた。

地図が太陽光を反射して眩しいぐらいだった。

どうやら、自分達の位置と、アーチェルに付けた『糸』の位置を、見失ってしまった様だ。

「よう爺さん……。で、ここはどこなんだ!？」

オルバニアンは、苛々して訊く。

「脅してどうする? オルバニアン。で、爺。今、我々はどこにいるんだい?」

ヨデイも口当たり柔らかに訊いてみる。

「はい、若。……どうやら、この地図と照らし合わせるに……。今、我々のいる所は……。グエン山脈東方、で、アーチェル様が今いるのはグエン山脈西方、海沿いの施設にいますね」

アベニは地図に目を落として言う。

「で、その施設とは?」

ヨデイも地図に目を落としながら訊く。

「これでは分かりません、若」

アベニは首を横に振る。

「じゃあ、駄目じゃん!」

オルバニアンが叫ぶ。

頭を掻く。

「そうは言ってもなア、オルバニアン……」

ヨデイがそれをなだめる。

「そうだよ、それに問題は別にあるんだ」

アルミナは腕を組む。

「別? 何なんだい、アルミナ?」

オルバニアンが怪訝な顔をする。

「確かに現在地と目標を結べば、近い所に来てはいるのさ。でも南北に伸びている山脈があるだろ?」

アルミナは、南北に走る山脈を地図の上で、指をなぞらせた。

「こいつが壁となって邪魔してるのさ。この山脈を迂回するだけで、近い方でもまる二日は掛かるね」

「少し待て、アルミナ」

アシュマは乗り出して、指を地図に指した。

「な、何？ アシュマ？」

「これは何だ？」

指差したのは、とある細いうねった線だった。

「ああ、これはね、この山を越える為の、峠道よ」

「なら、何故これを使わない？」

「ああ、アシュマ。この道は、途中までしか通れないのよ。まだ最後まで貫通していないの」

「……妙だ」

「妙？ 何が妙なの？」

「ここにドートネーゼの施設があって……」

「チョツと待った！ ドートネーゼって誰？」

アルミナがドートネーゼについて訊いていた。

聞きなれない言葉がアルミナに警戒感を抱かせた。

「それは……」

「それは、口下手なアシュマ君に代わって、僕が説明しましょう」

ヨデイが割って入った。

「『黙示録大戦』前後に結成された、慈善団体で、表向きの顔は、『自由』『平等』『博愛』を謳い文句として掲げ、世界各地で福祉活動、慈善活動を展開しています」

「なにさ、それだったら、いい団体じゃないの。人畜無害みたいだしさ。それにしても、古いねえ……黙示録大戦といえば、最早伝説の領域。千年も前の出来事じゃないか」

アルミナは感心しながら言った。

ヨデイがにやりと頬を歪める。

「それは、表向きの顔。あくまで表向きの顔のままだったら、だれも文句は言わない。ドートネーゼ最高評議會は、徹底した秘密主義

で、内部では何が行われているか誰も分からない。あくまで風評の段階ですが、社会や国家を改良して、普遍的な人道主義的な世界共和国を建設する事と、言われています」

「最高評議会……」

アシュマが呟く。

「そう。それが、ドートネーゼの核の部分」

「じゃあ、尚更いい組織じゃないか。なあ」

更にアルミナが言った。

「だから、表があれば裏がある。世界統一共和国の名を借りた、独裁国家を目論んでいるとしたら？」

ヨデイが、にやりとしながら言った。

「証拠はあんのかよ、証拠は？」

オルバニアンは突っ込んでみた。

「オルバニアン君、君は何の為に戦ってきたのかね？」

はあ、とヨデイが溜息をつく。

「その為のアーチェルと『バヴェル』か」

アシュマが呟いた。

「所でそのドートネーゼだが、ガルマインとドートネーゼは、繋がっているみたいだぞ？」

アシュマが続いて驚くべき事を言った。

「えっ!？」

ヨデイは驚いた。

それはそこにいる皆にとって、衝撃の事実だった。

「どうして、そんな事が言えるんですか？」

「皆が俺の助けに来てくれた施設に、ガルマインがいた。あの施設はドートネーゼの物の筈だ」

「そういえばそうでした」

ヨデイは呆けた事を言っていた。

「そのガルマインってのは？」

アルミナが訊いてみる。

「半ばクーデター紛いの事をして、ノリトレアを乗っ取った張本人だよ」

オルバニアンが答えた。

少し不機嫌にも見える。

ガルマインを思い出してのことだろう。

愉快的気分では無いはずである。

「まあ、そういう所で、話は落ち着くでしょう」

ヨディが顔をつるりとなでながら言う。

「あのさ、部外者なのにどうしてそんなに詳しいんだよ？」

オルバニアンがヨディに訊いた。

「部外者とは失礼ですね。一応僕はあなた方の仲間だと思っていたんですが……。それに僕が喋ったのは、あくまで一般論の部分ですよ。それよりもアシュマ君、話の続きを」

「そうだったな……」

と、言って、再びアシュマは地図に眼を落とした。

「ここにドートネーゼの施設があったとして、こっちの本道に出るまで、わざわざ二日もかけるのか？ ドートネーゼの組織たる者が」

「成程、アシュマ。アンタは、この地図には描かれていない道がある、言うんだね？」

そう、アルミナは訊き返した。

「そう思っている」

「じゃあ、行ってみようじゃないの『そこ』にさ」

ロンリーストラيفを掲げながらアルミナが言う。

「ああ」

アシュマは車に乗り込む。

アシュマ達は、山道をくねくねと上って行き、峠へとやって来た。そこは頑丈そうな鉄格子の様な扉が、立ちはだかっていた。

鉄格子は一本十センチ程の太さがあり、大きな車両がぶつかって

も、大丈夫な様に造られている様に思えた。

「あー。ここまで来たは良かったけれど、あれじゃあねえ……」

アルミナは溜息をついた。

「少し待ってろ」

アシュマは車を降りて、門の方へと向かっていった。

「何をするんだい？ アシュマは？」

アルミナは疑問に思った。

「まあ、見てな。アンタにも苦い経験がある筈さ」

オルバニアンはアルミナに言った。

「？」

疑問を呈したのはアルミナとヨディだった。

アシュマは門の側へ行き、鬼虎を抜いて鉄格子を斬った。

「あ」

そう零したのはアルミナだ。

アシュマは、次々と鉄格子を切り抜いていって、車が通れる程の穴を作った。

「これで、通れる様になっただろう？」

アシュマが納刀しながら戻ってくる。

「それはそうなんだけどさあ……強引な人だね、アンタ」

アルミナは嘆息した。

「！」

アシュマが気配を感じる。

アシュマが辺りを警戒したのと同時に、門の上から黒尽くめの男五、六人程が、襲ってきた。

瞬間、アシュマは、上から降りてくる二人程の脚を斬り飛ばし、先に着地した右側の男を左袈裟に臍の辺りまで斬り、反転して左側の男の腹を右から断ち割った。

続いてその向こうにいる男には、唐竹割りを噛まし、防御の為構えた刀ごと、頭蓋を断ち割った。

最後の男は、逃げようとする所を、後から追いつがって、後からの

袈裟で斬り割って、身体を真つ二つにしていた。

そして最後には、先程、脚を斬り飛ばした黒尽くめの男達に、丁寧にとどめを刺していった。

「アンタといると退屈しないよ」

「全くだ。アーチェルのお姫さんがいる時に、どれだけ自分を抑えているのが、良く分かるぜ」

アルミナとオルバニアンが呆れて見せた。

「なんだ？ 特に面白い事は、していないぞ？」

「皮肉ですよ、皮肉。アシュマ君」

ヨデイが肩をすくめ首を左右に振った。

「皮肉だったのか？」

頓狂な表情を見せて、アシュマは車に乗った。

「駄目だこりゃ」

アルミナは車を走らせた。

車はくねくねと峠道を下っていき、道の終着点までやって来た。

そこは化学工場の表門の前であった。

「こんな所に化学工場があるなんて、不自然ですねえ。アベニ、ここで合っているのか？」

ヨデイがアベニに尋ねた。

「ここに、間違いないでござる」

自信満々でアベニが、そう言った。

アベニが持っている機器を皆が見た。

「アーチェル殿には、糸が三本付いております。その内、全てが、この点に集中しております。間違いござらん」

アベニは言い切った。

「よし、全員、武器の点検！ 異常がある者はいますか！？」

ヨデイが言った。

「何でお前が仕切るんだよ！」

オルバニアンがヨデイに不服を言った

「では、オルバニアンさん。貴方どうぞ？」

「よし！ 全員準備は良いか！？」

ヨデイの代わりにオルバニアンが言葉を発する。

「おー」

「あたしやいつでもばっちりだ」

「……………」

「男連中の返事に覇気がない！ もう一度！！」

「いつでも準備完了であります！！」

ヨデイは、半ばやけくそになりながら、応えていた。

「アシユマは！？」

アルミナが訊く。

「皆は、アーチエル救出に全力を挙げてくれ」

アシユマがぽつりと言い出す。

「なにさ？」

アルミナが呆けた顔をする。

「何で又そんな事を？ アシユマ君」

ヨデイが言いだす。

「俺は、敵を出来るだけ引き付ける。もちろん、俺もアーチエルのいる方へ向かうが」

「その選択はつらいですよ、アシユマ君」

ヨデイがアシユマを気遣った。

「大丈夫だ。皆、アーチエルを頼むぞ。先に突入する！」

皆が分かったと頷くと、アシユマは一人歩いて行った。

「おおオオおおオオおっ！！」

アシユマは化学工場の門を乗り越え、猛々しく咆哮した。

早速黒尽くめの男達が表れた。

アシユマは、右手に鬼虎を、左手にはその金属製の鞘をそれぞれ握って、仁王立ちに立った。

この金属製の鞘は何の金属で出来ているかは解らないが、丈夫に

出来ていて且つ、不思議な事に、鞘を武器として使おうと思った頃から、重さが変わった様に思えた。

先程はそんなに重たくはなかった筈だ。

アシュマの想いを汲み取り重さが変化する金属という事か……。

鬼虎の鞘だ、そのくらいの不思議な事は起こりうる事かもしれないかった。

アシュマはそう思う事にした。

早速その威力を試さんと、アシュマは黒尽くめの男の頭上へと、鞘を振るって見せた。

鞘は男が咄嗟に頭の上にかざした剣を粉碎し、そのまま男の頭へと吸い込まれる様にめり込み、ぐしゃっ、という感触をアシュマの手へと伝えた。

男の頭蓋骨は子砂利の様に細かく粉碎されていた。

これをアシュマは、

(良い感触だ)

として、次の獲物を物色した。

早速アシュマの『狩り』が始まった。

一人目を袈裟に斬り、二人目をそのまま逆袈裟に斬る。

三人目は相手の刀を払いつつ、頭蓋を碎き、四人目の腹を撫で斬り、五人目は腹を左から右に撫で斬った。

アシュマはゆっくり歩きながら、アーチェルの囚われている所へと向かった。

たちまち、アシュマの周りには、黒山の人だかりが出来て、思うように前へ進む事も引く事も出来ない状態になった。

が、アシュマが一步、又一步と歩を進めるたびに三人、四人と、死体が増えていった。

「よし、今だ！」

ヨディ達四人が今を好機と化学工場の中へと侵入していった。

「アベニ頼んだぞ！」

「お任せ下さい、若」

アベニが請け負った。

「え？ アシユマが？」

レディール・エレノイがその言葉を聴いたのは、化学工場の応接室だった。

応接室と言っても無機質な造りで、白い床に白い壁、白い天井には照明が白く光っていた。

丁度類はデザインされた椅子とテーブルだけで、そのほかの物は何も無かった。

「はっ。アシユマ・アトーが、ただ今、この化学工場で暴れまわっています」

黒尽くめの男の報告を聞いていた。

「どうします？ ゴド・ング」

「貴様は良からう？ 『愛しい』アシユマに逢えて。ところが俺はそうはいかん！！ この間の、無様な負け方、奴を生かしておいてなるものか！！ おい、そこのお前！ お前はどうするんだ！？」

そう呼びかけられた男、即ちガデウインは、額に埋め込まれた球状の物体により感情に関する殆どの機能を奪い去られ、今や、感情を持たない殺人の機械と成り果てた。

ガデウインは手に身幅の広い『剣』を持って出て行った。

「気味の悪い奴だな……おい、俺達も行こうぜ」

続いてゴド・ングが斧を持って部屋を出て行くとする。

「まって。気味の悪いと言ったら、あのアーヌ……とか言う奴はどうしたの？」

「知るかよ！ 何でも『調整』が必要なんだとよ。全く使えねえ奴だぜ。あんな奴に手柄を横取りされてたまるかよ！ 俺はもう行くからな！」

「貴方は、アシユマをよく解ってないわ。今、彼に勝てるのは、アーヌという謎の鎧武者だけよ」

それでも、行かなければならないのか、レディールはドアノブに手を掛け、その部屋を出て行った。

外では、まだ『狩り』が行われていた。

いや、どちらがどちらだか、最早分からない様相を呈していた。相変わらず、アシュマは無傷で歩いていたが、その後には死体の山が出来ていた。

その数は百人を下らないだろう。

だが、黒尽くめ、ナンバーズを含めアシュマを狩ろうとしている者は優にその三〜四倍は居た。

アステルの隊が出て来た。

前回、前々回の雪辱を晴らすためにやって来た。

アステルは小冊子を取り出す。

そして呪文を唱え始める

『全てを憎しむその牙よ。

全てを憎しむその爪よ。

我は今より汝の主。

出でよ竜王、

ティアマツト!!』

アステルの手の甲に彫り込まれた入墨が光る。

魔方陣のようだ。

マナカード十三枚がいつぺんに吹き飛ぶ。

「アステル! ティアマツトを召喚するなんて! 制御が難しいはず!」

ハーミティーが叫ぶ。

「お前たちは私の援護につけば良い!」

ティアマツトの尻尾がアシュマを襲う。

アシュマは跳んでそれをかわす。

前回戦った、レッドドラゴンよりも俊敏だ。

「仕方ないわ隊長の補佐をするわよ。各自『魔導書』を用意!」
アステルの隊全員が小冊子を手にする。

「各自唱える魔法はサンダーストライク! 一斉に唱えて、アシュマの動きを抑えるわよ!」

『幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ。

汝の顔に笑みは無し。

未来永劫繰り返される、

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!!』

各自のmanaカードが十三枚ほど焼ききれる。

雷雲が湧き起こり大量のエネルギーを持った雷がアシュマを襲う。
激しい音がしてアシュマの念導境界面に干渉する。

アシュマの動きが一瞬止まる。

そこへティアマットの尾がアシュマに迫る。

「ちいっ!」

アシュマが舌打ちをする。

鬼虎が銀色に光っている。

アシュマは鬼虎を振りぬいた。

光の刃が地面を走る。

ティアマットの尾が両断される。

切断面がアシュマの脇を通り抜ける。

激痛に襲われるアステル。

怯むアステルの隊。

アシュマはこの好機を逃さなかった。

今度は容赦しない。

アシュマはアステルの隊に切り込んでいく。

先ずはアステルだ。

アステルは咄嗟に剣を抜く。

アシュマが迫る。

manaカードが十三枚ほど引きちぎられる。

アシュマの『気』圧にアステルの念導境界面が圧された結果だ。

「うっ！」

アステルが息を吞む。

アシュマが鬼虎を刷り上げる。

アステルは反撃する暇も与えられないまま股下から鳩尾辺りまで斬り割られる。

「ぐあっ！」

アステルが小刻みに痙攣する。

アステルは絶命した。

「くっ！ みんな、引き上げだよ！」

ハーミティーが号令する。

（アステル様、御免！）

ハーミティーは涙を飲んだ。

アシュマはまた、黒尽くめの男たちに包囲された。

おもむろ徐にガデウインはその輪の中へ入っていった。

そしてガデウインはアシュマの正面に現れ、そして剣を抜きアシュマの脳天目掛け剣を落としてきた。

アシュマの直感が危険な物を感じ、頭の上で鬼虎と鞘を十字に交錯させ防御の体制をとった。

がきいっ！

と重たい一撃が来てアシュマを少し押し戻した。

アシュマを取り巻く輪が巻き添えを恐れて一回り、二回りと輪を大きく広げた。

（この力は人間のものではない！）

アシュマは思った。

（力でくるのならば技で……）

アシュマは交差させている鞘を離し、鬼虎を左下に傾けた。

ガデウインはかける力を斜め下にいなされて、思わずたたらを踏んだ。

そこへ、ガデウインの手首目掛けてアシュマの持つ鞘がしたたか

に打った。

ごきばきん！

と、何とも嫌な音がして右手の手首と親指の骨が砕かれた。これで、剣は使えないだろう。

アシュマはそう判断して次の獲物へと向かった。

次の敵を狩ろうと思った瞬間アシュマの左手より剣風がやって来た。

それを寸でかわした。

剣風の元はガデウィンだった。

(こいつに痛覚という物は無いのか?)

返す刀でガデウィンはアシュマを横にないでいた。

だがガデウィンが横に斬ったのは、アシュマの幻で、实体はガデウィンの剣の下を掻い潜り、逆にガデウィンの下腹部辺りを真つ二つにしていた。

アシュマは『秘剣・空蟬』を無意識の内に使っていた。

ガデウィンは体が上半身と下半身に分断されていた。

下半身の方は小刻みに痙攣をしていたが、上半身の方は起き上がり片手で剣を持ってこちらに斬りかかろうとする。

「執念深い奴だな。……そうか、この額の……」

アシュマが鞆たもとの鎧よろいでガデウィンの額を叩いて玉を割った。

すると、ガデウィンは、もがき苦しみだし、

「いでっ！ いでっ！ いで~~~~っ！！ が~~~~~~~~っ

！！」

けたたましく断末魔の声を上げて、そして静かになった。

すると、今まで広がっていた輪が直ぐに狭まり攻撃を開始してき

た。
(ロボットみたいな奴らだな。こいつらは俺の体力が低下するのを待っているな……)

さすがに、今のガデウィンとの死闘で精神的に疲労が蓄積した。体力の消耗を強いられたと言えなくも無い。

しかし、総じて言えば、まだまだ戦うのに十分な体力と気力を保持していた。

次の狩りを行おうとした時、

「道を開けよレディール・エレノイである」

「ゴド・ングだ手前ら道を開けろい！」

二人が輪の中へ入って来た。

「まだ、こんなのが残っていたか」

アシュマは辟易した。

「まだ、『こんなのが』、だと？ 聞き捨てならん！ 先日は思わず勇み足で不覚をとったが、今日はそうはいかん！ 覚悟しろ、小僧！！」

ゴド・ングはいきり立った。

「いいから早く来い。俺はこれでも忙しい」

アシュマはさも面倒臭そうに言った。

「この、小童め！ 後ではえずらくなよ！」

ゴド・ングは、臂力だけはあるらしく、総重量五十キログラムは有りそうな全金属製の巨大な斧を振りかぶってやって来た。

ゴド・ングはその鋼鉄製の斧をぶんぶんと振り回していた。

「この前から少しも成長していないな」

だが、アシュマは涼しい顔で斧を避け、ゴド・ングは烈火の如く怒りだした。

「おのれ！ 小僧！！ 俺のどこが成長していないというんだアツ！」

先程よりも回転数を上げ、ゴド・ングは斧を振り回してきた。

「単調」

一言言って、鬼虎でゴド・ングの脚に打撃を噛ました。

「！！ ～～～～～！！」

これはかなり痛かったらしく斧を放り出して足を抱えて転げまわっていた。

まるで肉饅頭が転げまわっている様にも見えるので、これはこれ

で楽しかったが、いつまでも、遊んでいる訳には行かない。

アシュマは刀を峰に反してゴド・ングの首筋に鬼虎で思いきり打ち付けてやった。

すると、ゴド・ングは白目をむいて気を失ってしまった。

「さて、レディール。お前の番だがどうする？」

「……………」

「俺は以前にあの構え、あの太刀筋に見覚えがある。以前、俺に会った事はないか？」

「言うな……………」

「そう。そう、昔に……………」

「それ以上言うな！」

レディールは攻撃を開始してきた。

「言うな、言うな！！！」

突きを繰り返す。

「太刀筋が乱れてる」

アシュマが指摘する。

「くっ！」

レディールは渾身の突きを繰り出したが、アシュマが体を開いてかわした。

アシュマはレディールの手を掴みゆっくり剣を下げさせた。

「もう、その太刀筋は見切っている。君は離れて見ているが良い」

そう言うレディールは魂が抜けた様になって敷地内の路面にへたり込む様に座った。

「アシュマ！ あなた！ 私にこんな屈辱を味合わせておいて！」

覚えてなさいよ！ 次にあった時は必ず……………」

レディールはそうは言ったが、もう既に戦う気力は失せていた。

「さア、第二ラウンドだ！ 来い！！！」

アシュマはレディールを無視するが如く叫んだ。

ヨディ達は化学工場の中心部へと近付いていた。
人の気配がしない。

アシュマが陽動で戦っているとはいえ、ここまで人が居なくなる
とは前代未聞である。

それだけ、ドートネーゼがアシュマを恐れている証拠でもある。
戦闘があつたとしても、散発的な物で、大戦闘になる事は皆無だ
つた。

ヨディ達はアベニに道を訊きながら中を進んだ。

暫く進むとすり鉢状に掘られた、ある部屋へとたどり着いた。

そこを覗いて見るとアーチェルの入っている『棺桶』を発見した。
通路は、らせん状に敷かれ、底まで続いていた。

その周りには学者関係が二十名程、そのほか戦闘要員は三名名程
いた。

すり鉢の一番外側の輪でヨディは、

「よし、一人一殺で行こう。アルミナとオルバニアンは戦闘要員の
対応を頼む。アベニ爺は上から援護だ」

「分かったわ」

「よっしゃ。任せとけ！」

「畏まって御座る」

「よし、三……二……一……突入！」

四人はすり鉢の一番外側の輪から一斉に飛び降りた。

その部屋にいる者は完全に虚を突かれた。

ヨディはヌンチャクを男の首に絡めて、捻って首の骨を折った。

オルバニアンは対魔導機兵用ライフル改造型でナンバーを射殺し、
アルミナはその大剣で男を上から串刺しにした。

オルバニアンが撃ち殺した男は、頭が文字通り粉々に吹っ飛ばし
ていた。

オルバニアンの最初の銃撃の音で、白衣を着た連中は、一斉に身
体をかがめてその場に固まってしまった。

その後ヨディは周りに居る科学者連中に、

「アーチエル様を出せ！」

そう言った。

科学者達は、がくがくと首を縦に振り、操作を始めた。

『棺桶』内に眠るアーチエルは、頭にヘッドギアを付けられて、手を組んでいた

『棺桶』からは、様々なコードやケーブル、パイプ等が放射状に伸びており、計測危機等に繋がっていた。

操作を暫く続けた後メインウィンドウが開き始めた。

「ヘッドギアを外すんだ」

ヨディが脅しつけ、科学者がヘッドギアを外すと、ヘッドギアの下から、豊かで艶やかな栗色の髪の毛が現れた。

ヨディはアーチエルを背負うと、

「よし、アーチエル様を確保した。最早ここには用がない！ 行くぞ！！」

そう言い、すり鉢状の部屋の通路を登って行った。

そして、来た道を逆に戻って館内から脱出した。

『外』ではアシュマと黒尽くめの男達との戦いが続いていた。

アシュマは鬼虎に念を溜め『気』を充溢させ、鬼虎を仄かに青白く光らせていた。

そして、鬼虎を左から右へと横に薙いだ。

アシュマに近い十数名はアシュマの『気弾』によって身体を貫かれ絶命した。

アシュマは鬼虎の使い方が分かってきた。

きっかけは、ヨディと始めて出合ったあの夜だった。

そしてこれは、アシュマが何百人もの生命を生贄にして、会得したものだった。

アシュマ自身が会得した技。

アシュマはこの技を『蛭』と名付けた。

アシュマはこの技を連発していた。

だが、この技は念の元となる気を、大量に消費した。既に敵側の死傷者は三百を超えていた。

が、アシュマの疲労もピークに近付きつつあった。

その時ヨデイが走り寄って来て、

「アシュマ君！ アーチェル様は確保した！ 脱出するぞ！」
叫んだ。

「なら、しんがりは俺が引き受ける！ 早く行け！」

アシュマ自身が囧になる事を宣言した。

ヨデイ達は脱出を第一とし、戦闘は最小限とした。

尤も、行く手には、敵の死体が転がっているばかりだったが。

相も変わらずアシュマの回りには、黒尽くめの男達が群がっていた。

アシュマが、それ以上先へと行かせない様に、睨みを利かせていたからである。

他の皆が工場から脱出して、アシュマ一人となった。

アシュマの周りをじりじりと、包囲網が狭まって行く。

「アシュマ、もう良いわよ！」

アルミナが車を回してきた。

「アシュマは門に飛び移り、そして飛び降り、アルミナの車に飛び乗った。」

「いいぞアルミナ！！」

「はいよ！」

アルミナは車を急発進させた。

「本当だったら、そこまで血まみれになったアンタを乗せたくはないんだけどさ、そうは言ってられないからね。それにしても、アンタは全く、いつも血みどろになる男だねえ」

アルミナが運転しながら言った。

「済まない」

そうアシュマは言った。

「いいさ。所でお姫様はどうしたい？」

アルミナが尋ねると、

「まだ眠ったままだい」

オルバニアンが答えた。

オルバニアンは、アーチエルが苦しくない様、横にして寝かせていた。

アシユマは後部座席の端の方で、小さくなっていた。

アシユマはタオルを借りて、頭と顔と手に付いた血を丁寧に拭き取ると、アーチエルの顔を覗き込んだ。

アーチエルは、

「すー、すー……」

と、軽やかな寝息と共に、律動的に胸を上下させ、何も知らないまま穏やかに眠っている様にみえる。

（このまま寝かせといてやるか）

そう思った時、

「う……」

小さいうめきを発して、アーチエルは眼を開けた。

愛くるしい顔かたちは、そのままだ。

彼女が眼を開けて入ってきた画像は、アシユマだった。

「あ、アシユマさま」

アーチエルは微笑み、何の屈託もなく、アシユマに抱きついて来た。

「ア、アーチエル、ま、待った、待った」

アシユマが言ったが、時既に遅く、血でぐっしりとなったアシユマの体と着衣に、思いつき抱きついて来た。

ぐっちよりとした感触に違和感を覚えて、一度アシユマに抱きついた腕を見ると、それは血だった。

アーチエルは、はっ、とし、

「アシユマさま、大丈夫ですか！　どこかお怪我でも……」
等と心配した。

「大丈夫だ。これはな……その……返り血なんだ……敵の……」
アシュマは恐る恐る応えていた。

「……大丈夫ですよ。アシュマさま。怒ったり泣いたりなんかしません。前に言ったじゃないですか。アシュマさまが戦わなくてはならないのなら、わたくしも戦います。アシュマさまが血を浴びるのなら、わたくしも浴びます。アシュマさまが血を流されるのなら、わたくしも血を流します。」と

アーチェルはそう言った後、少し恥じらいの色を見せた。
そこへ、

「かーーーーっ！ 妬けるねえ、大将！ 所でこの近くに、アタシのアジトがあるんだけど、寄ってくかい？」

アルミナが、からかい半分でそう言った。

「そうだよなあ俺達はともかく、アシュマは、昨日今日合わせて数百人以上斬ってるもんなあ」

迂闊な事にオルバニアンは口を滑らせた。

「数百人！？ それは少し多うございます。アシュマさま！」

アーチェルは言ってアシュマを責めた。

「済まん」

「と、言っても、それがわたくしを助ける為になされた事ならば、それはわたくしの不徳の致す所。詫びねばならぬのは、むしろわたくしの方。相すまぬ事を致しました。許して下さい」

アーチェルはそう言って、話を閉じた。

アルミナやオルバニアンなんかは、

「ふーん」

とか、

「はあ」

で、すました。

アベニに至っては、

「これぞ人の上に立つ者の鏡」

等と言って、むせび泣いていた。

油断がならなかったのが、ヨデイで、

「王女！ 王女が心を痛める必要等ないのです。悪いのは全てドートネーゼ。彼らの無法が全ての元凶なのです。それでも王女の心の傷が癒えないのならば、このヨデイ、微力ではありますが、王女の心を慰めましょうぞ」

等と、口説き始める始末。

それを延々とやっている、だんだんアーチェルは引き始め、オルバニアンは、むかむかしだし、

「おい、姫さんが嫌がっているだろう！？」
思わず怒鳴った。

そして思わすアーチェルは、アシュマはまだ血みどろであるにもかかわらず、アシュマにしがみついてこう言った。

「ほほほ……ヨデイ様、お心遣い大変痛み入りますが、その様な斟酌等無用にございますれば……」

「ヨデイの旦那よう、つまりは、アシュマの旦那がいるから、ヨデイの旦那は要らないとき」

オルバニアンがヨデイに言った。

「アーチェル様。アーチェル様の魔導石です。首から掛けて下さいな」

ヨデイがアーチェルに手渡そうとする。

「はい」

「ヨデイ。貸してくれ。俺がアーチェルに掛けてやろう」

アシュマが手を差し伸べる。

アシュマは、魔導石を受け取った。

「後ろを向いて」

アシュマはアーチェルに魔導石を掛けてやる。

「有難う御座います」

アーチェルが礼を言う。

アルミナは暫らく車を走らせた。

「着いたよ！ アタシン家！」

「こ、ここがか！？ 普通の家じゃないか！？」

オルバニアンは思わず声を出していた。

そう、ここは住宅街。

日差しは西に傾いているが、まだ人通りも多く、アシュマ達の事を奇異の目で見て行く者もいた。

アルミナがアジトと言いつつそれは、住宅街に立ち並ぶ見た目通りの一軒家だった。

はたから見ると、他の家と変わりがない。

3LDKぐらいだろうか、部屋の規模も特別大きいという訳でもなさそうだ。

ただ、家の周りにある監視装置だけは、充実していた。

見つけただけで監視カメラは三つ、赤外線カメラも見受けられる。はたまた、あそこにあるのは、対人レーダーか？

警戒だけはちゃんとしている。

そんな事を思いながらヨディは家へ上がろうとした。

「ここは大丈夫だよ。多少変な目で見て行く奴もいるけれど、それでいいさ。こっちにおいで」

アルミナは堂に入ったものだ。

周りの眼等気にしない。

「ほんじゃ、お邪魔しましょか」

ヨディが後に続く。

ポケットに手をつ突っ込んで家の中へ入っていく。

案外、度胸が据わっているのかもしれない。

続いてアシュマ達が入っていく。

入り口から直ぐの所にリビングがあった。

内装に変わった物はない。

天井から吊ってある、巨大な魚の様な、十一本の巨大な剣を除いては。

後に分かった事だが、この十一本の巨大な剣は、全てアルミナの兄の物だという。

リビングはどこか乱雑で、ごみやら、着衣やらが散乱していた。リビングを中央に、向こう側にはキッチンがあり、その隣の部屋にはおそらくアルミナの部屋、続いて二部屋があり、そこから奥が、おそらくバスルームとトイレだろう。

キッチンを覗くとシンクがあり汚れた皿やら鍋等が突っ込まれてあった。

「邪魔するぜー」

オルバニアンはリビングに入る。

「さ、アシュマさま、行きましょう?」

アーチェルはアシュマと居られると嬉しい様である。

「……………」

そこでアルミナが……、

「おっと、アシュマはそこで風呂場に直行! 洗濯機があるからそこに洗物全部ぶち込む! 姫はその次だよ! 姫は真ん中の部屋を使っておくれ。着替えるんだったら、好きなものを選んでおくれ! 以上!」

そう、指示を出す。

「……わかった」

アシュマが言う。

「わかりましたあ。ねえアシュマさま? お背中お流ししましょうか?」

アーチェルは甲斐甲斐しくアシュマの世話をしようとする。

「いや、いい。自分で出来る」

アシュマの返事は素っ気無い。

「ぷうーっ」

憤慨するアーチェルだった。

「ああ、それとアシュマね、三番目の部屋に着替えがあるから、それ使って。」

「あ？ ああ」

アシュマはバスルームへ行った。

アーチェルも、そそくさとアシュマの後へ、付いて行った。
アシュマの着衣を洗っておこうと思ったからだ。

「さ、残った男連中はキッチンとリビングを綺麗にする事！」

アルミナは、きびきびと男連中に、指示を与えていた。

「え~~~~~っ」

男連中は不満の声を上げていたが、

「そこ！ 不平不満を言わない！！」

有無を言わず、通してしまった。

そこへアーチェルが戻ってきた。

「男ども喜びな！ キッチン清掃係が一人増えたよ」

「え？」

アーチェルが不意を突かれて驚く。

「姫！ アシュマと入れ替わりで、入浴中以外は、キッチンの片付けをしてもらうからね！」

「え？ え？は、はい！」

有無を言わず決め付けられて混乱する。

「アルミナさんは、何をするんですか~~~~？」

わざわざ『さん』付けして、嫌味ったらしくオルバニアンが言った。

「アタシは大事な大事なデータ整理よ」

アルミナは、自室に引き籠もってしまった。

引き籠もった真っ暗な部屋で、アルミナは何かを祈る様に手を組み、それを額に押し付けていた。

「兄さん……アタシを守って……」

アシュマが、風呂から上がってきた。

アーチェルは、アシュマがどこことなく、疲れている様に見えた。

それも、相当な疲労だ。

オルバニアンが、

「アシュマ……手伝ってく……」

そう言いかけたのをアーチェルが、

「アシュマさま、お疲れでしょう？ お部屋でお休みになって下さい」

話の腰を折った。

「済まない」

一言だけ発し、アシュマは室内に入り、濡れたままの黒いビキニカットの下着を穿いて、殆ど全裸のまま鬼虎を片手に、ベッド倒れこむ様にして、眠ってしまった。

暫くして、食事の時間になっても起きてこないアシュマに、不信任を持ったアーチェルが起しに行った。

アーチェルがアシュマを起しに行った時、余りにも突っ伏してベッドに横たわっているアシュマを見て、アーチェルは不安感を抱き、アシュマの顔を見る為ベッドの向こう側へ回ってみた。

が、アーチェルの懸念とは裏腹に、アシュマの顔は穏やかな表情で寝息を僅かに立てながら眠っていた。

ホッと胸を撫で下ろしたアーチェルは、アシュマに声をかけた。

「アシュマさま、お食事の時間です。……もし、アシュマさま……」

「ん？ ああ……」

アーチェルは、此処まで疲労しきったアシュマを、見た事がなかった。

「……このまま……寝かせてくれ……」

「……では、ちゃんとお布団にお入り下さいな、アシュマさま……」

「……分かった」

アシュマはアーチェルにも手伝ってもらい、寝ぼけながら改めて布団に入り、丸くなり眠ってしまった。

その時に改めて見ると、アシュマの体中には大小あわせて、無数の傷跡があった。

特に大きな傷は、背中にある袈裟に斬られた傷跡があった。
見るとアシュマは鬼虎を抱えたまま眠っていた。

「アシュマさま……鬼虎は……」

「すう……すう……」

「ふふ、子供みたい……」

アーチエルはにっこり微笑んで部屋を出た。

「どうだった？ アシュマの旦那は」

オルバニアンが尋ねた。

「死んだ様に眠っています」

アーチエルが言った。

「そりゃそうだ。つい二日三日前にゃホントに死んでたんだもんな

……」

「わっ、馬鹿！ 言っちゃ駄目でしょ！」

ヨデイがオルバニアンを諷めた。

「おっと、やべえ」

オルバニアンが言ったがもう遅い。

「どういう事ですか？ オルバニアン様？」

王女がそう言った。

「だから言っちゃ駄目って言ったでしょ、オルバニアン！」

ヨデイが窘める。

「あら？ 貴方様からも、後でゆっくり聞かせて頂きますわよ、ヨ
デイ様」

「あ？ え？ 僕？」

「ええ」

「馬鹿だねえ、男連中は……」

アルミナが嘆いた。

あらましを聞いたアーチエルは、

「……そうでしたの……。私を助ける為に……でも、アシュマさま

を働かせすぎです!」

と、言った。

「でも、アーチェルを助け出そうって言ったのは、アシュマ自身なんだぜ?」

オルバニアンは言った。

「アシュマさまは、そういうお方です! それを諫めてこそ、友と呼べるのではないのですか?」

「俺、友じゃないもん。アイツは親の仇だもん」

オルバニアンはそう返し……、

「僕は雇われた身ですし……」

ヨデイも追隨した。

「まあ、呆れた方々! そんな方々等もう知りません!」
アーチェルが怒った。

「そんな姫さん」

オルバニアンが許しを請うた。

「知りません」

「アーチェル王女」

ヨデイも同じく許しを請うた。

「知りません! もう休みます!」

アーチェルは怒りながら二番目の部屋に入ってしまった。

「やっぱり、お姫様だねえ」

アルミナが言った。

「何か白けてしまいましたね」

ヨデイが言い、

「寝るか」

オルバニアンがそれに続く。

「寝ますか」

「あんた達はここで休んどくれ。今毛布を持って来るからね」

アルミナが男共にそう言う。

「やっぱりそう来たか」

オルバニアンが言った。

「順当な所でしよう」

ヨデイがオルバニアンに言った。

こうしてアルミナ邸での夜は更けた。

朝、アシュマは目覚めた。

久方ぶりに寝た様な感じがした。

アシュマはジーンズのズボンを穿き、黒のタンクトップを着て、そして最後に靴の先端に鉄をはめ込んであるブーツを履いた。

そして、静かにリビングに出てきた。

「お早うにごさる」

「……済まない。起してしまったようだな」

普通に皆が起きてこない程度の気配の消し方しかしていなかったから、アベニ爺を起してしまった様だ。

「なんの。年寄りの癖の様な物でござるよ……アシュマ殿、ちと付き合ってはくれぬかのう？」

アベニはリビングを出て外へ行った。

「？」

アシュマもアベニの後を追う様に外へ出た。

アシュマは外に出てきた。

「お出でになったでござるな。見ているでござる」

長さは十センチ程、直径は太いところで十二ミリ、細い所で九ミリの金属製の棒を取り出し、目の前の木に向かって投げた。

金属製の棒は見事木にめり込んだ。

「おお！」

アシュマが感嘆の声を上げていた。

「アシュマ殿もやってみてはいかがかな？」

「いいのか？」

「どうぞ」

「どうするのか？」

「手刀で物を斬る様に、肩から肘へと順に綺麗に回して……」
アベニがアシュマに丁寧^{ていねい}に投げ方を教えていった。

「こうか？」

アベニの真似をしてアシュマが投げてみせ、見事、木の幹に突き刺さった。

「さすがアシュマ殿は筋が良いでござるな」

カツッ、カツッ！

と、律動的に繰り返される音にアーチェルは起された。

その音は、啄木鳥^{きつづき}が木の幹を叩くのに似ている様な気がしたが、違う様にも聞こえた。

もう少し寝ていたいたいアーチェルは、頭から布団をかぶって無視しようと思ったが、また、カツッ、カツッ！

と、聞こえて来る音に、耐えられずとうとう起きてしまった。

リビングに来てみると、ヨディとアベニが居なくなってる。

オルバニアンは相変わらず、大鼾^{おおいびき}で寝ている。

アシュマはどうしたろう、と部屋を覗いてみる。

すると、やはりアシュマもおらず、どこに居るのかと辺りを見回してみる。

カツッ、カツッ！

と、あの音がまた聞こえて来る。

どうやら、その音は、外から聞こえて来る様だ。

アーチェルはブラインドから外を覗いてみた
すると、アシュマが外で何かを投げている。

あの音の正体は、アシュマだった。

アーチェルも外へ出て行く事にした。

アーチェルが外へ出て、それはまだ行われていた。

「お早うございます、皆さん。何をしてらっしゃるの？」

「お早うございます、王女様。アシュマ君が朝っぱらから、『棒手裏剣』とやらの練習をしているんですよ。おかげでこちらは、朝っぱらから起きてしまってますね」

不満でもあるか、ヨディが言ってみせた。

「アシュマ殿は、ワシより忍びの者に、向いてござるな」

アベニ爺はそう言ってみせた。

アシュマが木の幹から棒手裏剣を抜いて、

「大変有意義でした。有難うございます」

棒手裏剣を返そうとした。

が、アベニは受け取らず、

「それは拙者からアシュマ殿に、プレゼントでござる。以前『朧霞』を見せていただいたお礼でござる。後は御自分で精進されよ。手持ちがなくなったら、この爺に申されよ。船に帰れば、たんござるでな」

アベニはそう言った。

すると、ヨディが、

「ふね？ 船！ 僕の銀龍！！」

ヨディが、慌てふためき出した。

「どこへ行きなさる？ 若！」

アベニが、ヨディを軽く窘める。

「アルミナに頼んで、車を出してもらおう！」

「その必要はないよ」

「アルミナ様。どうして？」

アーチェルはアルミナに理由を訊く。

「あんたらはここでアタシに捕まって、警察に売られ、アタシは賞金を頂く。そういう事さ」

「そんな……」

アーチェルが言葉に詰まった。

「あんた達に一つ貸しがあったね。今ここで返してもらおうか……」
アルミナが言った。

暫くの沈黙の後、

「……分かった」

アシュマは言った。

二人は道路上に出て相對しした。

「ねえ、やめて！ 二人が戦う事なんてないのよ！ やめてアシュマさま！ やめてアルミナ様！」

アーチェルは、必死になって、戦いを止めようとしていた。

「止めるな、アーチェル」

アシュマは冷たく言い放った。

「そんな……」

アーチェルは絶句した。

アルミナの得物は例の大剣、ロンリー・ストライフ。

「兄さん、アタシを守って……」

密かにアルミナは呟いた。

対してアシュマは鬼虎だ。

アルミナは大剣を下段……と言うより地擦りの構えにした。

アシュマも下段……と言うよりは、やはりこちらもだらりと刀を

下げて持ち、相手を見据えていた。

こちらも地擦りの構えと言え言えなくも無い。

アルミナは眼帯を外し戦利眼を使った。

アシュマの太刀筋を見極めようとしたからだ。

アルミナは後の先を取るつもりでいた。

アシュマが何かを仕掛けた直後に圧倒的な破壊力でアシュマを討つ。

これしか勝機はないと思ったからだ。

何かを仕掛けた後ならば、容易に切り替えが出来ないだろうと踏んだのである。

が、アシュマは動かない。

じりじりと時間だけが過ぎて行く。

アシュマは、ゆっくりと歩き出した。

アルミナは焦った。

これでは、ゆっくり歩いてくるアシュマに対して、後の先を取れないばかりか、アシュマの間に合いに入られてしまう。

戦利眼は未だアシュマの太刀筋を示してはくれなかった。

いや、示してはいたのだ。

それが余りにも単純な物であるから、俄かには信じられなかったのである。

戦利眼が示したアシュマの太刀筋はこうだ。

アルミナから見た左手より近付いて、小手を打つ。

アルミナは迷った。

先の先で行くか、あくまで後の先で行くか……。

アルミナの心を見透かしたかの様に、

「アルミナ、その大剣は巨大な旋回力で何物をも破壊する。それがその大剣の持ち味を生かす方法だ。先の先を取るしかあるまい。相手の動きを見切ってから動き出すのでは遅いぞ、アルミナ」

「くっ！　そうかい！　どうやらアンタも『戦利眼』を持っている様だね！　じゃあ、見せてやるよ！　この剣の破壊力って奴をね！」

アルミナはいったん背を向けいつもとは逆の、時計回りにまわり始めた。

「……！　一応こっちの太刀筋は読んでいるという訳か」

アシュマは言い、歩を速め走り出した。

アルミナの一撃目が来た。アシュマはこれを跳んでかわした。

「前と同じという訳には行かないよ！」

アルミナは遠心力のついた大剣を無理矢理ねじ伏せる様に回転を止め、今度は強引に逆回転をさせ始めた。

アルミナの剣はアシュマの着地の瞬間を狙っていた。

が、アシュマは懷から棒手裏剣を取り出しアルミナの顔面に向けて、棒手裏剣を投げつけた。

その行動も直前に読んだ。

読んだが、正直驚いた。

アシュマが飛び道具を使う等、完全にこちらの想定外だったからだ。

アルミナは剣の回転を止め、剣の平地の部分で、棒手裏剣をはじいた。

そうせざるを得なかった。

アルミナの剣は完全に勢いを無くしてしまった。

アシュマはアルミナの右手に降りた。

（いけない！ アシュマの突きが来る！）

が、そう思った時は、既に遅し。

アシュマの左手を添えた突きが、アルミナの喉元を襲った。

アルミナは思わず目を閉じた。

アシュマの刀が、アルミナの喉を突き破らんとした時、

「やめてえっ！！」

アーチェルが叫んだ。

アシュマは、刀をそこで止めた。

アルミナもゆっくり目を開けて行く。

アシュマの刀は喉元の直前で止まっていた。

アルミナはその大剣を放り出し、

「ええい！ 煮るなり焼くなり好きにしろい！」

アルミナは大の字になり仰向けに寝転んだ。

「ならば一緒に来るか？」

アシュマは手を差し伸べた。

「え？」

アルミナの表情が変わる。

少し驚いたようだ。

「そうですわ。そうしなさいな、アルミナ様」

アーチェルも微笑んだ。

「その、『様』ってのは、どうもこそばゆいなあ。『様』は、無しにしてくれないかい？」

アルミナはそれを拒否。

「そうですの？」

「あんた、アシュマの事を、どう思っていないさるのさ」
逆に、アルミナがアーチェルに質問をする。

「そ、それは……」

アーチェルは堂答えて言うか分からない。

「憎からず思っている訳だ」

「え、ええ」

辛うじて答えるアーチェル。

「それじゃ恋敵になる訳だ……」

「え？」

アーチェルが驚いた。

「あたしや、強い男が好きさ。アンタに惚れちゃったよ。これから
宜しくな、アシュマさま♪」

突然の告白だった。

「ええ？」

また、アーチェルが驚いた。

「……………」

アシュマは無言のままだ。

「……………」

アーチェルは少なからずショックを受けた様だ。

「で、『兄さん』はどうするんだ？ 連絡しなくていいのか？」

気を取り直した、アシュマが言う。

「ア、アシュマ！ 何でその事を！？」

アルミナが顔を真っ赤にして訊く。

「何でも何も、アルミナ。戦いを始める前に、言っていたらう？」

『兄さん、アタシを守って……』って

「わー！ わー！ 言うな、言うな、言うな！！ て言うか、何で

聞こえてんだよ！！」

「アルミナさん、アシュマさまは地獄耳ですう」

「そんな事、聞いてないぞ！？」

アルミナが喚く。

「聞いてなくとも、そうです」

「成程、今は亡き兄の面影を追い求めて、兄の姿をアシュマに見出だし、アシュマに惚れた訳だ」

ヨデイがそう決め付ける。

「そこ！ 勝手に決め付けない！！」

「でも、あながち嘘でもない。ブラコンですな」

ヨデイが畳み掛ける。

「だから勝手に決め付けない！ 第一、兄さんはまだ生きている…
…筈だ」

「ここを出たら、多分暫くは帰れなくなると思いますよ」

「じゃあ、兄さんのコレクションを、持ってこなきゃ」

アルミナはすっ飛んでいった。

「やつぱり兄さんなんだ……。あ、おい！ そんなに早く発つ訳じゃないから、そんなに慌てて荷造りしなくても……」

「朝ごはんが食べたいでござるな……」

アベニが呟いた。

「じゃあ、わたくしが、何か作ってしまいます」

アーチェルが家の中へ入って行く。

リビングに皆で戻ると、オルバニアンが大鼾で寝ていた。

「こいつだけは動じないな」

ヨデイが言った。

第六節 アーチェルの恋、アルミナの恋、エファールの恋

アルミナの荷造りは本格的な物になった。

衣装は必要最低限だったが、ボディアーマーが服の数より多かった。

その他の家財道具よりは武器や防具のメンテナンス用品が多く、そして、アルミナの……正確にはアルミナの兄の十一本の大剣をメンテナンス用品と共に四輪駆動のトラックに載せた。

「さて、これからどうするんだ？」

アシュマはヨデイに訊いた。

「そうですねえ、この国も物騒になって来たので、一旦この国から離れようと思います」

ヨデイは嘆き気味にそう言った。

「すると、サイコ・フライヤーが必要になるな」

アシュマがぼそりと零す。

「そこで、サイコ・フライヤーを奪い返しに、ガーファを指そうかと思います」

「ガーファかよ。却って危なくねえか？」

オルバニアンが訊く。

「そこなんですよ。でもこのままこの国にいるのも、ジリ貧ですしヨデイは頭を押さえる。」

考える所があるのだろう。

「男だったら、ガツンと決めて欲しいもんだね」

アルミナが言う。

「では、『銀龍』を奪い返しに、ガーファを指しましょう！」

ヨデイが宣言した。

「アシュマ！ こっちに来ないかい？ 二人っきりで旅と、しゃれ込もうじゃないか？」

アルミナがアシュマを自分の乗る車に誘った。

四輪駆動のトラック。

二人乗りだ。

「アシュマさま……」

不安げにアーチエルが、アシュマを見つめた。

アシュマも暫くアーチエルを見つめた後、

「済まない、アルミナ。俺はこっちに乗る」

アシュマはそう言った。

「ち！ ナチュラルキラーだわ、あの女……」

アルミナは悪態をついた。

「ワシが乗ってやろうかの、どうじゃ」

アベニ爺が名乗りを上げた。

「爺さんかよ……まあいいさ、乗んな」

「まだ、正式な名乗りはまだだったかのう？ ワシはアベニ・ロー。

アシュマ殿には適わんが宜しくお頼み申す」

「ああ、こちらこそな」

アルミナとアベニは、車に乗り込んだ。

クーペカブリオレのスポーツカーにも、皆が乗り込んで発車した。

アルミナの方もそちらに合わせて発車した。

途中で、先導を切り替えた。

「いきなり不躰^{ぶしつけ}で申し訳ないが、『戦利眼』とは何でござるかな？」

「ああ、『戦利眼』かい？ 戦利眼は、相手の太刀筋が見える能力の事さ。最近はあるまり役に立ってないけどね。自信無くしちゃうよ。読んでいても、負ける事が有るんだね。アシュマでそれを十分思い知らされたよ」

「アシュマ殿の事でござるか？ あのお方は戦いの天才にござる。気にする事はござらん。アルミナ殿も十分に達人にござる」

「有難うアベニの爺さん。要するにアシュマが異常であって、こっちは普通って事だね？」

「そういう事にござる」

一行は途中までは何事もなく、首都ガーファを目指していた。

途中アルミナが事前に検問を発見した。アルミナが携帯端末で、ヨデイに連絡を入れた。

ヨデイは携帯端末を取った。

『ヨデイかい？ アルミナだ！』

「どうしました？」

ヨデイが何事かと訊く。

『この先で検問をしている。かなり大掛かりな検問だよ。どうする？ 迂回するかい？』

「そうしましょう。要らぬトラブルに巻き込まれたくありません」

『わかった。ところで、お姫さんと代わってくれないかい？』

「アーチエル様、アルミナさんからです」

ヨデイがアーチエルに携帯端末を手渡した。

「私にですか？ なんてしょう？ ……はい、代わりました。アーチエルです」

アーチエルがヨデイに代わる。

『ああ、姫さんかい？ そこにアタシがないからって、アシユマにあんまりべたべたするんじゃないよ』

「そ、そんなべたべたなんか…！」

その言葉と共に、いままで少し接近気味に座っていたのを、アシユマから少し離れて座りなおした。

『ははは、凶星だったね？ あんまりアタシのアシユマに、ちょっかい出すんじゃないよ』

アルミナがからかう。

アーチエルの反応を見て見たいと思った。

多分面白いほどに狼狽えると思った。

「だ、だれが、ア、アルミナさんのアシユマさまなんですか？ な、何もなければ切りますよ？」

アーチエルはアルミナの予想通りに狼狽えた。

これ程如実に反応すると却って面白い。

『ははは、もう何もないよ。じゃあね』

アルミナからの通信は切れた。

「もう！ ……はい、ヨデイ様。有難うございました」

アーチェルはヨデイに携帯端末を渡す。

「どうしました？ アルミナさんに何か言われましたか？」

ヨデイは端末を受け取った。

「いえ、別に何も」

横目にチラッと、アシュマを見る。

それをバックミラー越しに見て取ったヨデイが、

「アシュマ君が、どうかしましたか？」

そう訊いてきた。

「い、いえ、べつに、何も……」

アーチェルはそうは言ってみたものの、折角アシュマにくつつこうと思っていたのに、それが却って自意識過剰になり、逆に近付きにくくなってしまった。

「もう……」

アーチェルは拗ねてしまった。

その後、別ルートで首都ガーファを目指していたが、やはり途中に検問所があり迂回をした。

が、迂回ルートを何度か変えてみたが、事ごとく検問所に阻まれ、ガーファへは素直に入れそうになかった。

そこで、いったん止まってルートを再検討する事になった。

クーペのボンネットの上に地図を広げた。

「この、ルート二十三とルート四十七は駄目だったね」

アルミナが言った。

「ルート十六とルート五十六、三十四、二十八も駄目でしたねえ」

ヨデイが言う。

「残るは五十二と四十六だが多分これも駄目だろうな」

オルバニアンが、地図上に×印を入れて行く。

「どうしようかねえ」

「質問だ」

アシユマが手を上げた。

「なんだい？ アシユマ君」

ヨデイが質問を許した。

「検問という物は、あそこまで物々しい物なのか？」

「確かに。パトカーの他に魔導機兵数機と、サイコ・フライヤーまでいましたからねえ……」

「警察と言う物は、そこまで装備が充実している物なのか？ それに、俺とアーチェルが警察に捕らえられた時も、俺達は実験施設へ送られて、実験動物まがいの事までされた。これは警察の権限で出来る事なのか？」

アシユマは思うところを言ってみた。

「確かにそこまでは、警察でも出来ないでしょうねえ」

ヨデイが言葉を返す。

「じゃあ何かい？ 軍が裏で動いているとでも？」

アルミナが訊く。

「そうなんだろうな。きっと。それで、アシユマとアーチェルを捕まえようと、軍が部隊か何かを展開させて、捕まえようとしているんだろうな」

オルバニアンが断定した。

「いや、軍まで動かせるとしたら、ドートネーゼが絡んでいるのかもしれないな。少なからずこの国は危ないかと思う。一刻も早く脱出するべきだ」

アシユマが言い切った。

「じゃあ、尚更サイコ・フライヤーが必要になるな」

オルバニアンがサイコ・フライヤーの必要性を訴えた。

「と、なると厄介ですねえ。どこをどう走ったらよい物か」

ヨデイが頭を抱える。

「あ……、あのお……」

アーチェルが小さくなりながら手を上げた。

「何でしょう？ 王女様」

ヨデイが受ける。

「道を走らなければ、宜しいのではないのでしょうか？」

アーチェルが突飛な事を言いだした。

「あのねえ姫さん。道を走らないって言ったって、そういう訳には

……」

オルバニアンが言いかけるのを、

「チョツと待った」

アルミナが制した。

「行けるかも知れないよ」

「どういう事ですか？」

ヨデイが訊いた。

「このルート二十三の検問所の手前で、右に折れて暫く砂漠地帯を走るんだ。暫く走って行くとルート七十二という奴にぶち当たるんだよ。その手前で更に左へ折れて海岸線に出るんだ。途中ルート五十八と交わるけど、そんなの一瞬だから問題ない。後は砂浜が首都ガーフア付近まで繋がってるから一気に行けばいい。どうだい？」

「ああ、これなら上手くすりゃ、軍の奴らの裏をかけるな！」

オルバニアンが頷いた。

「お手柄かもしれませんよ、アーチェル姫」

ヨデイがアーチェルを褒めた。

そして、アシュマが頭にポンと手をのせ、頭を撫でた。

アーチェルはこれが一番嬉しくて、アシュマに向かって満面の笑みを浮かべた。

皆が車に乗り込もうとした時、アルミナが、

「今度こそアシュマはこっちにおいでな！」

アシュマを誘った。

アーチェルはまた、不安そうな表情でアシュマを見ようとしたが、アルミナに、

「はい、そこ！ 一々不安そうな顔でアシュマを見ない！ 別にとって食おうってんじゃないんだから！」

制された。

アシユマはまた手をアーチェルの頭の上に置き、ぽんぽんと叩いた後、アルミナの乗る車の方へ行った。

「アシユマさまのばか」

アーチェルは小さく呟いて、とぼとぼと、ヨデイが運転する車の方へと向かった。

アルミナはエンジンを回し、それからアシユマが、アルミナの乗る車へと乗り込んだ。

「やっと来てくれたね、アシユマ」

アルミナは車を走らせ始めた。

暫らくして、

「アシユマは、アーチェルの事が好きなのかい？」
と、訊いた。

「わからん」

アシユマは、自らの事をあまり深く詮索されたくはなかったので、そう短く応えた。

アルミナは、アシユマが、

「わからん」

と、言った事で、まだまだ自分も巻き返せると判断した。

「じゃ、じゃあ、アタシの事は……？」

「仲間になったのは昨日今日の話だろう？ どうしてそんな短期間で、俺の事を好きになったのか、逆に訊きたい」

そこまで言われて、アルミナは切れた。

「じゃあ、言うけど、一目惚れってのはいけないのかい？ これは、アタシの気持ちだ！ 自分の気持ちに素直になって、一体どこがいけない？ それとも何かい？ アタシの気持ちは迷惑だったのかい？」

言ってしまった後で、

（しまった！ 言い過ぎた）

アルミナはそう思った。

迷惑だ、とでも言われれば、アルミナの恋も終わってしまいかねた。

「済まなかったな。言い過ぎた」

だが、意外にもアシュマは、謝ってきた。

「いや、たはは……、別にいいよ……あはは」

これは、思いのほか、上手く行くんじゃないか？

アルミナはそう思った。

「アルミナ。これはお前の勘違いかと思うが……」

（勘違い？）

話は意外すぎる方向へ逸れていきそうで、それに不安を持った。

今の自分の気持ちだが、勘違いだと指摘でもされるのではないかと、思ったからだ。

「いや、勘違いなんかじゃないぞ？」

アルミナは一生懸命否定する。

「そうか？ 俺はお前の勘違いだと思うぞ、アルミナ」

アシュマは尚も言ってくる。

「いや、私は勘違いなんかしてないぞ」

「いや、俺はお前の様に、『戦利眼』等という能力はもってないぞ。いや、太刀筋は見切れるは見切れるのだが、お前の様に見えるという訳じゃない。寧ろ羨ましいぐらいだ」

「え？」

アルミナは頓狂にもそう零していた。

「どうだ？ お前の勘違いだろう？」

「あ、ああ……」

確かに勘違いだった様だ。

アルミナは内心、変な事を言わなくて良かったと思った。

「その戦利眼という能力は、どうやって身に付けた？ 一種の予知能力だと思うが」

「いや、これはその……生まれつきなんだ。代々シア家に現れる能力で、遺伝なんだ。この能力の事では、あまりいい思いをした記憶

がない。小さい頃には色々不気味がられ、ジュニアハイスクール、ハイスクールと恋を成就させた記憶もない。役立つのは賞金稼ぎの時に有利だという事だけで、いい事かどうかは……たはは」

アルミナは最後の方は少し、はにかみながら笑って応えていた。少しばつが悪いらしい。

「そうか。済まなかったな。さっきから変な話ばかりさせて」

「い、いや、いいんだ。アシュマ。お前になら、もっと……もっと、私の事を知って欲しい……」

アルミナは照れながら言う。

そう。

アシュマになら、好いた男性にならもっと自分の事を知って欲しい。

そんな欲求があった。

「そうか。じゃ、アルミナ、何でお前は大剣を遣うんだ？ 女のお前の腕力ではあの大剣を使い切れてないと思う。お前には、もっと軽い剣が合うと思うぞ。やはり大剣を遣うのは、お前の兄の影響なのか？」

アシュマは遠慮なく訊いてくる。

だが、今のアルミナにはそれが心地よかった。

遠慮は不要。

彼女の気性である。

そしてアルミナは答え始める。

「そう……大きな剣を遣うのは、アタシの兄さんの影響よ。兄さんも賞金稼ぎなの。でも、二年前から行方不明になったの。それでアタシは、ハイスクールを中退して、賞金稼ぎになったのよ。女だてらに大きな剣を振るって暴れていれば、その内、兄さんの行方が掴めると思ったのよ」

アルミナが大剣を遣うのはそんな秘密があった。

「そうか……」

それから車は走り続け、その内に砂漠の日は落ちた。

その日は砂漠の真ん中で野宿となった。
火を起し、皆で輪になった。

アシュマの左隣にはアーチェルが、右隣にはアルミナが陣取った。
右隣のアルミナは、アシュマの腕を取って楽しそうだった。
左隣のアーチェルが、やきもきして、気が気でなかった。

心なしかアシュマも、少し楽しそうにも見えた。
アーチェルは少し悲しくなった。

アシュマは自分のものでは無い。

そう頭では分かっているけど心がそれを否定する。

それは嫉妬と呼ばれるものだった。

だが、それを素直に受け入れられない。

女の業と言うものだった。

アーチェルにはどうする事も出来ずに、

「あ、わたくし、少し席を外しますね……」

そう言い、立ち上がり、車の置いてある方へと、小走りにその場から立ち去った。

様子がおかしいと見たアシュマは、

「アーチェ……」

と、言いかけ、立ち上がりかけた。

アルミナは強くアシュマの腕を取り、

「そんな野暮な事、訊いちゃ駄目よ。お手洗いなんでしょ、きつと」
そう言った。

アシュマは、少し納得しかねる、といった表情をした。

アーチェルは、車の近くまで行き、そこにしゃがみ込んでしまった。

「アシュマさまには、きつといつも守られているわたくしよりも、
アルミナさんの様に剣が遣えて、アシュマさまと一緒に戦える様な
方が、お似合いなんだわ」

俯いたアーチェルは、砂漠の砂の上に零れ落ちる水滴の粒を、止める事が出来なかった。

「そうよ。アシュマさまはアルミナさんと一緒の方が宜しいんですわ、きつと……」

この時、後から声が掛かった。

「アーチェル様、いかがなされました」

アーチェルは、はつとなつて、急いで涙を拭い振り返った。

アシュマかと思った。

が、そこにいたのは、アシュマではなくヨディだった。

「ヨディ様……な、何でもありません」

アーチェルは一生懸命取り繕った。

「何でもない訳ないでしょう……」

ヨディが即座に否定する。

「い、いえ……何でも……」

尚も取り繕うとする。

が、ヨディは、

「アシュマ君の事ですね？」

と、看破する。

「……………」

アーチェルは泣くまいと我慢していた涙を、また流していた。

「ヨディ様……」

アーチェルは、ヨディに崩れ落ちる様にして身体を預け、ヨディはアーチェルを支える様にして抱きかかえた。

そこから、アーチェルの鳴咽が低く漏れ出していた。

次の日の朝、出発の時刻になった。

例の如く、

「アシュマ！ こっちに来なよ！」

アルミナが誘った。

「今日は、アシュマ君は、こっちですよ」

しかし、何故かヨディが応えた。

「なんで、ヨデイが応えるのさ？ アシユマ！ こっちにおいでよ」
ヨデイはアシユマの側へ寄り、

「今日一日は、アーチェル様の側にいてあげて下さい。手でも握って」

ヨデイが密かに、アシユマに告げた。

アシユマが不思議そうな顔をしていると、

「是非、そうしてあげて下さい」

ヨデイに念を押された。

「アルミナ、俺は今日はこっちだ」

アシユマはアルミナに断わって、アーチェルの隣に座ってしまった。
た。

「ア、アシユマさま……」

アシユマはてっきり、アルミナの車に行くものだと思っていた。

だから自分の隣に座る等とは、全く思ってもいなかったのに、隣に座ってくれて、とても嬉しく思った。

座席に座る。

アシユマは前触れも無しに、アーチェルの手を握った。

アーチェルは驚きアシユマの方を向いたが、アシユマは前を向いたままだった。

それは、アシユマなりの、照れ隠しだったのかもしれない。

多少顔は赤かったかもしれない。

アーチェルは、鼓動が早くなるのを感じながら、嬉しさを噛み締めて手を握り返した。

アシユマの代わりにオルバニアンが、アルミナの車に乗ってきた。

「今日は宜しくな」

「はいはい、ヨロシクネー」

気のない返事をして、車を走らせた。

「なんだよ、気の抜けた返事しやがって。何でアシユマばかり、良い想いをするんだ？」

オルバニアンが悪態をついた。

「別にアタシや、良い想いしてないけどねー」

「俺も、アーチェルの姫さんみたいな彼女欲しいよなー。いいなー。姫さん」

「男は皆、アーチェル姫の様な女が、そんなに良いのかね」

アルミナはそんな風にぼやいた。

「別に、そんな訳じゃないけどな」

オルバニアンがそう受ける。

「ふーん……おっとルート五十八だ。こっちにのるよ」

一行はルート五十八に乗り、暫く北上した。

そして海岸線沿いに出て、北上した。

ヨディが運転する車では、

「アシユマさま。訊いても宜しいですか？」

アーチェルが唐突に尋ねてきた。

「何だ？」

「き、昨日はアルミナさんと、ど、どの様なお話をされたんですか？」

少しぎこちない。

「そうだな、アルミナの過去の話だ」

「そうですか」

何故かアーチェルは少し気落ちした。

「そうだ」

「私には、アシユマさまに話して聞かす過去が有りません。残念です」

これが気落ちの原因だった。

話すべきことが無い。

恥ずべき事だと思ったのだ。

「過去が無いと言う訳では、ないだろう？」

アシユマはアーチェルの方を振り向く。

「私の過去は淡々とした物です。前にもお話したとおり、毎年民達と、種を植え、苗を植えて、穂を育て、そして民達と一緒に、穂を

刈り取る生活をしていました。そんな単調な生活でも私は十分幸せでしたし、それでいいと思っていました」

アーチェルは淡々と話し始めた。

「それで？」

続きをアシュマが促した。

「その生活を壊したのは、ガルマインでした。王宮……といっても質素なつくりで、大きさもさ程でない小さな物でしたが、ガルマインの兵は王宮を取り囲み、民を人質に私を虜の身にしたので。そしてノリトレアに連れてこられ、後はアシュマさまの知っている通りにございます」

アーチェルはそう言葉を言い終えた。

「王女は一度、レキシタニアに戻られた方がいいですな。お父様も心配なさっているでしょうし。もしかしてそろそろ国際社会に、ノリトレアの暴挙を訴えているかもしれないかもしれません。姫を返せとか、責任をとれとか。……さすがにガルマインを更迭しろ、とは言わんでしょうが……」

ヨデイが話に加わった。

「ま、まあ……聞いてらしたんですの？」

アーチェルは赤くなった。

「たしか、レキシタニアには王子……、つまりアーチェル様の兄君がおられましたよね」

ヨデイが言葉を続ける。

「ええ。とてもお優しいエースティーお兄様。良く御存知で」

そう言って微笑む。

「ええ、こういう事を調べたりするのが、僕みたいなモグリのサイコ・フライヤー乗りの生き残る術だったりするんですよ」

ヨデイは少しおどける。

「まあ、そうですね？」

アーチェルは目を丸くする。

「ええ」

「兄さんがいたのか」

アシュマは少し驚く。

考えてみれば兄妹が居てもおかしくは無い。

当たり前だとアシュマは思いなおす。

「はい。アシュマさまに御家族は……あ！　ごめんなさい……わたし……」

アーチェルはアシュマが天涯孤独のみと思い出して恥じた。

気の利かない自分。

なんと迂闊な事を言ったのだろう。

自分の言動に恥じたのである。

「構わない。確かに俺は、養父に拾われて育てられた事になっている。が、ガルマインの話では、俺の養父リクシル・ウォレウォリンは、ドートネーゼだったと言う事だ」

「何ですって!？」

ヨディは驚きを禁じえなかった。

「え？　そうなんですか？」

アーチェルも思わず訊き返していた。

「ガルマイン曰く、エヴァイブ・エブルもドートネーゼだがな」

「初耳ばかりですな。エヴァイブ・エブルといえばあの、剣名高いエヴァイブ・エブルですよな？」

ヨディは尋ねた。

「そうだ。今にして思えば、リクシルは俺を拾ったのではなく、俺を何らかの理由でドートネーゼの下から連れ出したのかもしれない。そう考えれば、俺が、世界中どこを捜しても、分からない様な辺ぴな場所で、人から隠れる様にして住んでいた事も頷ける」

「何故です？」

アーチェルが訊き返していた。

「俺が、鬼虎の正統なる持ち主だからだ。あの、エヴァイブ・エブルでさえ血反吐を吐きながら、本来の持ち主でないと、力を消耗するだけと言いつつ。鬼虎には不思議な能力がある。『万人殺し』」

の異名も、俺にはあながち嘘とは思えぬ。二人が言い合わせて一方が鬼虎を、もう一方が俺を引き取り引き離したとしたら……」

アシュマが淡々と語る。

「そんな……」

アーチェルが絶句した。

「先の実験で、俺は、『素体』……『オリジナルナンバー』と言う言葉を聞いた。ナンバーズと言う言葉も聞いた。ナンバーズと言うのが、何を指しているのかは分からないが……『素体』つまり『オリジナルナンバー』というのは、俺の事を指しているというのは分かった。そして、仮面の男達が俺と同じ顔立ちをしていた事を鑑みると、どうやら、ナンバーズと言うのは、その仮面の男達の事だと推測できる」

「ナンバーズと呼ばれる者が、君と同じ顔をしていると言うのは初耳だけど……そうなのかい？ アシュマ君……じゃあ、君は……」

ヨディが言葉に詰まった。

「俺はどういう出自なのかはつきりしない……人間なのかどうかもはつきりしない。『素体』、『オリジナルナンバー』というのが、きっと元来、鬼虎適合者の事だと……」

「やめてっ！」

アーチェルが叫んだ。

「そんな、アシュマさま……御自分の事を『物』みたいに言うのはやめて……」

「しかし俺は……」

「『しかし』って、じゃあ、わたくしのこの気持ちはどうなるの！

？ わたくしはアシュマさまの事を……」

アーチェルは涙ながらに訴えていた。

それは、アーチェルが見せる、初めての激情だった。

その直ぐ後、自分が何を言ったのかに気付き、恥じらいの所為なのかアシュマに顔を背けてしまった。

「済まん」

アシュマは謝った。

「お願い……謝らないで……」

アーチェルはそう言った。

それは、アシュマが、アシュマ自身を『物』の様に言った事に対する謝罪なのか、それとも、アーチェルの気持ちを受け止められないと言う意味で言った言葉なのか、どちらの意味で受け取ればいいか、分からなかったからだ。

アーチェルは、もう人目も憚らずに、涙を流していた。

ヨディは、クラクシオンを鳴らして車を止めた。

アルミナも気付き車を止めた。

そして、アシュマとアーチェルを残し、皆、車からおりた。

「なに？ なに？ 何が起こったんだ？ お姫さんが泣いてるぜ？」

アシュマの奴が何か言ったのかよ？」

オルバニアンが、興味本位で訊いた。

「大人の話です。深入りしない様に」

ヨディが言った。

「何か深刻そうだねえ」

アルミナが言った。

「アルミナ、チャンスなんて思うなよ」

オルバニアンがそう言う。

「アンタじゃあるまいし、アタシはそんな真似はしないよ。そんなんで勝っても、嬉しくないからね」

アーチェルは、車のシートに座って、未だアシュマを背にし、泣いていた。

「……御免なさい……分かってるの。……こんな時に泣くなんて卑怯よね……。アシュマさまを困らせるだけ……。いいの。わたくし、もういいの。……アシュマさまの側にいらればそれだけで、もう十分なの……わたくし……御免なさい」

アーチェルは肩を震わせ、今にも泣き崩れそうだった。

そんなアーチェルを見てアシュマは、

「俺も、アーチェルが側にいてくれなければ、困る」

そう、言った。

アーチェルの肩がぴくりと動いた。

「さっきの言い方は済まなかった。もう、ああいう言い方はしない。だからこっちを向いてくれないか？」

「……アシュマさま……だめ……今、きっと、わたしの顔……ひどいから、見せられない」

アーチェルは自分を恥、こちらを振り向けない。

「いいんだ、アーチェル。気にしないで。こっちを向いてごらん。さあ」

アーチェルは、ゆっくりとアシュマの方へと向いた。

「済まなかった」

先程の謝罪とは、明らかに違う意味で、アシュマはその言葉を使った。

「う……わああっ！」

振り返ったアーチェルは、今度はアシュマの胸で泣いていた。

アシュマは、アーチェルの肩を、しっかり抱いた。

「ありゃ、アーチェル、今度はアシュマの胸で泣いてるぜ」
オルバニアンが言った。

「こりゃチト厄介だよ。困ったねえ」

アルミナも言った。

「雨降って地固まる……でござるな」

珍しくアベニが口を開いた。

「善哉、善哉」

ヨデイが締めくくった。

暫くして皆、車に戻った。

「さすがに、今、アシュマにこっち来いとは、言えないしなあ」

アルミナが嘆いた。

「なんだい、俺じゃ役不足かい？」

オルバニアンが言う。

「そうだねえ、アタシと勝負して、勝ったら、考えてやってもいいよ」

「何だそりゃ？」

「アタシや、自分より強い男が、好きなのさ」

「へー、じゃあ、俺なんかはすぐ惚れられちまって大変だ」

「ははっ。よく言うよ」

一方、ヨディが運転する車では……。

「それじゃあ、出発しますよ」

車が走り出した。

「ああ」

アシュマの声しか返ってこないの、ヨディが後を振り向いて見ると、アーチェルがアシュマの膝を枕にして眠っていた。

「泣き疲れたんだろう」

アシュマは言った。

「そうですか」

ヨディが受けた。

「アーチェルは、どうやら俺を愛してくれているらしいな」

アシュマが呟く。

それは少し困惑の色を伴っていた。

今まで愛と無縁の生活を送ってきた男だ。

こんな無垢な愛情を見せられて困惑するのは当然といえた。

「見れば分かりますよ」

ヨディは当然と言う。

「だが俺は、アーチェルに愛される資格を、持つのだろうか？」

アシュマはアーチェルの寝顔を見ながら言う。

自分は血塗れの男である。

いつ誰かに倒されるか分からない。

だから気遣いは無用とかつて言った。

そんな男が愛される資格を持つのだろうか。

ましてや自分は人間かどうか怪しい男である。

愛。

自分には無縁のものと思えた。

「それは、アシュマ君が『人間』ではないからですか？」

ヨデイが察して言う。

その声にはいつもおどけるヨデイにしては真剣な響きがあった。

「……そうだ」

アシュマはそれに肯定する。

「アシュマ君。いい事を教えてあげましょう」

その真剣な声がアシュマに届く。

何かを言おうとしている。

「？」

ヨデイが何を言おうとするのかアシュマは少し疑問に思った。

「愛とは理屈じゃあないんですよ。好きになった者を愛す。これは自然な感情です。資格だの権利だのの話じゃないんですよ。分かりましたか？ アシュマ君。それでも分からない様なら、僕は一発お見舞いしますよ。本当に」

ヨデイは最後には矢張りおどけた。

だが、声音は真剣だった。

「分かった。二度と言うまい」

アーチェルは、アシュマの膝の上で、幸せそうに眠っていた。

夜になり、一行は、首都ガーファの直ぐ近くまで来た。

乗ってきた車は浜の岩陰に隠し、一行は街の入り口までやって来た。

「さて、どうするね？ ヨデイさんよ」

オルバニアンがヨデイに問いを発した。

「まず、サイコ・フライヤーを、捜さなきゃならない訳ですが、闇雲に捜しても見つからないでしょう」

ヨデイが言葉を返す。

「じゃあ、どうするんだよ！」

「そこで、この携帯端末から、ある人物の個人データを引き出す訳ですよ」

ヨディは自分の携帯端末に、基盤の様な物を付けて、皆に見せていた。

「で？」

オルバニアンが訊く。

「そこで引き出せたデータが、こちら。ネルゼイ警部の住所と電話番号なんですね」

ヨディが得意そうに言った。

「ネルゼイ警部っていやあ、俺達を捕まえた奴だよな！？　で、どうするんだ！？」

「これから会いに行く訳ですね」

「直接か？」

「そうです。直接ですね」

「よっしゃあ！」

オルバニアンは、ガッツポーズをとって見せる。

「なあ、アシュマ。オルバニアンって、馬鹿で面白いな
アルミナがアシュマに言った。

「んだとおー！！　こら！！　馬鹿だとおー！！」

オルバニアンが怒った。

「ありゃまあ、地獄耳」

「地獄耳じゃねえ！　お前が、でけえ声で言うからだ！」

「あははははは！　聞こえてやんの！」

「はア……君達良いコンビですよ」

溜息混じりにヨディが言った。

「最初の実行部隊は、アシュマ君とアベニ爺に行ってもらいます。
ここの窓は、セキュリティが掛かってないので、ここから侵入してもらいます。覚えて下さいね」

ヨディは端末のモニタを、アシュマとアベニに見せた。

それはマンションの裏手の窓だった。

「分かった」

アシュマが応える。

「心得たでござる」

アベニも頷く。

「そうしたら先ずアシュマ君には、ネルゼイ警部を抑えてもらいましょう」

「分かった」

「アベニには、その間にセキュリティを解除して下さい」

「心得たでござる」

「この部屋の呼び鈴を鳴らすので、ドアのロックを外して下さい。で、我々はセキュリティの解除された門を、堂々と通る訳です。と、言う訳で行動を開始して下さい」

ヨデイは命を下した。

一行は、ある建物の前に来た。

マンションの様だった。

かなり古びている様だ。

アシュマは、アベニから、リストバンドを受け取った。

手首を捻るとワイヤーが飛び出す。

アシュマとアベニは建物の裏手に行き、手首を捻ってワイヤーを飛ばした。

ワイヤーが見事目標の位置に突き刺さると、引っ張って具合を確かめ、ワイヤーを伝って登り始めた。

目標の窓まで来るとアシュマが鬼虎を抜き、器用に使って窓のロック部分の周りのガラスを切り抜いた。

アベニがガラスを取り外し、窓のロックを解除し、窓を開けると、中に進入していった。

アシュマも続いて侵入し、ネルゼイの眠る寝室へと、向かって行

った。

寢室ではやはり、ネルゼイが眠っている。

全くの無防備状態だった。

アシュマは気配を殺し、ネルゼイに近づいて行く。

そしていきなり布団を引っぺがし、ネルゼイの腕を後ろに回すと、アシュマの膝をネルゼイの……人間の急所の背中のある一点に、押し付けた。

ネルゼイは完全に覚醒したが、膝が押し付けられている所が激しく痛み、呼吸もままならなかった。

その為、言葉が出なくなっていた。

アシュマは、ネルゼイのもう一方の腕もとり、後ろ手に固めると、両方の腕に手錠をはめてしまった。

アシュマが膝を外すと、やっと呼吸が出来る様になった。

ネルゼイは何かを言おうとした瞬間、アシュマの手刀を首筋に受け、気を失ってしまった。

そしてアシュマは、両足にも手錠をはめ、更に手錠と手錠をつなぐ形で、更に手錠を用い、ネルゼイ警部を海老反り型にしてしまった。

「……いぶ〜」

（ん？ 誰だ？）

遠くで声が聞こえる。

「……けいぶ〜」

（俺は、まだ眠いんだ……）

段々声が大きくなる。

「……ゼイ警部〜」

（それで無くとも賊に襲われて……ん？ 賊？）

大分声が大きくなった。

「ネルゼイ警部〜」

今度こそはっきり声が聞こえる。

「！！」

眠っていた本人は何かを思い出したのか目を開ける。

「やっと目が覚められた様ですねえ」

ネルゼイの前でヨディがにこやかにしている。

「き、貴様はダストモンキー！！ 一体何を……」

ネルゼイが怒鳴る。

捕縛対象が目の前に居るのである。

当然だろう。

「パンツ一丁で話されても、迫力ないですねー。いえね、僕の船を返してもらおうかと、思いましたね。どこにありますか？ 僕の船は」

ヨディはそんな事はどこ吹く風、おどけて船の在り処を聞いているた。

「そんな事は口が裂けても言えん！ いや、そんな事は知らん！！」

「そうですかあ。じゃあ、身体に訊いちやおうかな〜？」

と、言ってヨディは、羽ぼうきを取り出した。

アルミナとアーチェルも、羽ぼうきを取り出した。

「ホントにヤルのか？ キモイぞ……」

アルミナが、さも嫌気に言う。

「なんだか、可哀相です」

アーチェルも同情して言う。

「アルミナさん。これはアルミナさんが、僕達の仲間になる為の通過儀礼です！」

「じゃあ、アーチェル姫は？」

「王女様は恨みがあるでしょう？ 卑怯にも王女様が人質に取られたおかげで、アシユマ君は捕まりましたから」

「そうでした。このひきょう者^{はねぼうき}。えい、えいっ！」

アーチェルは、羽箒でくすぐり始めた。

「ぎゃ、ぎゃははははっ！ い、言わんぞ！ 言うものか！ ぎゃはははは！」

「じゃあ、しょうがないねえ。うりうり」

アルミナもくすぐり始めた。

「ぎゃ、ぎゃはははは！ ひ、ひ、卑怯だぞ二人ががりで、ぎゃははは！」

「言ってる事が分かりませんよ。何故二人がかりだと、卑怯なんですか？」

ヨデイもくすぐりに参加した。

「ぎゃ、ぎゃははははは！ 言わん！ 絶対に言わんぞ！ ぎゃ、ぎゃははははは！」

最後にアシュマが、無言でくすぐりに加わった。

「ぎゃはははは、し、死ぬ！ 言う、言うから止めてくれ！」

「止める前に教えて下さい。出ないともっと……」

ヨデイが漬け込んで船の在り処を訊く。

「ひー、ひー、言う言う！ ソールの港の……廃港部だ、ひー、ひー、ゆ、許してくれ、もう！ ぎゃははははは」

「警備体制は？」

「ま、魔導機兵、四体に、警備兵が、十五人だ……ひー、わかってる、事は、全部、話した。ひー、ひー！ も、もういいだろう！？」

「あそこか……もういいですよ、皆さん」

ヨデイは場所を知っているのか、皆に号令を掛けてやめさせた。

「じゃあ、港に逆戻りだな」

オルバニアンは言った。

「そうですねえ。ま、船さえ取り戻してしまえば、結局は構わないんですけどね……。あ、アシュマ君、ネルゼイ警部には、チョツと眠ってもらいましょう」

「お、お前ら俺を殺す気か？ 警官殺しは罪が重いぞ！」

ネルゼイがそう言っているのを横目に、アシュマはまた手刀をネルゼイの首筋に叩き込んだ。

「アシュマさま！ 殺しちゃったの？ 本当に？」

アーチェルはアシュマに訊いた。

「いや、気絶させただけだ。殺したりはせん」

「よかった」

アーチェルが胸を撫で下ろす。

「では、早速ソールの港に行きましょう。魔導機兵には、済みませんが対魔導機兵用のライフルを持つ、オルバニアンに任せて……アシュマ君も対魔導機兵の戦闘は出来ますか？」

「一応出来るが？」

「では、こうしましょう。最初に、アルミナさんと、僕とで敵の歩兵達を倒します。その間に、アシュマ君とオルバニアンは、魔導機兵を抑えて下さい」

ヨデイが役割を割り振っていく。

「分かった」

「了解したぜ」

アシュマとオルバニアンが手順を飲み込んだ。

「あ、あのお」

アーチェルが、手を小さく上げた。

「何でしょう、王女？」

「わたくしは何をしたら宜しいのでしょうか？」

アーチェルがおずおずと訊く。

「王女様は監督です」

ヨデイがにこやかに言う。

「監督……」

「そーです。どんと後ろで、構えていて下さい。その方が僕らも戦いやすいです」

「分かりました。後ろで、どんと構えています」

アーチェルが腕を組んでそう言った。

「そうして下さい。アベニ、王女様の護衛は頼んだぞ」

「分かりました」

「では行こう！」

ヨデイは号令を掛けた。

アシュマ達一行は、ソールの港までやって来た。
廃港部分への道順は、ヨデイが知っている。

皆、ヨデイに付いて行った。

港のある場所から、

「ここから、注意していきましょう」

ヨデイがそう言って歩いて行った。

どうやらここら辺りからが、廃港部という事らしかった。

辺りは電気も通っていないのか、真っ暗だった。

周りは廃船ばかりで、浮力を失った船は、皆、港の底に船体を横たわらせ、積み重なり、船の墓場と言う様相を呈していた。

「足元に気をつけて」

確かに足元に注意して見てみると、パイプやらガラス、電気コードやら針金、釘の類やらが散乱して、まともに歩けそうな所は、どこにも無かった。

その中で明かりを点けている場所が、一箇所だけあった。

さすがに敵の歩兵も歩きにくかったのか、ここいら近辺まで掃除がなされ、歩きやすくなっていた。

角から覗いてみると向こうに『へ』の字型に曲がった所があった。手前の通路にはテントがあって、歩哨が四人、テントの中には十人一人いると思われた。

九十度折れ曲がった向こう側には、魔導機兵が四機、いずれも人が乗っている様で待機しアイドリング状態にあった。

「さて、皆さん、行きますよ。用意はいいですか？」

ヨデイが言った。

「待ってくれ」

アシュマが言う。

「俺はこっちの廃船側から魔導機兵側までを伝って行く」

「じゃあ、俺はここから魔導機兵を狙撃するよ」

オルバニアンが受ける。

「じゃあ、アタシとヨディが突撃だね」

そして、アルミナが受け応える。

皆が頷いた時、アーチェルが、

「あー、皆さん。わたくしこと監督より一言、二言。第一に皆さん無事に帰ってくる事。第二に兵隊さんになるべく殺さない事。以上、監督からの言葉、終わり」

言った時、オルバニアンとアルミナは、

「うへー」

と、言う顔をしたが、アシュマとヨディは心得た、といった表情で頷き返した。

「では……突撃！」

アシュマは廃船の上を飛ぶ様に走りながら鬼虎を抜刀していた。一方ヨディとアルミナは兵士のいる仮設兵舎の方へと走っていた。一番最初に異変に気づいたのは、魔導機兵に乗っている兵士だった。

『おい！ あれは侵入者じゃないのか』

『そういえばそうだな』

『拡声器を使って皆に……』

『撃つ方が速い』

魔導機兵のパイロットは、マシンガンを打ち始めた。

マシンガンからの弾丸の着弾点が、ヨディ達に近くなり、ヨディ達が危険に晒され様とした時、オルバニアンが、魔導機兵の内一機、そのマシンガンを持つ側の肩を打ち貫いた。

小さな爆発が起こる。

その魔導機兵はシールドを立て、防御姿勢をとる。

仮設兵舎からと兵士が出てきた。

歩哨と合わせて十人程が現れた。

アルミナは剣を立てて、蠅叩きの要領で、その剣を横に振るっていた。

これにより、三〇四人を壁に叩きつけていた。

一方魔導機兵側は、

『どこからだ？』

と、対魔導機兵ライフルを、撃ってきた者を捜した。

『あそこだ！ 向こう側の角から、狙われたんだ！』

『よし！』

オルバニアンのいる角を目掛けて、マシンガンを斉射して来た。

「きゃあっ！」

「うおっ！」

悲鳴を上げる、アーチェルとオルバニアンの二人。

こう立て続けに弾丸を打ち込まれては、反撃する暇がない。

しかし機兵の攻撃は、終わりを見せなかった。

その時、魔導機兵が一体、廃港の奥深くへと落ちていった。

アルミナは偶然その光景を目の当たりにしたが、見間違いをしたのだろうと思った。

それは、アシュマが魔導機兵の脚を『斬って』、バランスを崩させ、下に落していった様に見えたからだ。

（ありえない、ありえない。今はこっちに集中！）

そして、もうアシュマの方は見なかった。

魔導機兵側では、僚機が下に落ちたのを救えなかった。

悔恨の念に囚われているよりも、一人の『人間』が気になった。

いつからここにいます？

何故ここにいます？

こいつは一体何者なんだ？

するとその男は、モニターの死角に入り、何かをした。

それは下の方から来た、軽い振動で分かった。

そしてバランスを崩し、廃港の底へと落ちていった。

アシュマは三機目の足首を狙って、魔導機兵へと走っていた。

魔導機兵は、アシュマを狙ってマシンガンを斉射したが、アシュマの動きに追いきれず、アシュマに脚を断ち割られ、バランスを崩

し、やはり廃港の下へと落ちて行った。

最後の魔導機兵は、パイロット自らが魔導機兵より降りてきて、投降した。

その頃には、アルミナとヨデイによって、歩哨と兵隊を倒していた。

オルバニアンは念の為、ライフルでコクピットを潰した。

「さ、急ぎますよ。直ぐに敵が出てきます」

ヨデイが、警戒してそう言う。

「あつた！ 銀龍が！」

オルバニアンが言った。

だが、鎖でがんじがらめに、縛り付けられていた。

その鎖をアシュマが一本一本、斬り飛ばしていた。

「急いで出港準備を始めてくれ。俺は縛り付けている鎖をとき解く」

「アタシ、手伝おうか？」

アルミナがやって来た。

「その剣で大丈夫か？ セラミックの刃だろう？
脆性破壊するんじゃないのか？」
ぜいせい

「大丈夫だよジルコニアだから」

と、言って、振り落としたはいいが、ある程度までは切れたが、刃こぼれを起こしてしまった。

「あ~~~~」

「刃の部分も、ミスリルにしたらどうだ？」

「考えておく。一体アシュマの刀は何で出来ているの？」

「謎だ。硬度は十三、五。ダイヤモンドより硬いそうだ」

「誰が言ったの？」

「ガルマイン」

アシュマは鎖の最後の一本を斬った。

「いいぞヨデイ！」

『分かった。アシュマ君も中に入ってくれ！』

「了解だ」

アーチエルは後を向いて、アシュマがやって来るのを待っていた。アシュマが入って来た時、

「アシュ……」

と、言い掛けたが、その次にアルミナが入ってくると、口をつぐんだ。

（ううん！ もう少ししっかりしなきゃ！ たかが一緒に入ってきただけじゃない！）

アーチエルは気を取り直し、

「おかえりなさい、アシュマさま。アルミナさんも。もう発進だそうですね」

と、言った。

「そうか」

「アタシの席はどこだい？」

アルミナは訊いた。

「じゃあ、とりあえず、副操縦席についてくれ。主砲の管制を……」
ヨディが頼む。

「わかったよ。所でオルバニアンは？」

「旋回砲塔に登ってます」

「大丈夫なのかい？ あの、鉄砲玉は」

「ああ、あれはあれで、結構使えますよ」

「ところで、レーダーに映っている、これは何だい？ 機影が三つ……」

「！ いかん！ これは、敵です！ オーラコンバーターフルドライブ！ 急速発進します！ アーチエル様、宜しくお願いします！」
ヨディが叫ぶ。

「分かりました！ 念を込めます！！」

アーチエルも受け応える。

「オーラコンバーター……急速フルドライブ確認！ ……オルバニアン、敵が近付いてきています。捕らえられれば、いつでも撃つて下さい。船に火は入れました」

ヨデイが上ずった声で言う。
かなり緊急な様である。

『わかった！ エンジンの臨界確認！ この機影は……どの機体にもマツチしないぞ？』

オルバニアンが言う。

「とりあえず逃げます。各員よろし？ もっと細部の点検までしてから、逃げに入りたかったですけどね。仕方ない」

『宜しいは宜しいけどよお、不安になる様な事、言うなヨ』
オルバニアンが不安がる。

「じゃあ、逃げに入りますよ」

「ちゃんとアタシのコレクション、回収してよ！？」

アルミナが要求する。

大事なコレクションだ。

不安にもなる。

「わかっていきますよ！ 加速に入ります！
ヨデイの船、『銀龍』は加速度を増して、追っ手を振り切りに掛かった。

一旦洋上に出て、敵をそのまま振り切った。

おそらくそのまま国外へ出たと思うだろう。

「はい、みなさん、今回もご苦労様でした。特にアーチエル様には大量の念を使わせちゃって、済みません。もう手を離して好きな事しちゃって下さい」

「はい、じゃあお夜食作ってきます」

アーチエルはそう言って、キッチンに立った。

当初の予定通り、一旦洋上へ出てから、またアヘイビアの浜まで、低空で侵入したので、レーダーには察知されてない筈だ。

車が置いてある場所まで接近し、銀龍を着陸させた。

機体の左右には、車も出し入れできる程のハッチと、置いておく

だけのスペースがあった。

それはこの銀龍が、元は貨物船である名残の様な物だったのかもしれない。

どちらにしろ、それはこの際便利だった。

四輪駆動のトラックは右側に、スポーツカーは左側にそれぞれ納めた。

「おい、ヨディ！ 機影が三機こっちに向かってくるぞ！」

オルバニアンが、リーダーを見ながら叫んでいた。

「なんだって？ さっきの奴か？」

ヨディが訊いた。

「そうかもしれねえ！ とりあえず発進した方が、良いんじゃないか？」

「まだ、車を固定していない。発進は出来ない！」

「どの車だ！？ スポーツカーか！？ トラックか！？」

「トラックだ！」

「分かった！」

そう言って、倉庫の方へ走っていった。

倉庫では、アルミナがワイヤーを使って、トラックとアルミナの大剣を、船に繋ぎ止めていた。

「何やってるんだよ？」

オルバニアンが叫んだ。

「仕方ないだろう！ 繋ぎ止めなきゃ、アタシの大剣達が、この船の中を暴れまわっちまうんだよ！」

アルミナは言い訳をした。

が、このまま放置できない事も事実である。

「なんで、そんな厄介なもん、持ってきたんだよ！」

「なんだよ！ 持ってきたら悪いってのかよ！」

「ああ、悪い！」

「何だとう！」

二人は口げんかを始める。

「止めろ！ 二人とも。ここで言い争っても不毛だ！」

アシュマがやって来て口を挟む。

「アシュマ？」

と、オルバニアン。

「オルバニアンは砲座についてくれ……だそうだ。エンジンは臨界にしてある……らしい。ここは俺にまかせて、行ってくれ」

「分かった！」

オルバニアンがすっ飛んでいく。

「ああ、アシュマ！ アタシの為に来てくれたんだね？！」
アルミナが喜ぶ。

「主砲の管制を、ヨデイがして欲しいそうだ」

「ちえっ」

「よし、後これでお終いだ。主砲の方へ回ってくれ」

「分かったよ」

アルミナが通路を走ってきて、ヨデイの隣に座った。

「お待たせ！」

「敵が、直ぐそこまで来ています。今からでは、もう逃げられません」
ん

ヨデイが現状を話した。

「済まない」

「別に責めている訳では……」

「ワイヤーでの固定終わったぞ」

アシュマがブリッジに入ってきた。

「済みませんね、アシュマ君」

「いや、別に構わん」

『敵が射程内に入った、撃っても良いんだろう？』

オルバニアンが、スピーカー越しに言ってきた。

「撃っても構いませんけれど、外さない様に。ここまで近いと、一発一発の重みが違ってきますから」

ヨデイが注意する。

『分かった……捕らえた！ 撃ってみる！』
ドン！

大きな砲声がして、砲弾が軌跡を描いて、飛んでいった。
しかし、その砲弾は何と手前で見事にかわされた。

『外した！ 意外とすばしっこいぞ！ こいつ！』

オルバニアンは命中しなかった事に、多少の苛立ちを覚えた。

「アルミナさん！ 主砲の方も照準来たら、撃って良いですからね」

「分かった！ ……敵の動きが……捉えられない。普通の航空機じゃないよ。これは」

敵が、三機揃って編隊を組み、発砲してきた

「！ 撃ってきました……これは……うわっ」

ヨデイが言った所で、艦に振動が伝わってきた。

「直撃したらしいですね。それにしても今のシルエットは……まさか」

敵編隊は、ヒットアンドウェイの要領で、一度離れた。

『くそっ！ 見てろよ……いけっ！』

再び、

「ドン！」

砲声が響きわたって、発射されたが、砲弾はまた外れた。

「間違いない！ 敵は魔導機兵です！」

ヨデイは断定した。

『なんだって！？』

オルバニアンは衝撃を受けた。

オルバニアンは魔導機兵を陸戦兵器だと思ってたからだ。

魔導機兵が空を飛ぶ。

オルバニアンの常識が覆された。

「説明している時間がない。アシュマ君、君は巨大な念導境界面が張れましたね？ そのゴンドラに乗って、船外へ出て、敵の攻撃からこの船を守って下さい！」

アシュマは、

「何故それを……」

と、言いかけたが、

「分かった」

そう言って、ブリッジ中央にあるゴンドラに、手を掛けた。

「頼む。上に上げてくれ」

と、アシュマは言い、ヨディはスイッチを押した。

アシュマはゴンドラと共に、船外に出た。

「オルバニアン、君は後部格納庫に来て下さい。アルミナさんはメイン操縦席の方を頼みます。爺はオルバニアンに代わって、砲座の方へ行って下さい。皆さん急いで！」

言い終わった時、敵魔導機兵が目の前にやって来て、コクピット周りを攻撃した。

しかし今度は、アシュマが鬼虎を使って、敵からの攻撃を念導境界面で光に変換し、鬼虎に吸収して、敵の攻撃から船を守った。

そして敵機はまた離れてしまった。

その間に後部格納庫から、ハッチが開いて、魔導機兵がせり出てきた。

『オルバニアン、操縦の仕方は分かってますね？』

ヨディが念押しをした。

『一応な。実戦は初めてだが、シミュレーションなら何度かやった事がある』

『どのくらい？』

『ここんどこ一年くらい毎日一時間』

『君は、道場主の跡取りだと聞きましたよ？ この一年何をしてきたんです？ まあ、中堅クラスですね』

ヨディが何の前振りも無く言い、

（何でそんな事を知ってるんだ？ 誰から聞いた？ そんな事）

と、オルバニアンは思った。

『各種シークエンス完了！ 起動チェック、オールグリーン！ 起動開始！』

オルバニアンは各部をチェックした。

その、白銀に輝くその魔導機兵は、重装備の重装甲だが、装甲素材がミスリルと、ゲルマニウム、部分的にセラミックを使用しており、鉄だけの装甲より、軽く強く作られていて、とても高価な機体と言えた。

『ヨディは何をしてるんだよ』

オルバニアンが言う。

『魔導機兵を飛ばすんですよ』

また、背中にはもう一つのコクピットがあった。

そこには、魔導機兵をサイコフライヤーと同様の操縦を可能にする、機器があった。

背中のコクピットの横には、魔導石コイルが二対、ハの字型に付いていた。

『なに？』

オルバニアンが驚く。

『行きますよ！』

ヨディが魔導機兵を浮かせると、オルバニアンは

『わっ、わっ、わっ！』

バランスを取るのに苦労した。

『素直に力を抜けばいいんですよ』

ヨディが言った。

『分かった』

『なにせ、空飛ぶ魔導機兵は最新型なんだ。その最新型をお披露目するのは、僕のこの『炎龍』だと決めていたのに、先に配備されるなんて！ その上、僕の『銀龍』に傷を付けるなんて、許せないな……！ 行きますよ！ オルバニアン！』

『応っ！！』

ヨディとオルバニアンを乗せた魔導機兵『炎龍』は、スピードを上げ、敵機の追撃を始めた。

直ぐに、敵機との遭遇となった。

真直線上に敵魔導機兵三機と、こちらの魔導機兵が並んだ。
敵機はマシンガンで撃ってきた。

オルバニアンはシールドでこれを防ぎ、シールド裏に装備されている、ロッドを握った。

『どうした？　オルバニアン！　反撃しろ！』

『ヨデイ、奴らと接触しない、ぎりぎりの所を飛んでくれ！』
『分かった』

『よし、来た来た！』

これは、一種のチキンレースとなった。

敵機はこれをおぼつかすタイミングを失ったらしい。

これから急旋回しても、Gが人体に与える影響が大きい。
旋回するのは無理と判断したらしく、すれ違うコースを取るらしい。

すれ違う一瞬、オルバニアンはロッドを突き出し、敵機兵の浮遊用魔導石コイルを破壊し敵機一機撃墜をさせた。

『上昇だ！　ヨデイ、上昇だ！！』

すれ違いざま、敵機兵が攻撃をしてきたが、急上昇でこれをおぼつかした。

『ヨデイ！　旋回だ旋回！』

そして機体を捻り下を向き、敵機を真下に見る形になった。

そしてオルバニアンは、腰からマシンガンを取り出し、敵機の上空から弾丸の雨を降らせた。

それぞれの機体に弾丸が直撃し爆発し、海へと墜落していった。

『炎龍』は通常の飛行に戻り、『銀龍』に帰着し、アシユマも船内に戻った。

「「イエー！」」

ヨデイとオルバニアンが手を伸ばし、頭上で、
ぱん！

と、手を叩き合った。

「お疲れー。いや、オルバニアン、アンタにあんな才能があるなん

て、知らなかったよ」

アルミナが言った。

「いや、今回の機体制御はヨディだったから、俺は殆ど何もしていないよ」

「謙遜、謙遜。もっと威張っちゃって、良いんじゃないの？」

ヨディが言う。

少し離れた所からアシュマとアーチェルが、ヨディとオルバニアンとアルミナの喜び合う姿を見ていた。

そして、

「アシュマさま、お帰りなさい」

「ただいま。アーチェル」

二人は手を繋ぎ、更にアーチェルが腕にもたれかかった。それを目聡く見つけたアルミナは、

「あーっ！っ！　そこ！　手繋いで、良い雰囲気にならない！！　アンタだけのアシュマじゃ無いんだからね！！　ねーっ！　アシュマ様ーっ！」

アルミナは、アーチェルが握っているアシュマの手とは反対側の手を握り、アーチェル以上に身体を摺り寄せた。

「アルミナ、気持ちは分かるけど、虚しいから止めようぜ」

オルバニアンが言った。

「何だその虚しいちゅーのは！　聞き捨てならん！」

アルミナが口を尖らせる。

「だってよー、お前のペツたんこの胸じゃ、男と代わらんだろ」

「何だとお！？　お前、チョツと待て！　刀の錆にしてやる！！　待ってろ！！」

アルミナは、アシュマの事等忘れてしまったかの様に、オルバニアンを追い始めた。

「これから、どうする？」

アシュマがヨディに訊いた。

「そうですねえ……先程の攻撃で、船体に傷が付いていないかが心

配です。穴でも開いていたら高空を飛ばません」

「どこか、修理出来そうな所はないか？」

「あるにはあるんですけどねえ」

「？」

「まあ、あそこしか無いでしょうなあ」

ヨデイは意味深な発言をする。

「あんまり行きたそうに聞こえんが？」

「まあ、それはそれとして。最初に言った、ある『コネ』に行くんですけどね。でも今晚は行くのをやめましょう。どこかに潜んで、明日ここを発ちましょう」

ガルマイン、そして頭部に玉を埋め込まれ、下半身が機械化されたガデウィンが、ホテルのある一角を指指して歩いていった。

それは、例のドートネーゼ関係者専用のレストランだった。

「貴様はここで待て」

ガデウィンをレストランの入り口に待たせた。

そこでガルマインはノリトレアの外務省スタッフから、世界情勢に関して情報提供を受けている。

そして、今日もガルマインは、食後のお茶を喫しながら、世界情勢の『講義』を受けていた。

「近く、独立をしようと目論む所があります。クーロン人民共和国に隣接するマリク人民共和国から一部が独立して、国を建てるそうです。これには、アヘイビアの息が掛かっています」

スタッフは言って、茶を一口すすった。

「アヘイビアは自らを民主主義の盟主と謳ってますから、クーロンやノーツの全体主義国家の息の掛かったマリク政権を許さず、新政権を応援するでしょう。ややこしいですがマリク共和国と名乗る様ですね。まずアヘイビアは独立政権を後押しする為に色々と介入するでしょう。……いや、介入する予定です。またクーロン人民共和国

国は独立を潰す為に、マリク人民共和国を通じ、軍事的に圧力を掛けて来るでしょう。ノーツ連邦は技術提供という形でやはり介入する予定です」

また、一息入れて、茶をすすった。

「この、それぞれの介入により、軍事衝突は、避けられないでしょう」

「待て。それでは世界大戦に発展しかねないではないか？」

ガルマインは先行きを危ぶんだ。

「大丈夫ですよ。そんな事はドートネーゼがさせません。それよりもこういう言い方はあまり好きではないのですが、これは国際市場にノリトレアの高い技術力を売り込む、良い機会になると思いますよ。また、アヘイビアと軍事同盟を結んだノリトレアは、そうせざるを得ないでしょう」

「確かにその通り。であれば、急ぎ日程を詰めノリトレアに戻り、かの地に『製品』を送り込まねば。確か、かの地は熱帯雨林……ジャングルだったな。ならばそれに見合った装備の物を、選定せねば」
「そうですね。またこれによりノリトレアの技術力の向上も見込めます」

そしてその日、クーロン人民共和国隣国の、マリク人民共和国（西マリク）から、マリク共和国が独立（東マリク）を宣言。

西マリクは親クーロン人民共和国だが、東マリクはアヘイビア連邦の傀儡政権だった。

クーロン、ノーツ連邦が西マリクに軍事的援助を始める。

直ちに東マリクにもアヘイビア連邦より軍事的援助が来る。

ここにマリク紛争が勃発した。

ガルマインは、異例とも言える、アヘイビア大統領との二度目の会談をし、軍事同盟を速やかに遂行する事を約束。

ガルマインは急ぎ日程を切り詰め、アヘイビアを後にした。

アシュマ達一行は二、三日出発を足止めされた。

先日の敵の攻撃により、銀龍のエンジン部分に、障害が残ったからだ。

一応、応急処置を施して、飛べる様にはしたらしい。

しかし、修理は必要だった。

ヨデイの言った『コネ』を頼りに行けば、修理は出来るらしい。

そんな中、アシュマ達はガルマインが大統領と会談した事、そして急遽ノリトレアに帰った事を『銀龍』のブリッジ内のテレビで知った。

「どおりで、あんな研究施設にいる訳だ」

オルバニアンが言った。

そして帰国後、ガルマインは、関白の地位に着いた事が、内外に触れて回られた。

これで、名実ともにノリトレアの支配者になった訳である。

「あんな奴が関白かよ！ やりにくくなるぜ」

続けてオルバニアンが言う。

続いて、『七つの十字架』と名乗るテロリストグループが、迎賓

館を爆破し、死傷者が何人か出た事を知った。

「それにしても、これで大統領府も、安全とはいえなくなったな」

アシュマが呟いた。

「何か言いたい事が有るのでしょうか、私はこういう方法はありません好みません」

アーチェルは言い放った。

そして、アシュマ達は、東マリクの独立と、東西マリクの紛争勃発をテレビで知った。

犠牲になっているのは女子供、そして年寄りだった。

その映像が流れた。

特にショックを受けていたのはアーチェルで、涙すら浮かべていた。

そして、

「アシュマさま、何かわたしに出来る事は、ないでしょうか？」
そう言った。

「何かとは？」

「こういう時の王女です。レキシタニアの王女としての立場を利用して、紛争を止めさせる事は出来ないでしょうか？ ……自由と平等と博愛を国是とする、アヘイビアならば……そう、アヘイビアの大統領ならば、話を聞いて、この紛争を解決出来るのではないのでしょうか？」

「無理だ」

「何故にございます？」

「アヘイビアの採っているその解決方法が、今の紛争そのものだからだ。……それに……」

「それに？」

「今、大統領府に行けば、自ずから捕まりに行く様な物だ。最早、大統領も味方では無いと見た方がいいだろう」

「それならば、両マリクに直接行って、二国間の間の橋渡しとして何かは出来ないでしょうか？」

「それは……」

「それも無理ですよ、アーチェル様」

ヨデイが口を挟む。

「何故でございますの、ヨデイ様？」

「西マリクは親クロン国、東マリクはアヘイビアのでこ入れで、独立した様な物。最早、大国同士の思惑が絡んでいるでしょう。両マリクへ行つてどうなるという物ではないでしょう」

ヨデイが淡々と言う。

「私には何も出来る事が無いなんて……無力だわ……」
アーチェルは言つて涙する。

「それは、俺も同じだぜ、姫さんよ」

オルバニアンが言う。

「俺なんかは、正式な王子にも認められていない上、こんな事を見

せられてよ、全く無力感を感じない訳無いぜ……」

「オルバニアン様……」

「何？　オルバニアンって、王子だったの？」

アルミナが問うた。

「ええ、ノリトレアのルーラン王子でいらっしやいます」

アーチエルが答えた。

「とてもそんな風には、見えないけどねえ」

「大きなお世話だよ」

オルバニアンが言った。

「ここで嘆いても、しかたない」

アシュマが言う。

「よし、行こう。アーチエル様、エンジンの方よろしく」

ヨデイが言った。

「はい」

アーチエルは、気を取り直して返事をした。

サイコ・フライヤーは浜から海へと動き出そうとしていた。

ヨデイが船を発進させようとすると、機が右に大きく傾き、危うく横転しそうになった。

「ヨデイ！　何やってんだよ！」

オルバニアンが叫んだ。

「僕じゃない。くそ、何がどうなっている？」

ヨデイは、船外モニタを切り替えて行く。

すると、船の右端にワイヤーが引っ掛っており、船の自由を奪っていた。

そこから、何人かの警官が登ってきていた。

「ダスト・モンキー！！　……いや、ヨデイ！！　この間の借りを返してやるぞ！！」

ネルゼイ警部だった。

浜に居て拡声器を使っている。

「また、あのおっさんか！」

モニタを切り替えると、既に船上にゴド・ングと、レディール・エレノイ、そしてアーヌがいた。

「外にでる！」

アシュマが言った。

「俺も出る！」

オルバニアンが後に続いた。

「二人とも！ 命綱を忘れるな！！！」

ヨデイが叫んだ。

二人は命綱を腰に巻きつけ、ゴンドラに繋げ、ゴンドラから外へ出た。

その前に、巨斧を従えて、ゴド・ングが立ちはだかった。

「来たな、アシュマ・アトー！！ 二度も貴様を殺るのにしくじったが、今度こそ殺してやる！」

「俺も今度は容赦はせん！」

アシュマも言い放った。

「オルバニアン！ ワイヤーを伝ってくる警官を頼む！」

アシュマは雑魚の処理をオルバニアンに頼んだ。

「わかった！」

船上に引っ掛ったワイヤーは全部で六本あり、オルバニアンはまず、それらを外す事から始めた。

オルバニアンが魔導機兵用ライフルで、船上に引っ掛っているワイヤーを弾き飛ばして行く。

その間にも、警官十数名が、船上に上がっていた。

オルバニアンは、ワイヤーを全てはじき飛ばした。

そして、ライフルを左手に持ち、右手には刀があった。

「アーチェルのお姫さん！ 聞こえているのなら許してくれ！ 俺はアシュマ程器用な真似は出来ない。もしかして人を殺してしまう事があるかもしれない！」

そう言って、オルバニアンは刀を振るい始めた。

『オルバニアン様！ 先ず御自分のお命を『第一』にお考え下さい

！
』

船外スピーカーから、アーチェルの声が聞こえてきた。

「すまねえ！」

一方のアシユマは、三方と睨み合いが続いていた。

ゴド・ングは、今まで通り問題ない。

レディールは何故か、こちらへの攻撃を、躊躇っている様にも見えた。

問題はアーヌだ。

何せ、こちらの攻撃を、一切受け付けないのだ。

この窮地を、どう凌ぐかが問題だった。

アシユマはまだ、鬼虎を鞘の内に収めたまま、抜刀の姿勢をとった。

その時、ゴド・ングが、

「どうした、アシユマ？ 来ないのか？ 怖いのか？ こちらから

行ってやろうか？」

等と、挑発した。

それに対して、アシユマは、

「来るだけの勇気があるのなら、来て見るが良い」
逆に挑発してみた。

「おのれ！ 小僧！ 言いおったな！！」

すると、ゴド・ングは、斧を振り上げながら突進してきた。

「馬鹿めが。誘いに乗りおって」

アーヌが吐き捨てる様に呟いた。

「おおおっ！！」

ゴド・ングは吼える様にして、突進してきた。

アシユマの方は、腰をゆっくりと沈め、十分ゴド・ングを引き付けた後、抜く手を見せずに、ゴド・ングを斬り捨てていた。

しかしなんと、次の瞬間には、アーヌが斬りかかって来た。

『一応仲間』のゴド・ングの死を、アシユマの隙を作る為の道具にしたのだ。

アーヌも走りざま、居合いでアシュマを斬りつけてきた。

「!!」

アシュマは、後に大きく跳んでそれをかわしたが、アーヌの攻撃は執拗で直ちに二撃目、三撃目と技を繰り返してきた。

四撃目で、やっと、アーヌの攻撃を受け止め、鏖迫り合いに持ち込んだ。

ここで、レディールが意外な事を言った。

「アシュマ! 助勢するわ!」

「レディール! ? 俺の方への助勢はいい! オルバニアンの方を頼む!」

「どうして? アシュマ、助勢するわ」

「レディール、こっちに來るな! 巻き添えを食らって死ぬぞ!」

「アシュマ……分かったわ。もう一人の彼の助勢をすればいいのね?」

「たの……む!」

そう言ってアシュマはアーヌを押し戻した。

レディールはオルバニアンの方へとやって來た。

「故あって助勢するわ」

レディールはオルバニアンに言った。

「それは、どーも」

「どうすれば良いの?」

「敵を殺さずに退けるのさ。結構大変な仕事だぜ?」

「任せて、そういうのなら、私は適任だわ」

そう言ってレディールは、警官達の肩や太腿等を突き始めた。

狙いは的確で、次々と警官達の戦闘能力を奪っていった。

「器用だな、アンタ」

「それを言うなら、遣い手と言って」

レディールは、やや不服氣に言った。

アシュマは、依然、アーヌと切り結んでいた。

アシュマの左からの横薙ぎをかわし、アーヌの正眼からの斬りつ

けを、今度はアシュマがかわした。

かわしざま、アシュマは右からの横薙ぎを、アーヌに送り込んだ。アーヌはこれをかわせた筈なのに、わざとかわさずにアシュマに打たせておいて、隙を作らせるつもりだった。

アシュマは鬼虎をアーヌの胴へと送り込んだ。

が、硬度十三、五の鬼虎でも、これを斬る事が出来なかった。

アシュマの攻撃の流れが、止まってしまった。

「くそっ！」

アーヌの攻撃が始まった。

上に、下に、右に、左に、袈裟に、逆袈裟。

アーヌの攻撃は、水が流れる様に流麗で、留まる所を知らなかった。

「誰か、アシュマさまを助けて……！」

それをモニタで見ていたアーチェルは、叫んでいた。

「た……助けるといっても……！」

ヨディが言い淀んだ

「よし、アタシが行って来る……！」

アルミナが席を立った。

「それよりもいい手があります。皆さん、席に着いて、シートベルトを着用して下さい」

「え？」

外ではアシュマが、劣勢に置かれていた。

アーヌの執拗な攻撃の前に、反撃の機会を見出せないでした。

今は……。

アシュマは劣勢の中、密かに気を充溢じゅういつさせ、鬼虎にそれを送り込む様にイメージした。

アシュマは、アーヌの刃をかわしつつ、隙が出来るのを狙っていた。

アーヌはアーヌで、アシュマが、何かを狙っている事に気づきつつ、攻撃の手を緩めなかった。

少しでも隙を見せたら、何かをされるのは目に見えていたからだ。そして、アーヌは気付いた。

アシュマが、鬼虎に気を集めようとしている事に。

そして、硬度十三、五の鬼虎に気を集め、更なる破壊力を持たせようとしている事に。

アーヌは一瞬の隙もアシュマに与えてはいけない事を悟った。

そしてその時、

『皆さん！ 背面飛行に入ります！ 命綱をしっかりと握っていて下さい！』

ゆっくりとではあったが、銀流は既に海の上にあった。

「え!？」

オルバニアンは驚き、命綱を握った。

「きゃっ」

レディールも慌てて、オルバニアンに抱きついた。

その際に剣を落としてしまった。

アシュマは背面飛行に入る際、体が揺さぶられたアーヌに隙を見出した。

アシュマは、乾坤一擲の突きをアーヌに見舞った。

『蛭』の様に放射型の気ではなく、刀の一点、そこに気を集め、硬度の高い鬼虎とあいまって、爆発的な貫通力を生み出す。

それが、アシュマの狙いだった。

が、アーヌは後へ飛び、アシュマの突きを辛うじてかわした。

そしてそのまま銀龍号は、背面飛行に移りアーヌは海へと、落ちて行った。

傷ついている警官も、傷ついている警官も、皆、海へと落ちて行った。

そして銀龍は元の水平飛行に戻った。

『アシュマ君。危なかったですね。戻って来て下さい』

「あ? ああ……」

助かったのは、アシュマの方だったのか、アーヌ方だったのか、

一体どちらだったのか……？

「何でお前まで、くっ付いて来るんだよ！？」

オルバニアンが少し怒りながら、レディールに言った。

「あら？　今ここでレディーに対して海で泳げと仰るの？　それも服を着たまま？」

「分かったよ！」

「レディール……」

アシュマが呟いた。

「アシュマ……」

レディールもアシュマを見詰め、呟いていた。

『ハイ、そこ！　二人で、妙な雰囲気作らない！』

スピーカー越しに、アルミナの声が聞こえてきた。

遙か遠くでは、ネルゼイ警部が何かを言っていたが、最早何を言っているのかは判別不可能だった。

ただし、怒り心頭なのは、分かったが。

ゴンドラで、三人が降りてきた。

命綱のロックを筈し、二人は帰ってきた。

「よ、ご苦労さん」

そうヨディが言った。

「そんな苦労でも、なかったぜ」

オルバニアンが言う。

「お帰りなさい、アシュマさま」

アーチェルがタオルをもってアシュマの側まで来た。

「ああ、済まない」

アシュマが受けた。

その時、少しレディールの表情が曇った。

ヨディはそれを見逃さず、

「さて、レディールさん、お話だけでも聞きましょうか？　こちらにいらっしゃい」

等と言った。

「はい」

対して、レディールはそう応え、いつもならアーチエルが座る席に座った。

「さて、アシュマ君と、何か曰くありげだけど、何か言う事、ある？」

「……アシュマ、私の事、本当に分らないの？」
暫しの沈黙の後、レディールが言った。

「……………」

アシュマが沈黙を通した。

「アシュマさま……」

アーチエルが、不安げな瞳を、アシュマに向けた。
だがアシュマは、レディールを見詰めている。

「アシュマ、なら、ソーフアの名前ならどう？」

「ソーフア……ソーフア！ エント・ソーフアの娘、エファールか！？」

「そうよ、アシュマ。エファールよ！ 思い出してくれたのね？」
レディール……いや、エファールは喜んだ。

「なによ！ アタシのアシュマに、なれなれしくしないでよ」
アルミナが言った。

「何よ、貴女？ 『アタシのアシュマ』ですって？ 貴女こそ『私のアシュマ』に近付かないでよ！」

「いや、あの、その……話が、全然見えないんですけれど？」
ヨデイが困惑をしている。

「なによ、うるさいわねえ。アシュマは私の恋人だった人よ！」
「ええっ!？」

一同が驚いた。

当の本人、アシュマも含めて……。

「さて、エファール。それはどういう事だ？」
渦中の人アシュマが、エファールに聞いた。

「何？ アシュマ？ 忘れちゃったの、あの、愛の日々を」

「……………」

アーチェルはアシュマを見つめたが、直ぐに俯いてしまった。

「ちよつと、待て。何か勘違いしていないか？ エフアール。俺は、確かに数ヶ月お前の家に厄介になったが、お前とそんな仲になった覚えはないぞ？」

「どういう事ですか？ アシュマ君。もっと話が見える様に、説明して頂けませんか？」

ヨデイが説明を求める。

中々複雑な曰くがありそうだと思う。

「分かった、話そう。……俺は十三、四の頃から、武者修行の旅に出た。武者修行というよりは『無茶』修行だな、あれは……。とにかくあの頃の俺は、これとは思った道場を見つけては、殴りこんでボコボコにされて、悔しいから自分で技を工夫して、また道場に殴りこむ。そして遺恨を晴らす。そんな事を繰り返していた。殺されなかっただけでも、運が良いと言わなければならぬ……」

アシュマは何処か遠い目をして語っていた。

「そんな、アシュマの昔話は良いからよ、核心を話してくれよ」

オルバニアンが、苛つきながら言った。

「そんな昔話とはなんですか？ やつと、アシュマさまの過去の事を聞ける、又と無い機会ですよ！」

アーチェルは、声音も高く言った。

エフアールはおや？

と、思った。

さては、この娘、アシュマの事を好いているのでは……？と。

「核心部分を言うのだな。そんな道場破りまがいの事をしていて、エント・ソーファの道場……そこにやって来たんだ。そこで道場主のエントに暫く滞在を許されたんだな。つまりはそこで、修行しても良いという許しだな」

「で？」

オルバニアンが、続きの話を催促した。

「それだけだ。そこに暫く滞在して修行して、次の地へと旅立った。それ以上でもそれ以下でも無い」

アシユマはそうとだけ言った。

「そんな、アシユマ！ 私とのあの愛の日々はどこに行ったの？」

エファールは、同じ事を繰り返した。

「これだよ、これこれ！ これをどう説明するんだよ、アシユマ！
？ 全くなんでいっつもアシユマなんだ？ たまにはこっちにも…
…」

オルバニアンが、苛々しながら訊いた。

「エファール、どう言う事なんだ？」

アシユマが訊いた。

「アシユマは、本当に忘れたの？」

「だから、どう言う事かと訊いている」

「分かったわ。そこまで言うなら話してあげても、宜しくってよ」

「頼む」

「アシユマと一緒に、寝起きしていたわ」

「敷居で、遮られていた」

「朝食は、いつも一緒だったわ」

「親父さん一家と、一緒だった」

「稽古はいつも、一緒だったわ」

「他の門下生も、一緒だった」

「組稽古はいつも、一緒だったわ」

「親父さんが、年齢の近い者同士で、組ませてたからな」

「稽古の後、いつもお喋りをしていましたわ」

「皆でな。ちなみに俺は、いつもそれには参加していなかった」

「その後、二人で話をしたじゃない？」

「それは四〇五回あったな」

「ほら御覧なさい」

「でも、ジャンには、もっと話しかけていたぞ？」

「………！ そんな事は……貴方が道場を去る時に、髪を一房頂きました。これを俺の代わりにと」

「それは、そう乞われたからだ」

「では、私へのキスの件は！？」

その言葉に、アーチェルが少し身を硬くして、一回だけ身体を震わせた。

「あれは俺が転びそうな所に君がいて、偶然、口と口が重なっただけだ。その時に詫びた筈だ」

「酷い……あれが……あれが、ファーストキスだったのに！」

「う……」

アシュマは固まってしまった。

「なによ、ファーストキスが、どうのこうの言う歳でもあるまいに。話を聞いていれば全部貴女の想い込みばかりじゃない。アシュマと付き合っていたというのも、怪しいね！ アシュマもファーストキス云々で、一々たじろがない！」

ばっさりアルミナが斬って棄てた。

「なに？ ファーストキスの事を語るのに、年齢制限でもある訳？ エファールは攻撃の体勢を取った。

「その歳で、生娘でもあるまいに！ いつまでも昔の事をぐちぐちと！」

「生娘じゃなかったら、アシュマへの恋心を語ってはいけないとでも？」

「アシュマは、付き合っていないと言っているよ！」

「それこそ、アシュマの思い込みよ！」

「まあまあ、二人とも落ち着いて、冷静になって……」

ヨデイが二人をたしなめようとしたが……。

「なんだと？ ヨデイ！ 止めるな！ この未成^{うらな}りの瓢箪^{ひょうたん}！」

アルミナが大声を出すと、

「そうよ！ 貴方に、この想いをとめる事ができて？」

エファールも気迫のこもった声を出した。

「大体あんた達、怪しいんだよ。どっちもアシュマが『好き』とか言って、アシュマに近付き、アシュマを殺ろうって腹じゃないのか？」

オルバニアンが言った。

「馬鹿！ 煽ってどうする！？ 止めろって！」

ヨデイが諫めた。

「まあ、何ですって？ ワタクシがアシュマを殺害しようだなんて失礼を通り越して無礼よ！」

エフアールが憤った。

「所でその『エフアールさん』が、何故アシュマの事を、付け狙っていたんだい？」

オルバニアンが訊く。

「そうねえ強いてあげれば、愛しいからかしら？ 私の事、本当に忘れていたなら、殺しちゃおうと思っていたのよ。それで、アシュマの行方を、ずっと追っていたわ」

「うわっ！ あっぶねえ女……さっきと言ってる事、違うジャン！」

「でも結局出来なかったけれどね……やっぱり愛しているから……」

「それが普通なんだよ！」

「なんだい、オルバニアン！ アンタだって、似たようなもんだろう！？ ふざけんじゃないよ！」

アルミナもこの言葉には怒った。

「なら決着をつけるか！？」

オルバニアンは息巻いた。

「おうよ！ 望む所だね！」

アルミナもそれには同意した。

「宜しくってよ！」

エフアールも賛同する構えだ。

アーチエルには、アシュマがこの光景を見て、困惑している様に見えた。

アーチエルは意を決して、口を開こうと思った。

「皆様！ お控え下さい！ アシユマさまが困惑しております！！」
アーチェルにしては^{おおこわね}大音声に言った。
これにはアシユマも驚いた。

オルバニアンやアルミナ、ヨデイも黙ってしまった。

周りの雰囲気にあてられたのか、エフアールも黙ってしまった。
アシユマは少し離れた所に座りなおし、アーチェルもそれに従って、アシユマの隣に座った。

「すまなかったな。アーチェル」

「いいえ。大丈夫にございます。アシユマさまの昔話が聞けて、よう御座いました」

「あれ位の話なら幾らでもある。今度聞かせよう」

「はい。でも、ファーストキスの話は、少し驚きました」

「あれは事故だ」

「わかっておりまする」

「済まない」

「あの、わたくしにも髪を一房頂け無いでしょうか？」

「分かった」

以上の光景を見てエフアールが、

「前から思っていたのよ。何よあの娘。要所要所で、話の腰を折ってくれちゃって。おまけにあの雰囲気の良いは、一体なんなのよ？」

アルミナに訊いていた。

「ああ、彼女はね、アーチェルと言って、どっかだかのお姫様なんですってよ。なんだかんだ言っ、今の所、アシユマの一番のお気に入り……って所かしらね」

「何ですって？ 私のアシユマに……アーチェル……アーチェル……アーチェル？ ……アーチェルって、レキシタニアの？」

「そうそう、そんな国名だったかな？」

「めちやくちゃ、権威のある王女様じゃなくって？ それがなんで、こんな船に……」

「こんな船で、悪う御座いましたね」

ヨデイが口を尖らせる。

「あ、今の彼が、ヨデイ。ヨデイ……なんだっけ？」

「ヨデイ・ヨフル。どうぞお見知りおきを」

「そう、ヨデイ・ヨフル。この船の持ち主。で、向こうの彼がオルバニアン……オルバニアン……なんだっけ？」

「オルバニアン・マグマイヤーだ！ 覚えとけよな！」

「あれで、アタシの一コ上の十九歳なんだと。本物のノリトレアのルーラン王子だそうよ」

「まあ、本当に？ それだったら、私みたいな貧乏貴族にとっては、雲上人な訳ね」

エファールは驚いてみせる。

「とてもそうには見えないけどね。で、あそこに座って、大人しくしているお爺さんが、アベニ。ニンジャなのよ」

「で、アタシがアルミナ・ラ・シア。人は私の事を『隻眼のアルミナ』と言うけどね」

「さっきも自己紹介した通り、私はエファール・マヤ・ソーフア。レディールを名乗っていた時には『閃光のワルキューレ』って呼ばれていたわ」

「『閃光』だって？ アシユマと同じ異名だな」

「だって、意識したもの」

「ワルキューレってのは……？」

アルミナが訊く。

「超古代にある神話の中で、武装した乙女達の事をいいます」

「まあ、ヨデイさん、物知りでいらっしやる事」

もう、仲良くお喋りをするエファール達を見て、アシユマはアールに、

「中に入ってくれば？」

と、勧めた。

「いえ、わたくし、お喋りが苦手なので……」

「そうか、俺と同じだな」

アーチェルは、アシユマの隣に腰掛け、アシユマの手をそつと握った。

アシユマはそれに気付き、アーチェルの手を握り返した。

第七節 ファースト・キス

アシュマ達一行は、銀龍に乗り、ヨデイの『コネ』を訪ねて、アヘイビアの西海岸に沿って北上をしていた。

そこはフェイ・アメールの港街にあり、アシュマ達は『そこ』を目指していた。

フェイ・アメール港へは推進系に問題がある今の銀龍では、到達するまでに時間が要った。

その間に、敵に察知されて戦闘に突入しても、良い筈だったのだが、途中戦闘等は無く、穏やかに航行していた。

もしくは、よもやそんな事はないかと思われるが、フェイ・アメールで待ち伏せをされている可能性もある。

ヨデイにとってはいつもの、緊張を強いられながら、港の寂れた場所に船を停泊させた。

「じゃあ、チョツと行って来ますよ」

ヨデイが言葉も軽やかに言った。

「ホントに護衛はアタシ達で良いの？」

アルミナが言う。

「私は武器を持ってないのよ？」

エファールも至極当然な事を言った。

「途中で購いますよ。他に何か入用の物がありますか？ 一緒に買ってきますよ？」

ヨデイが言った。

「じゃあ、対魔導機兵用ライフルの弾、十四、五ミリ弾五百発程、後ライフルのメンテ用品、あと丁子油に打ち粉……そんな物かな？」

オルバニアンが遠慮もせずに言った。

「アシュマ君は？」

「俺はいい」

「若！」

「なんだ、アベニ……」

「ぷっ、わ、若？」

エフアールは吹き出した。

「そういえば、エフアール様は、アベニ様が喋る所を始めて見るのでしたね。変……ですか？」

それを受けてアーチエルが言った。

「変も何も……貴族か王族でも、あるまいし、『若』なんて……」

「何をいう！ 此処におわす方をどなたと……」

アベニがそう言いかけるのを、ヨデイが目で制した。

アシュマはそれを見逃さなかった。

が、見て見ぬ振りをした。

それに気付いたのは、どうやらアシュマ一人だけだった様だ。

ヨデイも誰かに悟られていないか辺りを一応警戒してみる。

が、それは大丈夫の様だった。

再び、

「誰か物入りの人はいませんかねえ？」

慇懃に訊いていた。

「若！」

アベニが言った。

「なんですか？ アベニ」

「棒手裏剣を五十本程と、ホルダーをお願いするでござる」

「アベニ、何を言っているんだ？ 棒手裏剣はまだ余ってるし必要ないだろう？」

「全部アシュマ殿の物にござる」

「俺に？」

アシュマが自分を指差す。

「そうでござる」

「アベニ殿、忝^{かたじけな}く存ずる」

アシュマが頭を下げる。

「止めて欲しいでござる。拙者、アシュマ殿に頭を下げられる様な

事を、した覚えはござらん。こそばゆいでござる」

エファールはアシュマとオルバニアンを見比べていた

「ねえ、貴女、アシュマがオルバニアンの仇って、本当？」

不意にエファールはアルミナに訊いてみた。

「さあねえ？ 親の仇って言うけど、詳しい事は知らないよ」

アルミナはそう言うに止まった。

「そう……」

「では行つて来ますから、後の事はよろしく」

ヨデイが出がけに言う。

「おう！ 任せとけ！」

それをオルバニアンが受ける。

こうして、ヨデイ達一行は船を出て、先ずは武器屋に行った。

エファールの剣を購う為だ。

彼女は先ず、持ちやすさ、バランス、そして良く切れるか、という事を念頭において剣を選んだ。

選んだ剣は品が良く、ミスリルとゲルマニウムの合金で作られた物だった。

これをヨデイは現金で買ってエファールに手渡した。

エファールは大層喜んで、アシュマに見せるのが楽しみだとも言った。

続いてヨデイ一行は、フェイ・アメールの港町にある、場末の寂れた酒場にやって来た。

裏道に面した入り口から、地下へ入って、地下一階にある、木製の扉を開いた。

中は意外に広い感じがした。

「マスターはいるかい？ 裏口を使いたいんだが」

ヨデイがそう言うと、そこらにいる客全員が、剣等の武器を手にして構えた。

一方、ヨディ側も、アルミナとエフアールが剣の柄に手をかけた。すると、カウンターの奥から、怪しげな男が出てきて、

「ヨディの旦那じゃないですか。一瞥以来ですな」
そう言った。

「このお方は、エバスの旦那のお知り合いだ！ 皆、剣を収めろ！」
男はそう言って、そこいらにいる皆をなだめた。

「さあ、旦那こっちだ」

そう言われてヨディは裏口へ続く、ドアを潜った。

そこは直ぐ裏口と言う訳でなく、部屋が一つあって、それが裏口に続いていたが、実際用があったのはこの部屋だった。

男から電話機を借りた。

この電話はボタンが一つしかなかった。

つまり、一回線しかない、と、言う事だった。

ヨディは受話器を手に取り、ボタンを押した。

数コールの後男の声が出た。

『オロだ。誰だ？』

「オロか？ 僕だ、ヨディだ」

『どうだ？ 顔の方は？』

「じっくりしてるよ」

『どうだ、電話じゃなんだ。合って話でもどうだ？』

「こっちもそのつもりなんだ」

ヨディは、帰ってきた次の日に、皆に触れて回る。

「さて、これから僕の言っていた、『コネ』に行きます」

「『皆さん、粗相の無いように』ってか？」

オルバニアンが茶化した。

「まあ、それもありますが、そんなに気にする事は、ありません」

「どんな人なの？」

「オロ・エバスと言って、汎用型電腦装置等の基本OSを作って財

を成し、今では鉄鋼や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器等も取り扱っている、豪商ですよ。今や世界の五パーセントは、彼の財力とまで言われ、唯一ドートネーゼと対等に渡り合っている、数少ない人のうちの一人です」

「オロ・エバス！？ 大富豪じゃないの！？」

エフアールが驚いた。

「まあ、そうなんですの……」

アーチェルが感心した。

「まあ、俺らに取っちゃ、雲の上のお人って奴だな」

オルバニアンが言った。

「オルバニアンやアーチェル様だって、十分雲上人なのよ？ それくらいの自覚は持って」

エフアールが言った。

「ここに、『そんな事は関係ございません』って奴が一人いるぜ」「誰？」

「アシュマ・アトーって言う、ぶっ壊し屋がさ」

「ああ。それは言ってる」

すかさずアルミナが茶々を入れる。

「聞こえてるぞ」

アシュマが言う。

「まるで俺の通った後には、草木も生えない様な言い方を……」

「事実アシュマの通った後には、屍の山が……」

オルバニアンがそれをからかう。

「オルバニアン様！」

オルバニアンが振り向くと、アーチェルが睨んでいた。

「おっかねえ……あれこそ、ぶっ壊し屋かもしんねえ」

見ると、アーチェルはもう、自分の仕事をなしていた。

「俺も仕事に戻るか……アルミナどいてくれていいぞ。俺がいる時は、そこは俺の席だ」

オルバニアンは副操縦席に付いた。

「あいよ」

アルミナは言って席を空けた。

「今、どの辺を飛んでいるのかしら？」
続いてアルミナが訊く。

「もう、エバス邸の敷地内ですよ」

ヨデイが言った。

「敷地内って海崖と、見渡す限りの森と草原じゃない？」

「そうですよ」

「そうですよって……じゃあ、これ全部が敷地なの？」

「だから、そうですってば」

「いつ着くの？」

今、銀龍は推進系に問題があった為、遅い速度しか出せなかった。

「そうですねえ、あと一時間といった所ですね」

「そんなに！」

「ヨデイ！ レーダーに感あり、だ。俺は砲座に行く……」

オルバニアンは立ちかけた。

「あー、大丈夫です。敵じゃありませんよ」

「？ そうなのか？」

『こちらはエバス特設空軍である。貴船の所属と船名、船の責任者の名前と、目的を言ってもらおう』

「あー。こちらはエバス財団・貿易部所属銀龍号。責任者はヨデイ・ヨフル。オロ・エバス氏とのアポイントメントを取ってある」

『……………確認した。ではこちらの指示に従って、付いてきて貰いたい』

「了解した」

「すごいねえ。特設軍と名前を冠しているけど、要はエバス財団の私兵と、言った所なんだろう？」

アルミナが感心した。

「そうですね。装備は常に最新鋭。兵達もよく訓練されている。アヘイビア全軍と、十分にタメを張れます」

「へへええ」

子一時間も経った頃、やっと建造物らしき物を見た。

「あれが、オロ・エバス氏の邸宅ですか？ 随分殺風景と言いまし
ようか、なんと言いましようか……」

エファールが言う。

「いや、あれは私設空港ですよ。邸宅はもう少し先です」
ヨデイが言った。

「うへええ。まだ先があるの？」

アルミナが、辟易した感じで言った。

『こちらエバス管制塔……』

「ほらきた」

ヨデイは管制塔の指示に従って、銀龍を着陸させた。

銀龍は格納庫に収められ、点検が始まった。

それと同時にヨデイ達が、エバス特設空港に降り立った。

ヨデイ達は空港に来ていた、リムジンに乗りエバス邸へと向かっ
た。

「うわ、すごい車！」

「ほんとですね」

オルバニアンとアーチエルが驚いていた。

「駄目でしょ。二人は一応王族なのだから、このくらいの事で、驚
いてはいけません」

エファールが言う。

「じゃあ、エファールは驚かねえのかよ」

「私は驚いても良いのです」

「何だよそれ？ 意味わかんねえ」

「ヨデイかアシュマぐらいに堂々としていなければなりません」

「俺は十分驚いているがな」

アシュマは言った。

「私の言った事が、無駄になっちゃうじゃないの。もう」

エファールが憤った。

「まあまあまあ」

ヨデイがなだめて、一行の乗ったリムジンは、エバス邸へと向かった。

一時間程走った場合、オロ・エバス氏の邸宅が見えてきた。

エバス邸の印象は、中世期の邸宅、マナーハウスそのものだった。それも普通の物ではない。

規模といい、造りといい、豪勢（こうせい）で豪奢（ごうしゃ）。

それでいて堅牢な物だった。

「すごい……私の国のお城より大きい……」

アーチエルは絶句した。

絶句したのはアーチエルばかりではなかった。

ヨデイ以外の全員が、絶句していた。

「こんなお城みたいな邸宅に住んでみたいですか？　アーチエル様
改めて、エファールがアーチエルに訊いてみた。

「住んでみたいかと、問われれば、住んでみたくもなるでしょうけれど、私は愛する人と一緒ならば、どこにても構わないと思っています
ます」

アーチエルはエファールに微笑んでみせる。

「あら、まあ」

（この子ったら……まあその辺が、アシュマのお気に入りたる、所（ゆ）以（えん）なのかも知れないわね。私も頑張らないと）

エファールがそう思っていると、車はロータリーに差し掛かり門の前で停車した。

「まあ、大きな噴水」

アーチエルは、そう言って眼を見張った。

ロータリーの真ん中には大きな噴水があって、見る者を和ませて

いた。

「うお！ 本当だ！」

オルバニアンがはしゃいだ。

皆が車から降りた頃合に執事がゆっくりやって来て、

「こちらに御座います」

と、案内をした。

「皆、見てみろよ！ でっけえって！」

オルバニアンがはしゃいでる。

「良いから、あんたは恥かしいからこっちきな」

「な、何だよ、アルミ……い、いて。いてえって」

アルミナが真っ赤になりながら、オルバニアンの耳を引っ張って引いていった。

中は、中央部分が吹き抜けになっていて、天井からクリスタルガラス製の、豪華なシャンデリアが釣り下がっていた。

中央の吹き抜けは三階まで続いており、吹き抜けに沿って階段が左右対称に続いていた。

階段ホールにはステンドグラスがはめ込まれていた。

一行は直ぐに二階に上がられ、とある一室で、身体チェックを男女別に行わされた。

そこで、武器の類の物は、一時預かりという事になった。

そして今度は、三階に上がられ、正面の大きい部屋に通された。

「オロ様、ヨディ様御一行を、お連れ致しました」

侍従が言う。

「うむ。分かった。お前は下がっていいぞ」

オロと呼ばれた青年はそう言った。

「畏まりました」

オロと呼ばれた青年の部屋は広く作られていた。

高価な椅子やテーブル等の調度品が置いてある。

茶会でも出来そうだった。

他にはビリヤードが置いてあり、ちょっとしたバーもある。

壁には本棚があつて、その中にはあらゆるジャンルの本が、ぎっしりと詰め込まれている。

政治、経済、歴史、科学……。

数え上げたらきりが無いくらいだ。

幅広な机の上には個人用電脳装置が所狭しと並べられていた。

「一瞥以来だな、アル……いや、ヨディ！」

オロが右手を差し出す。

「そっちこそ相変わらず手広くやってる様で何よりだ。オロ！」

二人は握手を交わす。

「何を、手広くやってる物か。内情は火の車さ」

「何を言ってるんだ？ 全世界の五パーセントもの資産があるじゃないか」

「いや、それが軍事部門が結構金食い虫でね、参ったよ」

オロと呼ばれた若者はスラリと背が高く、髪は肩まで伸ばして、しかも巻き毛で黒髪だった。

背の高さはヨディと同じぐらいと言った所だろう。

褐色の肌に、黒い瞳。

歳の頃は二十七、八であろうか。

濃紺の品の良いスーツを身に着けている。

どこかオリエンタルな雰囲気漂わせた青年であった。

「すげえな、ヨディって……あの、オロ財閥の頂点、オロその人と、ああも対等に喋っているよ」

アルミナは言った。

「さて、君の仲間を紹介してくれないか？ ヨディ」

「わかった。……先ずこちらのお方、レキシタニアの王女、アーチエル・ナヴィア・アップルトン様にあらせられます」

オロは、暫く我を失った。これまでに彼女の様に美しく、凜として、清楚で、可憐で、儂げな少女を見た事が無かった。

「これは、これは。これ程までに御美しいとは。噂以上に御座いますな。いや失礼。……遠路はるばるかような所においで頂き、恐悦

至極に存じます」

「いえ、こちらこそ。オロ様自らお出迎えていただき、有難う存じます」

「レキシタニアの王女様に、お出で頂いたとあっては、お出向かえするのは当然の事でございます」

アーチエルは左手の甲を差し出した。

そこにオロはキスをした。

「そしてこちらが、オルバニアン・マグマイヤーこと、ノリトレアの王子、ルーラン様に御座います」

ヨディはオルバニアンを紹介した。

「ルーラン様、かような所において頂き、光栄の至りに存じます」

「うう、うむ。た、大儀であ、ある」

「ぶつ、オルバニアン、普段どおりやればいいんだよ、変に意識すると変になるよ」

アルミナが笑う。

「なっ、なんだとう！？ 俺は、こうした席にたって少しでも練習をだなあ……！」

「その言やよし！ ……さて、次はアルミナ・ラ・シア嬢。彼女は……」

「ああ、存じ上げてますよ。『隻眼のアルミナ』様ですね。こんなに愛らしい人とは思いませんでした。よろしくお願いしますよ」

「そんなあ、愛らしいだなんて、何といえいいのか、分からなくて……いやア、たははは」

オロはこちらにも手の甲を取りキスをした。

「次は、エファール・ソーフア。レイピアの達人です」

「エファールに御座います。エファールという名前よりもレディー・エレノイの名前の方が御耳によく聞かかもしれませんわ」

「では貴女があの『閃光』の？ ソーフア家の方とは存じませんでした。以後お見知りおきを」

「いえ、わが家の事までご存知とは。こちらこそよろしく願ひし

ますわ」

やはり、オロは手を取りキスをした。

「次は、アベニ・ロー。以前はある国の草の者をしていたとか」

「失礼ですが、この方についての知識は無い物で……」

「あつたら、困る。何せ草の者じゃからの。知られていない方が良
いのじゃ。ほっ、ほっ、ほっ」

「これは、失礼」

「いや、それでよいのじゃ。ほっ、ほっ、ほっ」

「では、最後に……」

「アシュマ・アトーだ」

アシュマは自分で名乗りを上げた。

アシュマの声音にオロは多少、気圧されつい、自分の名乗りを忘
れた。

アシュマの声音は普通の大きさだったにもかかわらず、である。

オロはすぐさま、はっ、と気付き、

「……あ、ああ……オロだ、宜しく」

そう述べただけに至った。

「さあ、皆さん夕食まで時間があります。席を設けてあります。そ
れまではゆるりとしてお休み下さい」

気を取り直してオロは言った。

オロは呼び鈴を鳴らした。

「お呼びで御座いますか？」

侍従がやって来る。

「お客様を、客間に通して、差し上げろ」

「畏まりました」

ヨディを除く六人は、オロの執務室から出て行った。

「どうだった？ オロ」

ヨディはオロに訊いた。

「やっぱりアシュマ殿かねえ。威圧感というか、オーラがあるとい
うか。気圧されたね。後は、アーチェル様かねえ。あの人もオーラ

がある。あれ程美しいお方を、目にした事が無い。雲上人と言う感があるね。彼女を僕にukれないかい？ 幾ら位かな？ ヨディ」

彼はデスクに腰を乗せそう言った。

「悪い癖だぞ、オロ。何でも金で買おうとするのは。それに彼女には想い人がいる」

「誰だい？ その果報者は？」

「アシュマ君だよ」

「『閃光』の……か。でも、恋愛には疎そうじゃないかい？」

オロはデスクの上にあるシガーケースからシガーを取り出す。

「彼自身はね。何故か、周りが放って置かない」

「羨ましいね」

シガーの口を切ってマッチでシガーに火をつける。

「全くだ」

「そうだ、君達を、チョツと彼らに、紹介してみるか……」

「？ 何だい？」

オロはすぐさま、客であるアシュマ達をオロの執務室に呼んだ。

「どうなさったのですか？ オロ様」

皆を代表した形になってアーチェルが訊いた。

「ええ、皆さんをチョツと面白い所に」

「??」

一行は、オロについていった。

一階から地下へと続く階段を降り、地下一階、二階、三階へと降りて行って、終には最下層のへと着いた。

最下層の通路は狭く、壁はコンクリートがそのまま打ちっぱなしで、ライトは電球がむき出しで薄暗かった。

所々コンクリートに染みが出来ていて、あまり清潔とはいえなかった。

その階段を抜けると、そこには大きな空間があった。

空気が籠っている。

その空間には魔導機兵が七〇八機、銀龍級のサイコ・フライヤーが二機、その他大小の武器類。

そして男達の怒号と罵声が、行き交っていた。

「こう言う所です。ミス・アップルトン」

オロが言う。

「!？」

アシュマ達一行はその部屋……ホールとでも呼べば良いのか……
兎にも角にも、その部屋へ入っていった。

中では、男達が大きい声で何かを話し合っていた。

いや、言い合っていた。

「だから、それじゃ駄目なんだ!! 勢いだ!! 勝機は今しか無いんだ!!」

「そんな事をしたら、市民に被害が出る。我々の評判が落ちる! それはまずい!!」

「評判、風評……そんな事で奴らに勝てるものか!! 迎賓館を爆破して、各地の仲間は勢いづいている!! チャンスは今しかない!!」

「そんな事は分かっている。こちらに分かっていると言う事は、ドートネーゼも分かっているという事だ!」

「! オロ様。これは?」

アーチェルはオロに向かって訊いていた。

「通称『七つの十字架』。ドートネーゼにターゲットを絞る義勇軍、
と言えば、聞こえは良いけれどね」

「七つの十字架!! テロリストじゃねえかよ!!」

そうオルバニアンが叫ぶ。

「なんだあ? あの餓鬼共はあ?」

そうこうしているうちに、アーチェルはつかつかと階段を降り、
先程強行路線をひた走ろうとしていた団員の前に、歩いて来た。

「あなた方は、あのテロで、幾人の方が死んだと思っているのです

か？ 幾人関係の無い人が亡くなったと、思っているのですか？」

アーチェルは言いのけた。

「何、青臭い事言ってやがる。あの程度の犠牲で済んだんだ。良かったじゃねえか。こう言う事にゃ、犠牲が出るんだよ。しかたねえだろ！！」

「あなた方は、人の命を、何だと思っているのですか！！」

アーチェルには珍しく大音声に言った。

「うっ……なんだこの姉ちゃんは！？」

男は怯む。

「それ御覧なさい。犠牲者が増えると、我々の活動にも支障が出る。そういう事をこの女性は……」

「貴方も一緒です！ 人の死を損得勘定で推し量って！ 恥かしいとは、思わないのですか！」

アーチェルは、もう一方の男性にも、手厳しく言った。

「ううっ……！」

男は呻いて言葉を失った。

アーチェルは人の死に敏感である。

こう言う輩達に容赦はしなかった。

その言葉は辛辣だった。

「大体この姉ちゃんは、何者なんだよ？」

「敵の草ですかねえ？」

「ひん剥いて調べてみるか？」

「まずい！ アーチェル様が危ない」

オロが、言うか言わないかの内に、アシュマは、階段の手すりを乗り越え、十数メートル下の地面へと降り立ち、アーチェルの前に出た。

「アーチェルをどうこうしようと言うのなら、俺が相手になるぞ。死にたい奴は誰だ？」

「アシュマさま。殺してはなりません」

アーチェルが低く呟く。

「分かった」

アシュマが頷く。

まず、右手から男が拳を振り上げながら、やって来た。

アシュマは、それを避けると、男の拳をくいと捻って、男を投げ飛ばした。

そんなに特別派手な事はしていないのだが、相手の方が勝手に投げ飛ばされて行くという感じだった。

左手からも男が殴りかかってきたが、相手のストレートを見切り、カウンターで掌底を喰らわせた。

相手の男は、その場で縦に半回転をし、ぐったりしてしまった。

正面から、体重は百五十キログラム程はありそうな大男が向かってきた。いつもならば半身に身体を避けて相手をいなすのだが、今、後にはアーチエルがいる為、それが出来なかった。

アシュマは深く呼吸し丹田に力を込め、腰から捻りを入れ、それを胴、そして肩、前腕へと繋げた。

そしてそれを相手の鳩尾へ叩き込むと同時に、

「はっ！！」

と、気合を発した。

その瞬間、掌が発光し、相手に向こうへ吹き飛ばしていた。

「何だ？ 今のは！」

ヨデイがその疑問に、思わず独りごちた。

「多分『発気の術』で御座ろう」

アベニが言った。

「『発気の術』？」

「臍下丹田に込めた気を、経絡を通じ発気し、生身での戦闘において、防御や攻撃に転ずる技で御座る。しかしこれ程までの威力を持った『発気の術』を、見た事が御座らん」

そうこう言っている間に、下では十五〜六人程の男達が伸びていた。

「オロ。そろそろ止めた方が、良いんじゃないのか？」

ヨディがそう言うと、

「はっ」

と、気づき、オロは大慌てで、

「お前達やめないか！ その方々は私の客人である！」

そう言って、喧嘩を止めさせた。

そして、急いで下へ行き、

「御怪我はありませんか？ アーチェル様」

アーチェルの身体を気遣った。

「私は大事ありません。アシュマさまは大丈夫ですか？」

「俺も大丈夫だ」

「本当に？」

「顔でも身体でもどこかに打たれた後があるか？」

「いいえ」

そう言いながら、アーチェルはアシュマの手を取り、ぎゅつ、と握り締めていた。

それは、アーチェルがアシュマの身体を、気遣った証でもあった。

「ならそういう事だ」

「まあ、アシュマったら、アーチェルのナイト気取で……」

エファールが悔しがった。

「それよか、直接アシュマのところに行って、アピールするのがいいんじゃない？」

アルミナが言った。

「そうね。そうよね」

エファールも納得した。

「オロ！ 何の真似だ！」

アシュマが言った。

「何の真似とは？」

「アーチェルを危険な目にあわせて」

「私にはそのつもり等無かった。これは本当だ。信じてくれ」

「では、一体……？」

「同じドートネーゼを狙う狩人として、親睦を深めようと思ってね……実際……」

そう言いながらヨディ一行を、次の部屋へ招き入れた。

「これだけの物を用意させている……」

見せられたのは、この地下で、広さは到底どのくらいかは分からない程広い敷地に、生産ラインが何本、何十本と走っており、数百機もの魔導機兵、数十隻の艦艇、大小の様々な武器、武器、武器……。

「す、すごええ。良くこれだけのもんを揃えられたな。もう少し前に、発見されてもよさそうなモンなのによ」

興奮気味にオルバニアンが言う。

「発見されては困るのですよ。セキュリティーも何十にも掛けていますし、地下にこれを作ったのも発見されない為です。勿論あなた方は例外です」

オロが解説する。

「じゃあ、さっきのアシマにやられた連中……あいつ等も、セキュリティーチェック済みなのかよ？」

オルバニアンが訊き質した。

「もちろんです」

オロが返した。

「ふうん」

オルバニアンは、気の無い返事をした。

「しかし、彼らと貴方を引き合わせたのは、間違いだった様だ」

「そりゃ、そーだ。俺らは別に、ドートネーゼに対する狩人って訳じゃねえからな」

夕食の時間となった。

オロが夕食会を主催し、皆を招待する、という形になった。

夕食会を執り行う部屋は、人数に合わせて小規模だったものの、

豪華一点張りの部屋だった。

部屋の柱、梁、は旧時代の手の込んだ装飾が施されており、壁や天井には、見た目にも派手で美しい文様が描かれていた。

シャンデリアもクリスタル・グラス製の物で、光が屈折と乱反射をして美しく光り、それだけでとても豪華な物に見せていた。

椅子とテーブルはセットで、こちらにも旧時代の手の込んだ装飾がなされていた。

テーブルにはテーブルクロスが掛けられ、その上には燭台がのせられ、蠟燭が明かりを点していた。

皆はそれぞれ好きな席に着いた。

左側にはオルバニアン、アーチェル、ヨディ、右側にはエファール、アシュマ、アルミナが、オロの向かい正面には、アベニが着いた。

アシュマは、女共二人に、半ば強引に誘われた形になった。

アーチェルは少し残念そうだったが、仕方が無かったので諦めた。会食は和やかに始められた。

オロは差しさわりの無い話から、ジョークまで、色々なネタで、皆を退屈させない様に工夫を凝らした。

時には、自分のチョツとした失敗談を含めた、過去の笑い話を。

その時エファールが、

「そういえば過去の話といえば、アシュマじゃない？ 私以外にどれ程の女を泣かせてきた事か……？」

その言葉を聞いて、アーチェルは、はっとした。

迂闊にも、そういえば、そうだったのだ。

エファールは、自分の知らないアシュマを知っている。

その事に思い至った時、少し胸が窮屈になる様な感じがした。

「私が知っているアシュマは、十五、六の時。それまで何をやっていたかは知らないし、その後何をしていたかも知らない。よければ教えて」

「いいのか？」

アーチエルを見据えて、アシユマは訊いた。

アーチエルはゆっくり首肯して、やわらかくアシユマを見返した。「十三、四の俺はまだまだ駆け出しのヒヨッコも良い所で前にも言ったとおり『無茶』修行を繰り返しては、ボコボコにされて、追い出された物さ。それが、やっと都会に出てきた頃だ。だが、中に珍しくボコボコにしないで、俺に修行をさせてくれた人もいた。ハワ・ゲン・ゼウスという人だ。小さな町道場だったよ。そこで俺は住み込みで修行をした」

「チョツと待て！ アシユマ。その、ハワ・ゲン・ゼウスというお人、本名はハワ・ロン・イヴァスという名ではなかったか？」

オルバニアンが訊いた。

「ちよつと、話の腰を折らないでよ、オルバニアン！」
アルミナが言った。

「大事な事なんだ、アシユマにとって！ どうなんだ？ アシユマ」

「確かに、そうも呼ばれていたが……」

「やはり……」

「確か、武名で名高い、ノリトレアの前武芸指南役でしたね。そのお方は。確か十数年前に職を辞して以来、行方が分からなくなったと聞き及んでいます……」

ヨディが言った。

「そういう事なんだ。だからアシユマは偉いお人に教えを教わったんだよ」

「その先生には『お前は我を通すのだな』と、言われたよ」
「え？」

オルバニアンが訊き返す。

「先生に言わせれば、飲み込みが早いとは言っていた。事実、俺もそうだと思っていた。そこから俺なりの工夫をしていたんだな、俺は。半年修行して、そのうち道場の中じゃ俺に勝てる者は居なくなつたよ。先生を除いてな。その先生にも三本の内二本は取れる様になった。そしてある日先生に呼ばれたんだ」

「免許皆伝だな？」

オルバニアンが、興奮して聞いた。

「いや、違う」

アシュマは即座に否定した。

「『そなたの剣は、人を殺める事に固執した邪道の剣である故、二度とこの道場の敷居をまたぐ事、^{まか}罷りならん』と言われたよ」

「その後は？」

オルバニアンが訊いた。

「俺をボコボコにした道場を回って、お礼参りさ。後は、剣の修行……いや、武道なら何でも良かった。柔術や、合気の術、唐手から拳法まで、取り合えず納得するまでやるんだよ。それこそ道場で、俺に勝てる者が居なくなるまで」

「強くなる訳だわ」

アルミナが嘆息した。

「さあ、この辺で……」

アシュマが言いかけた時……、

「チョツと待って！」

エフアールが言った。

「最初のハワ先生？ その時に女の人は居なかったの？ もう少し後でもいいわよ。いなかったのかしら？」

目が据わっている。

大分呑んだようだ。

「エフアール、からみ酒になってるぞ」

アシュマが窘めた。^{たしな}

「チョツと位いいじゃない？」

「居た。これで良いか？」

アシュマはちらつとアーチェルの顔をのぞいた。

不安げなアーチェルと眼があってしまった。

「どこ見てるのよ、アシュマ！ 何人くらいの女を、泣かせてきたのよ？」

「もういいだろう？」

「だめよ、教えて頂戴」

アシユマはまた、アーチェルの方を見た。

アーチェルは俯いて、その表情が読めなかった。

「ねえってばあ」

アシユマはエフアールに絡まれた。

「これ以上、絡むな」

アシユマはエフアールを強く窘めた。

エフアールは、アシユマの気迫に気圧されて、言葉を失った。

アシユマは一呼吸置いて、

「さあ、エフア。行こう」

部屋から出ようとした。

「いやあよ、いやあ！ もう少し、ここにいるんだからあ」

アシユマは、その言葉に少しも動じる事なく、エフアールを肩に担いだ。

「アシユマ君どこへ？」

ヨデイが訊いた。

「エフアールを、寝かし付けて来る」

アシユマはエフアールの肩を担ぎ、部屋を出た。

「さて、場も白けてしまった事だし、お開きという事で……」

ヨデイがいかけるのを……、

「場をお開きにする前に、一言宜しいですか？ 皆さん」

オロが言った。

エフアールの寝室で、アシユマは、エフアールを寝かしつけていた。

アーチェルが寝ようとした所、丁度エフアールの寝室に差し掛かった。

ドアが少し開いていた。

気になって、中を覗いて見た。

「アシュマなんて嫌いよお……あっち行って！」

エファールが喚く。

アシュマがエファールを抱き上げ、布団に下ろし、靴を取ってやり、寝かしつけていた。

急にエファールは、アシュマに抱きつきキスをした。

いや、キスをしている様に見えた。

「あ……」

アーチェルは小さく声を上げて、その場から逃げた。

アシュマは耳ざとく、それを聞き逃さなかった。

アシュマが行き掛けるのを、エファールは抱きついて引き止めた。

「どうして……？」

再び、エファールは、アシュマに抱きついてきてキスをした。

エファールは舌を絡めて来ようとしたが、アシュマが頑なに口を閉じて拒んだ。

エファールが、アシュマの頬を張った。

「そんなに、あの小娘の方がいいの!？」

「済まない。エファ」

「もう、その名で呼ばないで!! 行きなさいよ、どこへなりとも!!」

「済まない」

アシュマはそう言って、部屋から出て行った。

「……………普通、あそこで本当に部屋から出て行く? 馬鹿にしないでよ!」

エファールはそう吐き棄てた。

アシュマは、アーチェルの部屋の前に来た。

「アーチェル、アシュマだ」

「……………」

気配で、アーチェルが、扉の直ぐ裏に居る事が分かった。

「アーチェル。何を見たかは知らない。だがあれは事故の様なもので……」

「御自分の都合の悪い事は、全て事故になさるのね。アシユマさまは。じゃあ、これまでの女性との付き合いも全て『事故』？ エファール様の事も全て『事故』？ そしてわたくしとの日々も、全て『事故』？ ……お願い……せめて、お側に……」

アーチェルは、泣いている様だった。

余程、アシユマとエファールとのキスが、堪えたらしい。

「……アーチェルここを開けてくれ」

アシユマが言葉をかける。

「……………」

アーチェルの返事は無い。

「……アーチェル……」

アシユマが声をかける。

声音は優しい。

「……………」

それでも返事は無い。

「……………」

アシユマも声が無い。

「……ちがう……わたくしの……言いたかった事は……」

アーチェルが声を返す。

悲痛な声だ。

「……わかった。済まなかった。もう行く」

アシユマは居た堪れなくなった。

「……お願い、謝らないで……」

「え……？」

「……御免なさい。そうじゃないの……。わたくし、それ程、心が、広くないみたい……胸が、痛い、苦しいの……とても……」

アーチェルが胸中を吐露する。

「アーチェル……」

「……だから……わたくし……会えない……」

「それが本心なのか？」

「………わからない……」

「そうか……それじゃ」

「………まって………」

「アーチェル」

その時ドアが少し開いた。

アシュマはゆっくりドアを開き、部屋の中を入るとゆっくりドアを閉めた。

「アーチェル」

アーチェルはドアの裏側で蹲うずくまっていた。

アシュマは膝を付きアーチェルの顔を覗いた。

「……わたくし、アシュマさまのお側にいられば、それでいいと思ってた。でも、さっきの……エファール様とアシュマさまを見て……見てしまって……わたくし……わたくし、嫌な女だわ……さっきので嫉妬して……」

アーチェルは自己嫌悪に陥っているようだ。

身体を小刻みに揺らし泣いている様だった。

色んな想いがアーチェルに去来する。

アーチェルはそんな想いに翻弄されていた。

「アーチェル……」

アシュマの声音は優しくかった。

愛に無縁な男が発するものとは思えなかった。

アシュマはアーチェルに心を動かされつつあった。

「……こんな娘、嫌いになったでしょう？」

アーチェルは未だ泣いていた。

「そんな事は無い」

「それでも……」

アーチェルは何かを口にしようとしていた。

言葉にする事で無形の物を形にしようとしていた。

「それでも？」

アシュマが聞き返す。

それで次の言葉を促す。

「……き……」

「？」

「……すき……」

「アーチエル……」

「それでも、好きなの！ ……始めてあった時から、お慕い申し上げておりました！」

アーチエルは終に自分の胸にある想いを言葉にした。

アシュマへの告白。

愛をもたない男への告白。

例え拒絶されても伝えずにはいられない想い。

過去には守ってもらわなくとも良いと拒絶された事もあった。

だが、今のアーチエルの頭の中にその事は入っていない。

ただ、アシュマへの想いを伝える事のみがアーチエルを支配していた。

「……………」

「……………」

暫しの沈黙。

アーチエルはもう駄目だと思った。

自分の思いは届かなかった。

絶望がアーチエルを襲う。

その時、

「……俺もだ、アーチエル……」

アシュマもアシュマの想いを打ち明けた。

アーチエルは始め理解が出来なかった。

アシュマの言っている事が分からなかった。

それが分かった時、改めて涙がこみ上げてきた。

「……アシユマさま！ ……う……うわあああつ！」

アーチエルは顔を上げアシユマの胸に飛び込んだ。

アーチエルはアシユマの胸で泣いた。

周りの事等憚らずに泣いた。

アシユマはアーチエルを抱いていた。

アーチエルが暫く泣いて、落ち着いた頃、アシユマはアーチエルの顎を優しく持ち上げた。

アーチエルはゆっくり目を閉じ、アシユマのなすがままになっていた。

二人は互いの唇を重ね合わせていた。

暫しの時。

そして口を解く。

アシユマはより力を込めて、アーチエルを抱きしめた。

アーチエルは少し苦しかったが、何故かそれが幸せに思えた。

第八節 故郷

「何だって？ ドートネーゼのアジトを強襲する？」

アシユマは、朝起きると、そういう話になっている事に、憤りを感じた。

ここは食堂前。

相も変わらず豪奢なつくりだった。

それに、あまり立ち話をして、格好のつく場所でもなかった。

「ああ、昨日オロと話をしていて、そう言う話になった」

ヨディは言った。

すこし罰が悪そうでもあった。

「二人だけで決めたのか！」

アシユマがヨディを責める。

「いや、皆はいた」

ヨディが慌てて否定する。

「皆？ そうなのか？」

アシユマは信じられないと言う風に言葉を発する。

「ああ、皆、賛成したよ。一応ね」

ヨディが肩をすくめる。

その時、アーチェルが、向こう側からやって来た。

「お早う御座います、アーチェル様」

ヨディが挨拶する。

「お早う御座います。ヨディ様。……アシユマ……さま……」

昨夜の事もある。

アーチェルは、ともにアシユマと目線を合わせる事が出来なかった。

「お早う、アーチェル」

アシユマは優しく声を掛けた。

「アーチェル様と何かあった？ アシユマ君」

ヨデイが何かを感じたのかアシユマに問う。

「い、……いや？ ……アーチエル……」

アシユマが、アーチエルを呼び止めた。

「な、何でしょう？ アシユマさま」

アーチエルは、おずおずと目線を合わせてきた。

「夕べの事だが……」

アシユマがそう言うのと、アーチエルは耳まで真っ赤になって、顔を手で覆ってしまった。

「夕べの事を、話さなくてはなりませんか？」

キスの事を思い浮かべた。

アーチエルにとっては恥かしい事だった。

それを話さなくてはならないのか。

少しばかり心に抵抗が残る。

「い、いや、そっちの方じゃなくて……夕食会でのドートネーゼの話で……」

アシユマはアーチエルの様子で察したのか少し狼狽える。

「！ わたくししたら……てっきり」

勘違いした事にアーチエルは恥じた。

顔まで真っ赤だ。

「王子様にキスでもしてもらったかい？」

ヨデイは鎌を掛けてみた。

「！！ ……何故その事を！？」

アーチエルは面白いほど狼狽える。

「アーチエル、鎌だ、鎌！」

アシユマは慌ててアーチエルを制しようとする。

「釜？ 窯？」

「大丈夫ですよ。皆には秘密にしておきます」

ヨデイがそう言った。

「あ、有難う御座います」

アーチエルが頭を下げる。

「で、アーチェル。昨日の話だが、OKしてしまったのか？」
アシュマがアーチェルに訊く。

勿論ドートネーゼのアジト強襲の話だ。

今度こそアーチェルは理解して、

「夕べは少し混乱してまして……」

と、言葉を続ける。

続いてエファールがやって来た。

「あ……。エ、エファール様、お、お早う御座います」

アーチェルが挨拶した。

少しぎこちない。

夕べのアシュマとエファールの事、そしてアシュマと自分の事が頭をよぎった。

エファールはその様子で、全てを察したかの様だった。

「王女、自分を『様』付けで御呼びなさるのは、どうかおやめ下さい。畏れ多い事に御座います故」

そう言ってエファールは膝を折った。

「でも……」

アーチェルが困惑する。

どう心の整理をつけて良いか分からない。

「どうぞエファールと、呼び捨てにして下さいまし」

「そんな……では『エファさん』ではいかがですか？」

アーチェルが辛うじて言う。

「アーチェル様が、そう御呼びになりたいのなら」

「では、エファさん、お立ち下さい」

「はい……」

エファールは立ち上がり、アシュマ達と共に、食堂に入って行った。

朝食である。

食堂で、皆席に着いて、侍女達に給仕を受けていた。

「エファールは……居なかったよな」

オルバニアンが言った。

夕べの結審の場である。

「あゝら、あの時間、あの場所に居て、そんな会合に出席できて？」

エファールは顔を澄ます。

「アシュマと何してたんだよ」

「あら、野暮な事はきかない物よ？ お子様ねえ」

エファールがからかう。

「なっ！ 何だとう！ それくらい分かるわい！ せつ、せつ、せつ……」

「はい、お子様はそこまで」

「ちがわい！！ あの……」

「ブー。ハイ、時間切れー。もうお仕舞ーい！ 残念でしたー」

エファールが上手く誤魔化し、話を閉じてしまった。

オルバニアンは不服顔である。

「で、どうなんだ、エファール？」

アシュマも訊いた。

「うゝん、良いんじゃない？ それより昔みたく、エファって呼んでもいいのよ？」

「いや、考えておく……」

「アシュマ君だけだよ？ どうするの？」

ヨデイが言った。

「諸君、お早う」

オロが、食堂に姿を現した。

「朝からにぎやかな事で……」

オロが席に着く。

「オロ！ 昨日とんでもない事を、皆に吹っかけてくれたもんだな？」

アシュマはオロに迫る。

多少怒りも覚えている。

夕べの決議の事だ。

「何の事だい？」

オロが惚ける。

口元には笑みがある。

嫌な感じだ。

「ドートネーゼのアジト強襲の話だ！」

「その話か。君はどうなんだい？」

オロが逆に訊く。

「反対だ」

アシュマは即座に答える。

「何故？」

「アーヌが出て来たらどうする？」

「またアーヌか。ヨディも警戒していたが、君は、少し自惚れていないかい？ アシュマ殿」

オロはアシュマに指摘する。

「何？」

アシュマはオロを睨みつける。

「自分に倒せない者が、脅威だと思っている。違うかい？」

「……………」

「我々も対策はしている。私もアジト強襲には参加する」

「……対策とは？」

「電子レンジ」

「？」

「わたくしも反対に御座います」

アーチェルも、反意を顕にした。

「？ 昨日は確か、賛成だったと思いましたが？ ……思い違いましたかな？」

「思い違いをしていたのは、わたくしの方」

アーチェルは普段の彼女とは思えないほどの気迫でオロを睨みつ

ける。

「何故、急に意見を翻ひるがえされた？」

「人が死にまする。それを見とうないだけです」

アーチェルはアーチェルの道理を説いた。

「これはこれは、お優しい王女様で。しかしこれは戦争なんですよ。王女様。戦争で人が死ぬのは当たり前。それがお嫌ならば、この船を降りるがよいでしょう」

「オロ！ 言い過ぎだぞ！」

ヨディが窘たしなめた。

「分かりました。貴方の様な人が、戦争を始めるのですね。それならば、尚更この船を降りる訳には、行かなくなりました」

アーチェルは固い決意を述べてみせた。

「では強襲に参加と、言う事ですな？」

オロが確認の為、訊いていた。

「参加は致しません。監視いたします」

「何をどの様に？」

「悪戯に、人を殺さない様にです」

「くくく……果たしてそんな事が、可能なんですかねえ」

「オロ！！」

ヨディがオロを制した。

「オロ。一つ訊きたい。何故ドートネーゼと戦おうとする？」

アシユマが訊く。

「私の利益を奪うからだよ。露骨に。言っておくが、先に手を出したのは向うだからな」

オロが答える。

「たかがそんな事の為にか？」

「たかが？ 合法的な方法で仕掛けてくるなら、文句は言わん！

武力を使って直接攻撃してくるのだぞ？ これを許しておけるか！

死亡者も百や二百では下らん。千単位だぞ！ 最早これは戦争だ！ しかも、向うから仕掛けてきた戦争だ！ 受けて立たねばな

るまい」

「それは、オロ。お前が強大に過ぎる力を、持つが故ではないのか？」

「力を持って何が悪い！ 金を稼いで何が悪い！ 金、金、金！ 世の中、金だ！」

「それは良い。だが、それに俺達を巻き込むな」

アシュマが、突き放した様に言う。

「もう決まった事なんですね。これは契約だ。反故にする事は許されない」

「……………」

「では、お先に失礼。色々と準備がありますのでね。皆さんはごゆっくりどうぞ」

オロはそう語り消えて行った。

「なんだよ、アイツ。殆ど食ってねえじゃん。何しに来やがったんだ！ いけ好かない奴だな……………！！」

オルバニアンは、吐き棄てた。

皆、朝食を済ませ、銀龍のある格納庫へと目指した。

しかしそこでは、オロの指揮の元、銀龍は吊り下げられ、下部には何かの構造物が取り付けられていた。

「オロさんよオ。勝手に人の船、弄しないでくれねえかい」

オルバニアンが言った。

「よせ、オルバニアン！」

ヨデイが止めた。

「何でだよ！ 銀龍はアンタの船じゃあ、ないのかい！？」

「正式にはオロの船なんだ……………」

「なんだって？」

「そういう事ですよ、オルバニアン君。君こそ勝手に私の船を弄ってもらっちゃ、困るよ？」

オロは勝ち誇った様に言う。

「ちっ！ 分かってるよ。…………嫌味な野郎だぜ」

「よし、OKだ。下ろしてくれ」

銀龍を吊り下げていた鎖がゆっくりと動き、滑車を伝い、銀龍をゆっくりと下ろして行く。

ずしん、と銀龍が地に着いて安定すると、オロはすぐさま中に入った。

「ふむ……。今までどおりだ。悪くない」

銀龍の内部を見回した。

オロに続いて、ヨディ達も中に入ってきた。

「この船の念動力担当者は、誰になるのかな？」

オロが訊いた。

「わたくしです」

アーチェルが言った。

「これは、失礼。てっきりアシユマ殿かと思ったもので。で、アシユマ殿は何を？」

「何もしていない」

「これは、また、鬼虎を持つアシユマ殿とあらうお方が、船の中では何も出来ないとは……」

オロが皮肉を披露する。

「オロ、いい加減よさないか！ お前の悪い癖だぞ」

ヨディがオロを諷めた。

「おっと失礼」

オロはメインの操縦席に着いてしまった。

「おい、そこは……」

オルバニアンが何かを言い掛けた。

いつもならそこはヨディの席だ。

そこを退け。

そう言いたかった。

「いいんだ、オルバニアン」

それをヨディが制した。

ヨディがサブの操縦席に着き、オルバニアンは仕方ないので、後

方の空いている席に着いた。

「おや、通信士がいまませんね。その君、受け答えぐらいは、出来るだろう？ 座りたまえ」

「私の事か？」

エファールが訊いた。

「そう、君の事だ。エファール君と言ったね」

「何も出来ませんよ？」

「いいんだ、そこに座っていれば！ 何度も言わせるな」

エファールは、一瞬、怒りを覚えたが、

「オロ！ 君もだ！ 失礼な事を言うな！」

ヨディが諫めた。

「オロ、どこへ行くんだ？」

アシュマが尋ねた。

「ランプシティですよ！ 聞かなかったんですか？ お仲間！」

ヨディ、君の仲間はどうやら弛たるんでいる様ですよ！ こんな人達と付き合うのは、大概にした方が良さそうですよ」

「オロ！！」

ヨディはとうとう切れた。

「僕が誰と付き合おうが、それは僕が決める事だ！ 君にとやかく言われる筋合いでは無い！ ……君こそ、それで何人の友人を失って来たか、分かつているのか？」

ヨディは怒りを顔あらわにした。

「……君も私から離れようというのかい？」

「そんな事は言っていない」

「……そうか……。まあ、そうしたくなったら言ってくれたまえ。

私は一向に構わない」

「オロ！ ……まあ、いい。……アシュマ君。これから行く所はですね、ランプシティと言って、この国有数の金融と経済の街です。そこにある、中央公園の地下にどうやらドートネーゼのアジトがあるらしいんですよ」

ヨデイが言った。

「そうか。規模は」

「後述する」

オロが言う。

「周りへの被害は？」

「公園の地下数十メートルと言う事なのでおそらくは大丈夫だ。周りには民家も少ない。あっても、オロのランプシティ第二出張所ぐらいな物だ」

「成程、自分の足元を固めようという腹か。それを自分の部下でなく、俺達に危険な事を回そうというのか？」

アシュマはオロを非難した

「それは違うぞ、アシュマ殿。私は貴方の実力を評価して……」

「……………で、任務は？」

アシュマはただ訊くだけだ。

「徹底的に、破壊してくれたまえ」

「わかった」

「戦闘要員は皆行くのだな？」

「ああ、行く」

ヨデイが言った。

「僕とエフアールさん、オルバニアンとアルミナさん、そしてアシュマ君とアベニ。この構成で行きます。アーチエル王女はここで待機を願います」

「分かりました」

アーチエルが首肯する。

「侵入経路は？」

アシュマが訊いた。

「これを見てくれ」

パネルにランプシティの中央公園のワイヤーフレーム映像が、映し出された。

「このこと、このこと、ここ。この三箇所屋根つきベンチに、地下へ

の入り口がある。皆も見て、頭に叩き込んでおいてくれ」

「わかった」

皆それぞれに理解を示した。

「地下のこの部分に、電力を供給する為の巨大な魔導石郡があります。これを潰すと、かなりの被害をもたらす事が、出来るでしょう。ここには最初に着いた人が、破壊を行って下さい。地下六階にあります」

「もう直ぐランプシティだ」

オロが言う。

「分かりましたね？ 皆さん。まずは自分の命を、大切にして下さい。たとえ任務に失敗しても、生きて帰って来て下さい」

ヨデイが指示する。

「それでは困る！ 是が非にでも、やってもらわなければ困る！」
オロが叫ぶ。

オロにとって見ればドートネーゼは宿命の敵。

宿敵は消すに限る。

それはオロの悲願だ。

その為にはアシュマ達に動いてもらわなくては困る。

「そんなに困るのなら、自分で行けよ」

オルバニアンが反発する。

自分達にはその義務が無い。

「なっ……」

オロは言葉を失った。

「よし、皆、そろそろ目標の中央公園だ。準備はいいですか？」

ヨデイが皆を見回した。

皆、ヨデイの言った事に頷く。

「ではアーチェル様、後をよろしく」

「分かりました。お任せ下さい」

アーチェルが優しい微笑を返す。

皆の事を案じているのだ。

銀龍は公園の中央にある草原へと接地し、後部ハッチを開いて、アシユマ達を降ろした。「よし、皆、散開だ！」

ヨデイが号令する。

アシユマとアベニ、オルバニアンとアルミナ、ヨデイとエフアル。

それぞれ三組が、目標のベンチへと向かった。

その公園は縦長の公園で、緑と木々に溢れ、公園中央には噴水があり、そこから左右に芝生が敷き詰められていた。

ヨデイ達が目指す屋根付きのベンチは、公園の両側にある道沿いにあり、皆が降りた所から、それぞれ五百メートル程行った所にあった。

それを監視する者があった。

それは公園のいたる所に、さり気無く設置されており、普通に見ただけでは分かり様が無かった。

監視カメラだった。

内部ではもう既に、迎撃準備に入っているだろう。

アシユマ達はそんな事も知らずに、ドートネーゼのアジトへ足を踏み入れようとしていた。

それぞれ皆は、地下への入り口を見付け、内部へと侵入していた。

アシユマは鬼虎を抜き、地下へと降りて行く。

そこは、壁と言わず、天井と言わず、不思議な文様がびっしりと書かれていた。

もしかして、それは黙示録戦争以前の文字だったのかもしれないかった。

床はガラスの様に磨かれていて、仄かに緑色に光っていた。

アシユマは内部へと進んで行った。

案の定、抵抗する者が表れた。

影の者達がアシユマに斬り掛かる。

アシユマは抜く手も見せずに斬り捨てる。

アステルの隊が現れる。

隊長のアステルはもういない。

副隊長のハーミティーが指揮をしている。

「アステル隊長の弔い合戦よ！ アシュマ！ 覚悟なさい！」

「また、お前らか！ 隊長は死んだのだろう？ 大人しく帰れ！

さもないと今度は俺も容赦はせんぞ！」

アシュマが言い放つ。

ある種、因縁だ。

「アシュマ！ 私達はお前が死ぬまで、最後の一人になろうとも戦うわ」

「馬鹿な！ 自分の命を何とも思わんのか？」

「私達の命はドートネーゼに捧げたわ！ ドートネーゼのためなら何でもやるわ！ 死さえ厭わない！」

「愚かな……」

「そんな事言う権利が貴方にあって？ 貴方にだって命を賭けて守りたいものが在る筈よ！」

ハーミティーは命を捧げると言った。

ドートネーゼはここまで人を狂信的にするものなのか？

何かを信じた人間の力は時として恐ろしいまでの力を発揮する。

アシュマはそれを危惧した。

「そんな物は無い」

「嘘ね。でなければ気づいていないだけ。さあ、みんな、行くわよ」

「また『魔法』か！ 俺には効かんぞ！」

アステルの隊は『魔導書』を開く。

「やらせるかよっ！」

アシュマがウオンを袈裟に斬る。

アステルの隊は後五人。

そんな事もお構いなしで、呪文を唱える。

『あまねく炎、火の精霊よ。』

汝ら、我が命に従い、

集いて、我が敵を焼き滅ぼすべし。
放て、その手で。

ファイヤーボール!!」

マナカードが十数枚焼き切れる。

巨大な火の玉がアシュマに直撃する。

大爆発。

炎の中からアシュマが現れる。

果たして彼は無事なのか？

一方、オルバニアンとアルミナ、ヨディとエフアールの行く手を
阻む者は、影の者ではなくて、黒尽くめの男達だった。

オルバニアンの所では、アルミナが盛大に暴れていた。

階段を下りてそこにあるホールで、例の大剣を振り回していた。

どちらにしても、広い場所でしか、威力を発揮できない武器なの
だ。

(思う存分暴れさせてもらおうよ)

アルミナは心の中で呟いた。

アルミナが剣を振るうたび、敵の黒尽くめの男達が、身体を両断
され、首を、手足を両断されていった。

卑怯にも、後から斬りかかろうとする者がいた。

尤も、乱戦において、卑怯も何も、あった物ではないが……。

兎に角、アルミナが後から狙われた事は確かだった。

敵の刃が、アルミナに襲いかかろうとするその瞬間、アルミナの
剣は高く頂点にあり、振り向いて、後から襲いかかろうとした敵の、
脳天から股までを一直線に断ち斬っていた。

アルミナは眼帯を外して、

「この戦利眼から逃れられる者等無いよ!」
そう言った。

アルミナは、そこで赤い竜巻となって、敵を斬り割っていた。

アルミナは暴れつつも、下へ続く階段の前へと陣地を移動させた。その間にオルバニアンが、下への通路を切り開く役を担った。

腰には、対魔導機兵用の改造ライフルをひっかけ、手にはこの戦闘に入る前に新調した刀を使っていた。

身幅が広く、定寸よりも四寸程長い。

階段から、斬っても斬っても沸いて出てくる敵の多さに、多少の不気味さを伴い、辟易していた。

オルバニアンも、元来の戦闘のタイプとしては、アルミナと同じく、多少の事は目を瞑り、力押しで目標の物を粉碎するタイプであり、こういった狭い場所での戦闘には慣れていなかった。

それでも、ハグム・マグマイヤーの息子である。

そつなく、階段通路の戦闘をこなしていた。

尤も本人は、

「うわ、めんどくせー。俺、こう言うの性にあってねえや！ アルミナ代わってくれ」

と、言ってみせたりもした。

「あたしがやる方が、もっと効率が悪いよ。十倍くらいね」
アルミナはそう返す。

エファールとヨディの場合は、エファールが突破口を開いて先に行き、ヨディが後詰めにまわり、後からの攻撃を防いでいた。

エファールは、その華麗な剣捌きによって相手を翻弄し、目を晦まし、敵を退けていった。

後詰めのヨディは、背中に短めの手槍を背負い、ヌンチャクを遣いながら、相手の剣を折ったり、曲げたり、時には相手の頭蓋を砕いたりしながら、自らも少しづつ後退った。

「数が尋常じゃないな。エファールさん、大丈夫ですか？」

「だんだん、きつくなるわね」

「前衛と後衛を、入れ替えますか？」

「そうね。でも、どちらにせよ一回、次のフロアで、敵の数を、減らしておかないと……」

「賛成だ」

地下三階のフロアにて、ヨディとエファールの二人は、敵の頭数を減らすべく、互いに背中合わせとなって、敵との乱戦を始めた。さすがに、閃光の異名は伊達ではなく、一呼吸の間に三人を突いていた。

それも、皆、致命的な急所を突いていた。

ヨディも武器を手槍に持ち替え、前に振った。

すると短めの手槍は、長さを倍にし普通の槍になった。

ヨディは黒尽くめの男達の攻撃を払い、薙ぎ、そして突く。

黒尽くめの男達は、ヨディの攻撃に、次々と倒されて行く。

二人の攻撃で、見る間に敵の数が減って行く。

暫くすると、急に敵の包囲の輪が二つに分かれて、その場で黒尽くめの男達は、そこに跪く。

そして、包囲の輪が分かれた先には、緑がかった黒色の外骨格を纏った者が現れた。

「アーヌ……か？」

ヨディが訝しがる。

「カフル様、『調整』がまだ済んでおりませぬ。このままでは五分しか戦えませぬ」

「五分もあれば十分。構うでない」

カフルと呼ばれた者はそう言った。

「しかし……」

「うるさい！」

そう言って、付き従っていた、従者の首を刎ねてしまった。

「なんて事を……味方なのに」

エファールが言った。

「使えない物は棄てる。それだけの事だ」

カフルと呼ばれた者は、そう言い退けた。

「気に入りませんね。その言い様」

ヨデイがそう言った。

「我が名はカフル。お相手いたそう。どちらから来られるな？」

二人いっぺんでもよいぞ」

カフルは言い、抜いたレイピアを、エファールそっくりの形で、構えた。

「じゃあ、私から……」

エファールが言い掛けるのを、ヨデイが

「二人がかりだ」

と、言った。

「チョツと、それは騎士道精神に反するわ。私は嫌よ！」

「騎士道精神云々で勝てる相手ですか！？」 相手はアヌと同レベルの敵と見ていい。あのアシュマ君も手子摺ったアヌと同様の敵に、エファールさんは、一人で勝てると思っっているのですか！？」

「済まないが、こちらは仕掛けさせてもらおう。何せ時間が無い物でね」

そう言って、カフルは突いて来た。

二人は、間合いの外にカフルがいると思って、油断していた。が、カフルの突きは、意外にも、思った以上に伸びてきて、エファールを襲おうとしていた。

エファールは一瞬凍りついた。

「危ない！」

ヨデイが身を挺してエファールを庇った。

「うっ！」

カフルの剣が、ヨデイの左上腕を突いた。

幸いにも、それはかすり傷で済んだ様だ。

「な？ 言ったろう？ こいつは、二人がかりじゃないと、駄目だ
って」

「分かったわ。二人がかりで行きましょう」

アルミナとオルバニアンは快進撃を続けていた。

相変わらずオルバニアンが突破口を開き、アルミナが残って、敵を蹴散らす戦法だった。アルミナが剣を振るうたび、敵が蜘蛛の子散らすように、逃げて行く。

そこへ、

「誰が逃げてよいと言った！！ 適わぬのなら、何故、せめて一太刀でもと思わん！？」

声高に逃げる者を罵る者が居た。

それは黒い鎧を纏っていた。

「アーヌか？ ……いや違う！？」

オルバニアンが言った。

出で立ちはアーヌとそっくりだったが、鎧の色がアーヌより若干紫色に偏っていた。

そして何よりも驚いたのは、アルミナが持っているのと同様に大剣を持っていた。

「あの剣は……兄さんの……まさか……」

アルミナは驚愕を隠せなかった。

「ウルク様、お時間が御座いません」

「相分かった。お前達は手を出すな。五分で決めてみせる！ ……

我が名はウルク！ いざ！」

相手が攻撃の姿勢をしているのに対して、アルミナは構えもしないで、ただ突っ立っているように見えた。

「アルミナ、どうしたアルミナ！？」

ウルクの大剣は振り下ろされ、アルミナの頭上に届きそうであった。

「アルミナっ！！」

その時オルバニアンのライフルが撃たれ、ウルクの鉄板の様な剣に当たった。

それで、大幅に剣の軌道が逸れて、アルミナの身体を傷つける事

は出来なかった。

アルミナはそこで初めて我に返った。

「おのれ、小賢しい事を……。まず己から先に片付けてくれるわっ！」

ウルクは標的をオルバニアンに変えた。

その時、アルミナが、ウルクに斬りかかった。

それをウルクは剣を背に回して、アルミナの攻撃を凌いだ。

「おのれ、卑怯な者共め！」

「貴様！ その剣をどうやって手に入れた！！ それは……。それはエード兄さんの剣！！ まさか、まさか貴様、エード兄さんを……！！！」

「エード？ 知らんなあ、そんな者は」

「貴様あ！」

アルミナは、剣を振り回し始めた。

「アルミナ！！ 熱くなるな！！！」

「貴様、兄さんを……。兄さんを！！！」

アルミナは剣を振り回す。

しかし、アルミナの剣は、ことごとくかわされてしまった。

「くそっ！ なぜ、当たらない！？！」

「くくくっ」

不気味な笑いをし、アルミナの間を突いて、横合いからウルクの剣が、アルミナを襲った。

アルミナは切っ先を下にして剣を立てて、それを防いだ。

「ほう、我が太刀筋が読めるというのか？ そうか……。貴様、戦利眼を持っているな？ 面白い、どこまで出来るか、試してやろう」

その時、ウルクの頭に衝撃が走った。

オルバニアンがライフルで弾を撃ち、ウルクの即頭部に命中したのだ。

「おのれは、さっきからうるさい！」

オルバニアンは驚いていた。

魔導機兵の装甲をも撃ち貫く対魔導機兵用ライフル十四、五ミリ弾が効かないのである。

「なんてえ硬さだ……」

「おのれ！」

ウルクがオルバニアンに斬りかかろうとするのを、今度はアルミナが思い切りウルクの背中に斬りつけた。

「おのれらは……卑怯という意味を知らんのかッ!？」

「なんて硬さの『鎧』なの？ アタシの剣が全く効かないなんて？」

「いや、いけるこの連携で行こう!」

「分かったわ、オルバニアン!」

アシュマはどうなったか。

黒焦げになったのか。

いや。

無事だった。

魔法の炎をエネルギーに転換し、わが身のものにしていた。

「そんな馬鹿な……。奴には何にも効かないと言うの？」

ハーミティーが呟く。

「言ったはずだ。無駄だとな!」

アシュマの鬼虎は白銀に輝いていた。

躍り出る影の者たち。

「せいっ!」

アシュマは気合と共に鬼虎を振りぬく。

『蛭』達が飛び立ってゆく。

物凄いスピードで。

そして、影の者たちや、アステルの隊を貫いていく。

「あぐっ!」

ハーミティーは腹を貫かれた。

他のメンバーは頭を貫かれたり、胸を貫かれたり、生き残ったの

はハーミティーだけの様だ。

だが、動ける状態では無い。

「アベニ爺。無事か？」

アシュマが言う。

直ぐにアベニを目で見つける。

「無事でござるよ。いやはや派手でござるな」

「『蚩』は階下まで敵を追尾して行ったからな」

「さて、下まで行きましょうぞ」

「うむ」

アシュマとアベニはいち早く、地下六階……つまり最下層にたどり着いていた。

ここに来る迄の戦闘で、おおよその影の者を倒していた。
最下層のフロアでは、道が二方向に分かれていた。

「どうする？ アベニ爺」

アシュマが尋ねていた。

「そうで御座るな。取り合えず、二手に分かれるしかないで御座ろう」

「そうだな。アベニ爺はどちらに行かれる？」

「そうで御座るな。取敢えず拙者は左にするでござるよ」

「そうか、それなら俺は右に行こう」

「先に発電施設に着いた方が破壊をするという事で……」

「分かった」

「では、また後程」

アベニは、左側の通路へと消えていった。

アシュマは右側の通路を行った。

割と長い時間、通路を歩いた様な気がした。

通路を歩いて行くと思いがけなく広い部屋に着いた。

部屋の中はシリンドーが、何本も立っていた。

シリンドーの内部はにぎった緑色の液体と人間の様な物が入っていた。

「故郷へようこそ。『オリジナルナンバー』、アシュマ・アトー・ショアク・アシュオン」

「誰だ！」

アシュマは振り向くとそこにいたのは……

「アーヌ……いや違うな？ ……誰だ！」

「私の名はカシア。いや、それを知ったとて無意味だな。何故ならお前は、今、ここで死ぬのだからな」

中二階にいたのは、女性型に模^{かたど}られた、外骨格とも甲冑ともいえる物を纏った者だった。

「『素体』……『オリジナルナンバー』とは俺の事か？」

「冥土の土産に教えてやろう。その通りだ」

「『素体』とは何の事だ？」

「それは超古代、『イムフレレ』が地球に残した胎児の事だ」

「『イムフレレ』？」

「知りたいか。『イムフレレ』の事を」

「ああ。」

「『イムフレレ』は超古代……五万年とも十万年とも言われる古代に來た來訪者の事だ」

「それが何だと言うのだ？」

「その『イムフレレ』が『バヴェル』と『鬼虎』を残して行った。二体の胎児と共に」

「その胎児である『素体』が、俺と言う事か」

「あと、アーチエルもな」

「なに！」

「元々この施設はバヴェルの前にあったもの。それを研究用にここに移築したのだ」

「アーチエルも素体とはどう言う事だ？」

「言葉どおりだ。お前、アシュマとアーチエル。二人揃ってカプセ

ルに胎児の形で残されていたのよ。十万年もの間」

「何だと？　なぜ、俺とアーチエルだと？」

「カプセルの前に名前が刻まれてあったのよ。『アシュマ・アトー・ショアク・アシュオン』と『アーチエル』とね」

「それで……？」

「これ以上は教えられんよ」

「では、ナンバーズとは何だ？」

「ナンバーズとはそもそもお前の細胞から作られたクローン……人造人間と言った所か」

「人造人間……」

「更にお前の場合は、ナノマシンを身体に宿し、反射神経、筋力、瞬発性、持続性の向上が見られる実例でもある。流石は『オリジナルナンバー』と言ったところか。『イムフレーレ』の科学力が見て取れる。事実どの項目を比較しても、ノーマルスペックのナンバーズを、遥かに凌ぐ『性能』を持っている」

「そもそもナンバーズのような者を何故必要とした？　人間を遥かに凌ぐ軍隊でも作るつもりだったのか！？」

「それもあるが、元は『鬼虎』とセットで、作られた者どもなのだから……」

「鬼虎と……」

「貴方は知らないかもしれないけれど、鬼虎のような刀と『素体』である胎児は何体か残っていたのよ。それが黙示録対戦で失われてしまった。元来の目的も果たせぬまま……」

「目的？」

「そう。ある崇高な目的。それも果たせぬまま、無意味に人類は滅亡寸前までいった。人類は計画的に滅びなければならなかった。そう、アシュマ。貴方が鬼虎とセットなのに対して、アーチエルは『バヴェルとセット』なのよ」

「なん……だと……。じゃあ、アーチエルは……」

「そう。バヴェルの『コアユニット』よ」

「じゃあ、それと対を成す鬼虎は……？」

「『対』……と言うよりは『番い』^{つがい}ね。貴方とアーチェルは」

「『番い』？」

「そう、プレートに書いてあったもの。『イムフレーレ』のプレートに。貴方たちは生まれる前から結ばれる運命にあったのよ。どう？ 嬉しいでしょ」

そう。

アシュマとアーチェルの出会いは運命的だったのだ。

生まれる前からの番としての運命。

お互い惹かれあうように。

「……………鬼虎とは何だ？」

「お前には解らぬだろうが、鬼虎には正に無限の力が眠っている。それと同調し一体化した時、無限の力が発揮される。……お前は鬼虎と親和はしている様だが、その力の片鱗すら見ておらぬであろう？ まあ、あのエヴァイブ・エブルでさえ親和できずに命をすり減らして鬼虎を守っていたがな」

「馬鹿な奴よ」

もう一人の鎧の男が現れた。

アシュマの居るフロアに。

「アーヌ！！」

「そう、奴はナンバーズの成功例の第一号だったにもかかわらず、それをふいにしたのだからな。性能も『オリジナルナンバー』に最も近かった」

「リクシル・ウォレウォリンがいけないのですよ。あまつさえ貴重なサンプルであるアシュマを連れ、その上データバンクまでバックアップごと綺麗に破壊してくれたから」

「そうだな貴重な千年分のデータ、記録と結果を、見事破壊してくれた。許されん背徳行為だ」

「解った？ 解ったなら、大人しく死んで。そして鬼虎を頂戴。我々は貴重なサンプルと鬼虎を手にする事が出来るわ」

「……一つ訊く。鬼虎とは『一体何だ』？」

「それは……」

「カシア、もういい。これ以上話しても詮無き事よ」

アーヌがカシアの言葉を遮る。

「そうね。では死んで頂戴」

「そうか……。では参る。秘剣、閃光一刀！」

アシュマは腰を落とし抜刀の体勢を取った。

そしてそのまま気を充溢させた。

一方、ヨディとエファールは、カフルと対戦の只中であつた。カフルがエファールに対して攻撃をすれば、ヨディの槍がカフルのレイピアを翻弄し、カフルがヨディを攻撃すれば、エファールがカフルの剣を翻弄する。

よく出来た連携攻撃だった。

「く！ 二人がかりでも良いと言ったのは、私のミスでしたね」

カフルが言った。

「何を言ってるんです？ 僕ら二人がかりでもやっとなのに、贅沢なお人ですねえ」

ヨディが言葉を返した。

「贅沢？ 何故？」

「貴方に勝つには、もっと仲間を呼ばなくては、ならないから」

「ふ、ふはははははは！！」

カフルの笑いに、二人は一瞬動きを止めた。

「面白い事を言う。だが私は時間切れの様だ」

カフルは言い、体の各関節に埋め込んであった、五センチ程の突起が浮き上がり、蒸気を吐いて、カフルは動きを止めた。

「またな。若い騎士達よ」

「僕は騎士とは、チョッと違いますけどねえ……」

カフルが動きを止めたのと同時に、敵の黒尽くめの男達が攻撃

を再開した。

それと同時にカフルを運ぶ者達もいた。

ヨディは、それを追おうとしたが、敵の包囲網がそれを許さなかった。

「なあ、エファールさん……」

ヨディが黒尽くめの男達を捌きながらエファールに声をかける。

「なあに？　ヨディ……今、忙しいんだから。……で、なあに？」

エファールはそれどころでは無い。

「アシュマ君の気持ち少し分からないかい？　彼、アーヌみたいな凄いい奴と、こんなすごい戦いを一人でやって、皆を支えてやって来たんだぜ？　凄いい奴だよ。アシュマ君は」

「そうね……でも、その時、私アシュマの敵だったんだけど……？」

「そうか？　……そうか。まあ、アシュマ君の凄いい所はそれを凄く

見せない所にあるんだよなあ」

「なによ、それ。ふふふ……」

「なんだ？　笑う所かい？」

「ふふふ……」

「それじゃあ、そろそろ、下を目指しますか」

「そうね……」

二人は一人が前衛一人が後衛と、役割分担をして下へと降りていった。

オルバニアンとアルミナは、ウルクと対戦中であった。

何せ、一撃一撃が、致命傷となり得る重い一撃だ。

慎重に攻撃しなければならない。

オルバニアンとアルミナは、連携してウルクに立ち向かっていた。

オルバニアンがライフで牽制し、アルミナがその大剣で攻撃を加えると言う、何とも力任せな連携だったが、今の二人に行える、これが最善の方法だった。

今もウルクが剣を振り上げて、大上段から斬りかかろうとするのを、オルバニアンのライフルが牽制して、ウルクの剣を撃った。ウルクの剣の軌道がずれて、アルミナの横を掠めて通り過ぎていった。

ウルクの剣は、横合いから打たれて、ボコボコになっていた。今度は逆に、アルミナが攻撃をする番だった。

アルミナも大上段に振りかぶり、鎧目掛けて振り下ろした。が、いつも当たる筈のこの連携攻撃が、当たらなかった。

「自分一人が戦利眼を持っていると思うなよ」

「何？ それは、どう言う意味よ！？」

ウルクに攻撃の機会が訪れた。

ウルクは剣を振り上げた。

オルバニアンがライフルを撃って牽制した。

いつもなら、オルバニアンの弾丸が的を得、ウルクの攻撃を牽制するのだが、今度は弾道の軌跡を読んだが如く剣を振った。

そうしておいてから、剣を思い切り振り下ろした。

アルミナにも剣の軌跡が見えている。

だが速さが違った。

避け切れる物ではない。

アルミナは、防御するので精一杯だった。

オルバニアンも牽制を掛けてみた。

そのことごとくは、読まれ、かわされた。

「待っている、この女を殺した後で、ゆっくりお前も殺してやる」ウルクは大きく剣を振りかぶって、アルミナを大上段から斬り下そうとしたその瞬間、ウルクは動きを止めてしまった。

「う……、時間……切れか……」

ウルクの身体中に埋め込まれている丸い突起物がせり上がって、そこから蒸気を噴出した。

「いまだ！！」

オルバニアンはウルクのある一点に弾丸を集中させた。

三発撃った。

神業ともいえる一点集中攻撃で、ウルクの右目部分が破壊された。そこから、除き見えた物は、金色に光る瞳だった。

しかし直ぐにそこから溢れる緑色の液体が流れ出て、それを隠してしまった。

「金色の瞳……まさか!? 兄さ……」

「ウルク様を回収しろ!」

「そうはさせるか! アルミナ、手伝え!」

「……………」

「アルミナ!!」

アルミナは、はっ、として正気に戻った。

「蹴散らすぞ!」

オルバニアンが叫んだ。

「分かったわ!」

そしてそこには修羅が二人いた。

ウルクと言う獲物をむさぼり食らうが如く、そこへ向けて一陣の血風が吹き荒びウルクを守る者をことごとく食らっていった。

あともう少し、ウルクへと届くほんの少し手前で、壁が上から降りてきて、ウルクへと続く道が閉ざされてしまった。

オルバニアンは右手に血刀を下げたまま、周りを見て残っている敵がいらないか見回した。

数名の黒尽くめの男が辺りにいたが、皆、階下に逃げ込んでしまった。

「アルミナ! ここはいい。下に行こう!」

「……うん」

「どうした? 気の無い返事だな。行くぞ、ほら」

「うん、分かってる」

「大丈夫か?」

「うん、平気……」

「よし、それなら、いこうぜ!」

暫く階下へと下って行くと、最下層に着いた。

そこは、動力室等ではなく、奇妙な箱が、中央に置いてあるだけの部屋だった。

それは、見た目では何の金属か解らない素材で出来ていた。

箱は長さが百三十センチメートル、奥行きと高さがそれぞれ八十センチメートル。

装飾が施され地面に直接触れない様、箱の下部四隅に脚が付けられてあった。

持ち運びの際、箱に手を触れない様、二本の棒が取り付けられていた。

「なんだろう、この箱は？ 一応持って帰るか？」

オルバニアンが言ってみる。

「やたらめったら、持って帰ってもいい訳でもないし……」
アルミナが返す。

「でもなんだろうね、この箱は？」

と、言ってオルバニアンが触ろうとした時、
バチッ！！

と音がして、箱からオルバニアンへと電流が走って、オルバニアンは感電した。

「あっちい！！」

オルバニアンは叫んで、手を引っ込めた。

「オルバニアン大丈夫！？」

『無礼者。朕に触れる事かなわず。下がりおろう』

「箱が喋った……」

「オルバニアン、この箱は何か危険よ。アシユマ達を待ちましよう？」

その時、

がくん！

と、なって床が開き、箱が床下へ格納されてゆく。

「いけねえ！ 箱が！ しょうがねえ！」

オルバニアンがライフルを構えて、『箱』目掛けて何発か撃ったが、箱の直前で弾は停止し……。

「おっと、いけねえ!!」

オルバニアンは屈み込み、オルバニアンが今いた所に、弾が弾き返って来た。

「こいつ、いっちょ前に、念の力場を持ってやがるぜ。それもあり強力な」

「手が出せないって奴だね」

「ああ、アルミナが剣でぶっ壊そうとしても、さっきの俺みたいに感電させられてお仕舞いって言う事にならあな」

「そうだろうね」

「いまは、見てるより他は無いな」

「ええ」

「ところでお宅さんは、純粋な念者かい？」

「なによ？ 行き成り。そんじょそらの妖しげな似非念者とは違いますよーだ！」

「ははっ。元気が出たみたいだな？ さっきまで落ち込んでたみたいだから」

「そう？」

箱は完全に床下に埋没し、その床に蓋がなされた。

「兎に角ここを上がろう」

「正解のルートじゃ無かったって所ね」

「そうだな」

二人は階段を駆け上がっていった。

ヨデイとエファールは、階段を下りて最下層へと着いた。

そして、とある部屋にたどり着いた。

そこは、薄暗くてよく見えない所だった。

向こうの方に、仄かに明るく見える所があった。

「あそこへ行つて見よう」

「ええ」

そういう事になって、二人は行つて見た。
するとそこは円卓のテーブルに、七人程、人が座っていた。

七人は頭から黒いフードを被り、面体はおよそ窺い知る事が出来なかった。

ヨデイが更に進もうとしたが、そこには分厚いガラスがあつて、先に進めなかった。

「お前達は何者だ？」

ヨデイは訪ねてみた。

黒いフードの者達は、一斉にヨデイの方を向いた。

『そういう貴様は何者か？』

背の低い男がそう応えていた。

音声は機械を通してあるからなのか、男か女か判別しかねる所があつた。

ヨデイは、鎌をかけて見た。

「我らはドートネーゼに仇なす者。ドートネーゼよ、世界はそこもとらだけの物ではない！」

『今の世界は我らが作り上げた物。いわば我らは神だ。そこな人間、神に対して無礼千万。神の雷、^{いかづち}思い知るがよい』

そう言われた時、ヨデイは反射的にごろりと回つて、雷を避けた。
ヨデイが今までいた所は黒く炭化していた。

ドートネーゼと思しき七人の男達は部屋の向こう側へ行こうとしていた。

「さて！ 逃げるな！！ こちらへ戻つて来い！」
ドンドンとガラス板を叩いた。

「ヨデイ、危ないっ！」

咄嗟にエフアールがヨデイの腰を引っ張つて、そこからヨデイを引きずり出した。

二人は盛大に転んだ。

その直後、光の壁の様な物が、スクリーンの様に張り巡らされた。最早それは何人たりとも近づけない、正に壁となった。

「危なかった。有難う、エファール様」

「私の様な貧乏貴族にも、『様』をつけるのですね？」

「いえ、女性であらせられるから」

「いいのかしら？ 私みたいな性悪女を口説いても？」

「あなたは、御自分が考えてらっしゃるよりもずっと性根はいいと思いますか？」

「お上手ね。……で、これからどう致します？」

「ここにいっても仕方ない。一旦上まで戻りましょう」

「そうね。上へ出たら改めて考えましょう？」

アベニは地下深くにある発電施設の前に来ていた。

それは蜂の巣状に組み込まれた膨大な量の魔導石群だった。それを目の当たりにして、どうしようか思案に暮れていた。

しかもその発電私設は、六角形の魔導石の直ぐ裏に、『脳』が繋がっていた。

『人』の物かどうかは解らない。

ただ、そういう仕組みになっていた。

そこへ機械的な音声とともに、魔導石が反応しだした。

『発電施設、臨界まであと、十分。職員の方々は速やかに退避をして下さい』

「な、なんじゃ、なんじゃ！？ ワシは何もしとらんぞい！？」

アベニは驚いた。

『臨界まであと、十分……………』

「奴ら自爆するつもりじゃわい！ これは、逃げた方がよさそうじゃわい」

そのアナウンスは、ヨデイ達にも、オルバニアン達にも、そしてアシュマにも聞こえていた。

「急げ。取敢えず、銀龍に乗ってしまおうんだ！」

ヨデイ達は、上を目指した。

オルバニアン達も

「取敢えず、上へ出よう！」

と、言いやはり上を目指した。

「そうか……。では参る。秘剣、閃光一刀！」

アシュマは腰を落とし抜刀の体勢を取った。

そしてそのまま気を充溢させていった。

「居合い？ 坊や。動かないならこちらから行くわよ」

『発電施設、臨界まであと、十分。職員の方々は速やかに退避をして下さい』

「勝ったな」

と、アーヌが言った。

「我らは一分もあれば脱出できる。だがお前は一分では脱出できない。我らは調整が完了している一時間は戦えるぞ」

それに対してアシュマは無言を通していた。

「じゃあ、こちらから行くわよ」

カシアはアシュマ目掛けて鞭を飛ばした。

アシュマは抜刀し、飛んできた鞭を両断した。

「ばかな！ 理論上、鬼虎の硬度では斬れない筈なのに！」

うろたえるカシアを前にして、アシュマは再び納刀し、抜刀の体制をとり、気を充溢させて行く。

「うろたえるな！ カシア。その鞭の本来の使い方をしろ！」

アーヌは叱咤した。

「！ そうだったねえ」

カシアは言い、鞭のもち手のスイッチを入れた。

すると、鞭に電流が走り斬られた先の方で、バチバチとショートをしていた。

そして、カシアが鞭を唸らしてアシュマを襲った。鞭の軌道を読むのは難しい。

こんな時、アシュマはアルミナが羨ましくなった。

戦利眼があれば……または戦利眼に代わる力があつたら……この手の者を相手をするには、その様な力が必要だった。

鞭が撓って飛んでくる。

危機が迫る。

それを、見極めようとした時、それは起こった。

自分を中心に三百六十度全ての景色が見えた。

また、三百六十度、『周りから自分自身を見ている』情景も見えた。

そして、自分が見たいと言う情景も見えた。

今、カシアの手首が捻られ、鞭の軌道を変え様としている所も、アーヌがその連携を待って、抜刀の姿勢をとっている事も。

すべてが……、そう全てが見えた。

アシュマが、極限状態に追い込まれた事により、編み出された一種の心眼といえた。

カシアの鞭が撓ってきてアシュマの顔面を襲ったが、アシュマは紙一重でこれをかわし、連携で跳びながら抜刀してきたアーヌの一撃目も紙一重かわし、二撃目も紙一重でかわした。

そして十分な余裕を持って、アーヌの胴へ迅速かつ威力の大きい一撃を見舞った。

アーヌは数メートル先に吹き飛ばされた。

そして、アーヌの腹部には薄っすらと鬼虎による傷が出来ていた。「前とは違うと言う訳か……見切りも、動きも、そして鬼虎も……」

しかし、アシュマは内心、焦っていた。

最高値にまで気を練り念を切っ先三寸に集中したにもかかわらず、アーヌに与えた打撃はたったのかすり傷程度。

これでは勝てぬ。

もっと力が欲しい。

力が……！！

その時、声が聞こえてきた。

『我、汝との契約に従い、汝に力を授けん』

すると、鬼虎が銀色に光りだした。

(これは……)

アシュマが刮目した。

と、アシュマは、カシアに対して刀を一閃、二閃とさせた。

すると、銀色の三日月が刃となってカシアを襲い、辺りを切り裂き土煙と共に建造物を崩し、カシアを中二階から地上へと落としていた。

「大丈夫かカシア!？」

アーンは仲間を心配してみせた。

「あまり大丈夫じゃ無いみたい。悪いけど離脱するわ」

『発電施設、臨界まであと、五分。職員の方々は速やかに退避をして下さい』

「あと五分か。そろそろケリをつけようかの」

アーンが言った。

「悪いが、こっちには時間が無い。次の一手で決めさせてもらう」
そう言っ、アシュマはいつもと少しだけ違う構えを見せた。

左腕を巻いて左手は右の脇に、右腕を巻いて右手は左腕の肩の上に、腰は落として右足を前にした。

「秘剣、裏・閃光一刀・崩し」

待っている余裕は無かった。

アシュマから攻撃しなくては勝機は見出せなかった。

アシュマは、アーン目掛けて切り込んでいった。

そして、右腕に持った鬼虎を伸ばし、左腕を逆に伸ばした。

作用反作用の原理で、切っ先に速度と力を加える為と、切っ先の伸びを良くする為の、交差した構えだった。

そして、鬼虎の切っ先は意外に伸びて、アーヌの顔面を捉えようとしていた。

が、アーヌも意外ではあったが、読んでいなかった訳でもなく、アーヌの抜刀が鬼虎を襲った。

しかし、砕け散ったのはアーヌの刀の方で、鬼虎は微塵も壊れていなかった。

刃こぼれなく、曲がりもせず、折れたりもせず、鬼虎は顕在だった。

一方アーヌの方も彼の隠し武器であり最強の武器、鉤爪を指の股から伸ばした。

長さは約二尺三寸。

以前は鬼虎の攻撃を防いだ事もある武器だ。

そんな事は微塵も考えず、アシュマはアーヌを、アーヌはアシュマを仕留める為、互いに反転し、アーヌは右腕の鉤爪を上段から振りかぶって、そして振り下ろした。

それを両の手で行われる物だから、アシュマにとっては、堪^{たま}った物ではなかった。

『発電施設、臨界まであと、三分。職員の方々は速やかに退避をして下さい』

「クソ！」

アシュマは焦りから悪態をついた。

「ほう。焦りだしたな？　ならばこれではどうだ？」

アーヌは回転しながら鉤爪でアシュマを切り刻み始めた。

銀龍はヨデイ、エファール、オルバニアン、アルミナ、アベニを収容して、まだ上空に待機していた。

「アーチェル王女。ここにしていると我々まで被害にあいかねませんよ？」

オロは言った。

「もう少し、もう少しだけここに……」

アーチェルが銀龍号の後部ハッチから外を眺めている。

いま、銀龍号の念はエファールが代わって送り続けている。

ヨデイが、

「悔しいですがここまでです、王女。今からではとても助かりますまい」

そう言いアーチェルに残酷な現実を突きつけた。

「ですが……もう少し……！！」

その時、銀龍の後方、公園の中央で土が盛り上がり、そしてそれを吹き飛ばして、中から銀色に輝く円盤状の物体が現れた。

ぽっかり開いた空洞は、今正に、アシュマとアーヌが戦っている所だった。

それを、アーチェルはいち早く見つけた。

「アシュマさまが……！！ アシュマさまが戦っている！」

「何？ ヨデイ！！ ワイヤーだ！ ワイヤーを下ろしてくれ！！」
オルバニアンが叫んだ。

「わかった！ 細かい調整はそっちでやってくれ！ 僕も手が離せません！」

「了解だ！」

銀龍は方向を変え、少し前進した後、主砲の照準を銀色の円盤に合わせた。

「後ろ、落ちるなよ！！」

ヨデイは声をかけ主砲のトリガーを引いた。

ドン！ と大きな音がして、衝撃が走った。

「きゃあ！」

「危ない！」

アーチェルが落ちそうになるのをアルミナが腰を引いてやって助けた。

「命綱を着けないとね！」

銀色の飛行物体は、銀龍の主砲の直撃を受けたのに、ビクともし

なかった。

「くそ！ もう一発見舞ってやる！」

「ワイヤー下ろすよ！」

「馬鹿な！ 我を見捨てて！？」

動揺が、アーヌの連続攻撃を止めていた。

「哀れだな、アーヌよ。現実がそれを教えている」

「あり得ない！」

袈裟からのアーヌの攻撃をアシュマはかわした。

「あり得ない！」

逆袈裟の攻撃もアシュマはかわした。

「あり得ない！！」

正面からの攻撃をアシュマは受け止めた。

アシュマはアーヌの執拗な攻撃をかわしながら再び鬼虎に気を充溢させていたのだ。

鬼虎は銀色の輝きを取り戻しつつあった。

「アーヌ！！」

アシュマは真っ向唐竹割りに鬼虎を振り下ろした！

アーヌは左手の鉤爪を犠牲に本体はくると回して鬼虎の攻撃を交わそうとした。

案の定、左手の鉤爪は粉々に碎かれ、本体を守った。

アシュマは返す刀で下から上に斬り上げられた。

これもアーヌは右手の鉤爪を差し出し本体は逃げる事によって、難を逃れた。

勿論、もちろん右手の鉤爪は粉々に碎かれたが。

そして、鬼虎の銀色の輝きも失われてしまった。

『発電施設、臨界まであと、一分。職員の方々は速やかに退避をして下さい』

そして、上からフック付きのワイヤーが降りてきた。

アシュマはアーヌが襲ってこない様に目で牽制をかけながら上へ登っていった。

アーヌは矜持を示しているつもりなのか、襲ってくる気配を見せなかった。

アシュマが回収されるのと同時に、地下では大爆発が起こり、吹き上がった爆風が、銀龍を大きく揺らした。

地上では爆発と同時に大規模な陥没が起きて、見る間に、関係の無い一般人を巻き込み崩れていった。

銀色の飛行物体は、逃げる風を見せていた。

「にがすか！」

オロが叫ぶ。

そして、

「その強念者のお二人！こっちに来て！」
そう言った。

「？」

アシュマとアーチェルは疑問を呈しながら半球版の前に座った。

「すこし無茶をする」

銀龍は、銀色の飛行物体の真上に着いた。

「その二人半球版に手を置いて！」

オロが命令したが、オルバニアンが、

「ばっ、馬鹿！ 止めろって！！ 銀龍がいかれる！」
と、静止した。

「分かってます、いいんです、やりなさい！ 特にアシュマ殿には、思い切り念を出してもらいましょう」

オロが言った。

「構わんのだな？」

アシュマが確認を取った。

「早く、今の内に！！」

「わかった！ 行くぞ、アーチェル」

「はい。アシュマさま」

「念導フィールド形成確認」

オロが言い、何かを始めた。

「フィールド転換、高周波誘電加熱開始！」

「これってオロが言ってたアーヌ対策のモンだろ？」

オルバニアンが言う。

「ええ、結局アーヌ達は、自分達で何とかしてしまいましたから、この飛行物体に攻撃をかけているんですよ」

ヨディが言った。

飛行物体はよく見ると、不思議な光の筒でアーヌを回収していた。だからここを動かなかったのだ。

飛行物体は所々煙を出し始めたが、アーヌの回収が終わると、信じられないスピードと飛行航跡を残して飛び去った。

「君達が愚図愚図しているから、失敗してしまったじゃないか！！」
大体君達といったらいつでも愚図ばかりで……」

その時、アーチェルはオロの目の前に行き、
ぱん！

と、頬を叩いていた。

「一体あなたは、何だと思っているんですか？ 大体、今日、この作戦で何人の人が死んだと思っているんですか？ こんな昼日中に……いいえ時間帯の問題じゃないわ。作戦を行う前に、一般人をここに入れない作戦を練って……いえ、違うわ私のいたい事はもっと、こう……やはりこの作戦を行う前に、内容をよく検討してからの方がよかったわ……迂闊でした」

「アーチェル……」

アシュマが呟いた。

「あの戦い方がベストだったのだ。少数精鋭による強襲。意表をつく時間帯、結果アジトは壊滅したではないか！ あれが、ベストだったのだ！！ 普通の兵を投入してみたまえ。それこそ、何十人、もしかしたら百の単位で、兵が死んでいたかもしれないんだぞ？」
オロが反論した。

「それも解っています……わかった上で、話しをしているのです。わたくしはそれをベストだとは到底思えません。亡くなった人や遺族には、どう応えるんですか!？」

アーチェルが非難した。

「援助はするよ『エバス財団』の名でね」

オロは言った。

「では、遺族にはどう言うんです？ 自らやってしまった事に対する罪を！」

アーチェルは言った。

「それは、勿論声明を出すよ『七つの十字架』の名でね」

オロが言い放った。

「!!」

「くくく……」

ぱん!

と、アーチェルが、オロの頬を、又、叩いていた。

「この、卑怯者!!」

「くつくつく、平和主義の王女にしては、暴力で解決させようとは、その主義もただの張子の虎ですかねえ？」

「くっ!」

アーチェルは、怒りで、涙が零れ落ちそうになった。

「オロ」

と、自分の名を呼ぶ声の方に、オロは向いた。

すると、アシユマの指先がオロの眉間を、とん、と叩いた。

途端に、オロは放心状態となり、ぐったりとしてしまった。

「この方が静かで良い」

そうアシユマは言って、オロの身体をメイン操縦席から引っ張り出すと、担いで後の座席に座らせてしまった。

「ははっ! ホントに静かでいいや」

オルバニアンが喜ぶ。

「オルバニアン、サブの操縦席に着いてくれ」

「あいよ」

オルバニアンがサブ操縦席に着くのと入れ替わりに、アシユマは後の席の最前列の席に着いた。

アーチエルは魔導石の半球板

アーチエルはそのまま半球版の前の椅子に座ってしまった。

「アシユマさま、御無事でよう御座いました」

アシユマに対しアーチエルは振り向きそういった。

「うん」

アシユマは返事した。

（アーチエルがバヴェルの『コアユニット』。そして俺と『番い』……）

アシユマは複雑な気持ちを内に秘めながら、アーチエルを優しい眼差しで見ていた。

「ところで、アシユマさま？」

「何だい？ アーチエル？」

「先程オロ様にした事、以前わたくしにも、致しましたでしょう？」

アーチエルは意外な事を言ってきた。

「え？ いや、その……」

アシユマが狼狽える。

「変な事、なさっていませんよね？」

アーチエルがアシユマを言葉で追い詰める。

「あ、ああ……」

たじろぐアシユマ。

「あら、アシユマ。傷だらけじゃない。私が看護して差し上げますわ」

横合いから、エファールが救急箱を持って、割り込んできた。

「そうだよなあ。アシユマは偉い！ アタシが看護してやろう」

アルミナはどこから持ち出してきたのか、もう一つの救急箱を持ってきて、アシユマを看護し始めた。

「い、いや、二人とも。もう治りかかってるし……」

アシュマの言うとおりの小さい傷は治りかかっている。

そんな事もお構い無しにエフアールとアルミナはアシュマの傷の手当てをしている。

「また、そう言って遠慮する。悪い癖だぞ、アシュマ」

アルミナがそう言ってアシュマに密着してきた。

それを見たエフアールは、

「あゝら、あんな洗濯板擦り付けられちゃ、痛いだけよね」

自慢の豊満な胸を、アシュマの腕に密着させた。

「あら？ スリムでスレンダーなボディって、言って欲しいわ。たれ乳のお姉さんよりは良いでしょう？」

アルミナも負けてなかった。

「あゝら、何処かの筋肉娘さんが、何か言ってらっしゃるわ」

エフアールも応酬した。

「なにおう！？」

「なによ！？」

「ヨデイ、行き先はどこだ？」

と、アシュマがそう言って、二人の話の腰を折った。

「オロ邸だな。暫くは、あそこを拠点にしなければならいだろう」

「そうか」

「また、オロか？ 息が詰まっちゃうぜ」

オルバニアンが辟易して言う。

「まあ、そういういなさんな。現状では最高のスポンサーだからなヨデイが応えた。

「性格さえよければ、最高のスポンサーなのにな」

オルバニアンが嘆いた。

「全くだ……」

アシュマが追隨した。

「そうよねえ」

エフアールも続いた。

「お、おう。そうだよな！」

アルミナも、話しが良く分からないまま追随した。

「真似をしないで下さる？」

「別に真似なんかして無いよ」

「あなた、自分で考えて仰ってます？」

「なにおう！？ 馬鹿にすんのか！？」

そんな二人に挟まれて困惑顔のアシユマに、

（もう、私のアシユマさまなのに）

と、アーチエルはやきもきました。

（あゝ、エファさん、あんなにくつついて……………あゝ、アルミナさん、あんなに密着してえゝ。……………もう、私のアシユマさまなのに）

しかし、アーチエルは半球板に手を置いているので、動けないでいた。

するとそれを察した、ヨデイがエナジアの箱を持ってきた。

それを半球板に、ぺたりぺたりと貼り付け、自由に動き回る事ができる様になった。

「どうぞ。アーチエル様」

「有難う、ヨデイ様」

ヨデイにそう言っていると、

「アシユマさま！」

アーチエルは真正面から抱きついて来た。

「アーチエル……」

アシユマはアーチエルを受け入れた。

「いいな、ヨデイ」

オルバニアンが言い、

「まったく。少し、こっちにも、回して欲しい物ですねえ」

ヨデイが応えた。

アーチエルはアシユマの頭を抱え込んだ。

そして、アーチエルは愛しそうにアシユマに頬を摺り寄せた。
「チヨ、チヨッと、何をしてらっしゃるの、アーチエル様！？」

「止めてよ！　アーチエル。アタシのアシユマに何してるのよ！？」
アーチエルはエフアールとアルミナの言う事なぞ気にせずに、改めてアシユマの膝に座りなおした。

「ごめんね、アシユマさま。重いですか？」

アーチエルが言った。

「いや」

アシユマが言う。

「もう危ない事しないでね。私の王子様」

アーチエルはアシユマに抱きつき、そう言った。

相変わらず、両腕はエフアールとアルミナに取られたままだったが、アーチエルに頬を寄せて、

「畏まりました、『王女』さま」

と、アシユマは言った。

第二話　了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5493f/>

閃光のアシュマ 第二話 オリジナル・ナンバー

2011年11月23日12時59分発行